仙台市文化財調査報告書第18集

枡江遺跡発掘調査報告書

―造瓦所の調査―

1980. 3

仙台市教育委員会
仙台市土地開発公社
古窯跡研究会

仙台市文化財調査報告書第18集

枡江遺跡発掘調査報告書

―造瓦所の調査―

第一号窯跡出土ヘラ書文字瓦
「嶋」「比」？

1980. 3

仙台市教育委員会
仙台市土地開発公社
古窯跡研究会

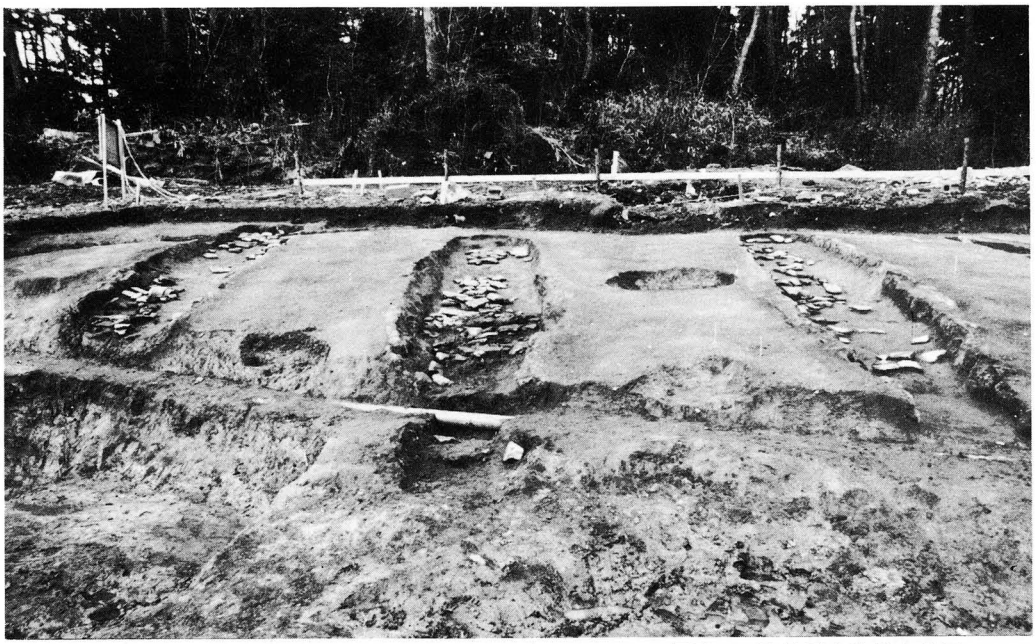


写真 1　B 地区窯跡検出状況

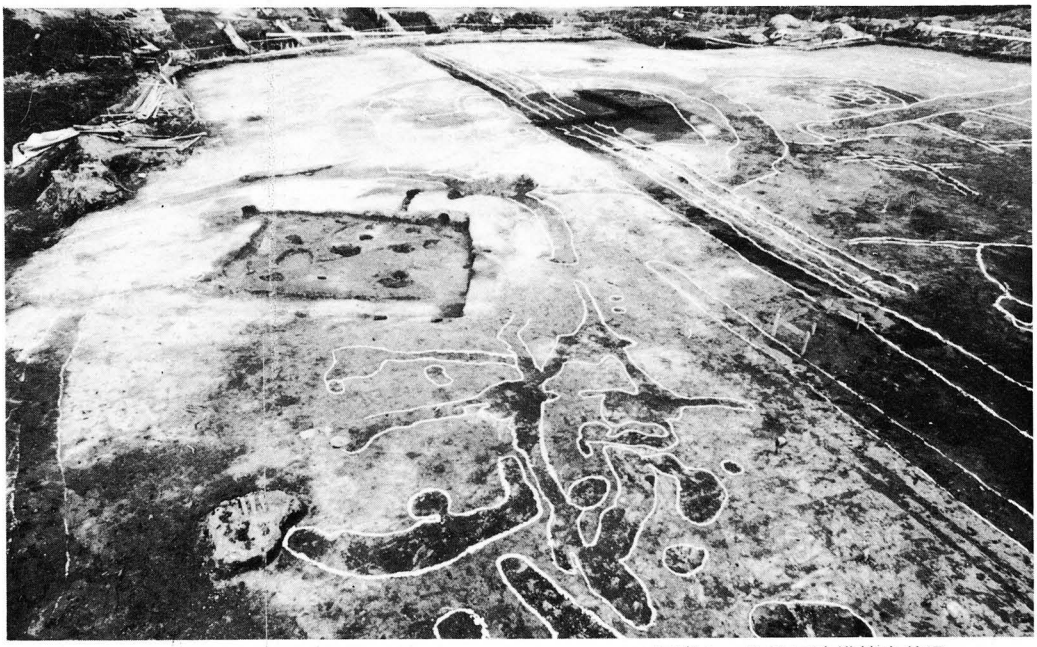
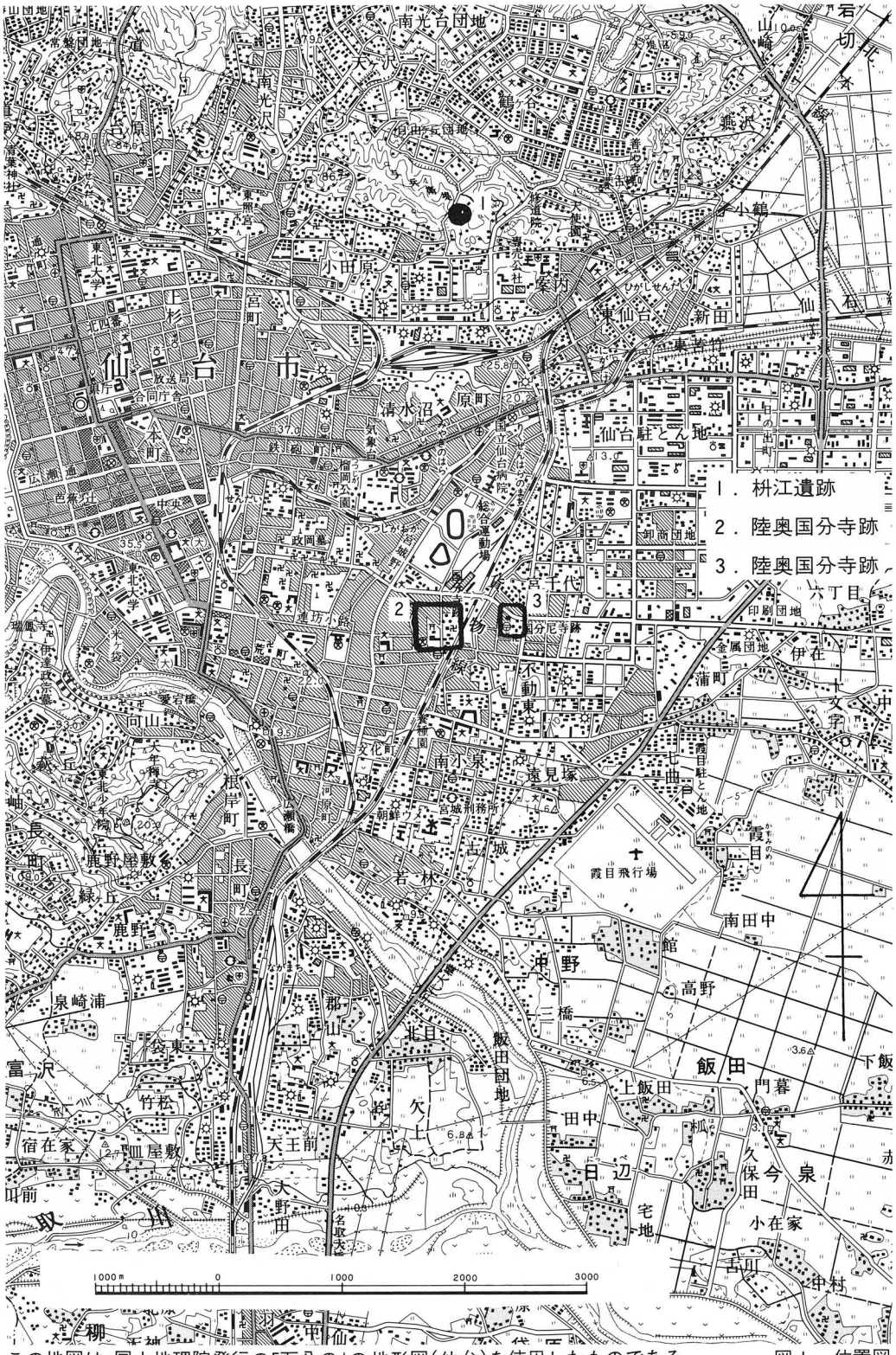


写真 2　C 地区遺構検出状況



この地図は、国土地理院発行の5万分の1の地形図(仙台)を使用したものである。　　図1　位置図

序　　文

昭和52年から２次・３回にわたり調査を実施してまいりました枡江遺跡の発掘調査報告書をこのたび刊行することになりました。この遺跡は台原・小田原丘陵のほぼ中央に位置しており、古代窯業遺跡の集中しているところに当たり、鶴谷小学校分校（仮称）建設予定地になっていることから、事前調査を行ない記録保存の処置をとったものであります。

調査に当っては、当教育委員会が主体となったのはもちろんのことですが、第１次調査から報告書作成にいたるまで実質的に担当していただいた古窯跡研究会、またこれまで多大なご指導を賜わりました東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所をはじめとする諸研究機関及び文化財保護委員の先生方に、心から御礼申し上げます。

報告書作成にあたりましては十分検討したつもりではありますが、不備な点もあるかと思います。本書へのご批評をお聞かせ願うとともに、今後とも仙台市の文化財保護行政へのご理解とご協力をお願い申し上げます。

昭和55年３月

仙台市教育委員会

教育長　　藤井　黎

例　　言

1．本報告書は、昭和52年７月から昭和54年４月までの間、二次にわたり、断続的に発掘調査を実施した宮城県仙台市枡江に所在する枡江遺跡の調査報告書である。

2．本調査は、仙台市土地開発公社の依頼により、古窯跡研究会が、仙台市教育委員会と共同で担当した。

3．本調査、ならびに報告書作成は、渡辺泰伸と結城慎一が主として当った。また本報告書作成編集のための遺物、図面の整理は、約１年間を要した。

4．本文の執筆は主として渡辺泰伸が行ない、結城慎一、滝口卓も一部分担した。

5．報告書作成にいたる作業分担は、整理参加者全員が行なった。

遺構写真　　渡辺泰伸、壱岐善文

遺物写真　　渡辺泰伸、中沢裕一

遺構実測製図　　斎藤秀寿、山内耕、石本弘

遺物実測製図　　滝口卓、石黒伸一朗、佐々木祐一、白井一夫、渡辺秀樹

最終的な製図・トレースは、渡辺泰伸、渡部弘美、滝口卓、石黒伸一朗が行なった。

6．編集は、結城慎一、渡辺泰伸が行なった。

7．本書図版観察表は次の要項に従って作成した。

(1)　遺構、遺物の色調観察は、小山、竹原編．著（1973）：『新版標準上色帖』日本色研事業株式会社を使用した。

(2)　遺構図では、オーバーハングの場合に一点鎖線を使用し、土色による変化の区分は、二点鎖線を使用した。

(3)　遺物では、凸部には、破線を使用し、凹部には、一点鎖線を使用することを原則としたが、その判断は観察者の主観によった。

8．遺物は、その大部分について観察カードを作成し、できうる限り、図、拓本、写真による資料化を行なった。本報告に掲載した以外にも多量の資料を保管している。

9．本報告においてふれることの出来なかったものについては、後日個別の問題点として解決して行きたい。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに…… 1

Ⅱ．調査要項…… 3

Ⅲ．遺跡の位置と環境…… 4

　1．地理的環境…… 4

　2．歴史的環境…… 5

Ⅳ．調査の方法と経過…… 6

　1．調査地区の設定…… 6

　2．調査経過…… 6

Ⅴ．調査概要…… 23

　1．A地区の概要…… 23

　2．B地区の概要…… 26

　3．C地区の概要…… 46

Ⅵ．出土遺物について…… 97

　1．瓦類…… 97

　2．土器類…… 101

　3．鉄製品…… 105

　4．木製品…… 105

　5．石製品…… 106

　6．その他…… 106

Ⅶ．総括と考察…… 107

　1．遺構について…… 107

　2．出土遺物について…… 108

　3．まとめと問題点…… 109

　4．おわりに…… 110

参考文献

遺物図版、写真図版、観察表

写真・図表目次

写真１．Ｂ地区窯跡検出状況
２．Ｃ地区遺構検出状況
３．Ａ地区発掘前の状況…… 7
４．Ｃ地区発掘前の状況…… 7
５．Ｂ、Ｃ地区グリット設定状況…… 12
６．Ｃ地区表土排除作業…… 13
７．Ｃ地区グリット掘上げ状況…… 13
８．Ｃ地区表土排除終了状況…… 14
９．現地説明会…… 16
10．Ｂ地区の表土排除状況…… 17
11．Ｂ地区窯跡の掘り上げ状況…… 17
12．Ｂ地区窯跡の実測風景…… 17
13．Ａ地区全景…… 23
14．第１号窯跡瓦堆積状況…… 25
15．第１号窯跡施設瓦状況…… 25
16．Ａ地区出土の重弁蓮華文軒丸瓦片…… 26
17．Ｂ地区全体の状況…… 31
18．第２号窯跡(1)…… 31
19．第２号窯跡(2)…… 32
20．第３号窯跡(1)…… 34
21．第３号窯跡(2)…… 34
22．第４号窯跡(1)…… 36
23．第４号窯跡(2)…… 37
24．焼土遺構遺物出土状況…… 40
25．灰原の状況…… 42
26．灰原から出土した
重弁蓮華文軒丸瓦…… 42
27．灰原での平瓦と
須恵器坏の出土状況…… 42
写真28．灰原出土の刻印文字瓦…… 43
29．灰原での漆器出土状況…… 43
30．灰原での木製品出土状況…… 43
31．Ｃ地区全体の状況…… 49
32．第１号住居跡(1)…… 53
33．第１号住居跡(2)…… 53
34．第１号住居跡(3)…… 53
35．第１号住居跡カマドの状況…… 54
36．第１号住居跡改築の状況…… 54
37．第１号住居跡周溝上の施設瓦…… 54
38．第２号住居跡(1)…… 61
39．第２号住居跡(2)…… 61
40．第２号住居跡のカマド状況…… 61
41．掘立柱建物跡群…… 65
42．第８号掘立柱建物跡…… 71
43．第３号土壙…… 75
44．第７号土壙…… 75
45．第14号土壙…… 77
写真図版１～２、Ａ地区出土遺物…160～161
３～５．Ｂ地区出土遺物…162～164
６～14．Ｃ地区出土遺物…165～178

図１．位置図（１：５万）
２．位置図（１：2.5 万）……２
３．遺跡全体図……21・22
４．第１号窯跡実測図……24
５．Ｂ地区全体図……27・28
６．第２号窯跡瓦出土状況……32
７．第２号窯跡……33
８．第３号窯跡瓦出土状況……34
９．第３号窯跡……35
10．第４号窯跡瓦出土状況……36
11．第４号窯跡……38
12．第５号窯跡……39
13．焼土遺構……41
14．Ｃ地区全体図……47・48
15．第１号住居跡(1)と
第８号掘立柱建物跡……51
16．第１号住居跡(2)……52
17．第１号住居跡(3)……52
18．第２号住居跡(1)……57
19．第２号住居跡(2)……58
20．第２号住居跡(3)……60
21．第２号住居跡(4)……60
22．第２号住居跡部分図(1)……63
23．第２号住居跡部分図(2)……63
24．第１号掘立柱建物跡……64
25．第２号掘立柱建物跡……66
26．第３号掘立柱建物跡……67
27．第６、７号掘立柱建物跡……70
28．第３、４号土壙……74
29．第７号土壙……76
30．第12号土壙……76
31．第13、14号土壙……78
図32．第１、２号溝断面図……83
33．第４号溝断面図……84
34．第６号溝断面図……86
35．第７号溝断面図(1)……86
36．第７号溝断面図(2)……87
37．第９号溝断面図……88
38．第10号溝断面図……88
39．第17号溝断面図……91
40．第18、19号溝断面図(1)……91
41．第18、19号溝断面図(2)……92
42．第20号溝断面図……93
43．第21号溝断面図……93
44．第21、22号溝断面図……94
45．第24号溝断面図(1)……95
46．第24号溝断面図(2)……96
図版１～５、Ａ地区出土遺物……113～117
６～26、Ｂ地区出土遺物……118～138
27～47、Ｃ地区出土遺物……139～159

表１．窯床面の傾斜角度……40
２．焼土遺構出土土器集成……40
３．Ａ地区第１号土壙出土土器集成……45
４．Ｂ地区第10号土壙出土土器集成……46
５．第１号住居跡ピット註記表……55
６．第１号住居跡関連溝観察表……56
７．第２号住居跡ピット註記表……62
８．第１号掘立柱建物跡ピット註記表…65
９．第２号掘立柱建物跡ピット註記表…65
10．第３号掘立柱建物跡ピット註記表…68
11．第６号掘立柱建物跡ピット註記表…69
12．第７号掘立柱建物跡ピット註記表…71
13．第８号掘立柱建物跡ピット註記表…72
14．第３号土壙出土土器集成……73
15．第４号土壙出土土器集成……73
16．第７号土壙出土土器集成……73
17．第８号土壙出土土器集成……75
18．第12号土壙出土土器集成……77
19．第13号土壙出土土器集成……77
20．第14号土壙出土土器集成……79
21．第15号土壙出土土器集成……79
22．第16号土壙出土土器集成……79
23．第17号土壙出土土器集成……80
24．第19号土壙出土土器集成……80
25．第20号土壙出土土器集成……81
26．第21号土壙出土土器集成……81
27．第１号溝出土土器集成……82
28．第２号溝出土土器集成……82
29．第３号溝出土土器集成……84
30．第４号溝出土土器集成……84
31．第５号溝出土土器集成……85
32．第６号溝出土土器集成……85
表33．第７号溝出土土器集成……87
34．第８号溝出土土器集成……88
35．第９号溝出土土器集成……88
36．第12号溝出土土器集成……89
37．第16号溝出土土器集成……90
38．第17号溝出土土器集成……91
39．第18号溝出土土器集成……92
40．第19号溝出土土器集成……93
41．第20号溝出土土器集成……93
42．第21号溝出土土器集成……94
43．第22号溝出土土器集成……95
44．第23号溝出土土器集成……95
45．第24号溝出土土器集成……95
46．文様瓦、文字瓦等出土表……98
遺物観察表……179

Ⅰ．は　じ　め　に

枡江遺跡は昭和48年段階の分布調査では、仙台市枡江地区の南東斜面、東照宮より燕沢に至る県道に面した仙台市原町小田原字枡江12番地を指すものとして登録されていたものである。今回調査を行なった地点は、枡江12番地より北西に250ｍ程のところである。この地点は旧仙台市原町小田原字蟹沢地区内であったが、町名整理により枡江地区となったものであり、重複をさけるため、今回調査した地点を枡江窯跡遺跡、先に知られていた枡江12番地所在遺跡を枡江12番地遺跡としたい。また枡江12番地遺跡は分布調査によって遺物の分布が確認されただけで遺構は発見されておらず、今後枡江遺跡の名称を使用する場合は、枡江窯跡遺跡を指すものであることをおことわりしておく。

今回の調査の契機となったのは、昭和52年に枡江地区内の与兵衛沼東側地区に鶴谷小学校分校（仮称）建設計画がもちあがり、仙台市教育委員会社会教育課文化財係職員が事前の踏査を行なった。その結果、同地は地形的に与兵衛沼より流れだした旧河道に面した南向緩斜面であり、さらには同一の旧河道に沿って存在する与兵衛沼窯跡群（仙台市文化財登録番号Ｃ－407）と蟹沢中窯跡群（仙台市文化財登録番号Ｃ－408）の中間にあたり、内藤政恒氏の報告に言う与兵衛沼窯跡群にあたる可能性もある。地主の古川敬氏によれば、自宅を建築するために整地した際に焼土や布目瓦片が出土したことがあるということで、今までの分布調査で見落していた窯跡の存在が考えられるにいたった。このことは早々古窯跡研究会に連絡され、同研究会員が分布調査を行なったところ、与兵衛沼より枡江地区に流れる用水路に、多量の須恵器片、布目瓦片が散布していることが確認された。その後仙台育英学園高等学校郷土史研究部々員によって分布調査が行なわれ、平瓦の完形品をはじめ、多量の瓦、須恵器片を出土するところであることが再確認された。このことより、地形、出土遺物から見て窯跡群の存在が確実となった。また用水路の東側平場においても、土地の買上げに伴ない杉林が伐採されるなど平場の整理が進められたところ、この平場においても多数の須恵器、土師器片が出土することがわかり、平場にも遺構の存在が考えられるようになった。

以上のように建設予定地内に窯跡群とその関連遺跡の存在が明らかになったので、仙台市教育委員会及び仙台市土地開発公社は事前調査を行なうこととし、長年同地区一帯の調査研究を行なってきた古窯跡研究会に発掘調査を依頼した。これにより古窯跡研究会は各機関の協力を受け、枡江遺跡調査団を編成して、昭和52年７月20日より着手したのである。

この地図は、国土地理院発行の2万5千分の1の地形図（仙台東北部）を使用したものである。　図2　位置図

II. 調　査　要　項

1．遺跡の名称

　枡江窯跡群（仙台市文化財登録番号C－433）

2．遺跡の所在地

　宮城県仙台市枡江105－1外

3．調査期間

　第1次　昭和52年7月20日～8月25日、昭和53年2月14日～4月20日

　第2次　昭和54年4月16日～4月27日

4．調査主体

　仙台市教育委員会

　仙台市土地開発公社

5．調査担当者

　渡辺泰伸（日本考古学協会々員、仙台育英学園高等学校教諭、古窯跡研究会代表）

　結城慎一、柳沢みどり、高橋彦之（仙台市教育委員会社会教育課文化財係）

6．協力機関

　東北学院大学考古学研究部

　仙台育英学園高等学校郷土史研究部

　みやぎの考古研究会

　藤間建設株式会社

7．調査補助員

　〈第1次〉　森剛男、山内耕、滝口卓、石本弘、渡部弘美、主浜光朗、木島勝也、小山薫、浜田秀一、中嶋康博、斎藤好輝、宇部則保、小野きよ子、金光正裕、安田稔、石本敬、白石直子、高橋学、廣岡敏、庄司博雄、工藤まり子、高橋美左子、小野いずみ、佐藤雅子、菅野順子、佐藤史仁、安倍正則、山田恵子、高橋みずほ、藤田俊雄、遠藤弘美、久富正章、古川哲弘、宍戸雅弘、福地真由美、千葉多智恵、高沢薫、那須祐二、井上敦子、沢畑俊明、壱岐善文、渡辺裕美、熊谷恵子、鈴木淑子、梅原秀子、猪股一夫、白井一夫、小島修、小湊賢一、菅原純孝、加藤豊明、若生俊広、渡辺秀樹、永沢一義、井口裕二、岩渕直之、藤島健司、藤原洋、内田悌之、海上晃、村岡信一、吉田豊、大茄子川泰司、松原清道、荒井裕己、小林慎吾、佐伯啓一、鈴木信人、鈴木僚一、鈴木清啓、高橋克彦、芳賀英実、三浦光一

郎、武山正孝、田村豊、辰口典男、水城昭子、岩崎美登利、伊達順、鈴木忠、佐藤功、佐藤武、馬場学、高橋秀至、酒井芳夫、熊谷信一、小沢健一、鎌田浩、高橋加代子、高橋和江、杉山真美、高橋勝子、佐々木啓一、藤本修、奥村義昭、佐々木政宏、佐藤正弘、斎藤秀寿、中沢裕一、佐々木祐一、川村正之、石黒伸一朗、横山慶一、高橋建一、桜井雄二、川村正彦、三塚健生、赤川祥子、上野英子、武藤亮子、目黒美智子、樋渡利美、

〈第２次〉 森剛男、滝口卓、熊谷信一、秋保博志、羽曽部豪美、富田茂夫、中沢裕一、村上昭弘、佐々木裕一、白井一夫、巻野俊夫、鈴木ひろみ

〈遺物整理〉 石本弘、滝口卓、山内耕、斎藤秀寿、藤田俊雄、高橋学、白井一夫、小沢健一、川村正之、熊谷信一、渡辺秀樹、佐々木祐一、中沢裕一、須田律子、佐藤正弘、酒井芳夫、石黒伸一朗、福地寿子、辰口典男、津田広穂、佐々木啓一、斎藤夕子、高野晃、小野寺清治

Ⅲ．遺跡の位置と環境

１．地理的環境

枡江遺跡は仙台市枡江105－１外に所在する遺跡で、仙台市の中心から3.5㎞程北にあり、東西に長く伸び、仙台市の北辺を画する丘陵南側斜面に位置する。

この丘陵は東北地方の背梁をなす奥羽山地より太平洋側に伸びた七北田丘陵が、北側を七北田川、南側を広瀬川によって浸蝕された丘陵の東端部で、通常台の原・小田原丘陵と呼称されている。丘陵地帯を構成する地層は仙台市を取巻く典型的な第三紀鮮新世仙台層群の一つであり、特に南側は河岸段丘の発達が著しい。遺跡の立地する台の原・小田原丘陵は、広瀬川によって形成された四つの段丘（台の原段丘、上町段丘、中町段丘、下町段丘）の中で最も高位にある段丘である（海抜50～100ｍ）。この段丘の一部は基岩が露出している岩石段丘であるが、大部分は５から６ｍの厚さの砂礫層で被われている。この砂礫層は上部より１ｍ内外の粘土層、次いで２から３ｍの偽層礫層よりなっており、台の原・小田原地区の浅井戸の良好な滞水層となっている。

つぎに枡江遺跡を中心とする微地形を検討したい。

枡江遺跡の立地する小田原地区は、仙台市の中心部に近接することより、近年宅地化が急速に進み、その本来の地形の様相が大きく変化している。現在わずかに溜池となって残っている沼と水路によって、かつての水系を推定することができる。一つは鶴ヶ谷団地と自由ヶ丘団地にはさまれた大堤沼から、鶴ヶ谷団地の南側斜面沿いに西流し、燕沢住宅、小鶴を通り梅田川に合流する。一つは与兵衛沼より南流し、藤川に合流し、さらに梅田川に合流する。この二つの水系は現在では沼は団地の排水池化され、水路の一部は暗渠化されてしまった。

枡江遺跡は後者の水系に属するものであり、最初に遺物を発見したのも与兵衛沼より枡江地区に至る用水路に大量の遺物を発見したことによってもうなずける。

遺跡は与兵衛沼より流れる用水路と、北側の丘陵より流れる小沢によって大きく三つに別れる。すなわち小沢によって南側を画される南側緩斜面、西側を用水路によって画され、北側を小沢によって切られ、中央部が若干高く東西に緩く傾斜するほぼ平坦な平場である。一つは、西側が現在道路となっている堤に接し、東は用水路によって切られ、南側は急斜面となっているところである。

2．歴史的環境

この遺跡がある台の原・小田原丘陵は、端的に言えば古代の生産遺跡が集中しているところである。丘陵東端から順次それらの窯跡をあげてみると、次のようになる。

大蓮寺窯跡は５世紀の須恵器を出土した遺跡として有名である。周囲から布目瓦が出土していることより瓦窯跡の存在も考えられるところである。これに続いて安養寺下窯跡、安養寺中囲窯跡、蟹沢中窯跡、与兵衛沼窯跡、庚申前窯跡、五本松窯跡等が点在している。これらの窯跡は瓦窯跡であり、庚申前だけが須恵窯跡である。また丘陵上には土師器、鞴火口の散布もみられることより、瓦、須恵器だけでなく他の生産も行なわれたことが考えられる。現在、丘陵の西端、国道４号線西側の堤町に堤焼という窯があるが、窯業に適した地であったことが知られる。

この丘陵は窯跡だけでなく、他の遺跡にも恵まれた地区であり、丘陵の各先端には縄文時代の遺物も散見せられる。枡江遺跡の北東には、現在調査されただけでも約20基の善応寺横穴古墳群がある。この横穴は７世紀前代より造営されたと考えられ、現存するだけでも50基を下らない大群集墳と推定される。ここから出土する遺物等により、窯跡群との関連も十分考えうることができる。また大蓮寺窯跡の範囲内には円筒埴輪をもつ小さな前方後円墳・案内古墳が存在する。さらには古代東北開拓の要となった陸奥国の第１級官衙である多賀城、その附属寺院、また寺院としては出羽、陸奥国最大の陸奥国分寺、同尼寺が、この丘陵から７㎞以内の距離に

位置している。遺跡の性格はかならずしも明らかでないが、多量に瓦、須恵器、土師器を出土する燕沢遺跡などがあり、各時代とも、比較的遺跡の立地環境にめぐまれ、特に奈良～平安期には、生産地帯として発展している。

Ⅳ．調査の方法と経過

1．調査地区の設定

分布調査を行なった当時、学校予定地内には杉林、竹林、民家等が有り、全体の地形を十分に掌握できる様な状態ではなかったが、その後予定地内の伐採整理が進むにしたがって、地形からみて分布調査で採集した遺物に関連する遺構の存在が考えられるようになったため、学校予定地を地形にあわせてA、B、C、Dの4ブロックに区分し、そのうちA、B、Cの3地区、約4,000㎡を第1次調査の対象とした。

A区は最初に遺物を発見した与兵衛沼より流れ込む小沢の東西斜面に、地形に応じてトレンチを設定した。B、C区は東側平場の南端に基準点を作り、この点を（0，0）として、3×3mを基準としたグリットを設定し、方位のアルファベットと3m単位のアラビア数字との組合わせで呼称することにした(例：N3E21、S6E30)。D区は遺跡内西側の平場で面積は約1,500㎡である。ここに3mのメッシュを組み、北側から1、2、3とトレンチ名を、西側からa、b、cと地区名を付し調査地点を表わすことにした。

2．調査経過

〈第Ⅰ次調査〉

昭和52年7月20日　晴れ

A地区の下刈りを行なう。表土は意外に浅いようである。与兵衛沼よりの排水路によって周辺が侵食されたものと思われる。意外に涼しく、作業は予定より進んだ。本日は遺構確認は出来なかった。

7月21日　晴れ

A地区は昨日に引き続き下刈り及び草木の排除を行なう。耕土は砂混りであるが、一部に赤

土が見られる。C地区は下刈りをほぼ終了した。

7月22日　晴れ

A地区、C地区のグリット設定を終了し、A地区の表土剝ぎ作業に入った。A－Ⅰ6とA－Ⅱ4、5の表土剝ぎは終了した。またA－Ⅱ3、6は一部掘り下げた。本日も遺構の検出は出来なかったが、遺物の出土量が増えた。中には溶着したものが混っている。

写真3　A地区発掘前の状況

写真4　C地区発掘前の状況

7月23日　晴れ

A－Ⅱ3、6を完了し、A－Ⅱ1、2の一部を掘り下げた。またA－Ⅰ5は完了し、A－Ⅰ3、4を一部掘り下げた。A－Ⅰでは遺構はなさそうである。また遺物も少ない。A－Ⅰ、A－Ⅱともに竹根、木根のため作業が困難である。

7月24日　晴れ

本日はA－Ⅱに作業を集中し、またA－Ⅱ6より北に8、9、10とグリットを拡張した。A－Ⅱ1、2は前日に引き続き掘り下げ、特にA－Ⅱ2が廃棄物のため難行した。A－Ⅱ7、8はほぼ掘り下げを終了した。遺物の出土量は特に7、8で多く、須恵器、土師器、瓦が一括で出土しはじめた。

7月25日　晴れ

Ａ－Ⅱ１、２は地山面まで掘り下げて終了した。Ａ－Ⅱ２より重弁蓮華文軒丸瓦の破片が出土した。Ａ－Ⅱ８は第５層上面での遺物を取り上げたが、遺物は少ない。Ｃ－Ⅱ１は表土が以外に薄く耕作の影響が見られる。

７月26日　晴れ

本日はＡ－Ⅱの表土剝ぎ及び遺構検出を行なった。Ａ－Ⅱ８は前日の作業の整理を行なったのち写真撮影を行なった。９ａ、10ａは遺物が少なく地山まで掘り下げ、８ｂ、９ｂ、10ｂは下刈り及び表土剝ぎを行なった。８ｂ、９ｂの境のベルトの西端において窯跡が検出された。副は140㎝位で窯壁が見られ、中には瓦がつまってあり、水田の開墾の際に一部削平されたものらしい。

７月27日　晴れ

本日は昨日検出された窯跡の確認を行なった。窯跡の残存部は焼成部の一部と思われ、トレンチに対し若干斜めに残っている。おそらく沢に水田を作った際に破壊されたと推定される。

７月28日　晴れ

Ａ－Ⅰ１、２、３、４を掘り下げ終了した。Ａ－Ⅱ８ｂは遺物包含層上面まで掘り下げ、またＡ－Ⅱ９ｂは地山面まで掘り下げ、土壙を検出した。Ｃ地区のＯ（Ｎ３Ｗ３）とⅡ１（Ｎ12Ｅ３）、Ⅱ２（Ｎ12Ｅ６）は６層上面より多量の土器が、またⅡ10は地山まで浅かったが、遺構は検出されなかった。

７月29日　晴れ

Ａ－Ⅱ８ｂ、９ｂは黒色土の堆積状況を確認するため掘り下げる。また前日検出された土壙は８ｂまで伸びた。Ｃ－ⅡＯ（Ｎ12Ｗ３）は黄色土の確認をするため６層上面まで掘り下げた。その上面で遺物が多量に出土した。黄色土の広がりを確めるためＣ－Ⅱ１（Ｎ12Ｅ３）とのベルトを排除した。

７月30日　晴れ

Ａ－Ⅱで窯跡を検出したため、同じ斜面の北側にⅡ11ｂ、12ｂ、13ｂとグリットを拡張し掘り下げたが、３グリットとも地山まで達しなかった。Ｃ－ⅡＯ（Ｎ12Ｗ３）、１（Ｎ12Ｅ３）はセクションの確認とセクション図作成を行なった。その結果６層上面が地山でなく、また５層と６層の間に粘土が張り付いた状態であった。

７月31　晴れ

Ａ－Ⅱ11ｂ、12ｂの特に下方部に作業を集中し、風化した凝灰層まで掘り下げた。上層の黒色土層下の砂質層、灰色層より多量の木質割板や瓦が出土した。Ｃ区は前日の遺物を取り上げ、層を確認した。またトランシットを使用しトレンチを設定した。

８月１日　晴れ

Ａ－Ⅱ９ｂ、10ｂ、11ｂ、12ｂの各トレンチを最下層まで掘り下げ完了した。Ａ－Ⅱｂ群は粘土で盛土をしテラスにしたと推定される。Ｃ地区はＩ10（Ｎ３Ｅ30）、8（Ｎ３Ｅ24）、6（Ｎ３Ｅ18）、Ⅱ９（Ｎ12Ｅ27）、7（Ｎ12Ｅ21）、Ⅲ10（Ｎ24Ｅ30）、8（Ｎ24Ｅ24）の各トレンチをを地山面まで掘り下げた。地山面までは浅く20～50㎝である。今日は遺構の検出はなかった。

８月２日　晴れ

Ａ地区は第１土壙をベルトを残し掘り下げ、また沢の落ち込みを確認した。Ｃ地区は昨日に引き続き、掘り下げたグリットの精査並びに遺構検出を行なう。

８月３日　晴れ

Ａ－Ⅱ区は８ｂで土壙を検出（第２土壙）した。また第１土壙の遺物をそのまま残し掘り下げた。また８ｂ、９ｂ、10ｂのセクション図作成の作業に入いる。Ｃ地区は焼土の範囲確認を行なうとともに、Ｉ７（Ｎ３、Ｅ21）、6（Ｎ３Ｅ18）、4（Ｎ３Ｅ12）、3（Ｎ３Ｅ９）、3ａの表土排除を終了し精査を行なった。その結果、幅60㎝で深20㎝の小溝を検出、また、住居跡らしき遺構が発見されたが、プランが明確になっていないため確証はない。

８月４日　晴れ

Ａ－Ⅱは９ｂのセクション図は終了したが、10ｂのセクションは３層目までである。13ｂは４層まで掘り下げた。Ｃ－Ｉは遺構を検出し確認するため昨日掘り下げたグリットを精査し、また住居跡のプランを確認するため精査を行なった。その結果、住居跡内と住居跡の北東に土壙を検出、また東側には２本の溝を確認した。Ｃ－Ⅱは昨日検出した溝のプラン確認、Ｃ－Ⅲは溝らしきものが見られる。

８月５日　晴れ一時雨

Ａ－Ⅱ10のセクション図終了し、９のベルトを排除した。第２土壙は掘り上げた。また第１窯は写真撮影を行なったのち平面図作成を実施した。Ｃ－Ｉは南北、東西ベルトを残した。第１住居跡の確認を行なったが、西側と南側は不明、東側の壁の内側に瓦列がみられる。Ｃ－ＩとＣ－Ⅱの各ベルトを排除し、Ｃ－Ⅱより３本の溝のプランを確認した。

８月６日　晴れ

第１窯跡は平面図終了、左側の瓦を取り除く。また床面には瓦が敷かれているようである。第１住居は全体の写真撮影を行なったのち、十字にベルトを残し、２層まで掘り下げ焼土の面で止める。平面で五つのピットを検出した。

８月７日　晴れ

午前中に２号溝、午後に３号溝を掘り上げたが、焼土の部分は残した。第３土壙の周辺は土色の変化が見られ、第４土壙は楕円形で第３土壙を切っている。第１住居は約５ｍ四方で、東と北側の内壁下に瓦が敷かれており、北側にカマドがある。床面と思われる面でピット６個発

見され、東側壁下より羽口が出土した。

8月8日　雨

プレハブ内にて水洗い及びネーミングを行なった。窯跡内出土瓦に「鳴」とヘラ書きされたものがあった。

8月9日　晴れ

窯跡は敷瓦を剝ぎ、縦断と横断の実測を行なった。住居跡においては床面プランの平面図を作成した。第4土壙の掘り上げ、その周辺の再確認を行なう。

8月10日　雨

プレハブにおいて、出土遺物の水洗いとネーミングを行なう。

8月11日　雨

今日も雨のため、遺物の整理と水洗いとネーミングを行なう。

8月12日　晴れ

窯跡及びA－II地区を終了した。住居跡はピットを半分掘り下げた。焼土の中に鉄滓の混っているものもあり、小鍛冶の可能性がある。住居跡も何回か拡張されたらしい。第3土壙は写真撮影後にセクション図作成を行ない終了した。

8月13日　雨

今日は現地説明会のため、その準備を行なった。

8月14日　雨

A地区の約3割の測量を終了した。第3土壙は実測のためのセクションポイントを残し、残りの埋土を掘り下げた。住居跡は平面プランを確認し、柱穴、ピット、溝を新しいものから掘り上げる。住居跡内に炉と考えられるものを確認した。溝周辺の平面図作成を行なう。

8月15日　曇り時々雨

A地区は第1、2土壙の平面図を終え、A－I、A－IIの平面図取りに入いる。第1住居跡はカマド前の土師器を取り上げ、その下を精査した。また前日まで行なっていたピットの大部分の掘りかたを終えた。第3土壙は平面図取りを終え、未掘の溝は番号を付け、その位置を図化した。

8月16日　曇り時々雨

A地区の平面図を終了した。住居跡は第2平面図取りに入いる。

8月17日　雨

雨のため午前中に遺物を育英高校に搬入し、午後は水洗いとネーミング作業を行なった。

8月18日　雨

午前中、プレハブにて器材整理を行ない、午後、育英高校において水洗いとネーミングを行

なった。

8月19日　曇り

第1住居跡の平面図取り及び床面の精査を行なった。また第3土壙と第1住居跡を結ぶトンネル状の溝を検出し掘削する。

8月20日　曇り

第1住居跡の平面図取りを終了し、レベル記入を行なった。また周溝の掘り下げも同時に実施した。C地区では東西セクション図取りの準備を行なう。

8月21日　曇り

第1住居跡の第1、第2周溝を掘り上げ、平面図を取り、レベルを記入した。また北西隅にもトンネル式の溝を確認した。

8月22日　晴れ

C地区の東西セクション実測を終え、註記も終了した。第1住居跡は周溝に敷かれている瓦を清掃し、その平面図を作成した。

8月23日　曇り一時小雨

第1住居跡の第3平面図を終了し、周溝に敷かれていた瓦を取り上げた。

8月24日　晴れ

第1住居跡の周溝に敷かれた瓦を取り上げた状態で平面図を取り、註記を行なう。またC地区の一部は埋め戻し作業に入いる。

8月25日　曇り

埋め戻し作業を終了した。

昭和53年2月15日　晴れ時々雪

事務所の整備をおおむね終了し、C区の清掃、グリット設定を終了した。

2月16日　晴れのち曇り

午前中B地区のグリットを終了し、午後より表土排除の作業に入った。

2月17日　晴れ

B地区の表土排除と遺構検出作業を行なった。その結果、N9、12、15ラインに沿って窯跡が3基検出され、西側から第2、第3、第4号窯とした。

2月18日　晴れ

前日に引き続き、B地区の表土排除と遺構検出を行なった。第2号窯の焚口部付近は破壊されている様である。

2月19日　晴れ

B地区の表土排除し、遺構確認面まで掘り下げた。第3、第4号窯跡の焚口部をわずかなが

ら確認した。水道管がＢ地区を東西に横断して窯を切断している。

写真５　Ｂ、Ｃ地区グリット設定状況

２月21日　晴れ

Ｂ地区はＮ48～Ｎ42、Ｅ９、12、15ラインのベルトのセクション図の検討及びＮ48～42、Ｅ９ラインの東側断面図取りを行なった。Ｃ地区は表土排除及び遺構検出を行なった。

２月22日　曇り

Ｂ地区はＮ48～42、Ｅ９、12、15とＮ45～42、Ｅ21ラインの南北ベルトとＮ42Ｅ21～24ラインの東西ベルトのセクション図取りと註記をした後、ベルトを排除した。Ｃ地区は中央部より南側の表土排除及び遺構検出を行なった。

２月23日　雪

雪のためＣ地区の清掃をしただけで屋外作業は中止し、遺物の水洗い及びネーミングを行なう。

２月24日　曇り

Ｃ地区の南側の表土排除及び遺構検出を行なった。

２月25日　晴れ

昨日に引き続きＣ地区南側の表土排除及び遺構検出を行なった。Ｓ６Ｅ６から内側が焼けている土壙を発見した。

２月26日　晴れ時々曇り

Ｂ地区に遣り方を設定し、Ｃ地区は南西部の表土排除及び遺構検出をした。

２月28日　曇り

Ｂ地区は第２、３、４号窯跡の精査を行なった後、写真撮影を実施した。Ｃ地区は東側の表土排除及び遺構検出。これでＣ地区の表土排除は全て終了した。

３月１日　曇りのち雪

Ｂ地区では精査を行なう。遣り方設定は終了。Ｃ地区はベルトの排除を行なう。

3月2日　曇り

B地区は第2、第3、第4号窯跡の確認面での平面実測を行ない、C地区では昨日に引き続きベルトを排除した。

3月3日　曇り

C地区は中央部の遺構確認作業を行なった。その結果、住居跡らしきものが4棟確認され、また溝が4本と土壙9基検出した。

3月4日　晴れ

B地区は窯跡に南北1本、東西3本のベルトを設け、窯跡全体を若干掘り下げ、その段階での平面図を作成した。C地区は東側の精査と遺構確認を行ない、第5住居跡の範囲を確認した。また東西と南北ベルトのセクション検討を行なった。

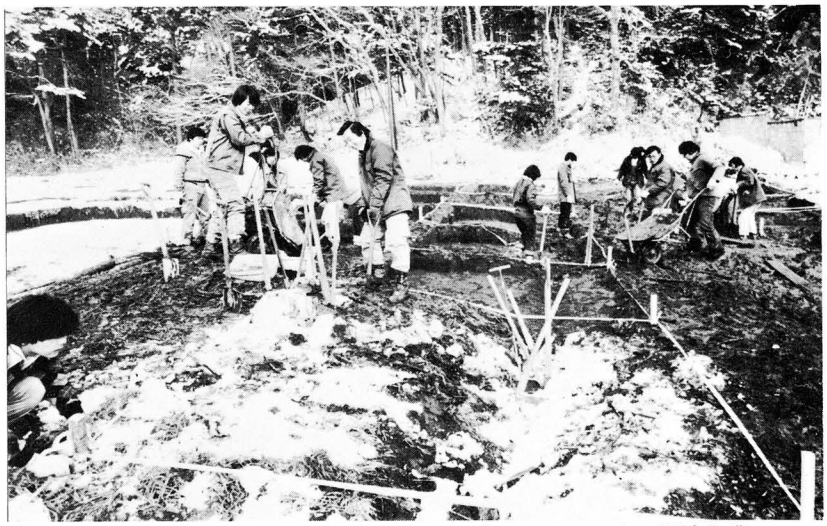


写真6　C地区表土排除作業

3月5日　晴れ

B地区は窯跡西側を昨日よりも若干掘り下げたところ瓦が出土したため写真撮影をした。東側も同様であり、その後出土遺物の実測を行なった。C地区は西側と東側の精査を行ない、

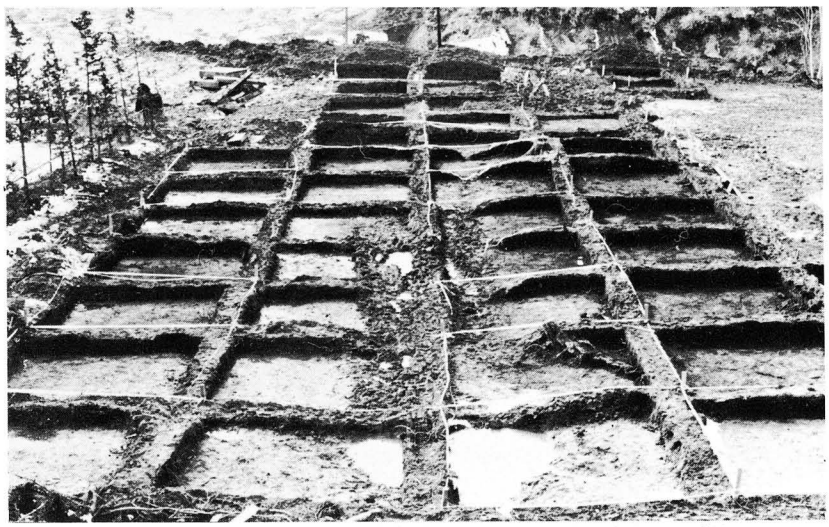


写真7　C地区グリット掘り上げ状況

同時に東西、南北ベルトのセクション図作成に入いる。

3月7日　晴れ

B地区は昨日と同様の作業を実施した。また窯跡の下方部に3m×6mのトレンチを4箇所設定し掘り下げた。C地区は東西、南北ベルトのセクション図取り、註記を行ない、その後、南北ベルトの一部を撤去した。その他、遺構確認はほぼ終了し、遣り方設定も行なった。

3月8日　晴れ

B地区は窯跡内部を若干掘り下げ、遺物を出した。また灰原の検出も行なった。C地区は東西、南北ベルトの排除と、去年埋め戻した第1住居跡、第2、3溝の埋土を排除した。

3月9日　晴れ

窯内出土瓦の平面図取り、遺物の取り上げ、灰原の確認を行なった。C地区では写真撮影のための整備及び不確定遺構の確認を行なった。

3月10日　雪

今日は雪のため、プレハブ内で遺物の水洗い及びネーミングを行なう。

3月13日　曇り

B地区は灰原の検出作業とE9、E15ラインのセクション図取りを行なった。C地区では現代の排水溝より掘り下げ開始。

3月14日　晴れ

B地区は窯跡の壁面、床面を検出した。灰原は第3、4号窯跡にかかるベルトのセクション実測を行なった。C地区は1、2、3号溝を掘り上げた。

3月15日　晴れ

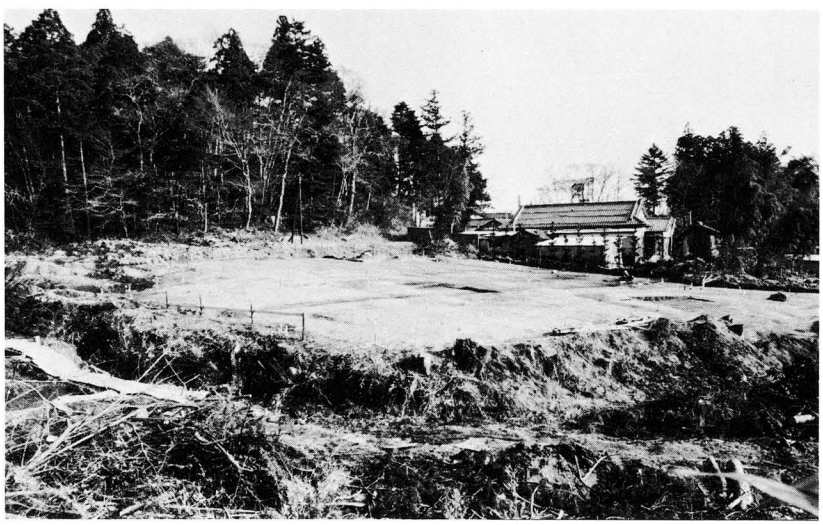


写真8　C地区表土排除終了状況

B地区は前日に引き続き窯の床面と壁面出しを行ない、その後、遺物の出土状況を実測した。また第5号土壙を掘り下げた。C地区では第1、2、4号溝と南側のピット及び東側のピットを掘り上げた。

3月16日　晴れ

B地区第2、4号窯跡のセクション図及び遺物出土状況図、第3号窯跡は精査を行なう。第4号窯跡東側を精査した結果、長さ約6m、幅約1mの溝状遺構を検出した。C地区では第1号溝を掘り上げ完了し、1号住居跡南側で住居跡1棟（第8号住居跡）検出した。また北東端で2間×3間の掘立建物跡、その南側でピット群を確認した。

3月17日　晴れ

B地区は昨日に引き続き第2、3号窯の東西ベルトのセクション図を取り、その後ベルト撤去。第3号窯跡は出土遺物の実測をした。また溝状遺構と灰原は精査した。C地区は東側の掘立建物跡の柱穴並びに南側のピットを掘り出す。8号住居跡を掘り上げ、第6号土壙は十字ベルトを設定して掘り下げ開始。

3月18日　晴れ

第2、4号窯跡はベルトを撤去した段階での遺物出土状況を実測し、第3号窯跡は東西、南北ベルトのセクション図作成を行なった。また溝状遺構は午前中に写真撮影、午後に確認面の平面図を取る。灰原は前日に引き続き掘り下げる。C地区は東側のピット掘りを続けた。また第8住居跡、第7、8号土壙は完了した。

3月19日　雨

今日は雨のためプレハブ内にて出土した遺物の水洗いとネーミングなどの室内作業を実施した。

3月21日　晴れ

B地区は第2号窯跡のベルトを排除し精査を行なった。溝状遺構はプランの再確認、実測をした後、掘り下げを開始した。また第9、11土壙をも掘りはじめた。C地区は第6住居跡のプランを確認し、十字にベルトを設定、第7号溝と並行して掘りはじめた。東側のピット群と第12土壙は掘り上がった。

3月22日　雪

雨のためプレハブにて出土遺物の水洗いとネーミングを行なった。

3月23日　晴れ

B地区は第2号窯跡内出土遺物の実測、取り上げを実施。溝状遺構は検討しながら掘り下げを進める。C地区は第7号溝の掘り下げを続行した。

3月24日　晴れ

B地区は明日の記者発表のため午前中に全面整備をし、午後に第2号窯跡の奥壁を確認した。また溝状遺構は下方部を掘り下げプランを再確認した結果、壁面が火を受けているようである。C地区は第6号住居跡のC区を床面まで掘り下げ、精査し、壁を検出した。7号溝は昨日に引

き続き掘り下げを行なった。

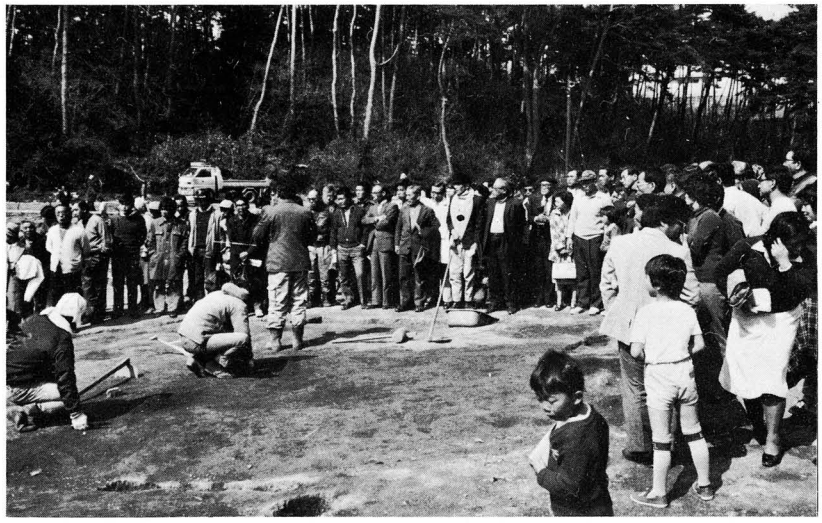


写真９　現地説明会

３月25日　晴れ

本日は記者発表。作業内容は次のとおり。Ｂ地区は溝状遺跡の下方部の掘り下げを行なった。その結果、昨日検出した焼壁面は溝状遺構の壁ではなく、溝状遺構を切って作られた遺構であることを確認した。また灰原の精査を行なった。Ｃ地区は第６号住居跡のＢ区を掘り下げ、床面、壁を検出した。またＤ区の周溝を掘り上げた。第７号溝はＡ区の精査、壁の検出を行なう。５号住居跡の精査と、第２、４、５、７号住居跡の周溝掘り下げも実施する。

３月26日　晴れ

今日、午後に現地説明会を行なった。約300 人が見学に来た。作業は、Ｂ地区では溝状遺構のセクション図取り、溝状遺構に続く灰原を掘り下げた。Ｃ地区は第６号住居跡のＡ区を床面まで掘り下げ、カマドも精査した。第７号溝はＡ区の精査を行なった。第２、３、７住居跡を精査したところ、掘立の柱穴を確認した。

３月28日　曇りのち雨

10時までＣ地区の精査をし、その後雨のため出土遺物の水洗いとネーミングを行なう。第１号掘立遺構の柱穴の註記と、Ｂ地区の溝状遺構のセクション図取りは雨の中実施した。

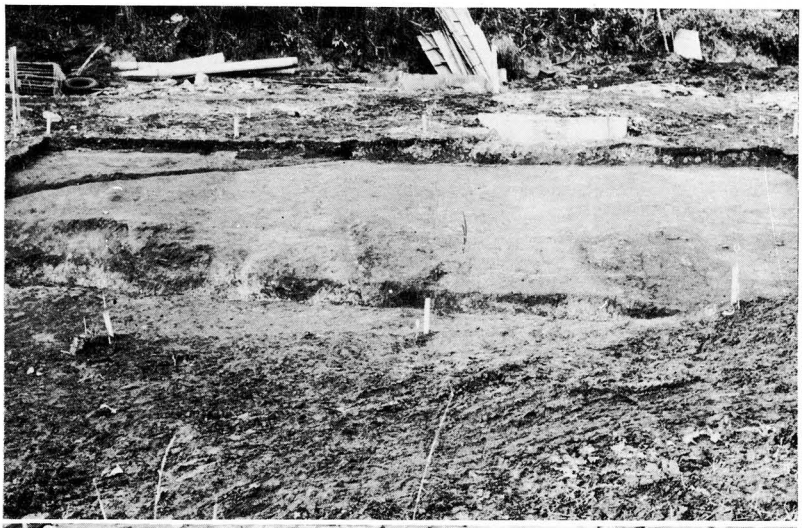
３月29日　晴れ

Ｂ地区は溝状遺構のベルト排除と焼土遺構のプラン確認をした。Ｃ地区では第６号住居跡の床面を精査し、また周溝を掘り下げた。第18、19号溝は精査し、新旧関係を調べた。本日より第２号住居跡を第２Ａ、２Ｂ号掘立遺構、第３号住居跡を第４号掘立遺構、第４号住居跡を第５号掘立遺構、第７号住居跡を第３号掘立遺構とした。第２Ａ、２Ｂ、３号掘立遺構の柱穴を掘り下げ、埋土の註記を並行して行なった。

３月30日　晴れ

Ｂ地区は焼土遺構を遺物を出しながら掘り下げて行なった。Ｃ地区は第６号住居跡の床面と

▶写真10
B 地区の表土
排除状況



▶写真11
B 地区窯跡の
掘り上げ状況

▶写真12
B 地区窯跡
の実測風景

壁を精査した後、略図を作成した。第２、２Ｂ号掘立遺構は前日に引き続き埋土の註記を行なった。第５号住居跡は精査したところ二つの土壙を確認し、第13、14号土壙とした。

３月31日　晴れ

Ｂ地区は焼土遺構を遺物を出しながら掘り下げて行った。これに並行して灰原の掘り下げも実施した。Ｃ地区では、前日第５号住居跡を第13、14号土壙としたため、第６号住居跡を第２号住居跡とする。第２号住居跡はピットに番号を付け、Ｐ１～５まで掘り下げた。第18、21、22号溝は切り合いを確かめつつ掘り下げ、第13、14土壙は十字にベルトを設定し、第23号溝との関連を確かめながら掘り下げ実施。

４月１日　晴れ

Ｂ地区は焼土遺構のセクション図作成と註記をしたのちベルトを撤去し、また灰原は白色粘土層上面まで掘り下げた。Ｃ地区は第２号住居跡のピットと周溝を、第13、14号土壙を底面まで掘り下げ、第８、20号土壙はセクションの実測を行なった。

４月２日　晴れ

Ｂ地区は焼土遺構出土遺物の実測準備をし、灰原は最下層まで掘り下げた。Ｃ地区第２号住居跡はピットと周溝の埋土の掘り上げ、各溝並びに土壙のセクション図取りを開始した。

４月４日　晴れ

焼土遺構より出土した遺物の平面図取りと灰原の東西、南北ベルトのセクション実測を行なう。Ｃ地区では第６号住居跡のセクション実測、溝、土壙のセクション図取りを行なった。また北側を精査した結果、２間×３間の掘立遺構を検出した。

４月５日　晴れ

焼土遺構の遺物取り上げ、精査を実施。灰原は実測を続行。第２号住居跡と第７号溝の南北セクション図取り後、ベルトを撤去し精査する。

４月６日　曇りのち雨

焼土遺構は遺物を図面にチェックしながら掘り下げていく。Ｃ地区は昨日に引き続き平面実測を行なったが、雨のため中断し、出土遺物の水洗いとネーミングを行なった。

４月７日　曇り時々晴れ

焼土遺構は前日の作業を続行し、灰原では東西、南北セクションの実測を終了した。Ｃ地区は第２号住居跡の２、３号カマドのセクション図取りと註記を行なう。

４月８日　晴れ

Ｂ地区は焼土遺構を昨日に引き続き掘り下げて行った。また灰原は南北、東西ベルトの排除を行なった。Ｃ地区は平面実測を続行する。

４月９日　晴れ時々雨

B地区は焼土遺構の断面、平面実測、精査並びに灰原の平面図取りを行なった。C地区は第2住居跡の北側の精査と、西南隅を掘り下げた。また平面図取りも同時に行なっている。

4月11日　晴れ

B地区は第22土壙を掘り下げ、B地区全体の平面取りを行なった。C地区は第2号住居跡のベルトを除去し、精査し、同時に第1、2カマドの平面図取りを行なった。また平面図取りはほぼ終了した。

4月12日　雨

雨のため午前中、出土遺物の水洗いとネーミングを行なった。

4月13日　曇り

B地区全体の平面図作成を行なう。灰原の平面図は終了した。C地区は第2号住居跡のピット、周溝並びに掘立遺構の掘り下げを実施する。

4月14日　晴れ

B地区の平面図取りは第2、3号窯跡まで終了した。C地区では第2号住居跡の平面図取りを行なった。また南側よりレベル記入をはじめる。

4月15日　晴れ

B地区は第4号窯跡と溝状遺構の平面図取りを終えた。C地区は第2号住居跡の平面図取りを行ない、平面図へのレベル記入は西側が終了した。

4月16日　曇り

B地区は平面図取りを終了し、第2、3号窯跡付近までレベル記入を行なった。C地区は第6号住居跡の平面図取りを終え、レベル記入をも終了した。

4月17日　晴れ

B地区全体のレベル記入終了。C地区第2号住居跡は全体を整備し、写真撮影を行なった。

4月18日　晴れ

第2号住居跡は溝の埋土を掘り上げ、同時に平面実測、レベル記入を行なう。

4月19日　曇り

第2号住居跡はレベル記入を終了した後、第1床面を剝がし、第2床面を検出した。

4月20日　晴れ

第2号住居跡は第2床面の焼土、炭化物の範囲を平面図にチェック、レベルを記入し、またピット及び溝を掘り下げた。

4月21日　晴れ

第2号住居跡は第2床面の平面図及びレベル記入と第1カマド焚口部の実測を行なった。第1号住居跡は東西、南北に切断してみた。

4月22日　晴れ

第2号住居跡は前日に引き続き第2床面の平面図及びレベル記入、第1カマドの瓦組の実測及びその切断を行なった。第1号住居跡は切断面の実測を行なった。

4月23日　曇り

6号住居跡の断ち割り、その図面作成及び北側の施設瓦の精査、実測、遺物取り上げを行なう。また3号掘立遺構の掘り方を半裁し、セクション図をとった。

〈第2次調査〉

昭和54年4月16日　雨

今回調査地区はD地区である。区域内に3×3mのグリット設定及び現場整備を実施する。

4月17日　晴れ

第1トレンチは約30cmで地山に達する。耕作が地山まで達しており、地山面には天地がえしの痕跡がある。第3トレンチも30～50cmで地山にたっしたが、本日は半分表土剝ぎが残った。

4月18日　曇り時々晴れ

第3、第5トレンチ完掘。第7トレンチは掘り残す。全体的に耕作による攪乱がはげしい。

4月19日　晴れ

第7トレンチを完掘する一方、第1トレンチ北側に第8トレンチを設定し掘り上げる。また第1～第7トレンチの中央部を南北に通る溝を掘り上げたが、時代、性格不明。畑の通路になっているところにほぼ一致している。

4月20日　曇り

第1～第8トレンチの清掃をして全体写真を撮る。その後、断面図取り。平面は古代遺構の検出がなかったので50分の1で平板実測をする。第5－Cでピットが一つと、その周囲に若干の焼土及び土師器片があったが、天地がえし等の攪乱がひどい。

4月23日　曇りのち晴れ

D地区の平板実測及びレベル記入終了。これに並行し、前回の調査地B地区の窯跡だめ押しのため、それを横に切断する。

4月24日　晴れ

B地区窯跡切断面の図面取りを行なう。また枡江遺跡の全体写真を撮るために、A地区全体の整備を行なう。

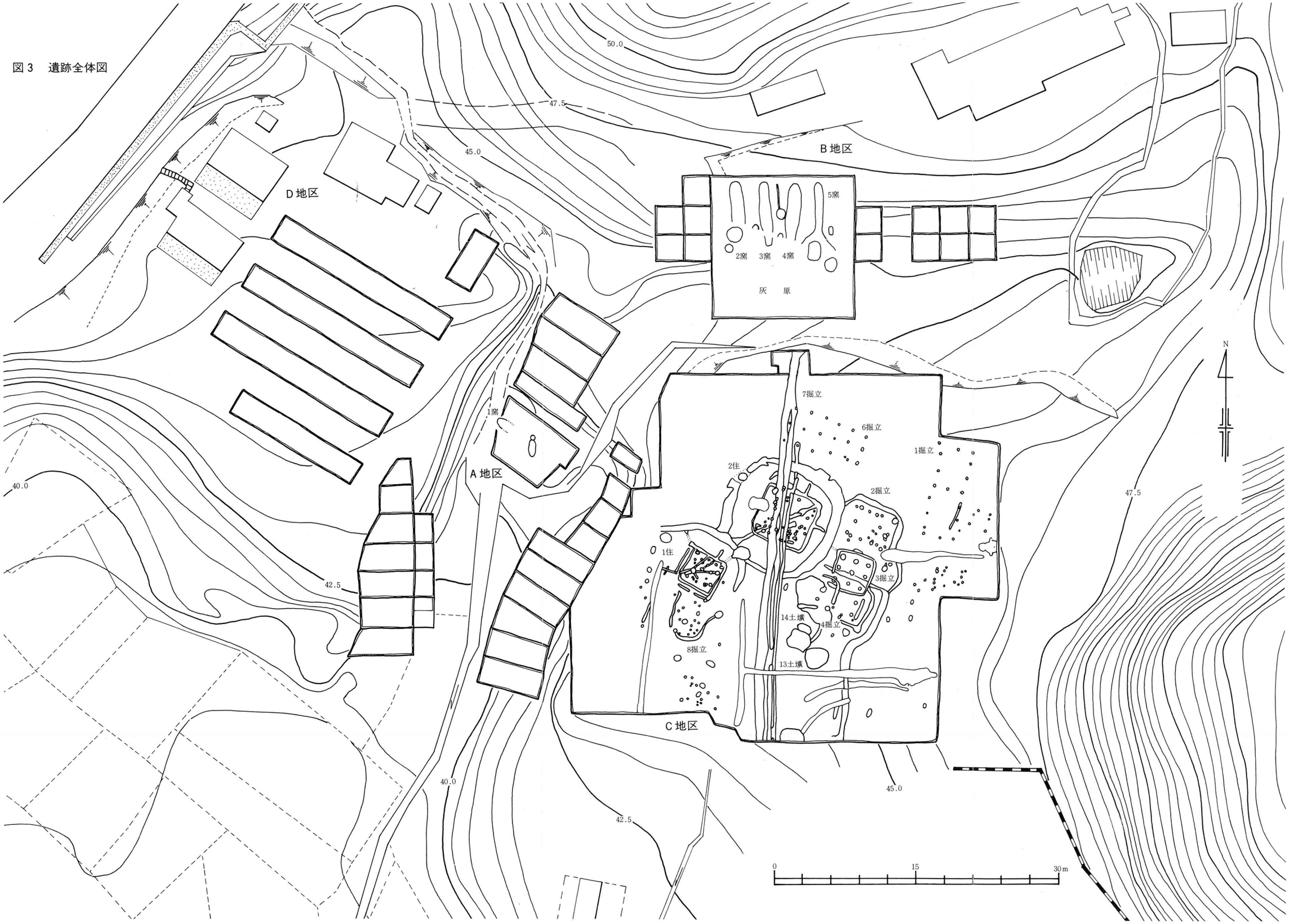
4月26日　曇り

窯跡断面の註記を行ない、その後、発掘器材の整理を行なう。

4月27日　雨

器材整理を終了し、今調査を終わる。

図３　遺跡全体図


50.0
47.5
45.0
42.5
40.0
B地区
D地区
A地区
C地区
5窯
2窯
3窯
4窯
灰　原
1窯
7掘立
6掘立
1掘立
2住
2掘立
1住
3掘立
14土壙
4掘立
8掘立
13土壙
N
0
15
30m

V．調　査　概　要

1．A地区の概要

A地区は与兵衛沼よりの用水路と沢田の両側に3×3mを基準としたトレンチを地形に応じて設定した。各トレンチは地形単位ごとに、A－I区、A－II区、A－IIb区に区分けして調査を行なった。

〈A－I区〉

用水路の西側斜面に南側から第1～第6までトレンチを設定した。この地区は分布調査の際に多量の須恵器片、瓦片が散布していた用水路に面した遺構の存在が考えられた地区であったが、各トレンチ共に表土は浅く20～30cmで地山にたっする。出土遺物も少なく、第1、第2トレンチより各2点の瓦片が出土しただけで遺構は見られなかった。

このA－I区の斜面は与兵衛沼からの用水路を作る際にできたものであり、分布調査の時に発見した遺物も他地区よりの流入品と考えられる。

〈A－II区〉

用水路の東側斜面に南側より第1～第10トレンチを設定した。また第8～第10トレンチは、

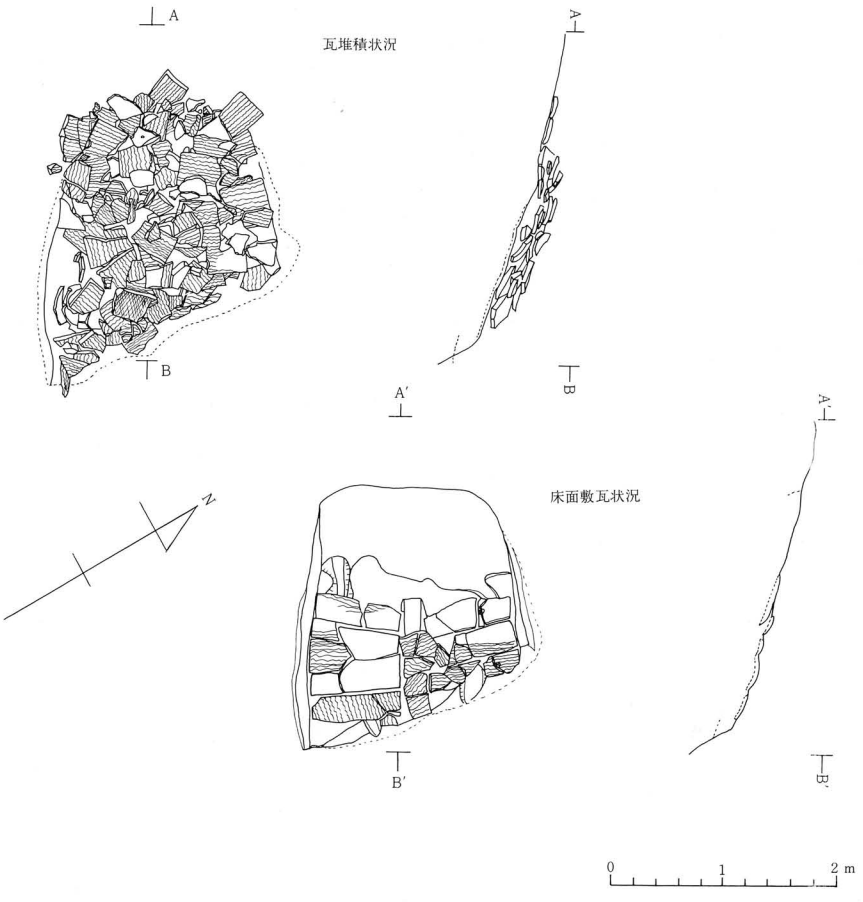
写真13　A地区全景

沢田を境にA－IIb区と同一のトレンチとなり、特に8a、9a、10aトレンチと呼称した。各トレンチ共層位は基本的に3層で、第2層の明褐色土層より土師器、須恵器が出土している。しかし大部分が破片であり、遺構も検出できなかったことより、C地区からの流入品と考えられる。またこのA－II区もA－I区同様、用水路開鑿による地形の変更を受けている。

〈A－IIb区〉

沢田の西側斜面で背後は用水路が通り、奥行きのない地区である。A－IIと通し番号であるが第8b～第13bトレンチまで設定した。遺構は第8bと第9bトレンチにおいて、窯跡1基と土壙2基が検出された。この地区は北側が高く、南側へ傾斜している沢に段状の水田が作られたため、両側の斜面は裾部がかなり削られている。また各トレンチ最下層の青灰色土層からは、瓦片と共に炭や火を受けた燃えさしと思われる木材が出土している。特に最も北側の13bトレンチでは100点をこえる瓦片と共に、炭、焼けた木材片が多量に出土しており、B地区において窯跡の存在を考えさせた。

図4　第1号窯跡実測図



〈発見遺構〉

（1）　窯　　跡

第1号窯跡

遺構の確認：A－II８ｂとA－II９ｂのベルト下で検出し、表土下約10cmで確認した。

窯体の構造：焚口部、燃焼部、焼成部の大部分が水田開墾の際に破壊され、わずかに焼成部の一部が残っていただけである。残存部は幅１ｍ、長さ1.1m程で、焼成部の最奥部分と考えられる。壁は床より立ち上る屈曲部がわずかに残っているだけである。床面の最も低い位置で測って13～17cmで、平均７cm程でしかなく、水田開墾による破壊以前にも削平されていたと考えられる。床面は平坦で、傾斜は15度程である。方向は南北に対して約54度西へ偏している。

写真14　第1号窯跡瓦堆積状況

写真15　第1号窯跡施設瓦状況

窯の内側はスサによってぬられていたと思われるが、残りが悪く、灰色に還元されている部分はわずかしか見られない。また床面下の地山は暗赤褐色に熱変化をうけているが、３～５cm程で、床面の厚さとも考えあわせると使用回数は少なかったと推定される。

窯内堆積：堆積土は薄く褐色土層であり、10cm程で瓦の堆積にあたる。瓦の堆積は、上面に不定形の大きさの瓦片を投げ上げたように積まれていたが、それをはずすと窯跡の中心線に対してほぼ直行するように、凸面を上にして２列に敷かれてあった。焼台として使用されたものらしく、瓦の下は還元されず橙色に熱変化を受けていた。

灰原：水田開墾のため残っていない。

（2）　土　　壙

第1号土壙

遺構の確認：A－II８ｂにおいて検出し、地山面で確認した。

形態と構造：平面形は南北2.5ｍ、東西1.1ｍ程の長楕円形で、壁はゆるやかに立ち上り、断

面形は若干凹凸のあるU字形をなす。深さは確認面より20cm程である。

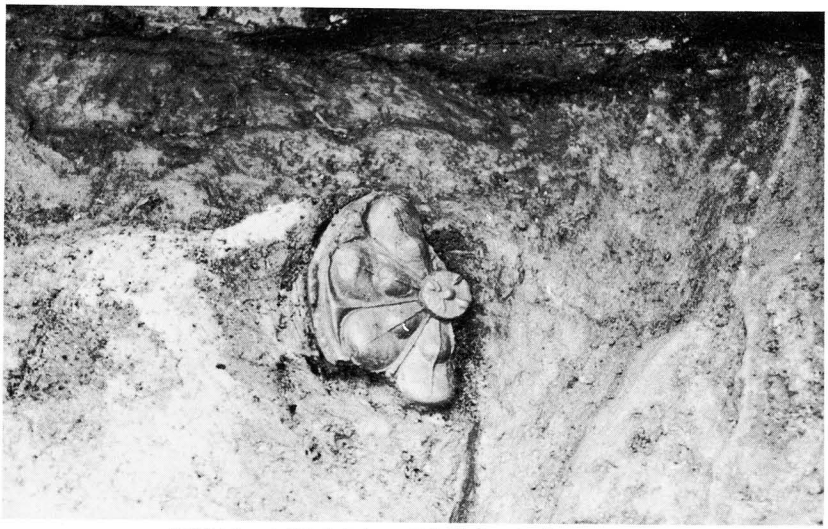


写真16　A地区出土の重弁蓮華文軒丸瓦片

堆積土：5層に区分できるが、基本的には灰褐色シルト、灰色シルト、暗褐色砂質シルトの3層で、最下層の暗褐色砂質シルトより瓦、須恵器が出土した。

関連遺構：第2号土壙が接する。切り合いは確認できなかった。

第2号土壙

遺構の確認：A－II 8 bにおいて検出し、地山面で確認した。

形態と構造：平面形は南北80cm、東西70cm程の楕円形で、壁は急に立ち上り、平坦な床面をなす。断面形はU字形で深さは30cm程である。

堆積土：堆土は第1号土壙とほぼ同一で3層に区分できる。水平堆積で遺物は含まない。

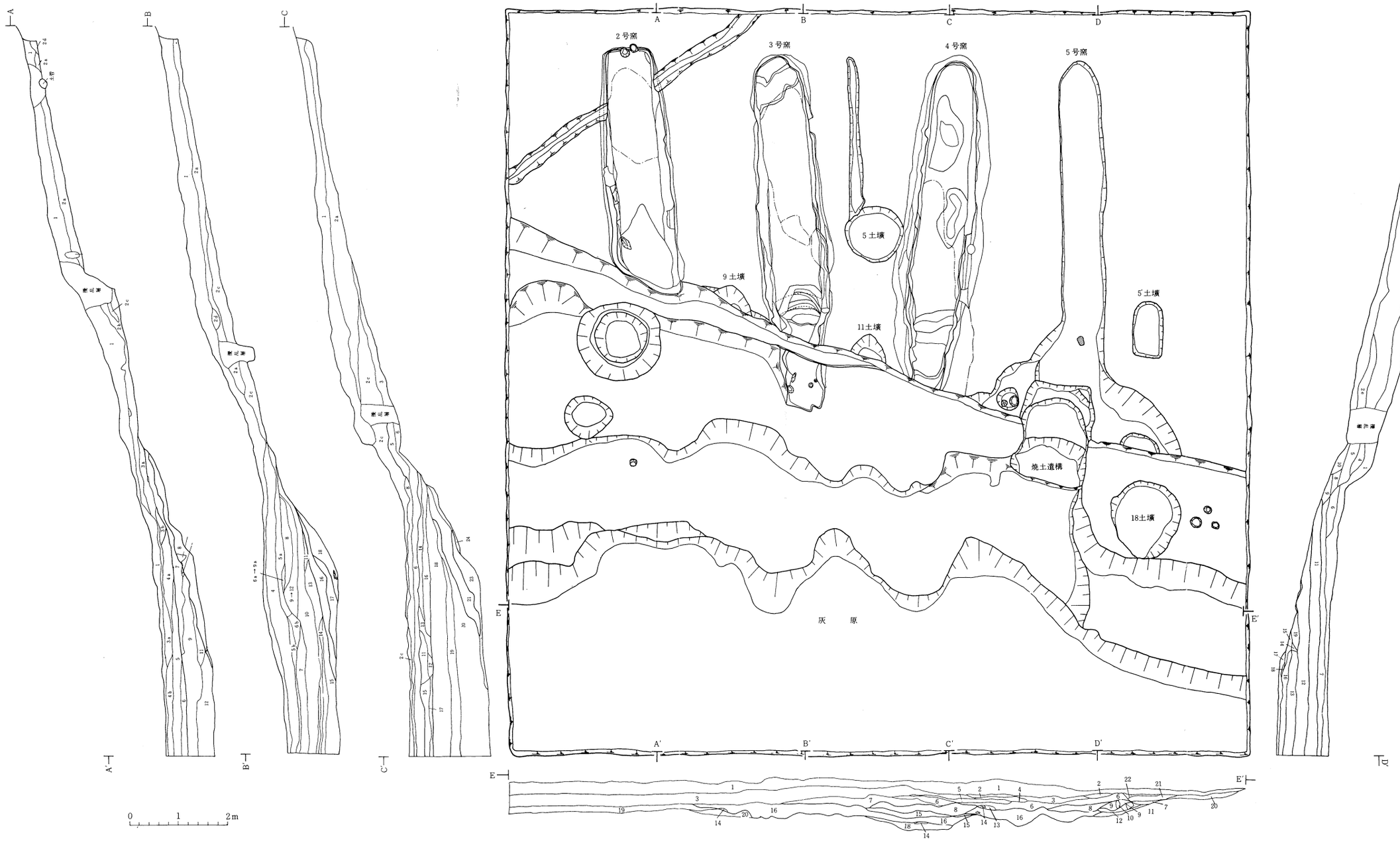
関連遺構：第1号土壙と共に第1号窯跡の前庭部付近にあたるが、炭は全く含まれず、遺物も少ない。上部がかなり削平されており、窯跡との関連は不明である。

2．B地区の概要

遺跡の北側を画する沢田跡の南向斜面にC地区と共通のグリットを設定した。現状は大部分が畑であったが、A地区と接する西側は竹林で、さらにその中に多量の廃土、廃材が捨てられてあり、ユンボでそれらを排除した。畑地の部分は全体的に表土が浅く、最も薄い所で30cm～40cmで地山にあたった。表面調査でも瓦片が数点採集されただけであり、当初は開田の際に遺構が大部分破壊され、遺物もA地区の方へ投げ捨てられたであろうと考えていた。

調査では開田の影響は意外に少なく、耕作や水道管埋設によって一部破壊されているが、かなり良好な状態で遺構を検出することができた。

図 5　B 地区全体図



B地図セクション註記

AA′セクション

1.	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性、しまりとも弱い。
2a.	10YR4/4 褐色シルト	粘性、しまりとも1層より強い。
2b.	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性は2a層よりも強く水分を含むためしまりがよい。
2c.	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性、しまりとも2a層と同じ礫を多く含む。
2d.	10YR4/4 褐色シルト	粘性、しまりとも2a層より強い。
3a.	10YR4/3 黄褐色粘土質シルト	粘性強くかそ性あり、しまりあり。
3b.	10YR5/3 黄褐色粘土質シルト	粘性、しまりとも3aと同じ。
4a.	2.5YR3/2 黒褐色シルト	粘性、かそ性しまりあり。
4b.	2.5YR3/2 黒褐色粘土質シルト	粘性強く、かそ性しまりあり。
5.	10YR3/1 黒褐色粘土質シルト	粘性、かそ性ともにあり。
6.	10YR3/1 黒褐色砂質シルト	粘性なし、かそ性弱くしまりあり。
7.	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性なし、かそ性しまりあり。
8.	10YR7/1 黒色粘土質シルト	粘性非常に強く、かそ性あり、しまりあり。
9.	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性なし、かそ性しまりあり。
10.	7.5YR5/1 明褐色砂質シルト	粘性なし、かそ性しまりあり。
11.	10YR4/4 褐色砂質シルト	粘性、かそ性、しまりともになし。
12.	7.5YR2/1 黒色シルト	粘性いく分あり、かそ性しまりあり。

BB′セクション

1.	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性・しまりとも弱い。
2a.	10YR4/4 褐色シルト	粘性・しまりとも1層より強い。
2c.	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性・しまりとも2a層よりやや強い。
3a.	10YR4/4 褐色シルト	（ブロック）粘性・しまりとも2c層よりやや強い。
4.	10YR3/3 暗褐色シルト	粘性強く、しまりなし。
5a.	10YR5/4 褐色粘土質シルト	粘性は4層より強く、しまりなし。
5b.	10YR3/3 黒褐色シルト	粘性強く、しまりなし。
6a.	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性は5a層より強く、しまりややある。
6b.	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	粘性・しまりとも強い。
7.	10YR3/3 黒褐色砂質シルト	粘性やや強く、しもふりなし。
8.	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性弱く、しまりあり。
9.	2.5YR4/1 黄灰色砂	粘性・しまりとも8層と同じ。
10.	7.5YR3/1 黒色砂質シルト	粘性・しまりとも9層より強い。
11.	5YR5/1 灰色砂	粘性・しまりとも10層と同じく強い。
12.	10YR4/3 にぶい黄褐色粘土	粘性・しまりとも10層と同じく強い。
13.	7.5YR2/1 黒色シルト	粘性は12層よりやや弱く、しまりあり。
14.	5YR5/2 灰オリーブ砂	粘性・しまりとも弱い。
15.	7.5YR3/1 黒色砂質シルト	粘性・しまりとも13層と同じく強い。
16.	10YR3/1 黒色砂質シルト	（第2次灰原）粘性は15層よりやや強く、しまりややあり。
17.	5YR5/2 灰オリーブ砂	粘性弱く、しまりあり。
18.	10YR3/1 黒色砂質シルト	（第1次灰原）粘性・しまりとも16層と同じ。

CC′セクション

1.	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性・しまりとも弱い。
2a.	10YR4/4 褐色シルト	粘性は1層よりやや強く、しまりあり。
2c.	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性は2a層よりやや強く、しまりもややある。
3.	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性・しまりとも2c層よりやや強い。
5.	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	粘性は3層より非常に強く、しまりもある。
6.	10YR3/4 暗褐色粘土質シルト	粘性・しまりとも5層よりやや強い。
7.	1層と同じ	
8.	7.5YR1.7/1 黒色シルト質粘土	粘性やや強く、しまりあり。
9.	5層と同じ	
10.	6層と同じ	
11.	10YR6/6 明黄色砂	粘性、しまりとも非常に強い。
12.	10G5/1 緑灰色砂	粘性弱く、しまりあり。
13.	10YR1.2/1 黒色シルト質粘土	粘性非常に強く、しまりもある。
14.	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性・しまりとも弱い。
15.	10YR4/1 灰褐色シルト	粘性・しまりとも14層と同様に弱い。
16.	10YR4/6 褐色シルト	粘性・しまりとも14層と同様に弱い。
17.	10YR3/3 暗褐色シルト	粘性強く、しまりもなし。
18.	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性・しまりとも17層よりやや強い。
19.	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性17層より強く、しまりは18層よりある。
20.	10YR3/2 黒褐色砂	粘性は18層よりやや弱く、しまりはややある。
21.	10YR3/2 黒褐色粘土質シルト	粘性は17層より弱く、しまりあり。
22.	10YR3/2 黒褐色粘土質シルト	粘性・しまりとも21層より強い。
23.	10YR3/1 黒褐色粘土質シルト	粘性・しまりとも22層と同様に強い。
24.	10YR3/1 黒色粘土質シルト	粘性・しまりとも22層より強い。

DD′セクション

1.	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性・しまりとも弱い。
2a.	10YR4/4 褐色シルト	粘性・しまりとも1層よりやや強い。
2e.	10YR3/3 暗褐色シルト	粘性・しまりとも2a層よりやや強い。
3.	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性・しまりともやや強い。
4.	10YR4/4 褐色シルト	粘性・しまりとも2a層と同じ。
5.	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性・しまりとも4層よりやや強い。
6.	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性は3層より強いがしまりなし。
7.	10YR3/2 黒褐色粘土質シルト	粘性・しまりとも6層よりやや強い。
8.	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性・しまりとも7層よりやや弱い。
9.	10YR3/3 黒褐色粘土質シルト	粘性は7層よりやや強く、しまりは6層よりやや弱い。
10.	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性は9層よりやや弱く、しまりはややある。
11.	10YR3/1 黒褐色粘土質シルト	粘性は9層よりやや強く、しまりはない。
12.	10YR3/2 黒褐色シルト	粘性は11層より弱く、しまりあり。
13.	7.5YR1.7/1 黒色シルト質粘土	粘性弱く、しまりややあり。
14.	5YR1.7/1 黒色シルト質粘土	粘性は13層と同じで、しまり強い。
15.	7.5YR2/1 黒色砂質シルト	粘性は13層より強く、しまりなし。
16.	7.5YR3/1 黒色砂質シルト	粘性は13層と同じでしまりあり。
17.	10YR4/1 灰色砂	粘性・しまりとも15層に同じ。
18.	2.5YR4/1 黄灰色砂	粘性・しまりとも13層と同じ。

EE′セクション

10YR3/2 黒褐色シルト質	粘性なし、かそ性あり、しまりもある。
5YR1.7/1 黒色シルト質粘土	粘性なし、かそ性あり、若干しまりが強い。
7.5YR1.7/1 黒色シルト質粘土	粘性いく分あり、かそ性あり、若干しまりが強い。
2.5YR3/3 黒褐色シルト質粘土	粘性あまりなし、かそ性あり、しまりが強い。
2.5YR4/1 黄灰色 砂質シルト	粘性なし、かそ性あり、しまりあり。
7.5YR3/1 黒色砂質シルト	粘性あり、かそ性もある。
5YP4/1 灰色砂質シルト	粘性、しまり、若干あり、かそ性もある。
10YR3/1 黒色砂質シルト	粘性あまりなく、しまり若干ある。
2.5YR3/1 黒褐色砂質シルト	粘性なし、かそ性あり、しまりあり。
2.5YR4/1 黄灰色砂質シルト	粘性なし、かそ性あり、しまりあり。
7.5YR4/1 灰色砂質シルト	粘性若干あり、かそ性あり、しまりもある。
7.5YR5/1 灰色砂質シルト	粘性なし、かそ性あり、しまりある。
10YR1.7/1 黒色シルト	粘性強く、かそ性ある。
7.5YR7/1 明褐灰色砂質シルト	粘性なし、かそ性あり、しまりもある。
5YR5/2 灰オリーブ色砂質シルト	粘性なし、かそ性、しまりあり。
10YR1.7/1 黒色シルト質粘土	粘性非常に強くかそ性あり、しまりもある。
10YR4/1 灰色砂質シルト	粘性なし、かそ性あり、しまりある。
N 1.5 黒色シルト質粘土	粘性強く、かそ性あり。
10YR3/3 黒褐色シルト質粘土	粘性なし、かそ性あり、しまりあり。
10G5/1 緑灰色	粘性なし、かそ性あり、しまりあり。
N3/ 暗灰色砂質シルト	粘性なし、かそ性あり、しまりあり。
5YR3/1 黒褐色シルト質粘土	粘性なし、かそ性あり、しまりあり。

東西セクション・南北セクション対比表

CC′セクション	EE′セクション
2 c 層	1 層
6 層	5 層
8 層	3 層
14 層	6 層
16 層	8 層
21 層	15 層
22 層	16 層

DD′セクション	EE′セクション
1 層	1 層
4 層	2 層
5 層	6 層
8 層	8 層
16 層	16 層

AA′セクション	EE′セクション
1 層	1 層
2 b 層	3 層
3 a 層	19 層

BB′セクション	EE′セクション
1 層	1 層
4 層	3 層
5 a 層	7 層
10 層	16 層

検出遺構は、窯跡４基、焼土遺構１基、土壙６基、現代の井戸１基である。特に灰原は最下層まで調査できた。

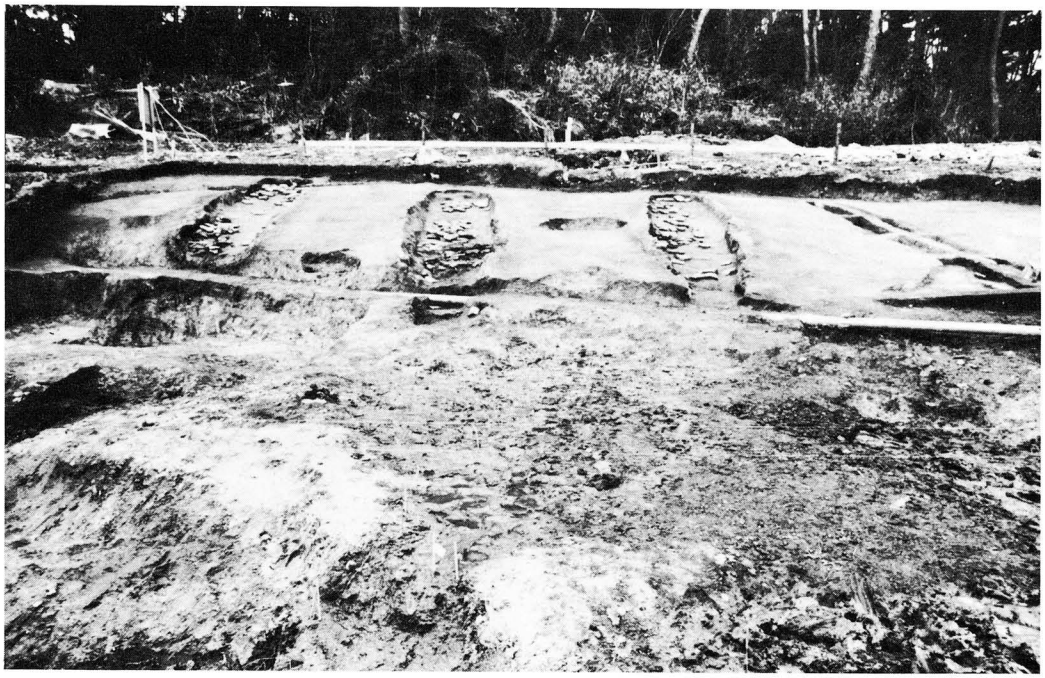


写真17　Ｂ地区全体の状況

〈発見遺構〉

（１）　窯　　跡

第２号窯跡

遺構の確認：Ｂ地区の西側、ちょうどＥ９ベルト下において発見した。表面調査では遺物は見られなかったが、第１層（暗褐色土）において廃棄物と共に瓦片が少量見られ、第２層（褐色土）において焼土、炭、瓦片が多量に混入し、第２層下面において窯跡を検出した。窯跡検出面は表土より30～40cmで浅く、遺構全面に耕作による影響を受け、斜面の上部ほど削平されている。

窯体の構造：窯体は丘陵斜面の暗褐色土に掘り込まれたものであるが、焚口と燃焼部の大部分を開

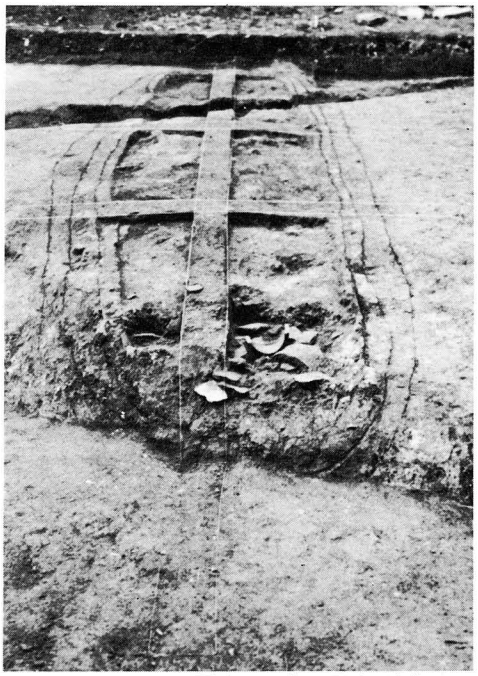
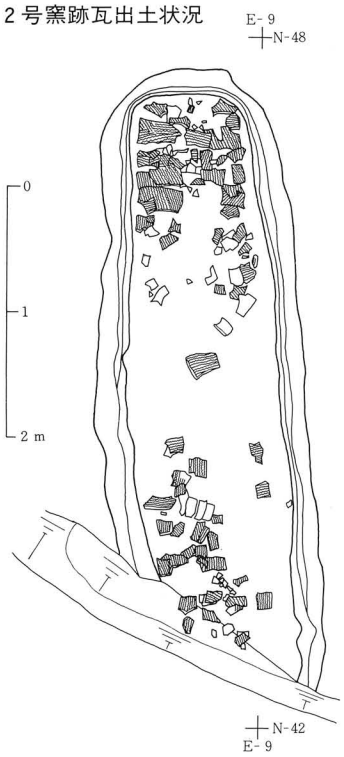


写真18　第２号窯跡(1)

図6　第2号窯跡瓦出土状況



田、井戸掘削、水道管埋設によって失っている。焼成部の一部は暗渠用土管埋設のため切断されている。したがって窯体の残存長は中軸線上で4 m52cmを測る。床面傾斜や両壁のカーブから推定すれば、窯体の全長は7 m程と考えられる。方向は窯体中軸線が磁北に対し西へ6度偏している。

焚口部と燃焼部：焚口部は完全に破壊されているが、燃焼部については残存部に傾斜変換部が見られる。水道管埋設によって切断された部分がそれにあたる。幅は1 mで燃焼部としての長さは約2.5 mと推定される。

焼成部：焼成部床面残存長は4.5 mである。壁は両側共に削平され、高さは25～30cm程しか残っていない。特に最も内側の壁面は窯内に崩落している。床面は青灰色の環元層となっているが、奥壁の周辺は薄く、赤褐色の部分もある。床面の幅は中央部で90cm、傾斜角は20度である。また調査時には奥壁近くに一部しか残っていなかったが、焼台に使用した平瓦が中軸線に直行するように2列に敷いてあった。窯の使用時に焼成部全面に敷いたものと思われる。天井部は残っていないが、壁の高さは、そのカーブと床幅より1 m前後と推定される。奥壁に見られるピットは窯跡に直接関係はないと思われるが、2層より掘り込まれている。性格は不明である。煙道は確認できなかった。

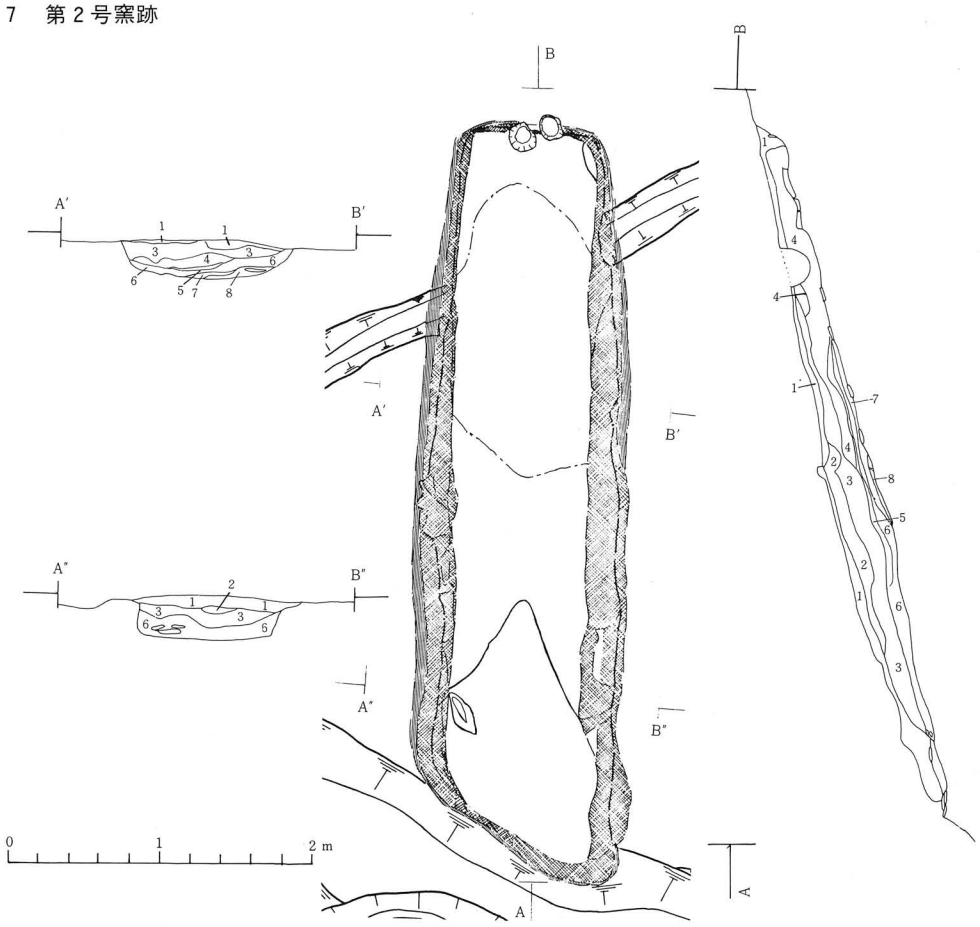
窯内堆積状況：8層に区分できる。割合いに水平に堆積しているが、焼成部全体を通して堆積している層はない。各層ともスサと若干の焼礫を含み、遺物は割合い少ない。

写真19　第2号窯跡(2)

第3号窯跡

遺構の確認：2号窯跡の東側、正にベルト下において発見した。検出状況は2層下面において窯跡を確認した。窯跡確認面は表土から35cm～40cmで、斜面の下方がやや厚い。第1層（暗褐色土）は小礫とゴミを含み、第2 a層（褐色土）、第2

図７　第２号窯跡



1．7.5ＹＲ⅘褐色シルト	粘性、しまりとも弱い。	6．10ＹＲ⅝黄褐色シルト	粘性、しまりとも弱い。
2．５ＹＲ⅝燈色シルト	粘性は弱く、しまりは非常にある。スサ・小礫を含む。	7．５Ｙ　⅘灰オリーブ色砂	粘性弱くしまりあり。スサが多分に多い。
3．５ＹＲ⅘にぶい燈色シルト	粘性弱く、しまりあり、スサ・焼土を多少含む。	8．10ＹＲ⅝明黄褐色シルト	粘性・しまりとも弱い。
4．7.5ＹＲ⅘褐色シルト	粘性、しまりとも弱い。	２つの東西セクションの注記は上記と同じ。	
5．2.5ＧＹ⅘暗オリーブ灰色砂	粘性弱くしまりあり。スサが多分に多い。		

Ｃ層（暗褐色土）は焼土、炭、遺物と共にゴミを若干含み、窯跡確認面まで耕作の影響をうけている。

窯体の構造：窯体は暗褐色土をベースとしており、燃焼部の一部を水道管埋設によって切断されているだけで、窯の全様を知ることができる。中軸線で測った全長は8.2ｍである。方向は窯中軸線が磁北に対し西へ６度偏しており、２号窯跡とほぼ同一方位である。

焚口部と燃焼部：焚口部は床幅52cmで、左右に広がらず、切り落したような開口部をなす。壁は赤褐色に熱変化をうけて、内部には多量の灰と炭が堆積している。

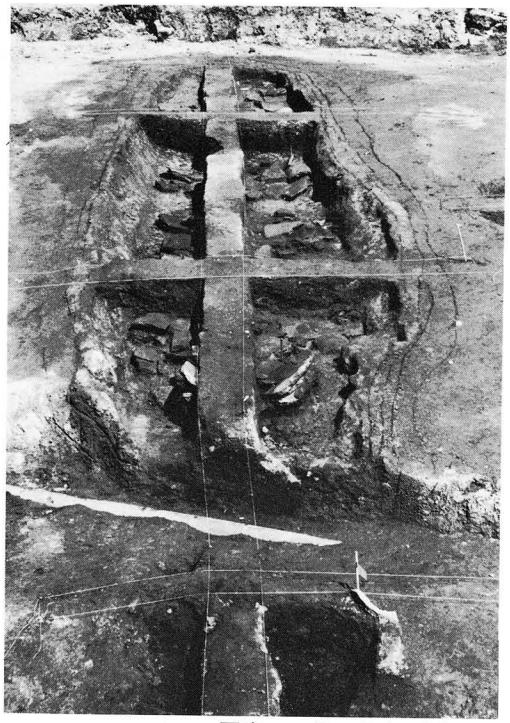


写真20　第３号窯跡(I)

図８　第３号窯跡瓦出土状況

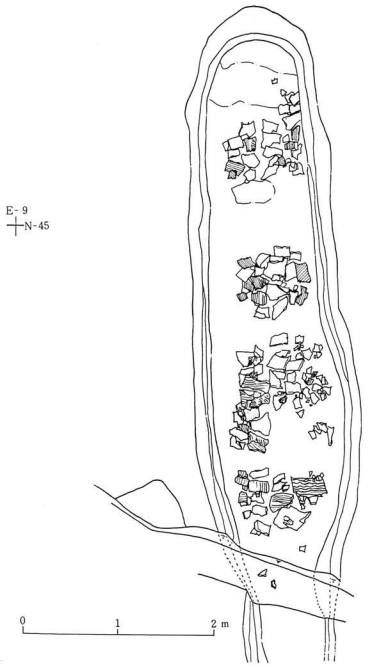
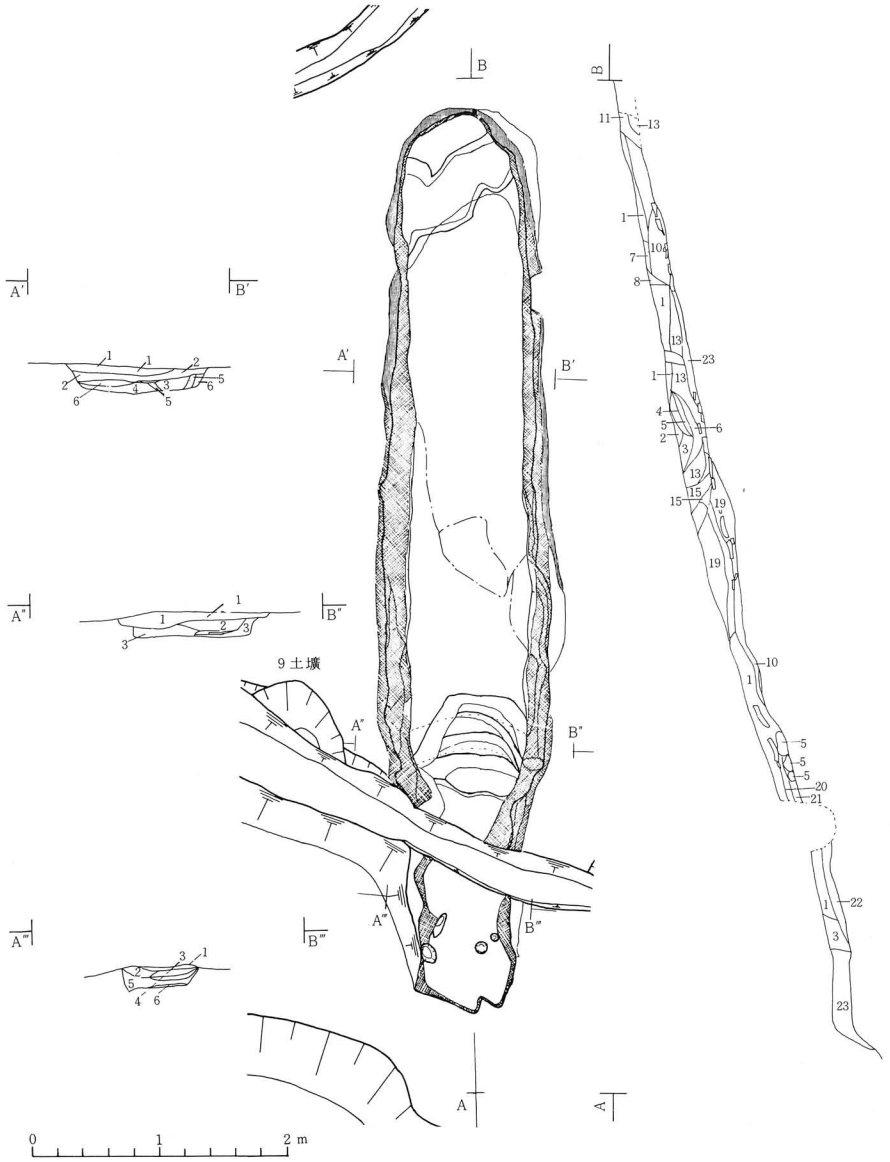


写真21　第３号窯跡(2)

燃焼部は一部を水道管埋設のため切断されているが、窯幅がせまくなる部分に傾斜変換部が見られ焼成部と区分できる。長さは2.25ｍを測る。床面は暗灰色に環元されている。傾斜は20度程で、炭、焼土と共に20cm前後の焼石が堆積している。側壁は中央部で東側が中軸線よりに内傾し、幅50cmと狭くなっているところもある。

焼成部：全長は中軸線で4.46ｍで、床面は凹凸があるが、傾斜は10～25度である。全体的に青灰色に還元され、堅く焼きしまっているが、奥壁の部分では還元されているところは薄く、床面は軟かい。幅は中央部で90cm、最も広いところで１ｍである。側壁は内側が青灰色で、外側は赤褐色となっている。還元層は３～５cmで薄い。壁の厚さは中央部が25cmで、奥壁に近いほど薄く、10cm程である。

図9　第3号窯跡



1．10YR5/6明黄褐色シルト　粘性、しまりとも窯跡確認面の地山と同じ。瓦瓦を混入する。
2．10YR5/6黄褐色シルト　粘性、しまりとも埋1層よりやや強い。瓦を混入する。
3．10YR5/6褐色シルト　粘性、しまりとも埋1層に同じ。焼土を多少含み瓦が混入する。
4．10YR5/6黄褐色シルト（2より暗い）　粘性、しまりとも埋2層よりやや強い。瓦が混入する。
5．10YR5/6黄褐色シルト(4よりやや明るい)　粘性は埋4層と同じで、しまりは埋4層よりやや強い。瓦を混入。
6．5YR5/6にぶい赤褐色シルト　粘性、しまりともスサト同じ、熱をあびる。
7．7.5YR5/6明褐色シルト　粘性は埋1層と同じだがしまりはやや強い。焼土をブロック状に含む。
8．7.5YR5/6明褐色シルト　粘性、しまりとも埋1層に同じ。
9．7.5YR5/6明褐色シルト　粘性、しまりとも埋1層に同じ。焼土をブロック状に含む。
10．7.5YR5/6明褐色シルト（やや明るい）　粘性、しまりとも埋1層に同じ。焼土をブロック状に含む。
11．7.5YR5/4褐色シルト　粘性、しまりとも埋1層に同じ。焼土をブロック状に含む。
12．7.5YR5/6褐色シルト　粘性、しまりとも埋1層に同じ。
13．10YR5/4褐色シルト　粘性、しまりとも埋1層に同じ。小礫、焼土を多少含む。
14．10YR5/4褐色シルト　粘性、しまりとも埋1層に同じ。スサをブロック状に含む。
15．10YR5/4褐色シルト(17よりやや明るい)　粘性、しまりとも埋1層に同じ小礫を多少含む。
16．10YR5/4褐色シルト(17よりい)　粘性、しまりとも埋1層よりやや弱い。壁と非常に似た黄色の焼土を含む。
17．10YR5/4褐色シルト　粘性、しまりとも埋1層に同じ焼土を多少含む。
18．10YR5/3にぶい黄褐色シルト　粘性は埋19層と同じでしまりなし。埋19層よりスサを多く含む。
19．10YR5/4褐色シルト　粘性は埋1層よりやや強く、しまりなし。ブロック状にスサを含む。
20．10YR5/3暗褐色シルト　粘性、しまりとも埋21層よりやや弱い。小石が底面に接しているが熱は加わってはおらず焼台とは考えられない。
21．10YR5/3暗褐色シルト　粘性は埋1層よりはやや弱い。
22．10YR5/3暗褐色シルト　粘性、しまりとも埋1層より強い。
23．10YR5/1黒色シルト　粘性、しまりとも埋22層より弱い。炭化物、焼土をブロック状に含む。

煙道部は検出できなかったが長いものではなく、奥壁付近より上部にぬくものと推定される。床面は多量の瓦が中軸線にほぼ直行するように散布しており、焼台として焼成部に敷いたものであろう。

窯内堆積状況：19層に区分できたが、ほとんどが水平堆積ではなく、場合によっては上方が垂直に入り込む層もあり、雑然としている。各層とも焼土、焼礫をブロック状に含み、床面に近い層ほど遺物とスサを含む。

第４号窯跡

遺構の確認：３号窯跡の東側、Ｅ15ベルト下に位置する。検出状況は窯跡の上方が第２層下面で、下方は第３層下面で確認した。窯跡確認面は斜面上方で20～30cm、下方は最も厚いところで90cmで、下方ほど厚い。各堆積土の状況は、第１層（暗褐色土）は耕作土で礫とゴミを含む。第２ａ層（褐色土）は焼土、炭、遺物を若干含む。第２ｃ層（暗褐色土）は遺物を多少含む。各層とも現代の遺物が混入しており、窯跡確認面まで耕作の影響をうけている。

窯体の構造：窯体は焚口部を水道管埋設によって切断されている。全体的に窯跡上面は削平されているが、全様を知ることができる。残存長は７ｍを測る。方向は中軸線が磁北に対し東へ６度偏しており、２号窯跡、３号窯跡とは反対側に偏している。

焚口部と燃焼部：焚口部は欠損しているが、２号窯より推定して、水道管埋設地点より１ｍ程

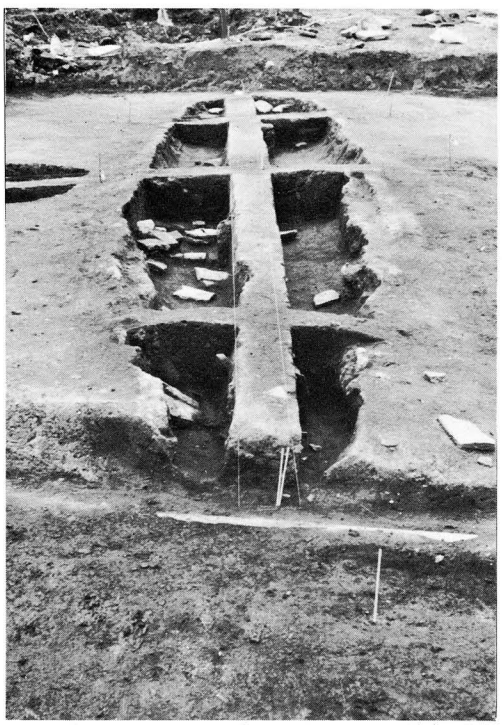
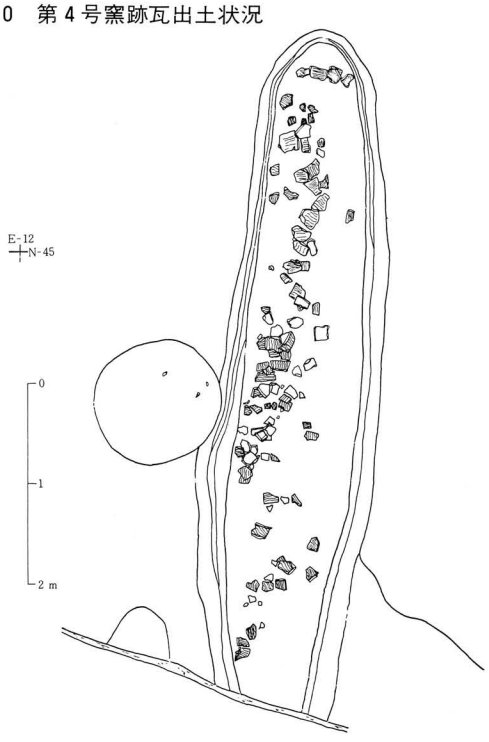


写真22　第４号窯跡(I)

図10　第４号窯跡瓦出土状況



手前の地点と考えられる。

写真23　第４号窯跡(2)

燃焼部は側壁が狭くなる地点に傾斜変換部があり、焼成部と区別できる。現存床長は1.3ｍ程である。側壁は床面からの立ち上りが垂直的で、床面共青灰色に還元されている。西側壁は特に厚く、赤褐色に変化した部分まで測ると、最も厚いところで50cmある。東側は15cmで薄い。床面の傾斜は15～16度で凹凸が見られる。

焼成部：焼成部床面長は5.2ｍである。床は中央部に凹凸があるが青灰色に還元しており、燃焼部付近は硬く、奥壁付近は軟らかい。傾斜は中央部で15～20度である。床幅は中央部で90cm、最大で１ｍを測る。側壁は東壁の保存は悪いが、西壁は一部二重に補修されている。壁の立ち上りは燃焼部に比べて緩やかにカーブしている。また窯壁は両壁共に厚く、赤褐色の部分もいれると、中央部で30cm、最大で50cmある。高さは削平されているため20～25cm程しか残っていないが、床幅、側壁のカーブより推定して１ｍ前後と思われる。

煙道部は検出できなかったが、奥壁付近で天井部へぬけるものであろう。

窯内堆積状況：６層に区分できた。第３層が最も厚く、焼成部中央に堆積しているが、これは確認面から床面まで１層をなし、スサ、焼土をブロック状ないしは霜降り状に含入している。他の層はほぼブロック状に堆積しており、ともに不整合な堆積状況である。

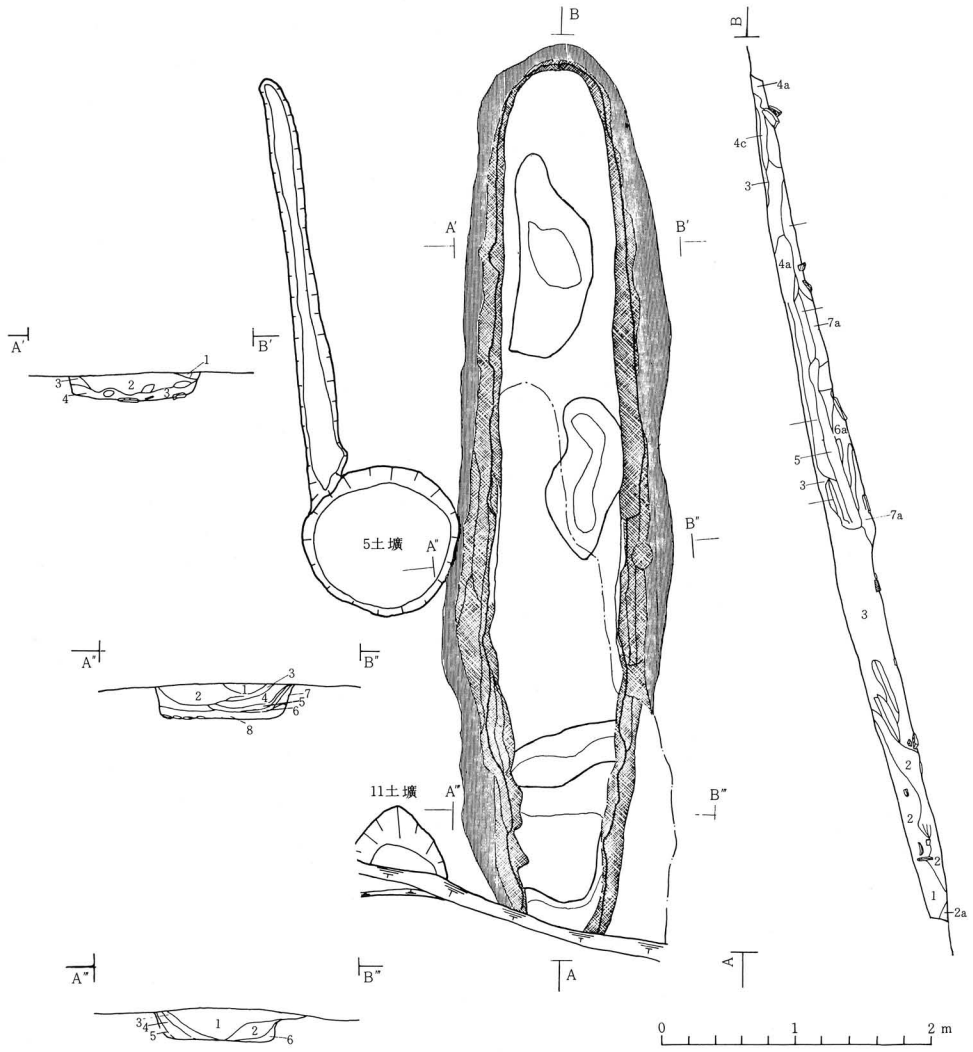
第５号窯跡

位置と保存状態：４号窯跡の東側、E18ベルト下に位置する。検出状況は窯跡奥壁付近では第２ａ層（褐色土）下、下方は第３層（黒褐色土）下面において確認した。第２ａ層は瓦片や焼土を含み、それまで発見した窯跡と同様のものと考えていたが、確認面においては、それまでのように焼壁による窯体輪郭の確認はできず、土色のちがいによって輪郭を確認した。全体的に耕作による削平をうけており、一部を水道管によって切断されている。焚口部と前庭は溝状遺構によって削りとられている。中軸線で計測した現存長は6.56ｍで、方向はほぼ真北を向いている。

焚口部と燃焼部：焚口部は溝状遺構が切っているため不明である。またこの窯跡は他の窯跡とはことなり燃焼部付近が左右に広がっており、はたして焚口部が作られたか疑問を残した。燃焼部は左右に広がった付近と考えられるが、傾斜変換部は明確ではなく、焼成部との境界が判然としない。

焼成部：全長は5.5ｍ程と考えられるが、境界は明確ではない。床面は左右に広がる部分で若

図11　第4号窯跡



1．10R⅗暗褐色シルト　粘性弱い可塑性なし、しまりなし焼土を若干混入する。瓦片を混入。

2．10YR⅘褐色シルト　粘性弱い。可塑性なし、しまりなし焼土・スサ入り粘土を若干混入する。瓦片を混入。

2a．10YR⅗黒褐色シルト　粘性弱い、可塑性なし、しまりなし焼土を若干混入する。

3．10YR⅝黄褐色シルト　粘性、しまり共にⅠ・Ⅱ・Ⅱaよりある。焼土・スサ入り粘土をブロック或いはしもふり状に混入する。小粘土を含む。

4a．7.5YR⅝明褐色シルト　粘性弱い、可塑性なし、しまりなし。焼土・スサ入り粘土を小ブロック、しもふり状に混入する。小粒砂を含む。

4b．10YR⅝にぶい黄褐色シルト　粘性弱い、可塑性なし、しまりなし。

4c．7.5YR⅝明褐色シルト　粘性弱い、可塑性なし、しまりなし。Ⅳａａ比べて粘土を多く含む。

5．7.5YR⅝にぶい褐色シルト　粘性弱い、可塑性なし、しまりなし、焼土、黄褐色粘土を若干含む。

6a．7.5YR⅝にぶい褐色シルト　粘性弱い、可塑性なし、しまりなしスサ入り粘土をブロック状に含む。

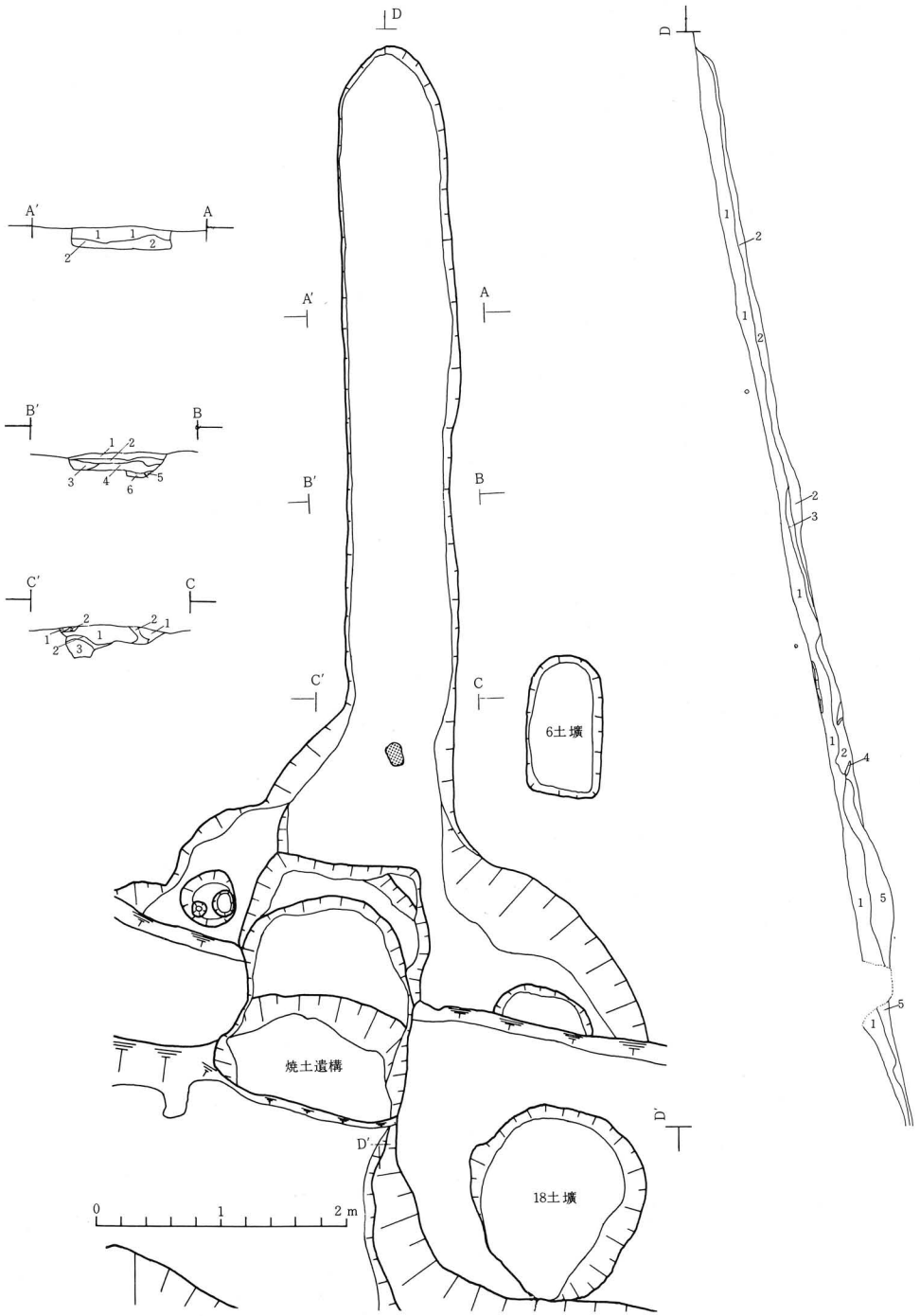
6b．7.5YR⅝にぶい褐色シルト　粘性弱い、可塑性なし、しまりなし、スサ入り粘土、焼土をしもふり状に含む。

6c．7.5YR⅝にぶい褐色シルト　粘性弱い、可塑性なし、しまりなし、オリーブ灰の粘土をブロック状に含む。

7．10YR⅝褐色シルト　粘性弱い、可塑性なし、しまりなし、

8．7.5YR⅝にぶい褐色シルト　粘性弱い、可塑性なし、しもふり状に混入。

図12　第5号窯跡



1）10YR¾褐色シルト　粘性、可塑性なし。しまりも弱い。
2）10YR⅝褐色シルト　粘性、可塑性、Ⅰ層に比べるとややあり、しまりもやや強い。
3）10YR⅝黄褐色粘土　粘性、可塑性あり。しまりも強い。
4）10R　⅘赤色焼土　粘性、可塑性なし。しまりも弱い。
　焼土にしては焼きがにぶい。
5）5YR⅗暗褐シルト　粘性、可塑性、Ⅰ層に比べるとややあり、しまりは弱い。

干下がるが、ほとんど平坦で、床幅も約90cmで一定している。傾斜は中央部で10～15度である。壁はほぼ垂直に近く、高さは20cm前後残っている。床、壁共に火をうけた痕跡は全く見られない。

表１　窯床面の傾斜角度

	燃焼部	焼成部(前)	焼成部(奥)	備　考
1号	不　明	不　明	15°	保存不良
2号	不　明	10°	15°	奥で反り上る
3号	3°～4°	14°	20°	〃
4号	5°～8°	16°	15°	〃
5号	2°～3°	16°	10°	〃

窯内堆積状況：４層に区分できるが、基本的には２層であろう。ほとんどが水平に堆積している。わずかに焼土、遺物を含む。自然堆積と考えられる。

焼土遺構

遺構の確認：第５号窯跡の焚口から前庭付近を切って作られている。検出状況は第５号窯跡南北セクション第１層下面（褐色土）において確認した。形体は長方形で、全体的に削平を受け、中央部を水道管埋設のため切断されているが、遺構の底面までいたっておらず、輪郭を確認できた。

遺構の構造：南北2.2ｍ、東西1.5 mを測る。床面は２段となっており、下方は平坦で、上部との境に35度程の傾斜の段があり、上段も平坦、奥壁で立ち上る。南北に長い長方形である。

写真24　焼土遺構遺物出土状況

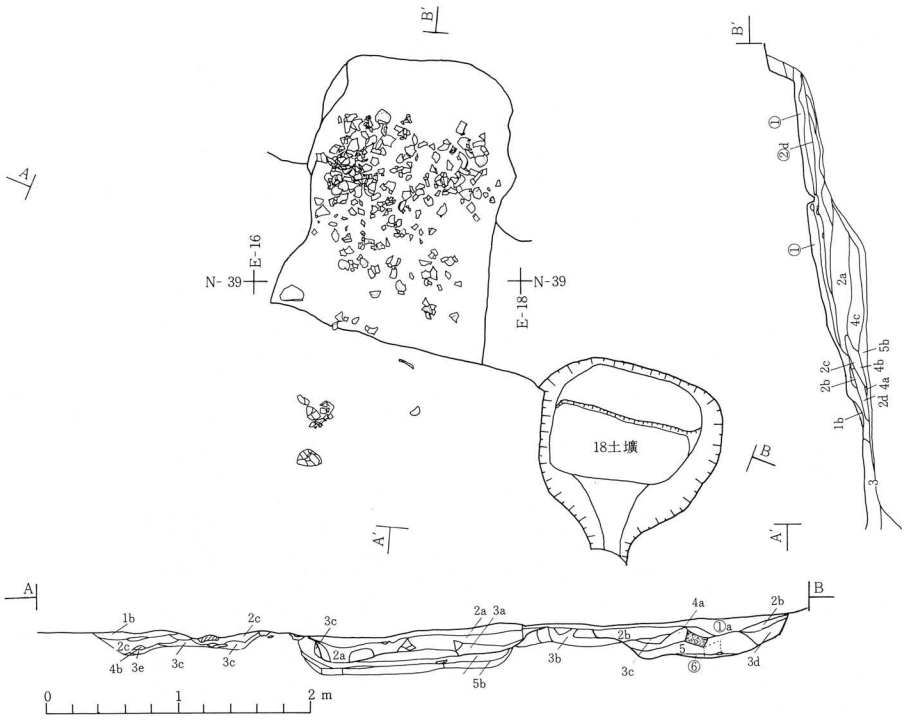
壁の高さは30～35cm程であり、壁、床面とも若干焼けており、壁と床面より若干の焼土を観察できた。上部の奥壁も若干の火を受けており、煙道部としての可能性がある。天井部は削平されて残っておらず不明である。方向は中軸線が東へ10度偏している。

遺構内堆積土：ほぼ水平堆積で、大きく区分して４層に分けられる。第１層より炭化物を含み、第２層から多量の炭化物と共に遺物が出土している。遺物は小型器形が大部分であり、床面に炭化物を敷き、その上に底部を下にして積み重ねられたような状態で押しつぶされていた。

器種／器形		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	0	250	250	0	65	65
	体　部	0	434	434	0	155	155
	底　部	0	71	71	0	24	24
甕類	口縁部	0	9	9	0	10	10
	体　部	0	39	39	0	7	7
	底　部	0	8	8	0	4	4
計		0	811	811	0	265	265

表２　焼土遺構出土土器集成

図13　焼土遺構



A′ B′ セクション

1b	（10YR 3/4）褐色土砂質シルト	①と同じ
①	（7.5YR 3/6）褐色土砂質シルト	炭化物遺物を含む。
②	（10YR 5/6）黄褐色土砂質シルト	全体的①よりしまりが悪く炭化物を含み、多量の遺物が含入している。
2b	（10YR 5/6）黄褐色土シルト質砂	炭化物が含入している。
2c	（7.5YR 5/6）明褐色土シルト質砂	炭化物が含入している。
2d	（10YR 5/6）明黄褐色シルト質砂	炭化物が含入している。②としまりが同じ。
③	（5YR 3/6）黒褐色土シルト質粘土	①・②よりもしまりが良い。
4a	10YR 3/3）暗褐色土シルト質砂	③よりもしまりが悪く、炭化物を含む。
4b	（5YR 3/6）暗赤褐色土　4aと同じ	

ABセクション

1a	（10YR 3/4）褐色土シルト質砂	炭化物、遺物を含む。
1b	（7.5YR 3/4）褐色土シルト質砂	黄色土が斑点状に入っている。
2a	（10YR 5/6）黄褐色シルト質砂	明黄褐色土がブロック状に入っている。炭化物と遺物等が含入している。炭化物、遺物を含む。
2b	（10YR 5/6）明黄褐色シルト質砂	炭化物、遺物を含む。
2c	（2.5YR 7/6）明黄褐色シルト質砂	黄橙色土の砂がブロック状に入っている。又、炭化物、遺物を含む。
3a	（10YR 5/6）灰黄褐色砂質シルト	炭化物、遺物を含み、焼土状遺構の遺物がある。
3b	（10YR 5/6）黄褐色砂質シルト	灰褐色土をブロック状に含む。しまりは2cより悪い。
3c	（10YR 5/6）黄褐色砂質シルト	灰褐色土が斑点状に入っており炭化物と遺物を含む。
3d	（10YR 5/6）明黄褐色砂質シルト	灰褐色土が斑点状に入っており遺物を含む。
3e	（10YR 5/4）明黄褐色砂質シルト	黒色土がブロック状に入っており炭化物を含む。
4a	（10YR 5/4）にぶい黄褐色砂質シルト	灰褐色土が斑点状に入っており炭化物、遺物を含む。
5b	（7.5YR 5/6）黒褐色砂質シルト	炭化物遺物を含む、4号窯の灰原の広がりである。
4c	（10YR 5/4）褐灰色砂質シルト	黄褐色土をブロック状に含み、しまりは3aよりもしまりが悪く炭化物、遺物を含む。
5	（10YR 5/1）褐灰色砂質シルト	黄褐色土が斑点状に入っており、炭化物、遺物を含む。
5b	（10YR 7/1）灰白色砂質シルト	ほとんど炭化物、遺物を含まなく4cよりもしまりが良い。

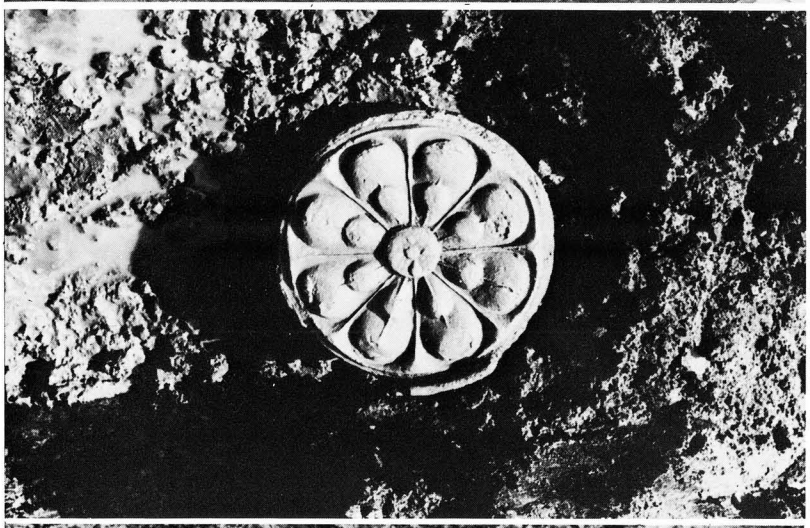
灰原

灰原の範囲：今回調査を行なったグリット内で、ほぼ灰原の範囲を確認した。この灰原は東西に流れる小沢に形成されたもので、東端はE21ラインまで、西端は6ラインまでである。ほぼ2号窯から4号窯までの下方に位置する。

灰原の堆積状況：堆積層は22層に区分できる。各窯に対応する灰原の東西セクションの観察では、第2号窯跡の灰原は非常に浅く、東西セクションでは3層（第1、3、19層）が観察できた。第3層に炭化物と遺物を多く含み、刻印平瓦が非常に多く見られた。

第3号窯跡灰原では東側が堆積層が多く、西側は第2号窯灰原と同様である。一部第4号窯の

◀写真25
灰原の状況



◀写真26
灰原から出土した重弁蓮華文軒

◀写真27
灰原での平瓦と須恵器坏の出土状況

▶写真28
灰原出土の
刻印文字瓦

▶写真29
灰原での漆器
出土状況

▶写真30
灰原での木製
品出土状況

灰原と重複するようである。

第４号窯跡灰原は最も厚く、おおよそ９層に区分できる。ほぼレンズ状の堆積で、最下層（第18層）は小沢の旧沢道面と考えられる。

各窯跡に対応する灰原の層位の中で共通に見られる層は、第１層だけである。第２、３号窯跡で共通する層は、第１、３層である。第３、４号窯跡で共通する層は、第７、16層である。以上の観察から見ると、第４号窯跡の灰原が最も深く、その上に第３号窯跡の灰原がのり、その上にほぼそれと同様に第２、３号窯跡の灰原が堆積している。灰原の堆積状態から見た窯跡の操業開始の順序は、第４号窯跡→第３号窯跡→第２号窯跡である。ただし、共通した層も見られ、ある時期は同時操業の可能性がある。また第４号窯跡が東に偏し、第２、３号窯跡が西に偏していることより、窯跡の構築順序は第４号窯跡が早く、第２、３号窯跡がそれに次ぐものであると考えられる。

（２）　土　　壙

第５号土壙

遺構の確認：Ｂ地区第３号窯跡と４号窯跡の間、Ｎ45Ｅ12地区において検出し、第２層で確認した。

平面形と構造：第４号窯跡の熱変化を受けた壁外側を切る。径約１ｍの円形で、底面は平坦で、緩やかな立ち上りをもつ壁をなし、深さは浅く13cmである。底面、壁に炭が薄くはりついている。

堆積土：埋土は１層で褐色土である。遺物は層中に１点と底面直上に１点見られた。

関連遺構と性格：第３、４号窯跡の中間にあり、第４号窯跡の焼成後に作られている。窯跡に関連する遺構であるが性格は不明である。

第６号土壙

遺構の確認：Ｂ地点第５号窯跡の東側、Ｎ42Ｅ18地区において検出し、第２層において確認した。

平面形と構造：東北1.3ｍ×東西0.6ｍの南北に長い楕円形である。壁の立ち上りは緩やかで、非常に浅い。壁の大部分が焼けており、周縁は若干熱変化を受けている。底面の西側は焼けている。

堆積土：埋土は３層で、１層はにぶい黄褐色砂質シルト、２層はにぶい黄褐色シルト、第３層は暗褐色砂質シルトで、共に炭化物を含む。遺物は瓦１点、土師器片２点だけであった。

関連遺構と性格：第５号窯跡に近接するが、第５号窯跡は火を受けておらず、関連は考えられない。これは壁が若干変化する程度の火を使用した遺構であるが、性格は不明である。

第９号土壙

遺構の確認：Ｂ地区第２号窯跡と第３号窯跡の間にあり、Ｎ45Ｅ12、Ｎ42Ｅ12地区で検出し、第２層下面で確認した。

平面形と構造：水道管埋設のため南側が削られ、残存部は斜面上方で三角形にまとまる。径は80～50cm程である。

堆積土：埋土は３層で、第１層褐色、第２層にぶい黄褐色、第３層黄褐色で、共に焼土と炭化物を含む。遺物は平瓦が２片見られた。

関連遺構と性格：保存状況が悪く、その形態も判然としないが、斜面を利用した土壙で、壁もわずかに火を受けた痕跡があり、焼土、炭化物も見られる。第11号土壙と同一の様相を呈している。窯跡に関連する遺構と考えられる。

第10号土壙

遺構の確認：Ｂ地区灰原、Ｎ３Ｅ39において検出し、地山面で確認した。

平面形と構造：東西1.15ｍ、南北１ｍの楕円形である。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上る。

堆積土：埋土は４層に区分できる。砂層と粘土層が交互に水平堆積して、底面には一部わらが敷かれた状態で見られた。遺物は含んでいない。

関連遺構と性格：堆積の仕方はほぼ水平で、他のＢ地区の土壙とはその在り方を異にする。この土壙の南に現代の井戸があり、底面にわらが見られたことから、井戸と同様現代の土壙と考えられる。

第11号土壙

遺構の確認：Ｂ地区、第３号窯跡と第４号窯跡の間、Ｎ42Ｅ15地区で検出、第２層下面で確認した。

平面形と構造：東西80×南北50cmの三角形で、南側は水道管埋設のため破壊されている。底面は斜面の傾斜と同一である。壁は火を受けている。

器種 / 器形		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	0	2	2	0	0	0
	体部	0	0	0	0	0	0
	底部	0	0	0	0	0	0
甕類	口縁部	0	0	0	0	0	0
	体部	0	3	3	0	0	0
	底部	2	1	3	0	0	0
計		2	6	8	0	0	0

表３　Ａ地区第１号土壙出土土器集成

堆積土：埋土は２層に分けて、１層暗褐色土、２層は黒褐色土で、共に炭、焼土を含む。

関連遺構と性格：埋土中に焼土と炭化物を含み、窯跡間に位置しており、第９土壙と形態、在り方が類似する。機能的には火を使用した窯跡に関連する遺構である。

器種 / 器形		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	0	0	0	0	0	0
	体部	0	0	0	0	0	0
	底部	0	0	0	0	0	0
甕類	口縁部	0	0	0	0	0	0
	体部	0	0	0	0	0	0
	底部	0	1	1	0	0	0
計		0	1	0	0	0	0

表4　B地区第10号土壙出土土器集成

第18土壙

遺構の確認：B地区灰原、N42E21地区において検出し、地山面で確認した。

平面形と構造：南北1.6ｍ×東西1.4ｍの楕円形である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上る。

堆積土：埋土は基本的に3層に区分できる。埋土中には瓦、須恵器、土師器片が含まれる。

関連遺構と性格：焼土遺構に近接し、東に小ピットが3個見られる。第18土壙は焼土遺構に関連する可能性があろう。

3．C地区の概要

東側の丘陵部の裾より緩やかに傾斜し、南西に広がる平場である。北側は小沢によって切られ、西側は用水路によって画され南側の低湿地に至る。当初は遺構の存在を考えていなかった地区であったが、平場の整備にともなって多量の土師器、須恵器が分布することがわかり、一次調査において平場全域に遺構の存在が推定されたものである。調査はC地区平場の学校建築予定地全域をその対称とした。すなわち、東は丘陵裾部を、西は用水路に接するA地区境までとし、北は小沢を南は民家との境界線までを区域としたものである。

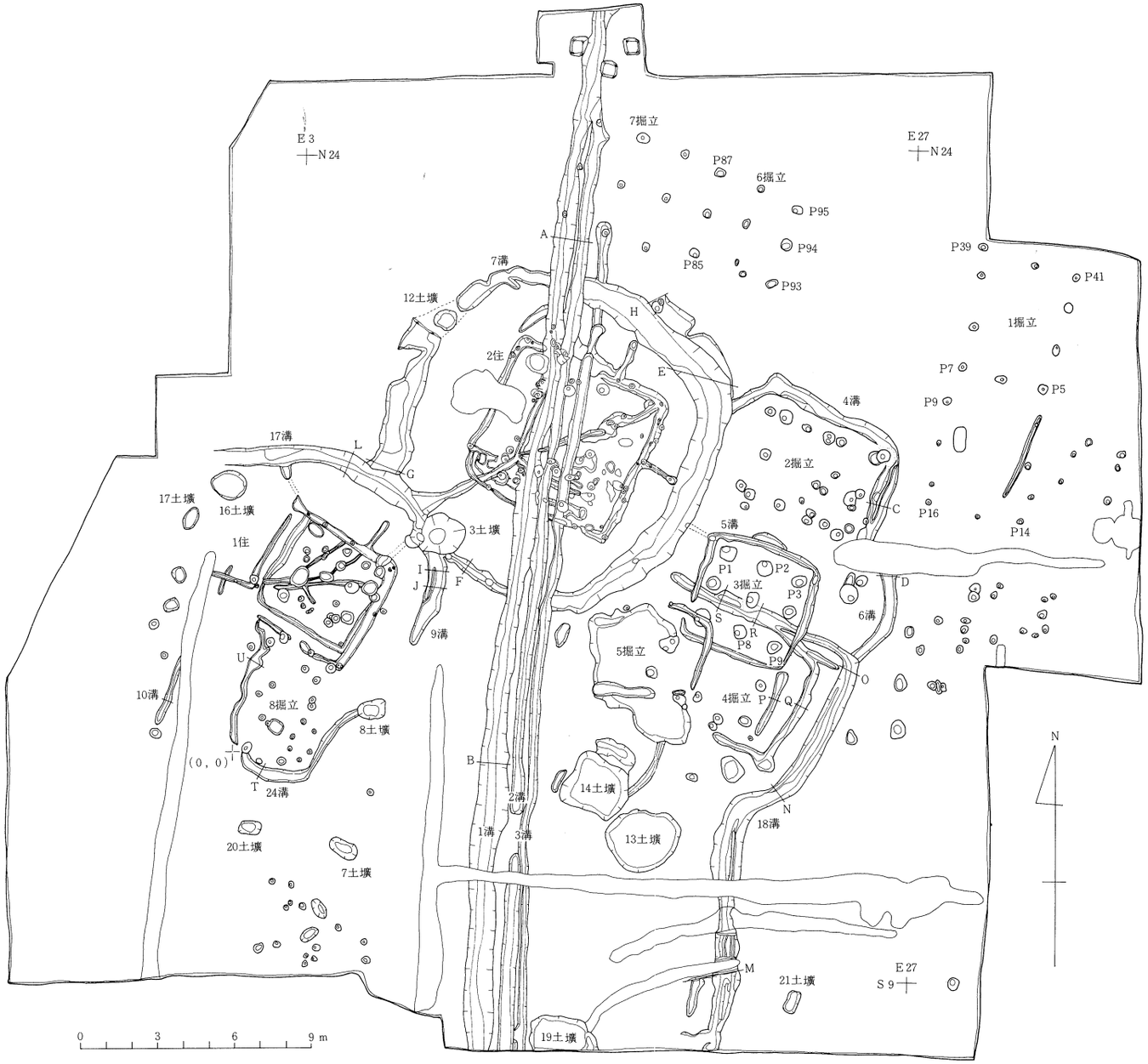
調査時の現状は、A地区との境界は防風林で、その他は畑地であり、果樹、苗圃なども見られた。全体的に水はけの悪い土質で、特に南西部は排水が悪く、表土剝ぎの段階では泥掘りの状態で作業は難渋した。

調査面積は約1,400㎡であった。

〈基本層位〉

C地区の基本層位は、東西（E12ライン）とそれに直交する南北（N21ライン）の土層観察によって行なった。

図14　C 地区全体図


E 3
N 24
E 27
N 24
7掘立
P87
6掘立
P95
P94
P85
P93
A
7溝
12土壌
H
2住
E
4溝
P39
P41
1掘立
P7
P5
P9
17溝
L
G
2掘立
C
P16
P14
17土壌
16土壌
3土壌
1住
5溝
P1
P2
3掘立
P3
D
6溝
I
J
F
9溝
S
R
P8
P9
5掘立
U
10溝
8掘立
8土壌
O
4掘立
P
Q
(0, 0)
T
24溝
B
2溝
14土壌
N
18溝
1溝
3溝
13土壌
20土壌
7土壌
M
21土壌
E 27
S 9
19土壌
0
3
6
9 m
N

C地区は北と東が高く、全体的に南西へ傾斜している。また東端、西端は堆積土の流失が著しく、中央部は耕作のため一部客土が行なわれている。そのため東西、南北畦状ベルトはその在り方に若干の差異があるが表土より地山までの堆積層は基本的には2層認められた。

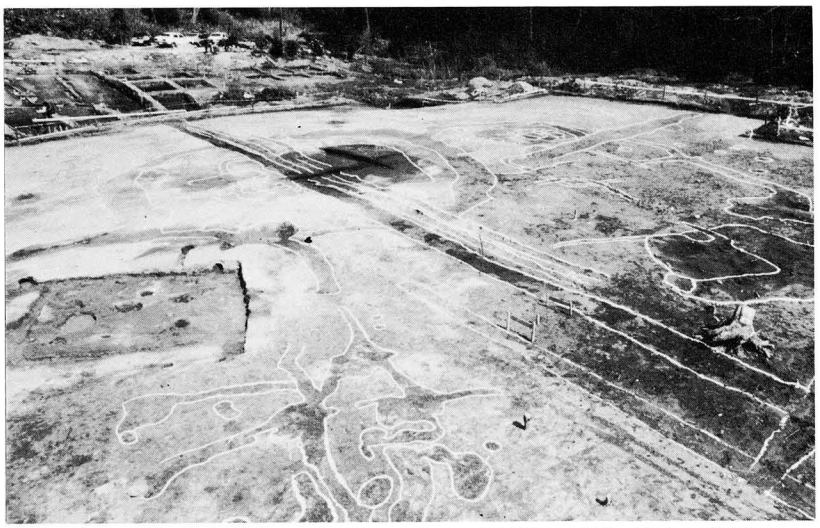


写真31　C地区全体の状況

（1）　南北セクション基本層位

第1層

間隙性があり、柔らかくしまりがない。全体的な色調は暗褐色（10YR3／3）である。この層は耕作による攪乱が著しく、厚さも全体的に薄く20cm前後である。北側には見られず、E11付近より南側に観察された。遺物はほとんど含まない。

第2層

第1層と同様にしまりなく柔らかい。色調は黒褐色（10YR3／2）で第1層よりわずかに黒い。耕作による攪乱も第1層に比べて少ない。北側は厚さ30～40cmでほぼ一定しているが、南側に行くにしたがって薄くなり、S2ラインより南側にはほとんど見られない。遺物は割合い多く含み、地区によってはブロック状の地山が観察された。遺構は一部2層中で、大部分は2層下面において確認した。

（2）　東西セクション基本層位

第1層

南北セクションと色調、土質共に同様なものである。東西セクションにおいてはA地区に傾斜する西端では薄くなるが、厚さ10cm位でほぼ全域にわたって観察された。

第2層

南北セクションと色調、土質共に同様なものである。ほぼ一定した厚さで全域に見られるが、

E13～E９の内には見られない。

第３層

地山よりややにぶい黄褐色（10ＹＲ４／３）で、主としてE13～Ｅ９の間に見られる。若干の遺物とブロック状の非常にしまりある黄褐色土（10ＹＲ５／６）を含む。遺構確認面は第１号溝が３層下面、第２号溝が２層下面である。

各層の広がりは第１層はほぼ全域に見られ、２層は南側が薄く、地域によっては無い所もあるが、全域に見られ、遺物も割合い多く含んでいる。東西セクションに見られた第３層は部分的なものであり、広がりはない。

〈発見遺構〉

Ｃ地区において発見された遺構は、竪穴住居跡２軒、掘立遺構８軒、土壙13基、溝24本、ピット群などがある。

遺構の配置は、中央部に最も大きな住居跡（第２住）があり、それを切るかたちで、ほぼN12～N15ラインに沿って南北に３本の溝が通り、遺構を東部と西部に二分している。東部は緩斜面の上部にあり遺構の大半が存在する。西部は遺構は少なく、北西区には遺構は全くない。

（１）　竪穴住居跡

第１号住居跡

遺構の確認：Ｃ地区西部、N12Ｅ９、Ｎ９Ｅ９、Ｎ６Ｅ９、N12Ｅ６、Ｎ９Ｅ８、Ｎ６Ｅ６、N12E13、Ｎ９Ｅ３、Ｎ６Ｅ３地区において検出し、２層下面ないしは地山面で確認した。

遺存状況：東部、北部は保存良好だが、南部は壁が残っておらず、かなり削平されている。また南側と西側の周溝が二重になっており、改築されたことがわかる。

平面形と方向：北側に煙道をもつ隅丸方形である。規模は内側周溝で南北３ｍ×東西4.3ｍであり、外側周溝では南北4.7ｍ×東西4.6ｍである。方向は東壁を基準とすると南北に対して30度東へ偏している。

壁、床面：壁は東側と北側がほぼ垂直に立ち上る。北東隅で30㎝、北側中央で15㎝、東側中央で20㎝程残っている。床面は10溝とピット15をおおうように東壁沿いに貼床がみられる。

住居内施設：①カマド―北壁の東よりに設けられている。トンネル状に掘り抜かれたと思われる。煙道は長さ1.25ｍ、幅20～25㎝で、焚口部は長さ35㎝、幅30㎝であり、両袖を瓦で補強している。カマド内堆積土は１層で暗褐色シルトである。層中には二次的に火を受けたと思われ

図15　第１号住居跡(1)と第８号掘立柱建物跡

ＡＢセクション図註記

1．黒褐色土　シルト質砂、炭含入
2．暗褐色土　シルト質粘土、炭含入
3．明褐色土　シルト質粘土、暗褐色をブロック状に含む
4．赤褐色土　焼土、炭含入
5．黄褐色土　シルト質粘土
6．黄褐色土　シルト質粘土、炭を含む

Ａ′　Ｂ′　セクション図註記

1．表　土（覚乱）
2．黒褐色　シルト質粘土　石英砂を含み、焼土、炭化物及び植物を含む。たて穴中央部に厚く分布
3．暗褐色　砂質粘土　黒褐色土と褐色土を含む。遺物をほとんど含まない。
4．褐色土　シルト質粘土　炭化物を少量含む。遺物をほとんど含まない
5．暗褐色　シルト質粘土　多量の砂を含む、黒褐色土と褐色土を含む。炭化物と赤変した遺物を多量に含む。
6．褐色土　シルト質粘土　黒褐色土も含む。
7．暗褐色　シルト質粘土　砂を多量に含む。焼土炭化物を含む。
8．褐色土　シルト質粘土　遺物をほとんど含まない。
9．暗褐色　シルト質粘土　多量の砂を含む。煙道部端のピット埋土底面に多量の土器を含む、層中にごくきわめて暗い褐色土。
10．暗褐色　シルト質粘土　砂を多量に含む。層中には二次的火をうけて赤変した土器多量に含まれる。カマド焼成部とみられる所に多量に分布し水平方向のかさなりを見る。
11．暗褐色　シルト質粘土　黒褐色土、褐色土、赤褐色土を含む。炭化物と遺物を含む。砂を多量に含む。㊟貼り床

図16　第１号住居跡(2)

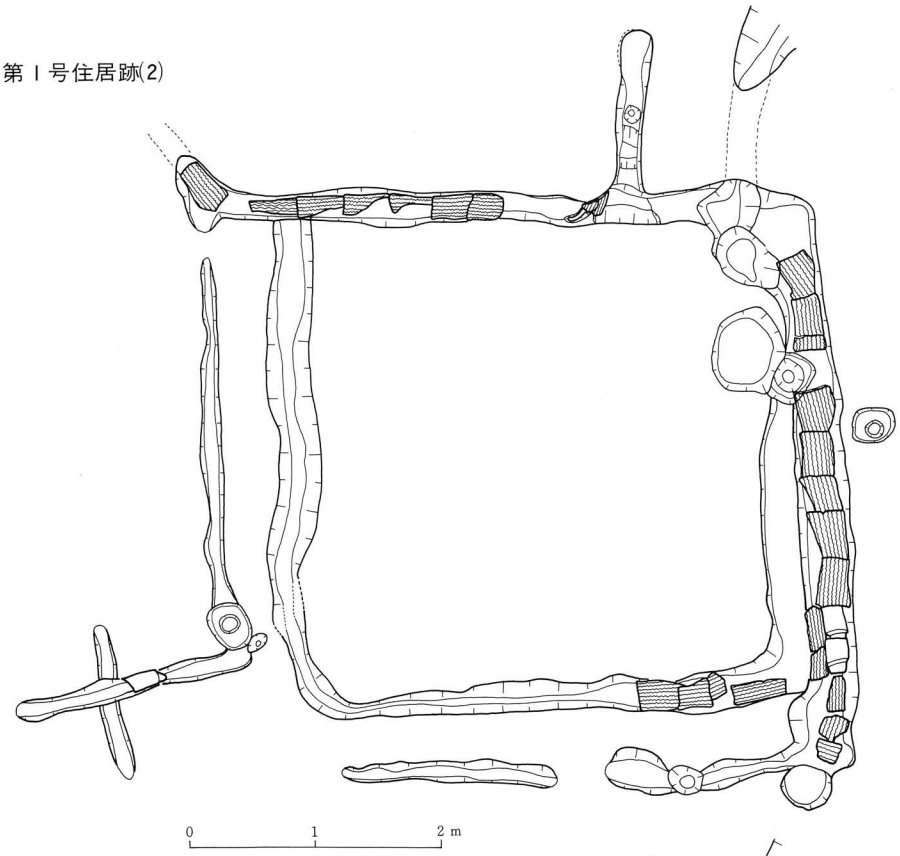
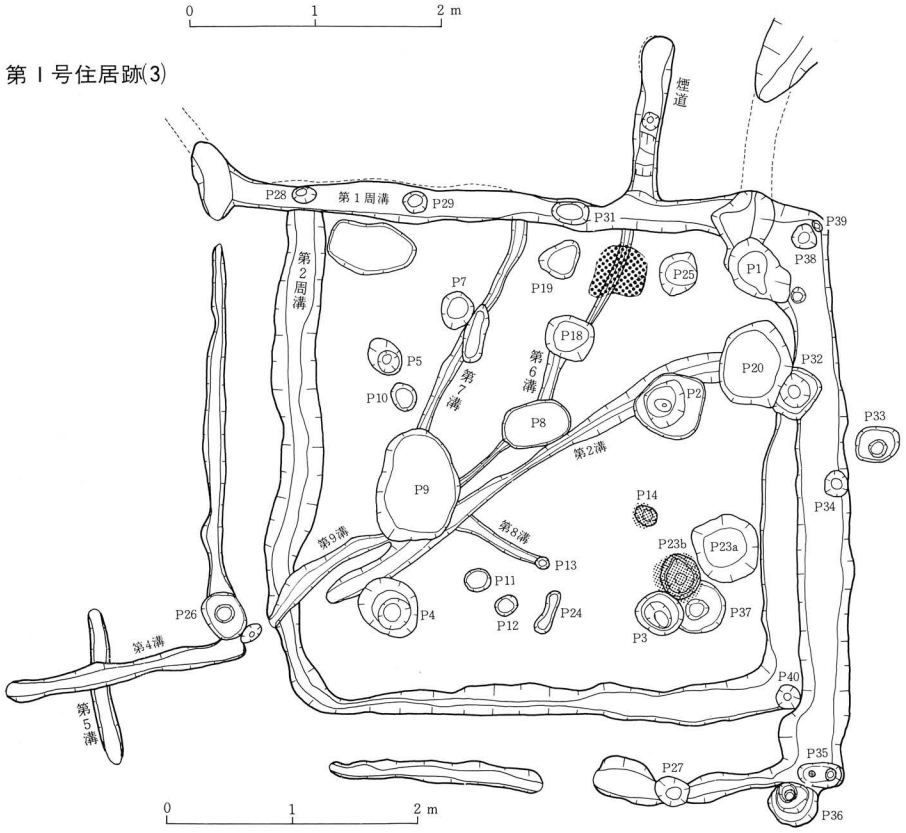


図17　第１号住居跡(3)



▶写真32
第Ⅰ号住居跡(1)

▶写真33
第Ⅰ号住居跡(2)

▶写真34
第Ⅰ号住居跡(3)

る土師器片と焼土、炭が多量に含まれる。

②柱穴—42個のピットが検出された。この中で柱穴と考えられるのは14個であり、その在り方によって二種に区別できる。一つは住居跡内にあるピット２、３、４、５、37の５個で、２、３、４、５が組み合う。ピット37は貼床の下で検出した。一つは東壁と北壁沿いに見られるもので、ピット28、29、31、32、34、35ａ、36、38、39である。掘り方の見られないものもある。

写真35　第Ⅰ号住居カマドの状況

③溝—住居跡の内側を壁沿いに回わる第１周溝とその内側をめぐる第２周溝の２本があり、さらにそれらの周溝に接する溝、床面を走る溝が10本見られた。

④その他の施設—ピット13、14、23ｂは火を受けており、鉄滓が混入している。

写真36　第Ⅰ号住居跡改築の状況

東壁、北壁沿いの第１周溝上に瓦が敷かれている。一部第２周溝南側にも見られ、本来は第１、第２周溝の全面を覆っていた可能性が有る。ピット１は貯水穴であり、トンネルによって第３土壙に接続する。

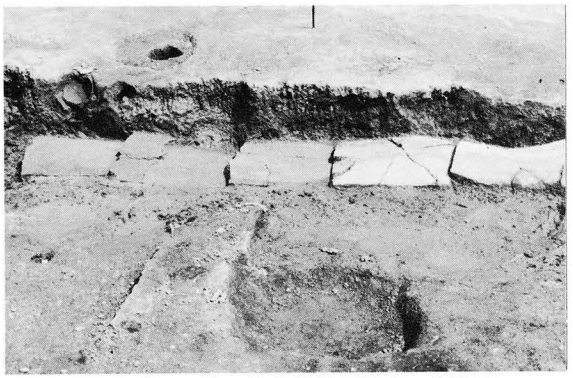


写真37　第Ⅰ号住居跡周溝上の施設瓦

堆積土：埋土は11層に区分できるが、基本的には３層で黒褐色土、褐色土、暗褐色土であり、共に焼土、炭化物、遺物を含む。南、西は削平がはげしい。多量に出土し特異なものとしては、鞴火口、手捏ね土器、異形土製品が見られた。

遺構の性格：この住居跡は改築され、南、西に拡大されたものであり、改築後に鍛冶の作業を行なったものであろう。南に近接する第８号掘立建物跡よりも鉄滓が出土しており、鍛冶を行なった時の関連遺構であろう。

表5　第Ⅰ号住居跡ピット註記表

番号	深さ(cm)	土色	土性	備考
1	47	7.5YR3/3 暗褐色	砂質粘土	貯蔵穴、炭化物、焼土、土師器、須恵器多量出土
2	40	〃	〃	柱穴、炭化物、焼土、土師器片
3	30	〃	〃	炭化物、柱穴
4	35	7.5YR3/2 黒褐色	〃	炭化物、焼土、柱穴
5	35	7.5YR3/3 暗褐色	〃	炭化物、焼土、柱穴
6	8	10YR4/4 褐色	〃	炭化物、土師器片
7	7	7.5YR2/3 極暗褐色	〃	炭化物、焼土多量
8	28	10YR4/4 褐色	〃	遺物多量、柱穴？
9	18	7.5YR3/4 褐色	〃	炭化物物、焼土、土師器片多量
10	14	7.5YR3/1 黒褐色	〃	岩化物、焼土、土師器片
11	4	10YR4/4 褐色	〃	
12	12	10YR3/3 暗褐色	〃	
13	4	10YR3/2 黒褐色	〃	炭化物多量、鉄滓有り。炉？
14	5	〃	〃	炭化物多量、炉？
15	4	7.5YR5/4 にぶい褐色	〃	炭化物
16	28	7.5YR3/3 暗褐色	〃	
17	6	〃	〃	
18	20	10YR5/8 黄褐色	〃	炭化物、土師器片
19	23	7.5YR5/4 にぶい褐色	〃	土師器片多い。
20	26	〃	〃	炭化物、焼土多量、土師器、須恵器片
21	32	〃	〃	炭化物
22	24	〃	〃	炭化物
23	20	7.5YR3/3 暗褐色	〃	炭化物多量、鉄滓、土師器片、炉
24	10	10YR3/3 暗褐色	〃	
25	5	7.5YR5/8 明褐色	〃	
26	6	7.5YR5/6 明褐色	〃	
27	5	7.5YR4/4 褐色	〃	須恵器片
28	7	7.5YR5/6 明褐色	〃	木炭
29	12	〃	〃	土師器片
31	27	10YR4/6 褐色	〃	土師器片
32	11	10YR6/4 にぶい黄橙色	〃	炭化物、土師器片
33	32	〃	〃	炭化物、土師器片
34	6	7.5YR5/6 明褐色	〃	
35	15	10YR4/6 褐色	〃	
36	40	〃	〃	炭、土師器片、柱穴
37	10	〃	〃	炭、土師器片、柱穴
38	16	10YR5/2 黒褐色	〃	炭
39	10	〃	〃	炭
40	6	〃	〃	炭、土師器片
41	17	10YR4/3 にぶい黄褐色	〃	炭、土師器片

表6　第Ⅰ号住居跡関連溝観察表

溝	位　置	関連ピット等	埋　土	出土遺物	備　考
第1周溝	壁沿いに方形にめぐる。	第2周溝を切る。瓦が上を覆う。第1Pが切る。	にぶい黄褐色 10YR 5/3	炭、土師器、鉄滓	
第2周溝	第1周溝の内側を方形にめぐる。	第1周溝に切られる。一部瓦が上を覆う。	褐　色 10YR 4/4	炭、土師器	
溝　1	東壁に接する。	瓦の上を通り、P23a、P20につながる。	褐　色 7.5YR 4/3	炭、土師器	貼床の上
溝　2	住居跡中央。	P2、4、8、9に切られる。	暗褐色 7.5YR 4/4	炭、土師器	
溝　3	住居跡東端。	第2周溝に切られる。	暗褐色 7.5YR 4/6	炭	浅く削平がはげしい。
溝　4	第1周溝南。	P26に切られる。	褐　色 7.5YR 4/6	炭、瓦	〃
溝　5	第4溝の西。	溝4を切る。	褐　色 7.5YR 4/6	炭	〃
溝　6	住居跡中央、カマドより南へ伸びる。	P8、18に切られ、P9に接する	黒褐色 7.5YR 3/2	炭、焼土、土師器、須恵器	土器が上を覆う。
溝　7	北壁に接する。	北壁の瓦の上を通り、P7、9に切られる。	灰褐色 10YR 4/2	炭、焼土、土師器	
溝　8	住居跡中央南。	P13により第2溝とつながる。	褐　色 7.5YR 4/6	炭、焼土	浅い。
溝　9	住居跡西。	P9と第2周溝をつなぐ。	褐　色 7.5YR 4/4	炭、土師器、須恵器	土器がふたをしている。
溝　10	東壁沿い。	第2周溝に切られる。	褐　色 10YR 4/4		貼床の下

第2号住居跡

遺構の確認：C地区中央で、東部、南部にまたがる。東西はN18～N12、南北E12～18の9個のグリットで検出し、第2層下面、一部は地山面で確認した。

遺存状況：住居跡の西側はブルドーザーや耕作によって削平され、壁の残りは悪い。そして第1号、2号、3号溝によって東西に切断されている。北壁に2本、東壁に1本の煙道があり、住居内にそれに対応する4本の周溝があり、3時期の重複または改築が考えられるので、各期ごとにその実態を述べていく。

第Ⅲ期

平面形と方向：平面形は隅丸方形で、東側に煙道（第3号カマド）が付く。規模は周溝の内側で南北4.4ｍ×東西4.4ｍである。方向は煙道を通る線でみると、南北に対して115度程東へ偏している。

壁と周溝：南側と西側は削平されて残っておらず、わずかに残っていた第2周溝によって輪郭を確認した。東側と北側の壁は残っているが、第Ⅰ段階の住居跡内周溝である第1周溝がめぐらされ、本来の壁であるかどうかは不明である。第2号周溝は第3号カマドの焚口付近を除いてほぼ全体を回っていたものである。またこの第2号周溝の南側にわずかに痕跡が残った第4号周溝が観察され、一部改築の可能性がある。

床面：第1床面を剝がしたのちに確認した。各時期のピットや溝で切られているが、ほぼ平坦である。大部分はにぶい黄褐色の地山であるが、東側に焼土や炭の分布があり、若干の土器が

図18　第２号住居跡(1)

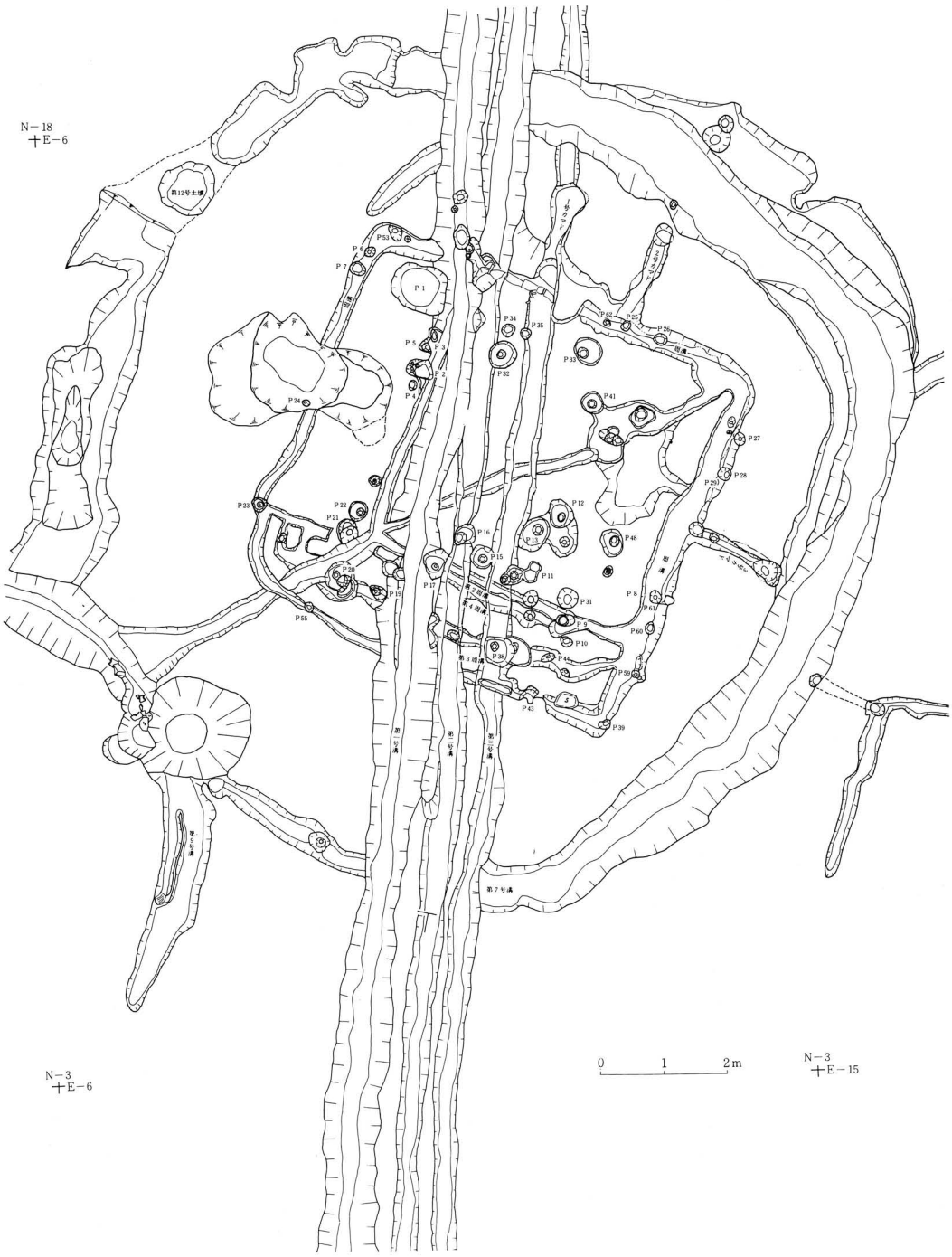
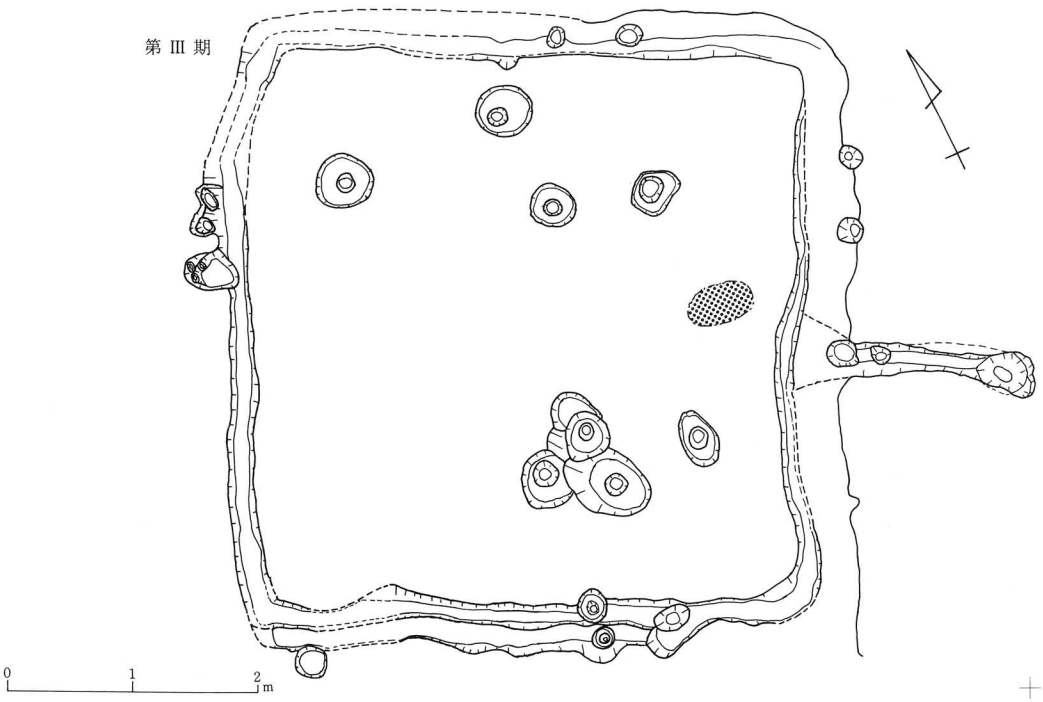

N－18
＋E－6
第12号土壙
P53
P6
P7
P1
P34
P35
P5
P3
P2
P4
P32
P24
P62
P25
P26
P33
P41
P27
P28
P29
P23
P22
P21
P12
P16
P13
P48
P15
P11
P20
P17
P19
P55
P31
P8
P61
P5
P60
P10
P36
P44
P59
P43
P39
第1号溝
第2号溝
第3号溝
第4号溝
第5号溝
第7号溝
第9号溝
0　1　2m
N－3
＋E－15
N－3
＋E－6

図19　第２号住居跡(2)



含まれる。

柱穴：ピット32、41、42が組み合い、それにピット16が組み合う可能性がある。

カマド：東壁のほぼ中央に設けられている。トンネル状に掘り抜かれたものと思われる。煙道は長さ 160 ㎝、幅20～15㎝である。焚口部は第１号周溝によって切られ、残っていない。わずかに第２次床面の焚口部付近で焼土と炭が観察された。

第II期

平面形と方向：平面形は隅丸方形である。北側に煙道（第２号カマド）が付く。規模は周溝の内側で南北５ｍ×東西5.5 ｍである。方向は煙道を通る線でみると南北に対して30度程東へ偏している。

壁と周溝：壁は第III期同様南側と西側は削平されて残っておらず、わずかに南側に残っていた第３周溝によって輪郭を確認した。東側と北側の壁は残っているが、第Ｉ期の段階の改築を受けていると思われる。東側は削平されており、かならずしも明確ではない。第３号周溝は南側で確認できたが、北側と東側は第１号周溝と重複し切断されており、西側は南西コーナーだけが確認できた。

床：第Ｉ期の床面とほぼ同じで、第２号カマドの焚口付近で多量の焼土と炭が遺物と共に、かためられた状態で平坦になっていた。

柱穴：柱穴は掘り方を持つものはあるが、重複や削平のため組み合いが不明であった。

カマド：北壁のやや東側に設けられたもので、煙道の長さは170㎝で、幅は20～30㎝で、焚口部分は第1号周溝によって切られ、焼土、炭が多量に確認された。

第Ⅰ期

平面形と方向：平面形は隅丸方形で北側にカマド（第1号カマド）が取り付く。規模は周溝の内側で、南北5.5ｍ、東西6ｍである。方向は煙道を通る中軸線で、南北に対して23度東へ偏している。

壁と周溝：壁は北側と東側は良く残り、高さ30㎝程で直立している。南側の壁はわずかに残り、西側は周溝だけが存在している。周溝は第1号周溝が四辺を取り巻く。また北東隅から南西隅をへて第3土壙に通じる溝を切っている。

床面：床面は酸化鉄を若干含む黄褐色砂質シルトで、しまりが良い。東側で部分的に白色粘土が見られ、貼り床の可能性がある。床面は全体的に平坦である。

柱穴：床面では掘り方を持つピットは確認できたが、組み合わせは不明である。東側と北側の壁に等間隔でピットが見られ、壁柱穴の可能性がある。

カマド：北壁のやや西側に設けられている。煙道部の長さは130㎝で、幅は25～45㎝である。焚口部の長さは約60㎝で、袖が残っている。カマドの下を通るマドの下を通る第1号周溝には平瓦と丸瓦で暗渠が設けられている。カマド内からは多量の焼土と遺物が出土している。

住居跡内の堆積土：南部と西部は削平が激しく、特に西側では地山が露出していた。全体的に溝、ピットが重複し、全体の堆積状況はあまり良く把握できなかった。堆積土は東西セクションの観察では9層に分けることができる。黄褐色土の間に黒褐色土ないしは褐色土の遺物を多量に含む層がブロック状に入っている。各層の広がりは残りが悪くつかめなかった。

関連遺構とまとめ：第2住居跡はそのまわりを円形に取り巻く第7号溝によって全体が画されている。第7号溝と関連する遺構は後述する。

第2号住居跡は、最初に第Ⅲ期が構築され、一部改築されたのち第Ⅱ期に拡張され、第Ⅰ期でさらに拡張されている。第Ⅲ期には東壁に見られた煙道が、第Ⅱ、Ⅰ期には北壁に構築されている。以上のことから3時期4回の改築が考えられる。ただし第Ⅰ期と第Ⅱ期の時間差は大きなものとは考えられない。また第Ⅰ期と第Ⅱ期の煙道の方向は第1号住居跡と同一であり、時間的な同一性を考えさせられる。

図20　第２号住居跡(3)

第 II 期

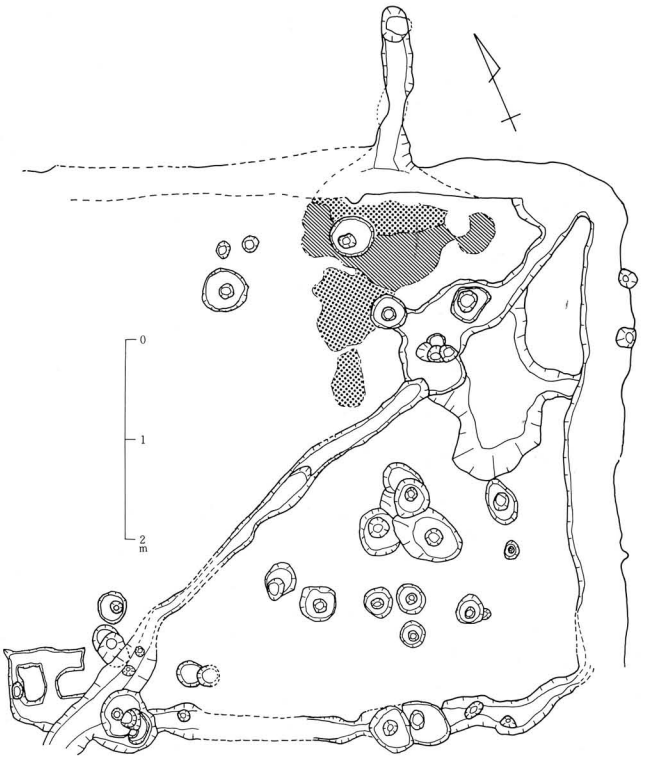
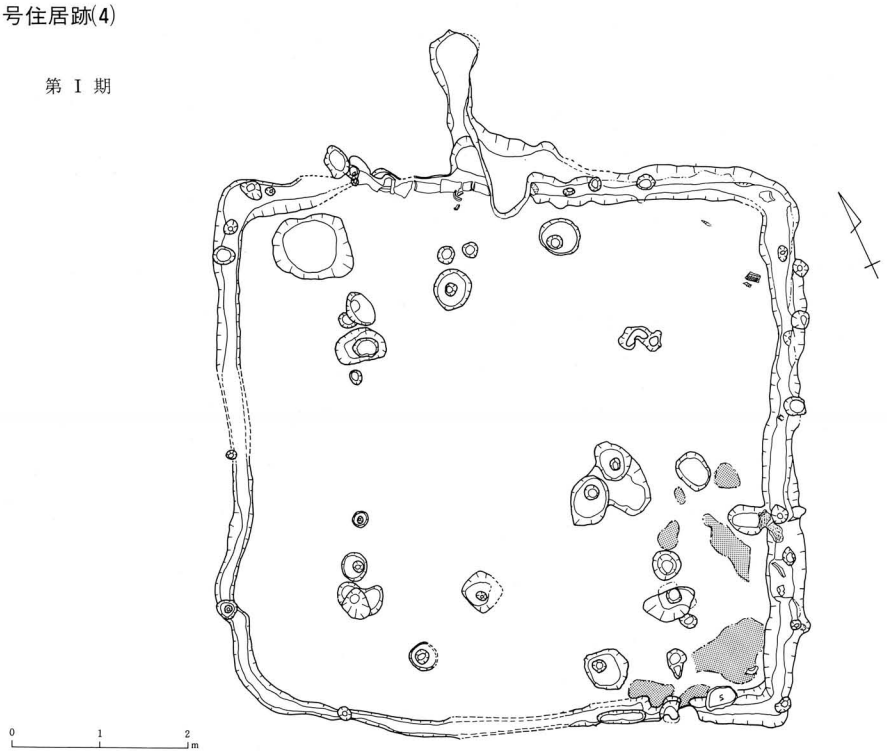


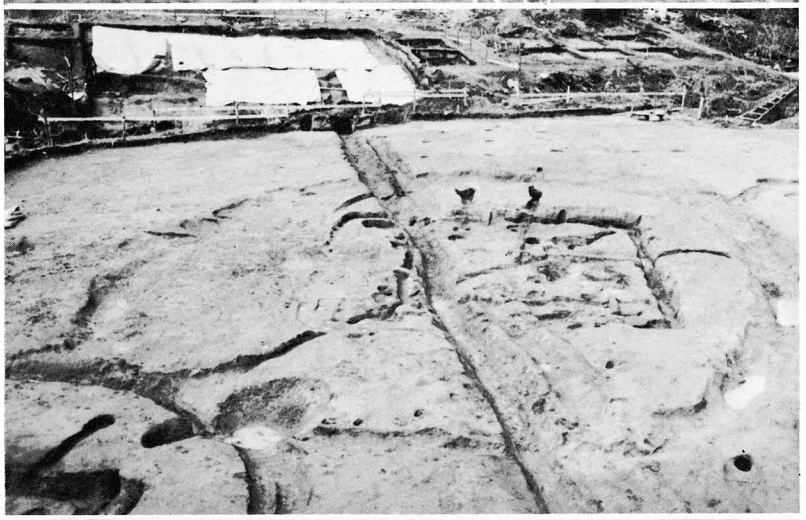
図21　第２号住居跡(4)

第 I 期



▶写真38
第２号住居跡(１)

▶写真39
第２号住居跡(2)



▶写真40
第２号住居跡の
カマド状況

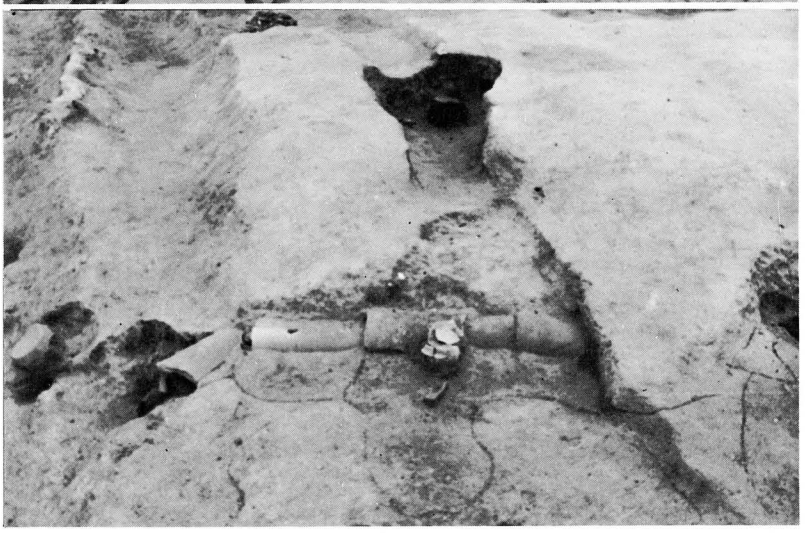
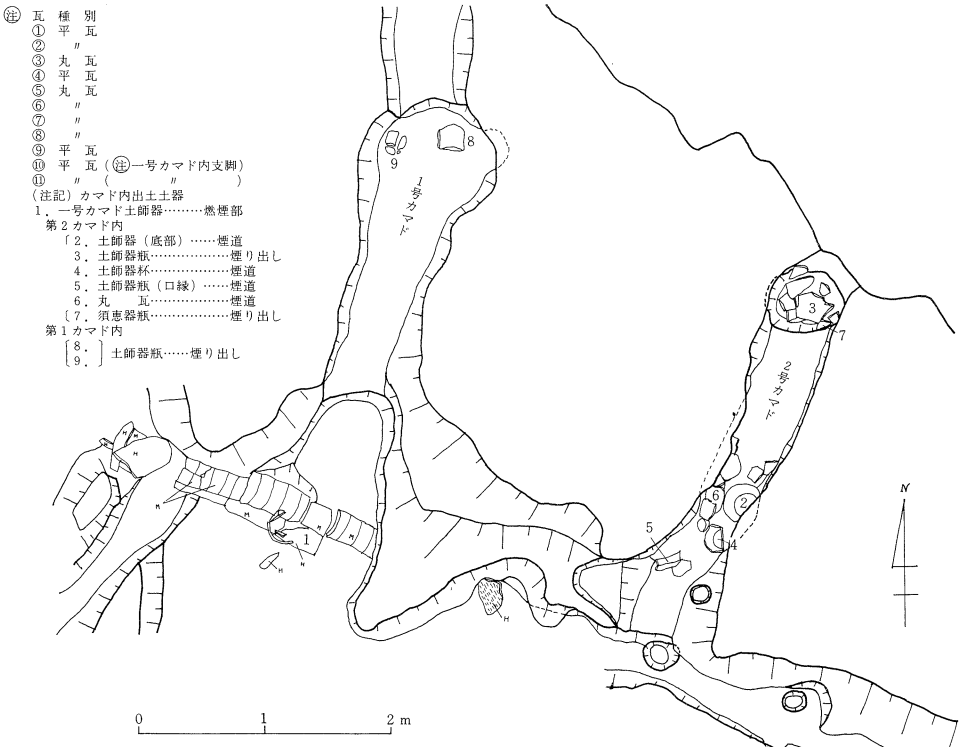


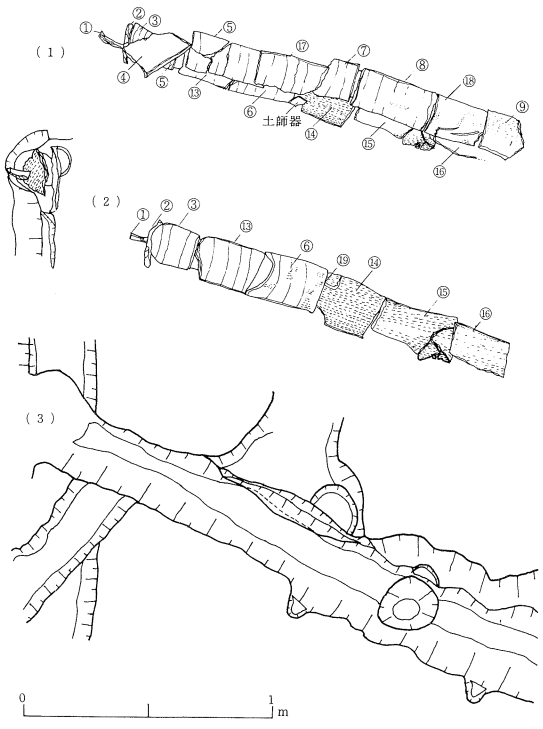
表7　第2号住居跡ピット註記表

番号	深さ（cm）	土色	土性	備考
1	27	10YR 4/4 褐色	砂質シルト	木炭、須恵器、土師器片、貯蔵穴状
2	40	10YR 5/6 黄褐色	シルト	炭化物、焼土
3	44	〃	砂質シルト	平瓦片
4	23	10YR 4/4 褐色	〃	須恵器、土師器片
5	11	10YR 3/3 暗褐色	〃	土師器片
6	14	10YR 4/4 褐色	砂	
7	21	〃	〃	
8	5	10YR 5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	焼土、炭化物、平瓦片
9	44	〃	〃	土師器、須恵器片、柱穴
10	15	10YR 4/3 にぶい黄褐色	〃	
11	27	10YR 5/6 黄褐色	〃	柱穴
12	38	10YR 6/6 明黄褐色	シルト	焼土、炭化物、柱穴
13	36	10YR 6/4 にぶい黄橙色	砂質シルト	焼土、炭化物、柱穴
14	27	10YR 5/4 にぶい黄褐色	〃	平瓦片、柱穴
15	27	10YR 6/6 明黄褐色	粘土	土師器片、柱穴
16	13	10YR 5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	
17	30	〃	〃	土師器片、柱穴
18	9	10YR 5/2 黒褐色	〃	
19	33	10YR 5/4 にぶい黄褐色	〃	柱穴
20	37	〃	〃	柱穴
21	16	〃	〃	土師器片、柱穴
22	25	10YR 3/2 黒褐色	〃	柱穴
23	18	10YR 5/8 黄褐色	〃	柱穴
24	23	10YR 5/4 にぶい黄褐色	〃	炭化物
25	40	〃	〃	
26	48	〃	〃	
27	12	〃	〃	壁柱穴
28	12	〃	〃	〃
29	10	〃	〃	〃
30	16	〃	〃	〃
31	42	10YR 5/3 にぶい黄褐色	〃	土師器、平瓦片、柱穴
32	29	10YR 5/6 黄褐色	〃	柱穴
33	40	10YR 4/3 にぶい黄褐色	〃	炭化物、柱穴
34	10	10YR 5/4 にぶい黄褐色	〃	
35	9	〃	〃	
36	10	10YR 3/2 黒褐色	〃	
37	17	10YR 3/4 暗褐色	〃	
38	24	10YR 5/8 黄褐色	〃	柱穴
39	40	10YR 5/6 黄褐色	〃	
40	5	10YR 3/3 暗褐色	〃	須恵器片
41	30	10YR 5/4 にぶい黄褐色	〃	土師器片、柱穴
42	15	〃	〃	炭化物、柱穴
43	30	10YR 5/6 黄褐色	砂	壁木穴状？
44	30	〃	砂質シルト	炭化物、柱穴
45	36	10YR 6/3 にぶい黄橙色	〃	炭化物、柱穴
46	14	10YR 6/4 にぶい黄橙色	〃	焼土、炭化物、柱穴
47	34	10YR 4/4 褐色	〃	炭化物、柱穴
48	30	10YR 5/6 黄褐色	〃	炭化物、平瓦、土師器片、柱穴
49	37	10YR 6/3 にぶい黄橙色	〃	焼土、炭化物多量、柱穴
50	10	10YR 4/4 褐色	〃	炭化物、柱穴
51	12	10YR 5/4 にぶい黄褐色	〃	
52	10	〃	〃	
53	10	〃	〃	
54	20	〃	〃	
55	8	〃	〃	
56	6	10YR 5/8 黄褐色	〃	
57	4	〃	〃	
58	20	10YR 5/4 にぶい黄褐色	〃	炭化物、柱穴
59	40	〃	〃	
60	48	〃	〃	
61	54	〃	〃	
62	30	〃	〃	



▲

図22　第２号住居跡部分図(Ⅰ)



① 平 瓦 立
② 〃 〃
③ 丸 瓦 表
④ 平 瓦 裏
⑤ 丸瓦瓦 表
⑥ 〃 〃
⑦ 〃 〃
⑧ 〃 〃
⑨ 平 瓦 裏
⑩ 支 脚
⑪ 〃
⑫ 欠 番
⑬ 丸 瓦 表
⑭ 平 瓦 裏
⑮ 〃 〃
⑯ 〃 〃
⑰ 丸 瓦 表
⑱ 〃 〃
⑲ 平 瓦 裏
⑳ 丸 瓦 〃
3の下から出る

(1)と(2)の間の土は
10ＹＲ¾ 褐色シルト しまりなし
焼土炭を多量に含む。
土師器を若干含む。
(2)と周溝底の間の土は
10ＹＲ⅗ 暗褐色シルト しまりなし
焼土炭を含む。
土師器を含む。

図23　第２号住居跡部分図(2)▶

（２）　掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡

位置：Ｃ地区東部北東端にあり、四隅はＮ21Ｅ36、Ｎ21Ｅ30、Ｎ18Ｅ30、Ｎ18Ｅ33において検出し、第２層下面にて確認した。

規模と構造：ピット41、40、39、38、37、７、６、５、43、42の10個の柱穴が組み合う。桁行３間（4.6ｍ、約1.5ｍ等間隔）×梁行２間（3.3ｍ、約1.6ｍ等間隔）の南北棟で、桁方向は南北に対して東へ15度前後ずれている。側柱だけの建物である。

掘り方と柱痕：掘り方は径24～50cmの楕円形で、柱痕は径11～16cmの円形あるいは楕円形である、掘り方の埋土は黄褐色土、柱痕の埋土は褐色である。掘り方の埋土には炭化物と少量の土師器が見られた。

第２号掘立柱建物跡

位置：Ｃ地区東部中央にあり、四隅はＮ15Ｅ27、Ｎ12Ｅ27、Ｎ12Ｅ21、Ｎ９Ｅ24において検出し、第２層において確認した。

重複：２間×３間の掘立（Ａ）と、２間×２間の掘立（Ｂ）の２棟が同一位置に建つ。

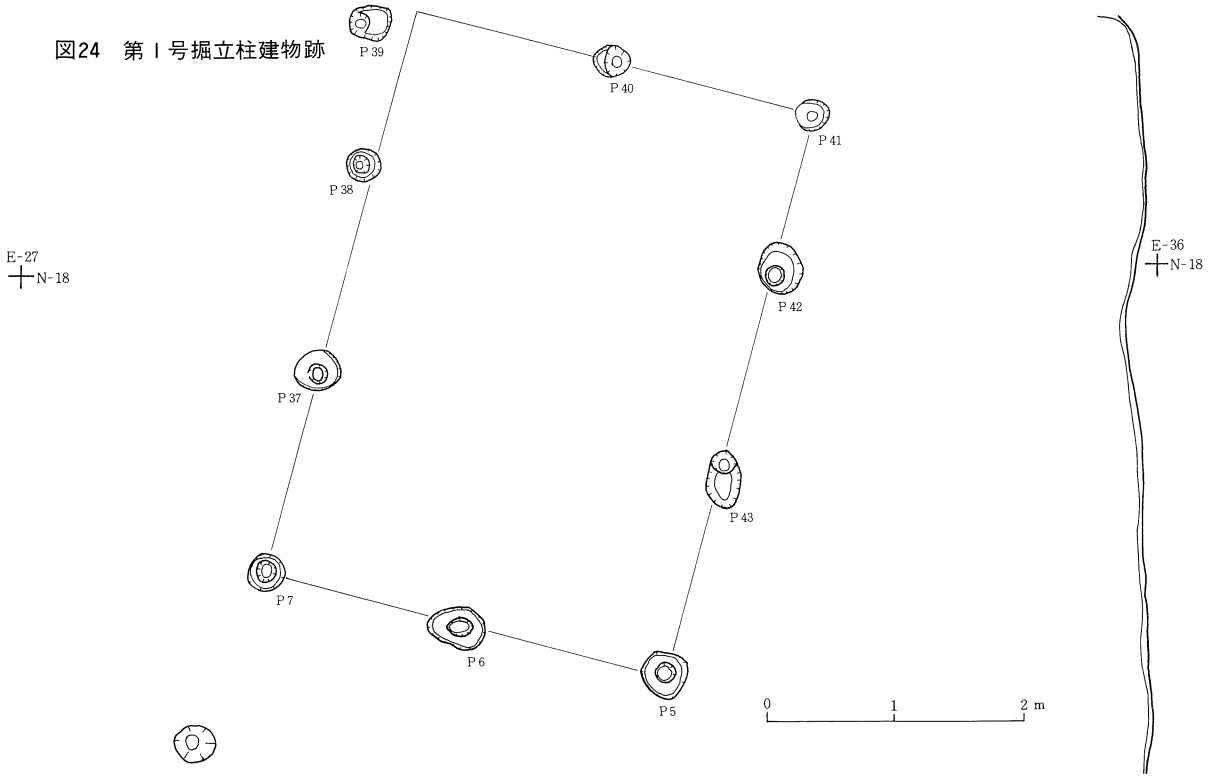


図24　第１号掘立柱建物跡

▶写真41
掘立柱建物跡群

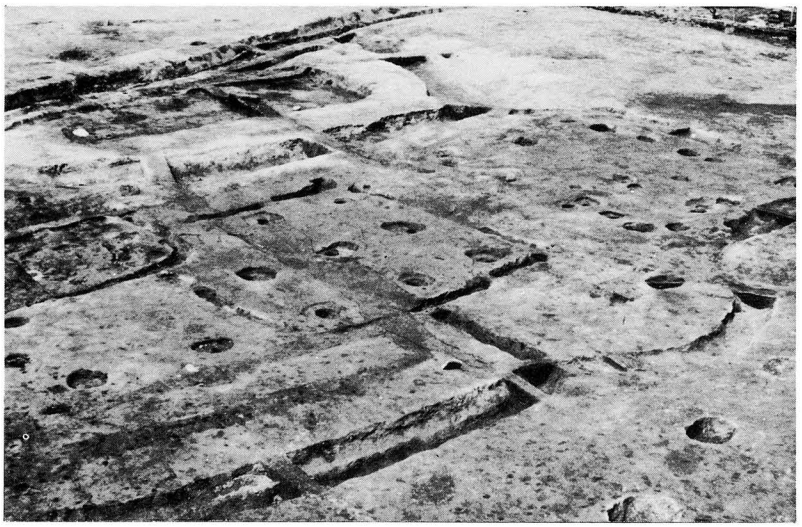


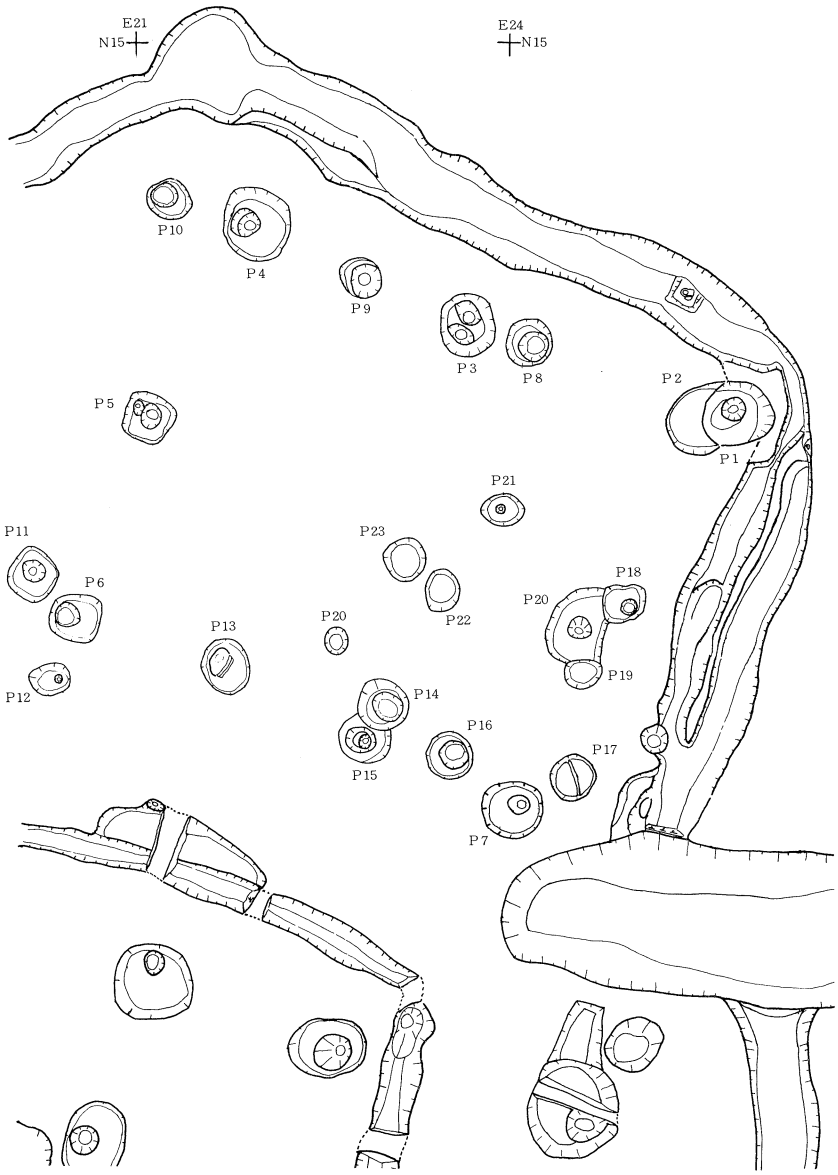
表8　第1号掘立柱建物跡ピット註記表

番号	深さ（cm）	土色	土性	備考
5	47	10YR 4/6 褐色	砂質シルト	炭化物、柱穴
6	45	〃	〃	須恵器片、柱穴
7	43	10YR 5/6 黄褐色	〃	炭化物、柱穴
37	33	10YR 4/6 褐色	〃	柱穴
38	36	〃	〃	柱穴
39	25	〃	〃	柱穴
40	40	10YR 3/4 暗褐色	〃	炭化物、柱穴
41	45	10YR 4/6 褐色	〃	炭化物、柱穴
42	40	〃	〃	炭化物、土師器、柱穴
43	37	10YR 5/6 黄褐色	〃	炭化物、土師器、柱穴

表9　第2号掘立柱建物跡ピット註記表

番号	深さ（cm）	土色	土性	備考
1	31	10YR 4/4 褐色	シルト	土師器
2	28	10YR 5/6 黄褐色	〃	土師器、柱穴
3	31	〃	〃	
4	22	10YR 6/6 明黄褐色	〃	柱穴
5	18	10YR 4/4 褐色	〃	炭化物、土師器、柱穴
6	27	10YR 5/6 黄褐色	〃	柱穴
7	31	10YR 5/4 にぶい黄褐色	〃	土師器、柱穴
8	34	〃	〃	柱穴
9	57	〃	〃	柱穴
10	26	10YR 4/6 黄褐色	〃	柱穴
11	16	10YR 5/6 黄褐色	〃	柱穴
12	18	10YR 6/6 明黄褐色	〃	
13	21	10YR 5/4 にぶい黄褐色	〃	瓦、須恵器、土師器片、柱穴
14	20	10YR 5/3 にぶい黄褐色	〃	
15	16	10YR 4/4 褐色	〃	柱穴
16	17	10YR 5/4 にぶい黄褐色	〃	
17	15	10YR 4/4 褐色	〃	土師器
18	33	10YR 5/4 にぶい黄褐色	〃	土師器、柱穴
19	12	10YR 5/6 黄褐色	〃	
20	19	〃	〃	
21	15	10YR 6/6 明黄褐色	〃	
22	26	〃	〃	柱穴
23	12	〃	〃	
24	14	〃	〃	

図25　第２号掘立柱建物跡



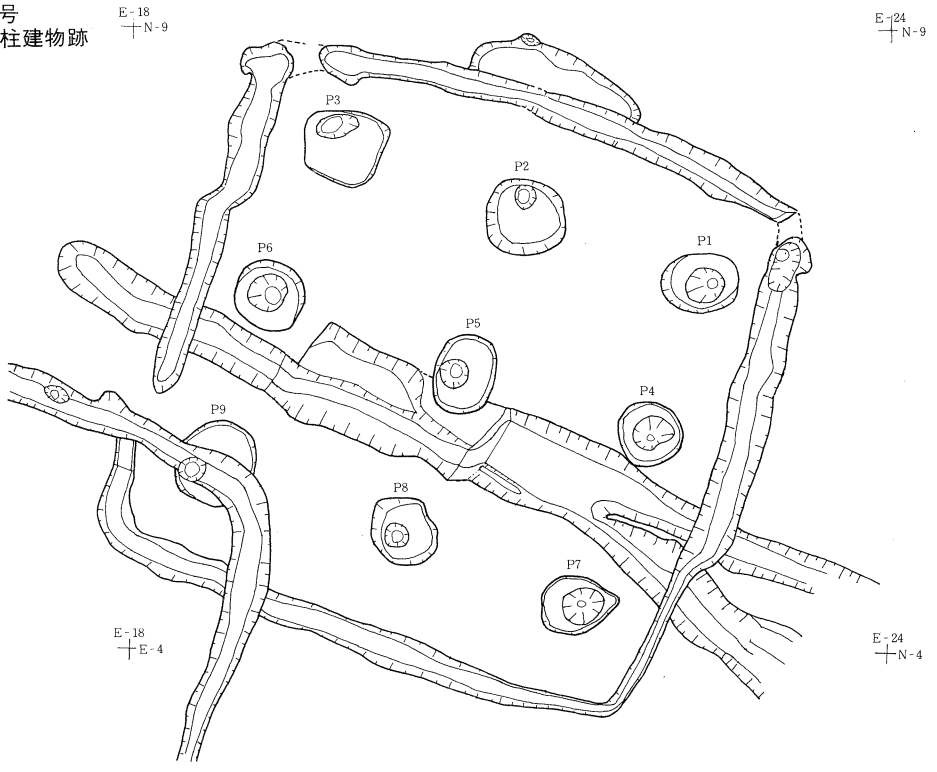
規模と構造：24個のピットがあり、A、B２棟の建物がある。A棟はピット２、８、９、４、５、６、13、15、７、18が組み合う。桁行３間（４ｍ、約1.3ｍ等間隔）×梁行２間（3.4ｍ、約1.2ｍ等間隔）の東西棟で、桁行方向は南北に対し65度程西へ偏している。側柱だけの建物である。B棟はピット８、９、10、11、13、15、22が組み合い、２間（東西3.2ｍ、約1.6ｍ等間隔）×２間（南北3.2ｍ、約1.6ｍ等間隔）であるが、ピット10とピット11を結ぶ地点に柱穴を検出できなかった。側柱だけの建物である。方向は東西柱列線が南北に対し65度西へ偏している。柱穴の在り方より見ればB棟が新しい可能性がある。

掘り方と柱痕：検出したピットのほとんどが掘り方と柱痕をもつ。掘り方は径27～51cmの楕円形で、埋土は黄褐色である。柱痕はピット１が不明であったが径10～24cmの円形で、埋土は褐色ないしはにぶい黄褐色であった。

遺物の分布：ピット３に平瓦がつきさしてあり、ピット１、２、５、７、17、18より土師器片が出土し、ピット13よりは平瓦、須恵器、土師器片が出土している。

関連遺構と問題点：A、B棟の東側、北側は第４号溝によって区画されており、この掘立柱建物跡は当初より溝をめぐらしたものと考えられる。検出したピットの大部分が掘り方と柱痕を持ち、ピット間に切り合いが見られ、さらに柱穴以外のピット中よりも若干の遺物が検出されており、A、B棟以外の遺構が存在した可能性がある。

図26　第３号掘立柱建物跡



第３号掘立柱建物跡

位置：Ｃ地区東部中央にあり、Ｎ９Ｅ24、Ｎ６Ｅ24、Ｎ９Ｅ21、Ｎ６Ｅ21において検出し、第２層において確認した。

重複：ピット５が第18、21、22号溝を切っており、ピット７が第23号ａ溝に切られている。また第４号掘立柱建物跡を切っている。

規模と構造：ピット１～９の柱穴が組み合い、２間(南北3.3ｍ、約1.6ｍ等間隔)×２間（東西2.8ｍ、約1.4ｍ等間隔）である。桁方向は南北に対して東へ23度偏している。建物内部にも柱穴をもっている。

掘り方と柱痕：検出した９個のピットに全て掘り方と柱痕が見られた。掘り方は径45～60cmで楕円形である。柱痕は径17～28cmで円形である。埋土は掘り方が明黄褐色で柱痕は褐色である。

遺物の分布：ピット１、４、５、６、９より土師器片が出土し、ピット６、７より須恵器片、ピット１より平瓦が出土した。またほとんどのピットより炭化物を検出した。

関連遺構と問題点：第５号溝が柱穴群を方形に取り巻いて区画している。第４号掘立柱建物跡のかなりの部分を切っており、柱穴の配置より見るとピット７、８、９が４号掘立で検出したピットと対応しそうである。あるいは４号掘立の柱穴をそのまま利用した可能性もあるが判然としない。

表10　第３号掘立柱建物跡ピット註記表

番号	深さ（cm）	土色	土性	備考
1	41	7.5YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	瓦、土師器片、柱穴
2	38	10YR 4/4 褐色	粘質シルト	炭化物、柱穴
3	41	〃	〃	炭化物、柱穴
4	40	〃	〃	土師器片、柱穴
5	40	10YR 6/4 にぶい黄橙色	〃	炭化物、土師器片、柱穴
6	43	10YR 4/4 褐色	シルト質粘土	炭化物、土師器、須恵器片、柱穴
7	51	〃	粘質シルト	炭化物、須恵器片、柱穴
8	57	10YR 2/3 黒褐色	〃	炭化物、柱穴
9	43	10YR 4/4 褐色	〃	炭化物、土師器片、柱穴

第４号掘立柱建物跡

位置：Ｃ地区東部中央、Ｎ３Ｅ21、Ｓ３Ｅ21地区において検出し、２層において確認した。

重複：第３号掘立柱建物跡に切られ、さらに第５号掘立柱建物跡に切られている。

規模と構造：６個のピットが検出されたが、そのうち柱痕が確認されるのは４個あるが、組み合うと思われるものはない。

関連遺構と問題点：第３号掘立柱建物跡と関連する可能性があるか明らかでない。第21号溝によって東側、北側、南側の一部が区画されており、溝でかこわれた掘立柱建物跡である可能性

が強い。

第5号掘立柱建物跡

位置：C地区東部中央、N6E18、N3E18、N6E15、N3E15地区において検出し、2層下面において確認した。

重複：ブルドーザーによって大部分が削平されており、柱穴の重複は不明であるが、5号掘立建物跡を方形に囲む第23a溝が第4号掘立柱建物跡と第3号掘立柱建物跡を切っている。

規模と構造：6個のピットが検出されたが、柱痕が認められたのは一つで、組み合うものはない。全体を削平されて実態は不明であるが、周溝の在り方から第5号掘立柱建物跡と同様の形態が推定される。

第6号掘立柱建物跡

位置：C地区東部北端、N24E24、N21E24、N24E21、N21E21地区において検出し、第2層下面において確認した。

規模と構造：ピット95、92、86、85、89、93、94、91、89の9個の柱穴が組み合う。2間（東西3.3m、約1.6m等間隔）×2間（南北3.1m、約1.5m等間隔）である。東西棟とすれば桁方向は南北に対し19度南に偏している。建物内部にも柱穴がある。

掘り方と柱痕：掘り方は径23～43cmの楕円形、円形及び隅丸方形である。柱痕は径11～15cmの円形である。掘り方の埋土はにぶい黄褐色で、柱痕は褐色である。掘り方の埋土には少量の炭化物を含む。ピット87、88、89から土師器片、ピット92からは須恵器片が見られた。

関連遺構：西側に同規模の第7号掘立柱建物跡が平行して存在する。

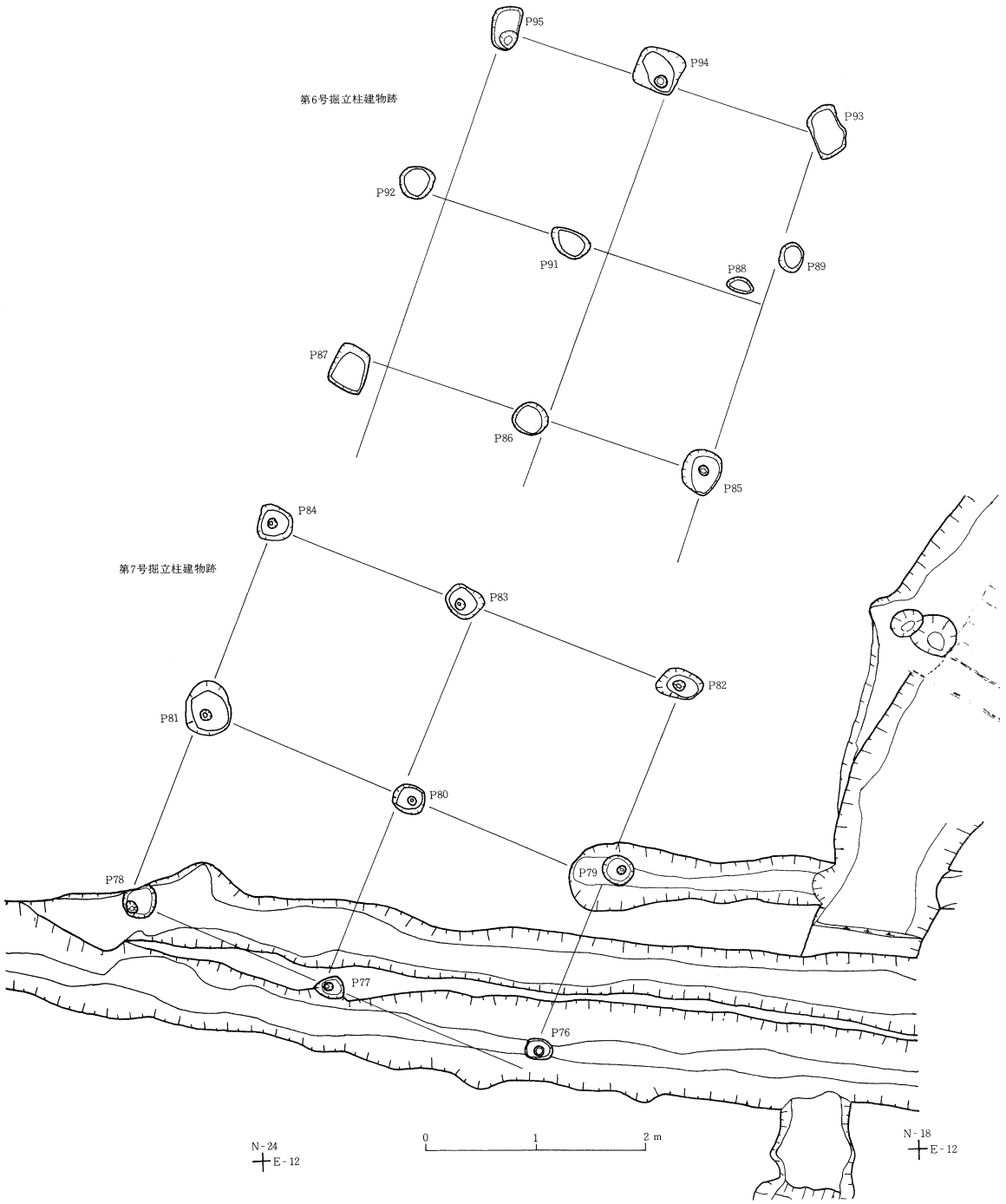
表11　第6号掘立柱建物跡ピット註記表

番号	深さ（cm）	土色	土性	備考
85	43	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト	炭化物、柱穴
86	39	〃	〃	柱穴
87	47	〃	〃	炭化物多量、土師器片、柱穴
88	28	10YR 5/6 黄褐色	〃	土師器片、柱穴
89	15	10YR 5/4 にぶい黄褐色	〃	土師器片、柱穴
91	27	〃	〃	炭化物、柱穴
92	23	〃	〃	炭化物、須恵器片、柱穴
93	51	7.5YR6/8 橙色	〃	炭化物多量、柱穴
94	32	10YR 6/8 明黄褐色	〃	炭化物、柱穴
95	18	10YR 7/8 黄橙色	〃	炭化物、柱穴

第7号掘立柱建物跡

位置：C地区東北端、N27E18、N24E18、N21E18、N27E15、N24E15、N24E21地区に

図27　第６、７号掘立柱建物跡



おいて検出し、第２層不面ならびに第１号溝、第２号溝底面において確認した。

重複：第１号溝と第２号溝に切られる。

規模と構造：ピット84、81、78、77、76、79、82、83、80が組み合う。２間（東西４ｍ、約２ｍ等間隔）×２間（南北3.6ｍ、約1.8ｍ等間隔）である。東西棟とすれば桁方向は南北に対して19度南に偏している。建物内部にも柱穴がある。

掘り方と柱痕：掘り方は径26～45cmの隅丸方形ないしは楕円形である。柱痕は径13センチ前後である。埋土は掘り方がにぶい黄褐色で柱痕は褐色である。埋土は掘り方、柱痕共に炭化物を含むものが大部分である。ピット79、80、83よりは土師器片が少量出土している。

関連遺構：東側に第７号掘立柱建物跡がある。

表12　第７号掘立柱建物跡ピット註記表

番号	深さ（cm）	土色	土性	備考
76	10	10ＹＲ 4/4 褐色	シルト	炭化物、柱穴
77	24	10ＹＲ 5/4 にぶい黄褐色	〃	炭化物、柱穴
78	16	10ＹＲ 6/6 明黄橙色	〃	炭化物、柱穴
79	30	10ＹＲ 5/4 にぶい黄褐色	〃	炭化物、焼土、土師器、瓦片、柱穴
80	42	10ＹＲ 6/6 明黄褐色	〃	炭化物、土師器片、瓦片、柱穴
81	48	〃	砂質シルト	柱穴
82	37	10ＹＲ 5/4 にぶい黄褐色	シルト	炭、柱穴、焼土
83	38	〃	〃	土師器片、柱穴
84	43	〃	〃	炭、柱穴

第８号掘立柱建物跡

位置：Ｃ地区西南部、Ｎ６Ｅ６、Ｎ３Ｅ６、Ｓ３Ｅ６、Ｎ６Ｅ３、Ｎ３Ｅ３、Ｓ３Ｅ３地区で検出し、第２層において確認した。

規模と構造：平面形は南から北へコ字型に囲む第24号溝によって画されている。区画された内部に18のピットを検出したが組み合うものがない。中央部の最も大きなピットより鉄滓が多量に出土した。

掘り方と柱痕：掘り方の見られたのはピット２、３、13、14、15、16、17、18で、径は20～30cmで柱穴は９～16cmである。埋土は掘り方が黄褐色で柱痕は褐色である。

関連遺構：第１号住居跡に接しており、その位置より考えて第１号住居跡の付属施設の可能性がある。

写真42　第８号掘立柱建物跡

表13　第８号掘立柱建物跡ピット註記表

番　号	深さ（cm）	土　　色	土　性
1	9	10ＹＲ 4/4　褐　　色	砂質シルト
2	45	10ＹＲ 5/4　にぶい黄褐色	〃
3	23	10ＹＲ 5/6　黄　褐　色	〃
4	38	10ＹＲ 3/4　暗　褐　色	〃
5	42	10ＹＲ4/ 4　褐　　色	〃
6	5	10ＹＲ 4/6　褐　　色	〃
7	7	〃	〃
8	19	〃	〃
9	5	10ＹＲ 3/4　暗　褐　色	〃
10	26	10ＹＲ 4/6　褐　　色	〃
11	52	10ＹＲ 5/6　黄　褐　色	〃
12	49	〃	〃
13	13	〃	〃
14	40	〃	〃
15	16	〃	〃
16	29	〃	〃
17	34	10ＹＲ 4/4　褐　　色	〃
18	30	10ＹＲ 5/6　黄　褐　色	〃

（３）　土　　壙

第３号土壙

遺構の確認：Ｃ地区西部中央、Ｎ12Ｅ９、Ｎ９Ｅ９、Ｎ９Ｅ12地区で検出し、第３層で確認した。

重複：第４号溝、第９号溝、第17号溝を切り、第４号土壙に切られる。

平面形と構造：径２～1.6ｍの楕円形である。底面は平坦な円形をなし、割合い急に立ち上る。

堆積土：埋土は12層に区分できるが、基本的には褐色土、明褐色土、黄褐色土の３層で、これが交互に堆積している。堆積の仕方は土壙の周縁より埋まり、第６層（褐色土）の堆積によって埋まり切っている。各層共遺物を含み、総数では土師器片67、須恵器片87出土している。

関連遺構と性格：第４号土壙によって切られている。溝は水流方向は全て土壙に向っており、土壙に接する部分が凹み、水が流れた痕跡がある。土壙内にも水を貯蔵した痕跡を観察することができる。３号土壙は水が流れ込み、一定量になると第17号溝を通して排水されたものである。また第１号住居跡ともトンネル状の溝でつながっている。レベル差は住居側がわずかに低いが、水流方向はたしかめられなかった。この土壙は接する溝から水を集め、第１号住居跡、第６号住居跡に関する貯水用として利用されたと思われる。

第４号土壙

遺構の確認：Ｃ地区西部中央、Ｎ９Ｅ９で検出し、第３層で確認した。

重複：第６号溝に掘り込まれ、第３号土壙を切っている。

堆積土は３層に区分できるが基本的には２層である。第１層は褐色土で第２層は明褐色土であり、かなりの土師器、須恵器片を含む。

平面形と構造：50～70cmの楕円形である。緩やかな立ち上りをもつ壁で、全体的に第３号土壙の方に傾斜している。

関連遺構と性格：第６号溝が第３号土壙に接する位置に掘り込まれており、第６号溝よりの水が流れやすいように、第６号溝を作った後に第４号土壙を掘り込んだものである。

器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	3	17	20	4	0	4
	体部	11	11	14	0	11	11
	底部	0	2	2	0	3	3
甕類	口縁部	0	3	3	0	0	0
	体部	0	3	3	0	47	47
	底部	0	2	2	0	2	2
計		6	38	44	4	63	67

表14　第３号壙出土土器集成

器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	0	1	1	0	4	4
	体部	0	3	3	0	0	0
	底部	0	2	2	0	1	1
甕類	口縁部	0	0	0	0	0	0
	体部	0	17	17	0	30	30
	底部	0	0	0	0	0	0
計		0	23	23	0	35	35

表15　第４号土壙出土土器集成

第７号土壙

遺構の確認：Ｃ地区西部、Ｓ６Ｅ６で検出し、地山面で確認した。

平面形と構造：65×112 cmの長楕円形である。かなり削平されており、深さは８cm程である。壁は緩やかに立ち上り、熱変化により厚いところでは10cm程赤褐色となっている。底面にも熱がくわわり、壁などではいが赤褐色に変化している。壁、底面共炭化物が付着している。

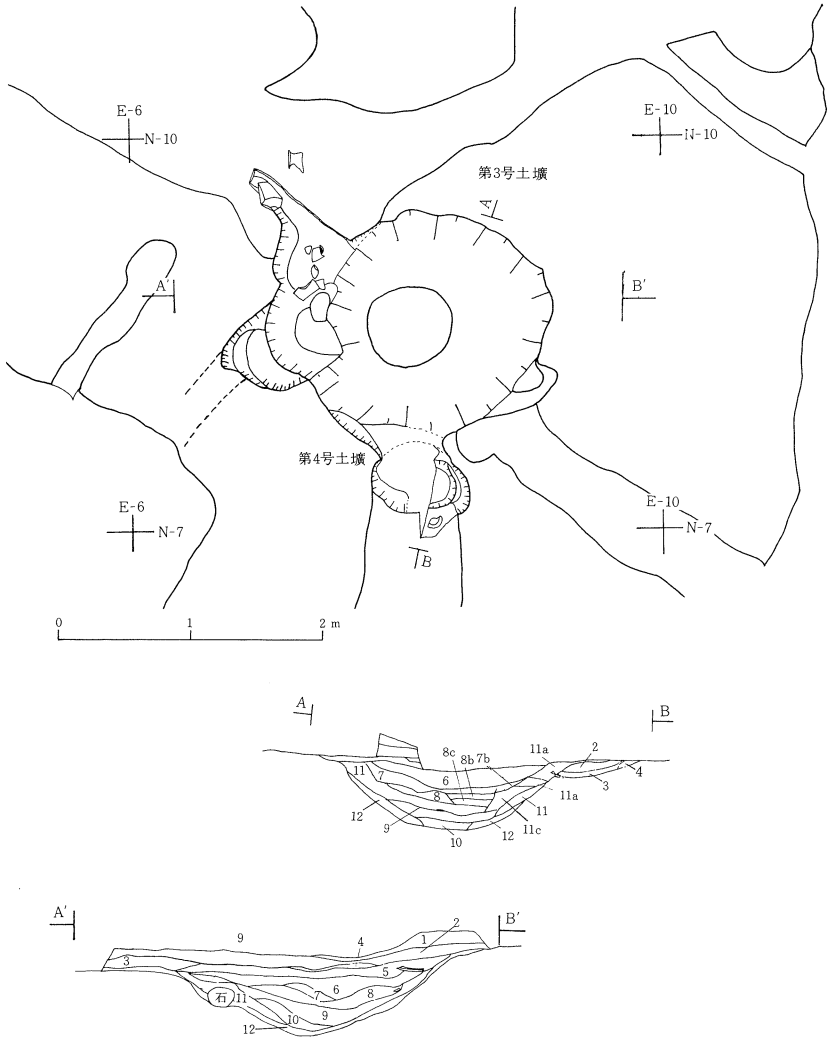
器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	0	2	2	0	4	4
	体部	0	14	14	0	1	1
	底部	0	5	5	0	3	3
甕類	口縁部	0	7	7	0	2	2
	体部	0	8	8	0	61	61
	底部	0	0	0	0	2	2
計		0	36	36	0	73	73

表16　第７号土壙出土土器集成

堆積土：埋土は３層で、１層は暗褐色、２層は黒褐色、３層は黒色土である。遺物は大部分が土師器である。

関連遺構と性格：南側に小ピット群があるが特に関連するものと思われず、単独で存在している。埋土の中には鉄滓等も見られない。かなりの高熱をうけた焼土遺構である。

図28　第３、４号土壙



1．暗褐色　シルト質粘土、表土
2．褐　色　シルト質粘土
3．明褐色　シルト質粘土、黄褐色土が含入
4．褐　色　シルト質粘土
5．褐　色　シルト質粘土（遺物を多量に含む）
6．褐　色　シルト質粘土（明褐色土を含む。遺物多量に出土）
7．黄褐色　シルト質粘土（砂を多量に含む。遺物は少量であるが出土する）
8．褐　色　シルト質粘土（明褐色土を含む。遺物を含む）
9．褐　色　シルト質粘土（明褐色土を含む。炭化物及び遺物を含む）
10．黒褐色　粘土（多量に炭化物及び遺物を含む）
11．明褐色　シルト質粘土（黄褐色土混入）
12．黄褐色　シルト質粘土（砂を多量に含む）

第８号土壙

遺構の確認：Ｃ地区西南部、第１号住居跡の南東部、Ｎ３Ｅ６、Ｎ３Ｅ９で検出し、第２層下面で確認した。

重複：第24号溝を切る。

平面形と構造：東西に長い72×105㎝の長楕円形である。底面は平坦で急に立ち上り、深さは30㎝程である。壁面は全て地山の黄色土が露出している。

堆積土：埋土は３層に区分できる。第１層は黒褐色、第２層黒褐色土、第３層黄褐色土で、各層共炭化物を含み、大量の土師器が出土している。ほぼ水平な堆積状態である。

関連遺構と性格：第８号掘立柱建物跡を区画する第24号溝を切って作られており、８号掘立柱建物跡に関連する遺構で、一時的に水を溜めたものと考えられる。

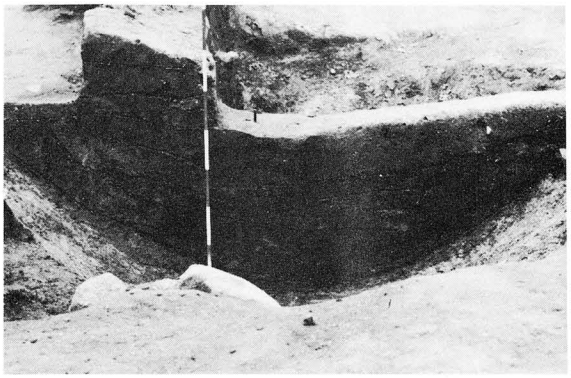


写真43　第３号土壙

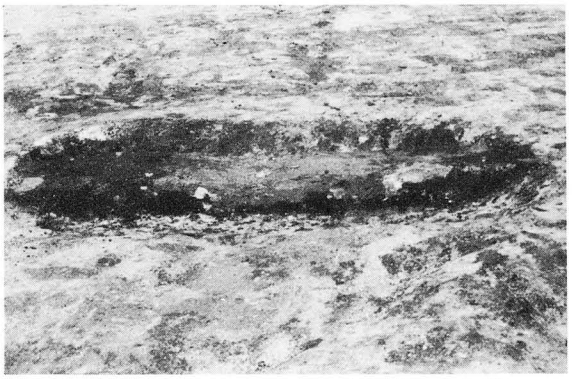


写真44　第７号土壙

第12号土壙

遺構の確認：Ｃ地区西部、第７号溝中のＮ18Ｅ９地区において検出し、第２層において確認した。

重複：第７号溝を切って構築している。

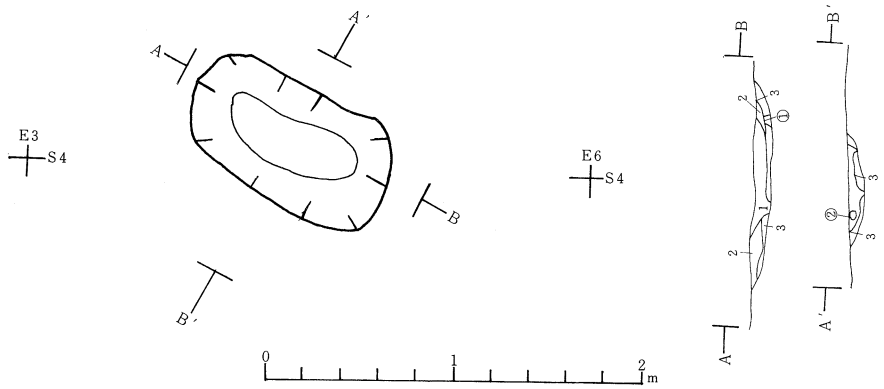
平面形と構造：径75×125㎝の楕円形である。比較的浅いため上部は削平されていると思われるが、深さは15㎝程である。壁は緩やかな立ち上りをもち、壁周辺が赤色に熱変化を受けている。底面は中央及び北西側は熱変化を受けず、地山が底面となっていた。底面南側は壁同様に熱変化を受けて赤色を呈している。

堆積土：埋土は４層で、第１層黄褐色シルト、第２層にぶい黄褐色シルト、第３層褐色シルト、第４層明るい褐色シルトで、共に炭化物、焼土を含み、土師器片、須恵器片も出土する。

器種／器形		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	1	7	8	0	1	1
	体部	0	11	11	0	14	14
	底部	0	4	4	1	6	7
甕類	口縁部	0	0	0	0	0	0
	体部	0	0	0	5	58	63
	底部	0	0	0	0	2	2
計		1	22	23	6	81	87

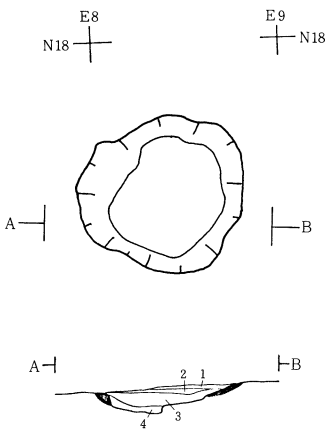
表17　第８号土壙出土土器集成

図29　第７号土壙



1．10Y R3/3　暗褐色・粘性有り、焼土をブロック状に含む。
2．10Y R3/2　黒褐色・粘性やや有り
3．10Y R2/1　黒色・粘性なし、焼土及び地山をブロック状に含む。遺物を含む。
①．10Y R4/4　褐色
　10Y R5/6　黄褐色　} 地山と第１層との混入土がブロック状で第３層に混入している。
②10Y R4/6　赤色
　10Y R5/6　黄褐色　} 焼土と地山が混り合いブロック状に入る。

図30　第12号土壙



1．10Y R5/3、にぶい黄褐色シルト、炭化物、焼土、土師器含む。
2．10Y R5/4　にぶい黄褐色シルト、炭化物、焼土、土師器含む。
3．10Y R5/4　にぶい黄褐色シルト、土師器、須恵器含む。
4．10Y R5/4　褐色シルト、土師器含む。

関連遺構と性格：第７号溝が掘り込まれており、７号溝が溝として機能しなくなった時に作られたものである。位置的には第２住居跡に近接しており、時期的には２号住居跡の最後の段階と一致する可能性がある。また第７号土壙と類似し、若干の鉄滓が見られたことより、鍛冶に関連する遺構と考えられる。

第13号土壙

遺構の確認：Ｃ地区の東南部、Ｓ３Ｅ18、Ｓ６Ｅ18地区において検出し、第２層下面において確認した。

平面形と構造：径2.45ｍと2.8ｍの円形で、壁はほぼ直立する。底面は平坦で底面直上に灰黄色の砂質シルトが見られる。

器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	0	0	0	0	0	0
	体部	0	0	0	0	0	0
	底部	0	0	0	0	0	0
甕類	口縁部	0	0	0	0	2	9
	体部	0	0	0	0	9	9
	底部	0	1	0	0	0	0
	部	0	1	1	0	11	11

表18　第12号土壙出土土器集成

器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	0	41	41	0	13	13
	体部	0	44	44	0	26	26
	底部	0	29	29	0	25	25
甕類	口縁部	0	0	0	0	36	36
	体部	0	2	2	0	219	219
	底部	0	2	2	0	22	22
	計	0	118	118	0	341	341

表19　第13号土壙出土土器集成

堆積土：埋土は15層に区分できる。大部分が黄褐色砂質シルトでその中に褐色砂質シルトが交互に堆積し、各層に炭化物を含む。堆積状態は壁側から堆積し、中央部はほぼ水平堆積している。遺物は各層より多量に出土している。瓦、土玉があり、土師器片は300点、須恵器片は、100点を越えた。

関連遺構と性格：東南に近接する第14号土壙に次ぐ規模で、堆積状況も同様であり、共に廃棄用の土壙と考えられる。

第14号土壙

遺構の確認：C地区東部中央、N３E18、S３E18、N３E15、S３E15地区において検出し、第２層下面で確認した。

重複：第23ｂ溝が接する。

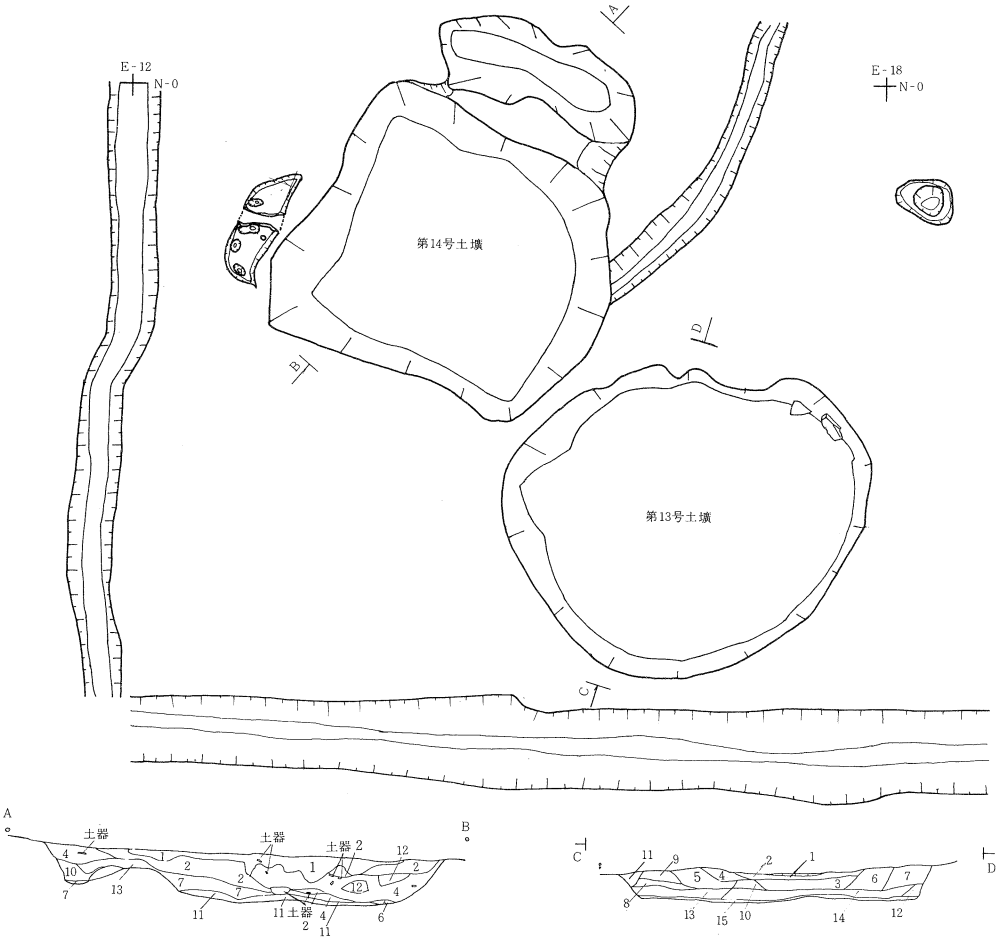
平面形と構造：径2.45ｍ×3.2ｍの楕円形である。壁は南側が急に立ち上り、北側では一度立ち上り再び落ち込む。南北の断面で見ると二つの土壙が接合したように見えるが、平面及びセクションにおいても切り合いは見られず同一のものと考えられる。底面は平坦で、第13号土壙で見られる灰黄色の砂質シルトが床面上に見られた。

堆積土：埋土は13層に区分できる。基本的には黒褐色砂質シルトと黄褐色砂質シルトでブロック状の堆積が目立ち、炭化物を含む。堆積状況は壁側から堆積し、中央部は水平に近いがブロック状の層が間に混入する。出土遺物は各層共多量で、瓦、風字硯、ト石、手捏ね土器が見られ、土師器は、1400点、須恵器片は500点を越えた。

関連遺構と性格：第23ｂ溝が接している。これは平面形では切り合いを確められず、14号土壙に排水したものと思われる。第

写真45　第14号土壙

図31　第13、14号土壙



A－B セクション

1．10ＹＲ3/1黒色シルト　　粘性やや強く、しまりなし。2層の土を少し含み土師器片多く含む。
2．10ＹＲ3/3黒褐色破質シルト粘性、しまりとも1層と同じ。
　　6層の土をしもふり状に少し含む。炭化物を多少含む。
3．7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト　粘性、しまりとも1層に同じ、1層の土をブロック状に含む。
4．10ＹＲ3/3暗褐色砂質シルト粘性、しまりとも1層より弱い。炭化物多少含む。
5．7.5Ｙ Ｒ3/2黒褐色砂質シルト　粘性やや強く、しまりあり、炭化物、土師器片多く含む。
6．10ＹＲ5/4にぶい黄褐色砂質シルト　　粒は小さく、粘性、しまり強い、2層の土を多少含む。
7．10ＹＲ5/4にぶい黄褐色砂質シルト
　　粘性、しまりとも強い、11層の土をブロック状に含む、炭化物多少見られる。
8．10ＹＲ5/4にぶい黄褐色砂質シルト　粘性、しまりとも7層と同じ、6層と10層の土をブロック状に含む。
9．10ＹＲ5/6黄色砂質シルト粘性、しまりともかなり強い。地山の土をブロック状に含む。
10．10ＹＲ5/1褐灰色砂　　粘性、しまりともやや弱い。地山の土をブロック状に少し含む。炭化物を少し含む。
11．10ＹＲ5/6黄褐色砂質シルト　粘性やや強く、しまりあり、炭化した土器片多く含む。
12．10ＹＲ5/6にぶい黄褐色砂　粘性、しまりとも弱い。9層の土をブロック状に含む。
13．10ＹＲ5/6黒褐色砂　　粘性常に弱くしまりあり、炭化物を多少含む。

C－Dセクション

1．10ＹＲ5/4より5/6に近い黒褐色粘土質シルト　　しまり粘性とも地山より非常に強い。
2．10ＹＲ5/4より5/6に近いにぶい黄褐色砂質シルト　　しまり粘性とも埋1層より常に弱い。黒色土をブロック状に含む。
3．10ＹＲ5/4より5/6に近いにぶい黄褐色砂質シルト　しまりは埋2とほぼ同じで粘性はやや強い。
4．10ＹＲ5/4より5/6に近い黄褐色砂質シルト　　しまりま埋1よりやや弱いが粘性は埋2よりやや強い。シルトのつぶがあらい。
5．10ＹＲ5/4埋2よりやや明るいにぶい黄褐色砂質シルト　しまりは埋4よりやや強く粘性はやや強い。
6．10ＹＲ5/4より5/6に近いにぶい黄褐色砂質シルト　　しまりは埋5よりやや弱いが粘性は埋4の次に強い。
7．10ＹＲ5/4より5/6に近いにぶい黄褐色砂質シルト　しまり粘性とも埋2と類似する、炭化物を多少含む。
8．10ＹＲ5/4より5/6に近いにぶい黄褐色砂質シルト　しまりは埋4より硬くしまる。粘性は埋4より弱い。
9．10ＹＲ5/4より5/6に近い褐色砂質シルト　しまりは埋8よりやや弱いが粘性はやや強い、炭化物を埋8と同様に含む。
10．10ＹＲ5/4埋9より明るい褐色砂質シルト　しまりは埋4より弱く粘性は埋7よりやや弱い。
11．10ＹＲ5/3と5/6の中間の暗褐色砂質シルト　しまりは埋8よりやや弱く粘性はやや強い。
12．10ＹＲ5/4より5/6に近いにぶい黄褐色砂質シルト　　水分を他の埋土より多く含んでいるため弱くしまり、粘性は埋7よりやや弱い。
13．10ＹＲ5/4より5/6に近いにぶい黄褐色砂質シルト　しまりは埋10よりやや弱く粘性はやや強い。
14．10ＹＲ5/4埋7よりやや明るいにぶい黄褐色砂質シルト　しまり粘性とも埋7とほぼ同じ。
15．10ＹＲ5/4より5/6に近い灰黄褐色砂質シルト　しまりは埋7より強く粘性もやや強い。

4号土壙はC地区最大の土壙で遺物の出土もきわめて多量であり、堆積状態より見て、第13号土壙同様、廃棄用土壙であろう。

器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	3	136	139	0	49	49
	体部	0	213	213	0	232	232
	底部	0	71	71	0	42	42
甕類	口縁部	0	16	16	0	41	41
	体部	2	63	65	11	61	152
	底部	0	13	13	1	61	62
	計	5	512	517	12	532	544

表20　第14号土壙出土土器集成

器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	0	2	2	0	5	5
	体部	0	10	10	3	1	4
	底部	0	0	0	0	4	4
甕類	口縁部	0	0	0	0	1	1
	体部	0	0	0	0	15	15
	底部	0	0	0	0	2	2
	計	0	12	12	3	28	31

表21　第15号土壙出土土器集成

器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	2	2	4	0	0	0
	体部	5	1	6	0	0	0
	底部	3	0	3	0	0	0
甕類	口縁部	0	0	0	2	0	2
	体部	1	1	2	9	1	10
	底部	0	0	0	0	0	0
	計	11	4	15	11	1	12

表22　第16号土壙出土土器集成

第15土壙

遺構の確認：C地区東南部、S３E21において検出し、第２層で確認した。

平面形と構造：92×102㎝の楕円形で深さは10㎝程である。壁は急に立ち上り部分的に熱を受け赤褐色に変色している。床面は多少凹凸がある。熱変化は受けていない。

堆積土：埋土は３層に区分できるが、基本的には２層で、第１層はにぶい黄褐色シルト、第２層暗褐色シルトで焼土、炭化物を含む。ほぼ水平堆積である。遺物は土師器、須恵器が多少見られた。

関連遺構と性格：第４号掘立柱建物跡に近接している。性格はかるく火を受けている焼土土壙である。

第16号土壙

遺構の確認：C地区西部中央、N12E３、N12W３地区において検出し、地山面で確認した。

平面形と構造：67×106㎝の東西に長い楕円形である。全体的に削平されて遺存状況は悪く、壁は大部分消滅して、かろうじて輪郭がわかる程度である。

堆積土：埋土は黄褐色土１層で、底面に平瓦が見られた。

関連遺構と性格：第１住居跡に近接する。保存が悪く性格は不明である。

第17号土壙

遺構の確認：C地区西部中央、N12W3、N9W3地区において検出し、地山面で確認した。

平面形と構造：50×100cmの楕円形である。削平がはげしくかろうじて輪郭がわかるものである。深さは2cm程である。

堆積土：黄褐色土がわずかに見られる。遺物は土師器が少数見られた。

器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	0	0	0	0	0	0
	体部	0	0	0	0	0	0
	底部	0	0	0	0	1	1
甕類	口縁部	0	0	0	0	4	4
	体部	0	0	0	0	19	19
	底部	0	0	0	0	1	1
計		0	0	0	0	25	25

表23　第17号土壙出土土器集成

関連遺構と性格：第16号土壙が近接するが、共に削平がはげしく実態は不明である。

第19号土壙

遺構の確認：C地区東南端、S12E15地区において検出し、第2層で確認した。

重複：第12溝が接する。

平面形と性格：グリットの壁に接し、一部調査地区外にはみだしているため全形を確められなかったが、ほぼ楕円形を呈するものと思われる。底面は平坦で灰黄色砂質シルトが堆積し、壁は直立する。調査部分の最大径は2.6mで、深さは28cmを測る。

器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	5	36	41	0	3	3
	体部	6	54	60	0	30	30
	底部	3	28	31	0	16	16
甕類	口縁部	0	1	1	0	9	9
	体部	0	17	17	23	151	174
	底部	0	5	5	3	12	15
計		14	14	155	26	221	247

表24　第19号土壙出土土器集成

堆積土：埋土は5層に区分できる。ほぼ水平堆積であり、基本的には黒褐色土、灰黄褐色土、褐灰色の3層でブロック状の土が混入している。遺物は瓦、手捏ね土器、風字硯である。

関連遺構と性格：形態、規模、底面上堆積土が第13、14土壙と類似しており、それらと同様の廃棄用土壙であろう。

第20号土壙

遺構の確認：C地区西南部、S3E3、S6E3地区で検出し、第2層で確認した。

平面形と構造：57×87cmの東西に長い楕円形である。底面は平坦で、壁は直立し、深さは26cm程である。

堆積土：埋土は3層に区分できる。第1層暗褐色シルト、2層暗褐色シルト、3層黒褐色シルトで、各層共炭化物を含む。遺物は土師器が172片、須恵器が19片発見された。

関連遺構と性格：西南部に孤立している。性格は不明である。

第21号土壙

遺構の確認：C地区東南部、S12E24地区において検出し、地山面で確認した。

平面形と構造：45×85cmの南北に長い隅丸長方形である。底部は平坦で壁は直立し、部分的に熱が加わり赤褐色に熱変化している。深さは17cm程である。

堆積土：埋土は3層で、南北セクションは第1層褐色シルト、第2層にぶい黄褐色シルト、第3層は暗褐色シルトで東西セクションとは若干ことなる。壁端より堆積し、弓なりの堆積状態を呈する。遺物は須恵器、土師器片が少数見られた。

関連遺構と性格：東西部に孤立している。火を受けた焼土土壙である。

器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	0	8	8	0	0	0
	体部	0	8	8	0	0	0
	底部	0	2	2	0	2	2
甕類	口縁部	0	0	0	0	2	2
	体部	0	0	0	0	66	66
	底部	0	0	0	0	0	0
計		0	18	18	0	70	70

表25　第20号土壙出土土器集成

器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	0	0	0	0	0	0
	体部	0	0	0	0	0	0
	底部	0	0	0	0	0	0
甕類	口縁部	0	0	0	0	0	0
	体部	0	0	1	2	0	2
	底部	0	1	1	0	0	0
計		0	1	2	2	0	2

表26　第21号土壙出土土器集成

（4）　溝

第1号溝

遺構の確認：C地区中央部を南北に縦断している。その南端はS12E12、北端はN30E18区において検出し、第2層下面で確認した。

重複：第7号溝、第2号住居跡、第2号溝、第7号掘立柱建物跡を切り、第16号溝(現代の溝)によって切られている。

形態と構造：南北に長い溝で、北は小沢に落ち込み、南は調査区域外にも伸びて、計測可能なだけでも42mである。横断面形はU字形を呈し、深さは約40cmである。上幅は最大で1.2m、最小で約50cmで、底面幅は40cm程である。南部は幅広く段をなしている。底面傾斜方向は北から南である。

堆積土：埋土は7層に区分できる。第1層、第2層、第3層はほぼ水平堆積であるが、第4層、第5層、第6層は不整形な堆積状態である。遺物の出土は第1層から3層に多く、第4層から6層は少ない。特に第2層は多く、土師器片は200点を越えた。最初に西側より第7層が埋ま

り、次いで第６、５、４層が埋まり、３層が堆積した後、西側に一部拡張されて使用され、第２層、１層と堆積したものと思われる。第２層に特に多いという遺物の在り方からも裏付けられる。この溝は掘られてから溝として機能した時期が少なくとも２回あったと考えられる。

器種＼器形		須恵器 確認面	須恵器 埋土	須恵器 計	土師器 確認面	土師器 埋土	土師器 計
坏類	口縁部	0	36	36	2	23	25
	体部	2	41	43	7	69	76
	底部	0	10	10	2	9	11
甕類	口縁部	0	7	7	1	43	44
	体部	0	23	23	3	476	476
	底部	0	14	14	2	45	47
計		2	131	133	17	665	682

表27　第１号溝出土土器集成

関連遺構：第１号溝とほぼ平行して第２号溝、第３号溝が走っている。３本の溝のうち、第１号溝が一番長く、第２号溝を切っていることより、第１号溝が最も新しい。遺構の方位は北東から南東に伸びており、第１号住居跡の中軸線にほぼ平行する。

遺構の性格：埋土中の出土遺物は全て古代のもので現代のものが混入していないことから、古代の溝と断定しても間違いはない。また接する全ての遺構を切断するかたちで構築されており、Ｃ地区発見遺構の中でも最も新しい時期に属する。西側に見られた第１住居跡と、それに近接する遺構群との関連が考えられる。

溝としての機能は、水性粘土の堆積も見られず、遺構単位の区画としては十分な関連遺構も見られないことから、常時水が流れたものでなく、雨天時の水抜き的な性格が考えられる。

第２号溝

遺構の確認：Ｃ地区中央部に第１号溝の東側に平行して南北に伸びている。南端はＳ12Ｅ12、北端はＮ27Ｅ15において検出し、第２層下面で確認した。

重複：第７号溝、第２号住居跡、第７号掘立柱建物跡を切り、第１号溝，第16号溝(現代の溝)によって切られている。

器種＼器形		須恵器 確認面	須恵器 埋土	須恵器 計	土師器 確認面	土師器 埋土	土師器 計
坏類	口縁部	0	3	3	0	0	0
	体部	0	3	3	0	1	1
	底部	0	0	0	0	1	1
甕類	口縁部	0	0	0	0	1	1
	体部	0	1	1	0	6	6
	底部	0	0	0	0	0	0
計		0	7	7	0	9	9

表28　第２号溝出土土器集成

形態と構造：南北に長い溝で、北端は第１号溝によって切られているものの、本来は小沢に落ち込んでいたものであろう。南端は一部切れるところもあるが調査区外にも伸びている。38.5ｍまで計測できる。横断面形はＵ字形を呈し、深さは30cm程である。壁は急に立ち上り、上幅は30～80cm、底面幅は10～50cm、底面は丸味をおびている。底面傾斜方向は北から

南である。

堆積土：埋土は南部で２層に区分され、第１層は茶褐色シルト、第２層は茶黄褐色砂質シルトである。北部Ｂセクション（Ｅ21）では褐色砂質シルト１層だけであり、共に遺物の混入は少ない。南部と北部では堆積土に差異が認められた。

関連遺構：第１号溝に切られており、現存長では第１号溝より短いがほぼ同一の規模であり、第１号溝と同様西部遺構群との関連が考えられる。

遺構の性格：堆積土中の出土遺物はきわめて少ないが、現代の遺物は混入していない。溝としての機能も水抜き的なものである。第1号溝と同様な性格であり、時期的には１号溝に次ぐ新しさが考えられる。

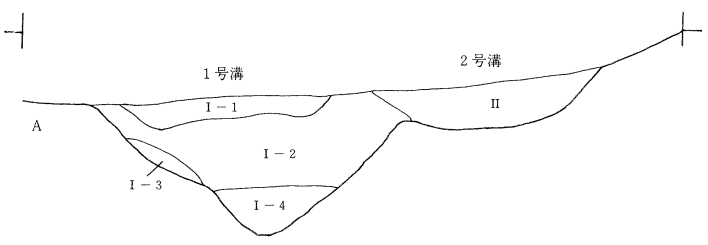
第３号溝

遺構の確認：Ｃ地区中央部を南北に縦断し、南端はＳ12Ｅ12、北端はＮ24Ｅ15区において検出し、第２層下面で確認した。

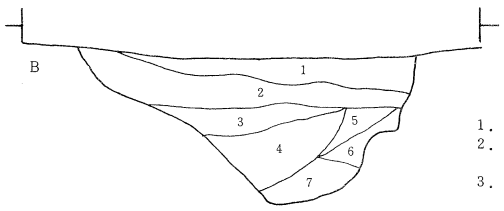
重複：第７号溝、第２住居跡、第７号掘立建物跡を切り、第16号溝（現代溝）に切られている。

形態と構造：南北に細長い溝で、北は小沢の手前、南端は調査区域外にも伸びている。全長は33ｍでＣ地区中央部を縦断する３本の溝では最も短い。横断面形は第１、第２号溝よりきつい

図32　第Ⅰ、２号溝断面図



Ⅰ－１　10ＹＲ3/3暗褐色砂質シルト　粘性なし　黒褐色土を若干粒状に含んでいるが黄褐色土の混入はない。
Ⅰ－２　7.5ＹＲ4/4褐色シルト　粘性なし砂粒を含み他の混入土はない。遺物を多量に含んでいる。
Ⅰ－３　10ＹＲ5/4にぶい黄褐色シルト　粘性やや有り、地山の土をブロック状に少量含んでいる。
Ⅰ－４　10ＹＲ5/6黄褐色シルト　粘性有り、砂粒をやや多く含み１－２層の土をしもふり状に含んでいる。



1．10ＹＲ4/4褐色シルト　粘性、しまりとも強い。
2．10ＹＲ3/2黒褐色シルト　粘性は１層より強く、しまりあり。灰褐色土がブロック状に混入。
3．7.5ＹＲ4/3褐色シルト　粘性は２層より弱く、しまりなし。灰褐色土がブロック状に混入。
4．10ＹＲ3/2黒褐色シルト　粘性２層より強く３層より弱い。黄褐色土をブロック状に含む。
5．10ＹＲ5/3にぶい黄褐色シルト　粘性４層より強い。黄褐色土を帯状に含む。
6．10ＹＲ3/2黒褐色シルト　粘性５層より強い。
7．10ＹＲ5/2灰黄褐色シルト　粘性、しまりとも５層より強い。粒子があらく、黄褐色土を帯状に含む。

器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	1	1	2	1	0	1
	体部	2	0	2	11	4	15
	底部	0	0	0	0	1	1
甕類	口縁部	0	1	1	0	0	0
	体部	2	1	3	6	26	32
	底部	0	0	0	0	1	1
計		5	3	8	18	32	50

表29　第3号溝出土土器集成

立ち上りをもつU字形で深さはは10cm程ある。幅は上面で30～40cm、底面で10～20cmである。壁は南部では崩壊が著しい。底面傾斜方向は北から南である。

堆積土：埋土は2層からなり、第1層は黒褐色砂質シルト、第2層は茶褐色粘土質シルトである。出土遺物は2層に多く、特に土師器片が多い。

関連遺構と性格：第1号、第2号溝と同一の遺構を切り、また平行して走っていることから同一の性格をもつ溝と考えられる。南端で一部第2号溝に切られており、第1号、第2号溝よりも古い。

第4号溝

遺構の確認：C地区東部、N15E27、N12E27、N9E27、N18E24、N15E24、N15E12の各区において検出し、第2層下面で確認した。

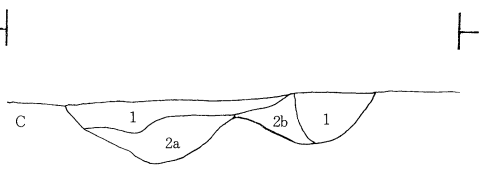
重複：第7号溝、第2号掘立柱建物跡の第1ピット及び第13号溝（現代溝）に切られる。

形態と構造：第2号掘立柱建物跡の東から北を囲むようにコの字型を呈する。横断面形は逆台形をなし深さ10cm程で底面は平坦である。幅は上面で最大70cm、最小40cm、底面では最大幅40cm、最小幅20cm程である。

堆積土：埋土は2層で、第1層黒褐色シルト、第2層黄褐色砂質シルトである。出土遺物は多く、土器以外に鉄製品片、鉄滓、焼石などが見られる。出土土器は土師器が多く、大半は第1層より出土している。

関連遺構と性格：第4号溝は第2号掘立柱建物跡の周溝である。しかし方形にまわるものではなく、当初より東と北だけをコ字形に作られたもので、第7号溝に

図33　第4号溝断面図



1．10YR3.5/3　黒褐色シルト　　粘性がやや強く、しまりなし。
2a．10YR5/6　　黄褐色砂質シルト　粘性・しまりとも埋1層より強い。
2b．10YR5/6　　黄褐色シルト　　粘性は埋2a層より強く、しまりはほぼ同じ。

器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	6	8	14	3	4	7
	体部	8	9	17	0	46	46
	底部	3	6	9	3	6	9
甕類	口縁部	5	1	6	0	0	0
	体部	2	20	22	0	0	0
	底部	0	1	1	0	0	0
計		24	45	69	6	56	62

表30　第4号溝出土土器集成

接する部分はその地点よりも伸びておらず、切られたというよりも接続させたものである。面傾斜方向は南を向いているが、水性粘土は見られず、水抜きの性格をもつものである。また溝の北東コーナーは第２号掘立柱建物跡のピット１に切られ、溝の東側も改築の痕が見られる。掘立柱の改築にともなうものと考えられる。

第５号溝

遺構の確認：Ｃ地区東部、Ｎ９Ｅ24、Ｎ６Ｅ24、Ｎ９Ｅ21、Ｎ６Ｅ21区において検出し、第２層下面で確認した。

重複：第18号溝、第19号溝、第20号溝、第22号溝、第22号土壙を切り、第23号溝に切られている。

形態と構造：南西コーナーが１ヶ所あいているが、ほぼ１辺が4.4ｍ前後の方形を呈する。横断面形はＵ字形で深さ10cm程、急に立ち上る壁をなす。幅は上面で15～35cm、底面では5 ～15cmを測る。

器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	0	8	8	0	1	1
	体部	0	5	5	0	43	43
	底部	0	3	3	0	2	2
甕類	口縁部	0	1	1	0	2	2
	体部	0	6	6	0	9	9
	底部	0	0	0	0	1	1
計		0	23	23	0	58	58

表31　第５号溝出土土器集成

堆積土：埋土は１層で黄褐色シルトである。出土遺物は土師器が大半で割合いに多い。

関連遺構と性格：第５号溝は第３号掘立柱建物跡を方形にめぐる周溝である。機能的には自己完結的な水抜きである。切り合いより見ると、隣接する第４号掘立柱建物跡を切り、第５号掘立柱建物跡に切られている。これらの前後関係は４号→３号→５号掘立柱建物跡遺構の順となる。

第６号溝

遺構の確認：地区東部、Ｎ９Ｅ27、Ｎ６Ｅ27で検出し、第２層下面において確認した。

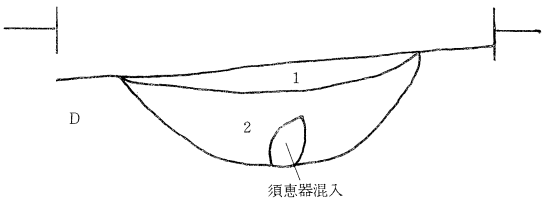
重複：北端を第13号溝（現代溝）に切られ、南端を第18号、第19号溝に切られている。

形態と構造：横断面形はＵ字形で幅は上面では35～60cm、下面では25～45cmで、丸味をおびた底面からなだらかに立ち上

器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	7	2	9	0	0	0
	体部	6	1	7	6	3	9
	底部	5	1	6	2	3	5
甕類	口縁部	0	0	0	3	0	3
	体部	2	3	5	21	0	21
	底部	1	0	1	1	0	1
計		21	7	28	33	6	39

表32　第６号溝出土土器集成

図34　第６号溝断面図



１．10YR⅗暗褐色　シルト粘性・しまりとも弱い
　　砂が混入する。
２．10YR⅗褐色　　シルト粘性・しまりとも埋１層よりやや強い。
　　須恵器混入。炭化物混入。

る壁をなす。

堆積土：埋土は基本的には２層で、第１層は暗褐色シルト、第２層は褐色シルトであり、ブロック状の堆積をしている。第２層からは須恵器、土師器の坏片が多く出土し若干の炭化物が混入している。

関連遺構と性格：遺構の南北端をそれぞれ第18、19号溝と第13号溝に切られているが、切られた位置からさほど伸びるものではない。埋土中には現代の遺物は混入しておらず古代の遺構であることは確実であるが、遺構としての性格は不明である。

第７号溝

遺構の確認：Ｃ地区の東部から南部にまたがる中央にあり、東西はＮ21～Ｎ９、南北はＥ21～Ｅ６の地区で検出し、第２層下面で確認している。

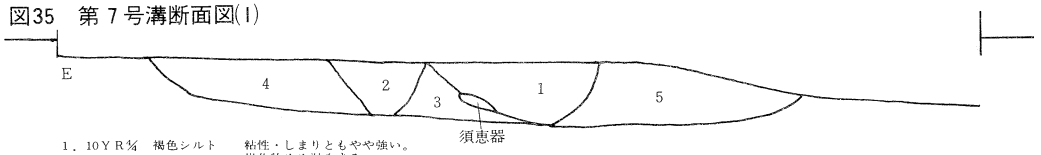
重複：第１号、２号、３号、９号、17号溝に切られ、また第３号、４号、12号土壙にも切られている。第４号溝が接する。

形態と構造：径約14ｍの円形にまわる溝である。横断面形は保存状態によって若干異なるが底面が平坦な逆台形を呈し、深さは15～20cm、幅は上面で40～ 150 cm、下面では20～90cmで東部が幅広く深い。南部はかなり削平されている。また第３号土壙に接する南側は最も幅が狭くなる。幅の広さに大きな差があり、かならずしも同時に作られたものではない。

堆積土：各位置において異なるがおよそ２層に分けられる。第１層は褐色砂質シルト、第２層は黄褐色砂質シルトである。各層共多量に遺物を含み、土師器片は1756点、須恵器片は 390 点を越える出土である。

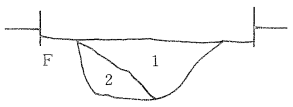
関連遺構と性格：円形にまわった溝の中に第２号住居跡があり、それを取り巻く周溝である。溝の作り方は部分によって異なる。東部は幅広く溝の壁に段を有する部分があり何度かの改造が考えられる。西部の第３号土壙に切られる部分は幅狭く、第３号土壙に水を流すために付けたした感がある。

図35　第７号溝断面図(1)

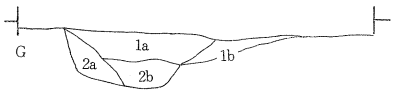


１．10ＹＲ⅗　褐色シルト　　粘性・しまりともやや強い。
　　炭化物やや混入する。
２．10ＹＲ⅗　暗褐色シルト　粘性は埋１層よりやや強く、しまりは同じ。
　　炭化物やや混入する。
３．10ＹＲ⅝　黄褐色シルト　粘性・しまりとも埋１層よりやや弱い。
　　須恵器・炭化物を多少含む。
４．10ＹＲ⅗　褐色シルト　　粘性・しまりとも埋２層と同じ。
　　土師器・炭化物を多少混入する。
５．10ＹＲ⅗　褐色シルト　　粘性・しまりとも埋４層に同じ。
　　炭化物多少含む。

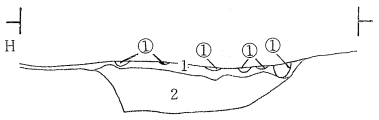
図36　第７号溝断面図(2)



1．10ＹＲ3/1　褐色シルト　　粘性少しあり、しまりぐあいけっこうしまっている。炭化物混入。
2．10ＹＲ5/6　黄褐色シルト　粘性１よりある。しまりぐあい１より悪い。混入物なし。



1a．10ＹＲ5/3　褐色砂質シルト　粘性あり、しまりはあまりよくなあ。
1b．10ＹＲ5/4　褐色砂質シルト　粘性あり、しまりあまりよくない。
2a．10ＹＲ5/6　砂質シルト　　１．２にくらべ粘性が強い。しまりが悪い。
2b．10ＹＲ5/6　砂質シルト　　１に比べやや明るい。しまりは他と同じ。



10ＹＲ3/3　暗褐色砂質シルト　粘性あり、黒土色のブロック含む。
2．10ＹＲ4/6　褐色砂質シルト　粘性あり、ところどころに小さく地山混入。
①　10ＹＲ3/3　黒褐色砂質シルト　粘性ややあり。

以上のことより考えると本溝は当初より円形であったのではなく、東側からの流水を止めるために作られ、その後住居跡の増改築に伴ない円形になったものと推定される。また南西部の溝中に第12号土壙（焼土遺構）があり、溝としての機能は十分でなく、当初から区画程度のものであったと考えられる。

第８号溝

遺構の確認：地区内西縁を画するように南北に長い溝で、Ｎ９Ｗ３、Ｎ６Ｗ３、Ｎ３Ｗ３、Ｓ３Ｗ３、Ｓ６Ｗ３、Ｓ３Ｗ６、Ｓ６Ｗ６、Ｓ９Ｗ６地区において検出し、第３層上面において確認した。

重複：第10号溝と第１号住居跡西側周溝の一部を切っている。

形態と構造：南北17ｍ程の溝で横断面形は緩やかなＵ字形をなし、深さは10cm程、幅は上面で35～70cm、下面で20～35cmである。

堆積土：大部分が腐食土で現在のゴミが多量に混入している。

関連遺構と性格：現代のゴミが混入していることより水抜きのための現代溝であろう。地主の話しでも数年前まで使われていたとのことである。

第９号溝

遺構の確認：Ｃ地区西側、第１号住居跡と第２号住居跡の中間に当たるＮ９Ｅ６、Ｎ６Ｅ６において検出し、第２層下面において確認した。

重複：第３号土壙にそそぎ、第７号溝を切っている。

形態と構造：長さ3.8ｍの南北に細長い溝である。南端は浅く10cm程で第３号土壙に接する地点で深くなり30cmを測る。

器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	2	101	103	2	63	65
	体部	44	77	121	5	188	193
	底部	1	54	55	2	35	37
甕類	口縁部	1	14	15	44	83	127
	体部	3	39	42	1	1210	1211
	底部	1	36	37	0	55	55
部		52	321	373	54	1634	1688

表33　第７号溝出土土器集成

横断面形は底面が平坦な逆三角形である。幅は上面が最大幅80cm、最小40cm、底面で最大55cm、最小15cm程である。

堆積土：埋土は２層からなり、第１層はにぶい黄褐色土、灰褐色土をブロック状に含む。第２層は明黄褐色シルトで炭を含む。出土遺物は多く土師器片は100点を越えた。

関連遺構と性格：溝のある位置は第１号住居跡の排水路的性格が考えられる。また溝の中には水性堆積物はほとんどなく一時的に第３号土壙に流したものであろう。

第10号溝

遺構の確認：Ｃ地区の西縁、Ｎ６Ｅ３、Ｎ３Ｅ３、Ｎ３Ｅ６地区において検出し、第２層下面で確認した。

重複：第８号溝（現代溝）に切られる。

形態と構造：東西に３ｍの細長い溝で、横断面形は底面が平坦な逆台形であり深さは10cm程である。底面傾斜は南へ向いている。幅は上面で15～30cm、底面で10～20cmである。かなり削平されている。

堆積土：埋土は１層で、褐色土の遺物を若干含む層である。

関連遺構と性格：第８号溝（現代溝）に切られているが他の遺構とは接していない。第１号住居跡に関連するかはっきりしない。

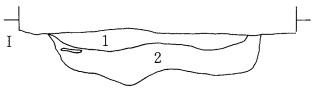
器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	0	2	2	0	3	3
	体部	0	2	2	0	17	17
	底部	0	2	2	0	0	0
甕類	口縁部	0	0	0	0	2	2
	体部	0	0	0	0	34	34
	底部	0	0	0	0	1	1
計		0	6	6	0	57	57

表34　第８号溝出土土器集成

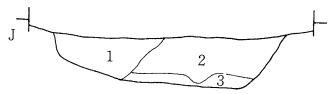
器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	0	3	3	0	17	1
	体部	0	15	15	0	73	73
	底部	0	0	0	0	1	1
甕類	口縁部	0	2	2	0	5	5
	体部	0	8	8	0	104	104
	底部	0	2	2	0	2	2
計		0	30	30	0	186	186

表35　第９号溝出土土器集成

図37　第９号溝断面図

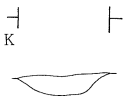


1．10ＹＲ5/4　にぶい黄褐色シルト　粘性・しまりとも強い。灰褐色土がブロック状に混入。
2．10ＹＲ5/6　明黄褐色シルト　粘性・しまりともやや強い。灰を含む。



1．7.5ＹＲ4/4　褐色シルト　粘性弱く、しまりややあり。埋３層の明褐色砂をブロック状に含む。
2．7.5ＹＲ3/4　暗褐色シルト　粘性ややあり、しまりもややある。大粒の砂を多く含む。
3．7.5ＹＲ5/6　明褐色砂　粘性・しまりとも埋２層と同じ。埋２層の暗褐色土をブロック状に含む。

図38　第10号溝断面図



10ＹＲ5/4褐色砂質シルト　粘性有り

第11号溝

遺構の確認：C地区東南側、東端はS 9 E30、西端はS 9 E18で検出し、第1層下面で確認した。

重複：第18号、19号溝を切る。

形態と構造：弧状で東西に11.8m程の長さである。横断面形は緩やかに立ち上るU字形で、深さは10cm程である。幅は上面で40～80cm、底面で10～60cmでかなり不規則な状態で掘られている。

堆積土：腐食土に現代のゴミが混入している。

関連遺構と性格：現代の水抜き溝と思われる。

第12号溝

器種 / 器形		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	0	0	0	0	0	0
	体部	0	1	1	0	0	0
	底部	0	0	0	0	0	0
甕類	口縁部	0	0	0	0	0	0
	体部	0	0	0	0	0	0
	底部	0	0	0	0	0	0
	計	0	1	0	0	0	0

表36　第12号溝出土土器集成

遺構の確認：C地区東南部、東端はS 9 E24、西端はS12E18地区において検出し、第1層下面で確認した。

重複：第18号溝、第19号溝、第19号土壙を切っている。

形態と構造：東から西南へ湾曲して伸びる6m程の細長い溝である。横断面形は緩い立ち上りをもつU字形である。幅は上面で25～55cm、底面で5～35cmを測る。

堆積土：埋土は暗褐色土であるが腐食土とゴミが多量に混入している。

関連遺構と性格：第11号溝と同一方向へ展開している。第19号土壙と接する付近で終っており、第19号土壙を切っているというよりも上層を通過しているという表現が適当である。第11号溝同様に現代の溝である。

第13号溝

遺構の確認：C地東側中央部、東端はN 9 E33、西端はN 9 E21地区において検出し、第2層において確認した。

重複：第4号、6号溝を切っている。

形態と構造：東西約11mで横断面形は緩やかな弧状で深さは10cm以内と浅い。幅は不規則で30～80cmである。

堆積土：黒褐色土で現代のゴミを混入している。

関連遺構と性格：東端に現代の第12号土壙とピット49があり、これに関連する現代の溝。

第14号溝

遺構の確認：C地区東側、N15E33、N12E33地区において検出し、第1層下面において確認した。

重複：第1号掘立柱建物跡南にあるピット8を切っている。

形態と構造：南北に細長い3.5mの溝である。横断面形は急に立ち上るU字形を呈し深さは約50cmである。底面はわずかに南へ傾いている。幅は上面で15～25cm、底面で5～10cmである

堆積土：埋土は黄褐色シルトで若干の須恵器、土師器片を含む。

関連遺構と性格：ピットは溝の底面で確認しており、特に関連する遺構もなく、他の溝と比較しても類似するものはなく性格は不明である。

第16号溝

遺構の確認：C地区東部より東西に伸び、西部にいたって東西に伸びる。東端はS6E30、南端S9E9、北端N3E9地区において検出し、表土でくぼみが観察され、第1層において確認した。

重複：第1号、2号、3号、18号、19号溝を切る。

器種 / 器形		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	0	0	0	0	0	0
	体部	0	3	3	0	6	6
	底部	0	1	1	0	0	0
甕類	口縁部	0	0	0	0	0	0
	体部	0	0	0	0	5	5
	底部	0	0	0	0	0	0
計		0	4	4	0	11	11

表37　第16号溝出土土器集成

形態と構造：東西21m、南北15mのT字形をしている。横断面は緩やかな弧状をなし、深さは10cm以内である。幅は最大で2.3m、最小40cmである。底面傾斜方向は東から西へ、更に南を向いている。

堆積土：暗褐色の腐食土で現代のゴミが混入している。表土から観察でき水を含み泥状になっている。

関連遺構と性格：最近まで使用されていた現代の溝である。

第17号溝

遺構の確認：C地区の南部、東端はN12E9、西端はN15E3地区になり、第1号住居跡と第2号住居跡の間において検出し、第2層で確認した。

重複：第7号溝を切っている。

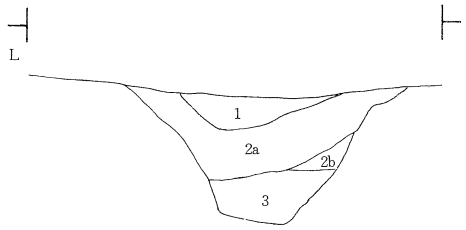
形態と構造：第1号住居跡側に弓状にまわり、第3号土壙に接しA地区に落ち込んでいる。横断面は底面が平坦な逆台形をなし、第3号土壙付近が最も深く50cm程である。幅は上面で60～

65cm、底面では10～65cmである。底面傾斜方向は、中ほどから東が第３号土壙に向って傾き、西側半分がＡ地区に落ち込んでいる。

堆積土：埋土は３層からなり、第１層は暗褐色砂質シルト、第２層がにぶい黄褐色砂質シルト、第３層が黄褐色砂質シルトで若干粘土が混っている。各層とも多量の遺物が混入しており、特に土師器は多く、第１層では100点をこえ、総数では400点を越えた。

関連遺構と性格：第９号溝と同様第３号土壙に水を集めるように作られており、一定以上貯水されると西側斜面に排出されるようになっている。集水と排水を兼ねた溝である。

図39　第17号溝断面図



1．10YR3/4　暗褐色砂質シルト・しまりはあまりよくない。石英粒の大きいのが入っている。
2a.10YR5/6　にぶい黄褐色砂質シルト・1よりしまりがある。
2b.10YR5/6　黄褐色2aと同じ砂質シルト・しまりもほぼ同じ。粘性がある。
3．10YR4/4　にぶい砂質シルト・1.2a b に比べるとしまりが悪い。粘性がある（少し粘土が入っている）

器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	0	15	15	0	5	5
	体部	1	14	15	0	102	102
	底部	0	7	7	0	5	5
甕類	口縁部	0	0	0	0	13	13
	体部	1	8	9	0	269	269
	底部	0	4	4	0	4	4
計		2	48	50	0	398	398

表38　第17号溝出土土器集成

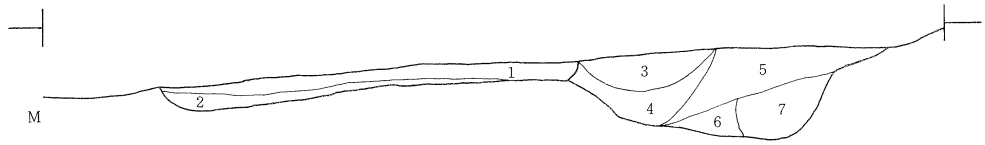
第18号溝

遺構の確認：Ｃ地区東南部、北端がＮ９Ｅ18、南端がＳ12Ｅ２地区において検出され、第２層において確認した。

重複：第11、12、16号の現代溝に切られ、さらに第３号掘立柱建物跡の周溝である第５号溝、柱穴であるピット５に切られている。また第６、12、22号溝を切っている。

形態と構造：第４号掘立柱建物跡の周溝である第21号溝の東をカギ状に囲こみ、屈曲して南へ伸びる全長27.5ｍ程の溝である。底面は平坦で壁が急に立ち上り、横断面形は逆台形である。

図40　第18、19号溝断面図(1)



1．10YR3/1　黒色シルト　粘性少しあり、しまりぐあい少しあり、混入物なし。
2．10YR3/3　暗褐色シルト　粘性少しあり、しまりぐあいあまりしまってない。炭化物少しあり。
3．10YR2/1　黒色シルト　粘性あまりなし、あまりしまっていない。土師器含む。
4．10YR5/4　にぶい褐黄色シルト　粘性少しあり、しまりぐあい少しあり、混入物なし。
5．10YR5/4　にぶい黄褐色シルト　粘性少しあり、しまりぐあい指あとつく、細かく少しはいっている。
6．10YR3/1　褐色シルト　粘性なし、しまりぐあい少ししまっている。炭化物あり。
7．10YR5/4　にぶい黄褐色シルト　粘性あまりなし、しまりぐあいややしまっている。混入物なし。

器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	8	29	37	0	22	22
	体部	2	25	27	4	35	39
	底部	5	21	26	1	29	30
甕類	口縁部	3	4	7	7	9	16
	体部	6	25	31	51	70	121
	底部	1	3	4	0	3	3
計		25	107	132	63	168	231

表39　第18号溝出土土器集成

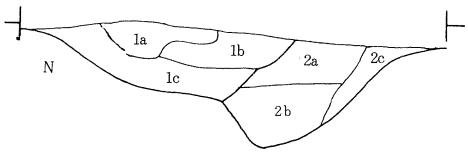
深さは約40cm、幅は上面で40～50cm、底面で10cm程である。底面傾斜方向は南である。

堆積土：埋土は5層に区分できる。第1層は黒褐色シルト、第2層はにぶい黄褐色シルト、第3層も黒褐色土が混入するにぶい黄褐色シルト、第4層は褐色シルト、第5層はにぶい黄褐色シルトである。基本的には第2層と第3層、第4層と第5層が同一で3層に大別できる。遺物は第1層に多く、土師器は200点、須恵器片も100点を越えた。

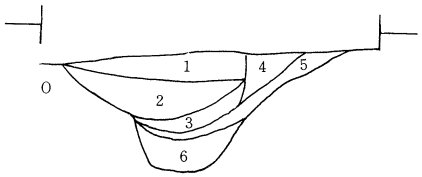
関連遺構と性格：第17号溝に切られているが、方向、屈曲の仕方が同一であり、第18号溝を掘りなおしたものであろう。カギ状に屈曲しながらも南北に長く、溝の南側の遺構群の区画と水抜きを兼ねたものであろう。

第19号溝

図41　第18、19号溝断面図(2)



1a．10YR3/2　黒褐色シルト　粘性弱く、しまりややあり。
1b．10YR3/2　黒褐色シルト　粘性・しまりとも埋1層と同じ。土師器出土。
1c．10YR3/3　暗褐色シルト　粘性やや強く、しまりややある。土師器出土。
2a．10YR3/2　黒褐色シルト　粘性・しまりとも弱い。
2b．10YR5/6　黄褐色シルト　粘性弱く、しまりややある。土師器片混入。
2c．10YR3/3　暗褐色シルト　粘性・しまりともやや強い。土師器片混入。



1．10YR4/4シルト　粘性なし、しまりぐあいややあり。混入物少々
2．10YR5/4シルト　粘性なし、しまりぐあいなし。混入物なし。
3．10YR5/3シルト　粘性なし、しまりぐあい少しあり。混入物すみ少々
4．10YR5/4シルト　粘性なし、しまりぐあいなし。
5．10YR5/4シルト　あまりなし、しまりなし。混入物なし。
6．10YR5/6シルト　Eと同じ位、しまりなし。

遺構の確認：C地区東部、第18号溝と重複するように存在する。北端はN9E27、南端はS3E21地区にあり、第2層において確認した。

重複：第6号溝と第18号溝の一部を切る。

形態と構造：第6号溝を切る地点から始まり、第18号溝と平行してコ字形に湾曲する南北17mの細い溝である。横断面形は底面が平坦な逆台形で深さ15cm程である。幅は上面で30～50cm、底面で10～20cmを測る。南北の底面傾斜方向は南、東西は西を向いている。

堆積土：埋土は水平に2層堆積している。第1層は黒褐色シルト、第2層は暗褐色シルトで多量の遺物を含む。土師器は、100点を越え、須恵器も50点を越えた。第

1層が特に多い。

関連遺構と性格：第18号溝を掘りなおしたものであり、同様の性格をもつものである。

第20号溝

遺構の確認：C地区東部、第4号掘立柱建物跡内、N6E24、N3E24、N3E21地区において検出し、第2層で確認した。

形態と構造：南北に2.8m程の細く短かい溝である。横断面形は底面が平坦で壁が急に立ち上る逆台形をなし、深さ10m程である。幅は上面で25～40cm、下面は10～20cmである。底面傾斜方向は南へ向いている。

堆積土：埋土は暗褐色シルト1層で炭化物と数点の遺物を含む。

関連遺構と性格：切り合う遺構はないが第4号掘立柱建物跡の一部をなすものと考えられる。

第21号溝

遺構の確認：C地区東部、第19号溝の西側にある。北端はN3E24、南端はS3E21地区において検出し、第2層において確認した。

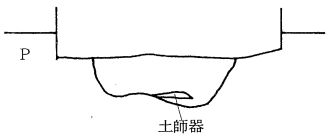
重複：第5号、18号、22号溝に切られている。

形態と構造：西に屈曲したコ字形を呈する。横断面形は底面が平坦で壁が急に立ち上る逆台形をなし、深さは約10cmであ

器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	0	23	23	0	17	17
	体部	0	19	19	1	69	70
	底部	0	4	4	0	7	7
甕類	口縁部	0	6	6	0	6	6
	体部	0	8	8	3	22	25
	底部	0	5	5	1	3	4
底計		0	65	65	5	124	129

表40　第19号溝出土土器集成

図42　第20号溝断面図

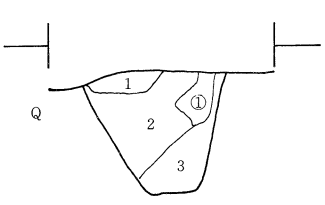


10YR¾　暗褐色シルト粘性はやや強く、しまりなし。炭化物、土師器混入。

器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	0	1	1	0	1	1
	体部	0	1	1	0	0	0
	底部	0	0	0	0	0	0
甕類	口縁部	0	0	0	0	0	0
	体部部	0	0	0	0	2	2
	底部	0	0	0	0	0	0
計		0	2	2	0	3	3

表41　第20号溝出土土器集成

図43　第21号溝断面図



1．5YR⅝　暗赤褐色シルト
粘性強く、しまりややある。
黒色土をブロック状に混入。
2．10YR¾　褐色砂質シルト
粘性・しまりとも埋1層と同じ。
暗褐色砂質シルトを含む。
3．10YR⅝　にぶい黄褐色シルト
粘性・しまりとも埋1層と同じ。
①　10YR⅔　黒褐色砂質シルト
粘性・しまりとも埋1層と同じ。

器種 / 器形		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	0	4	4	0	1	1
	体部	0	6	6	0	1	1
	底部	0	3	3	0	3	3
甕類	口縁部	0	0	0	0	5	5
	体部	0	2	2	0	37	37
	底部	0	0	0	0	4	4
計		0	15	15	0	51	51

表42　第21号溝出土土器集成

る。幅は上面で20～50cm、底面で10～20cmである。

堆積土：埋土は3層で、第1層は暗赤褐色シルト、第2層は褐色砂質シルト、第3層はにぶい黄褐色シルトであり各層共土師器、須恵器片を含む。ところによっては第1層が見られない所もある。

関連遺構と性格：南から東へ流れ南へ向きを変える点で第22号溝と交わり、第3号掘立柱建物跡の東端で第18号溝と接する。東側では第18号溝と平行しており、なんらかの関連が考えられる。性格は第4号掘立柱建物跡の排水溝と考えられる。

第22号溝

遺構の確認：C地区東部中央、N9E18、N9E21、N6E21、N6E24地区において検出し、第2層で確認した。

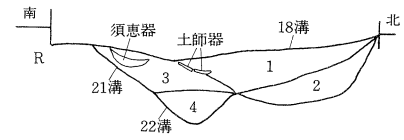
重複：第5号、18号溝に切られ、第21号溝を切る。

形態と構造：東西に細長い8m程の溝である。

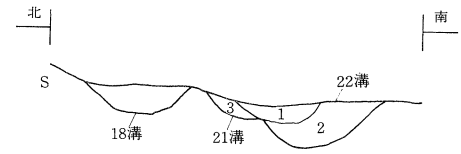
堆積土：埋土は2層からなり、第1層、第2層ともにぶい黄褐色シルトである。100点を越える土師器と若干の須恵器片を含む。

関連遺構と性格：第21号溝を切り第18号溝に切られているが、第21号溝との関係は深く掘りなおした状態で切り、第18号溝にはその拡張によって切られている。底面傾斜方向も同一であり、順序としては21号→22号→18号溝となるが、掘り下げ、そして拡張したものであり、機能的には同時に働いたもので、共に排水溝である。第5号溝が作られた段階で機能を停止したものである。

図44　第21、22号溝断面図



1．10YR5/6黄褐色シルト　粘性・しまりとも弱い（18溝）炭、土師器混入
2．10YR5/4にぶい黄褐色シルト　粘性は弱く、しまりややあり（18溝）混入物なし
3．10YR5/4褐色シルト　粘性・しまりとも埋1Rより弱い（21溝）シルト粘性　炭、須恵器
4．10YR5/4にぶい黄褐色シルト　粘性弱く、しまりややあり（22溝）炭、化物多少混入



18溝10YR5/6黄褐色シルト　粘性は弱く、しまりややあり炭多少混入する
1．10YR5/4にぶい黄褐色シルト　粘性・しまりとも弱い（第22溝）
2．10YR5/4にぶい黄褐色シルト　粘性・しまりとも弱い（第21溝）
3．10YR5/4褐色シルト　粘性・しまりとも弱い（第22溝）

器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	0	7	7	0	7	7
	体部	0	5	5	0	77	77
	底部	0	3	3	0	3	3
甕類	口縁部	0	1	1	0	10	10
	体部	0	3	3	0	63	63
	底部	0	0	0	0	2	2
計		0	19	19	0	162	162

表43　第22号溝出土土器集成

bは南北に伸びる。横断面形は共に緩やかな立ち上りをもつU字形で、深さは10cm程、幅は15～35cmである。全体的にブルドーザーの削平をうけ残りは悪い。

堆積土：埋土は土師器をわずかに含む黄褐色シルト1層である。

関連遺構と性格：aは第3号掘立柱建物跡を切り、第5号掘立柱建物跡を囲んでいる周溝である。bは第14号土壙に接しているが、aと接合するものか第5号掘立柱建物跡に関連するものか不明である。観察のため観察が十分でない。

第24号溝

遺構の確認：C地区西南部、東端はN3E6、S3E6、S3E3、N3E3、N6E3の各区において検出し、第2層下面で確認した。

重複：第8号土壙によって切られたまた第1号住居跡の第2号周溝に切られている。一部削平のため切られている。

形態と構造：第8号掘立柱建物跡の北側を除く3方をコ字型に囲む。横断面形は

第23号溝（a、b）

遺構の確認：C地区東部中央、aはN3E18、N3E21地区、bはN3E21、N3E18、S3E18地区において検出し、第2層で確認した。

重複：aは第5号溝と第3号掘立柱建物跡の南西コーナーピットを切る。bは第14号土壙に接する。

形態と構造：aはL字形の平面をもつ。

器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	0	0	0	0	0	0
	体部	0	0	0	0	3	3
	底部	0	0	0	0	0	0
甕類	口縁部	0	0	0	0	0	0
	体部	0	0	0	0	1	1
	底部	0	0	0	0	2	2
計		0	0	0	0	6	6

表44　第23号溝出土土器集成

器形＼器種		須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏類	口縁部	0	0	0	0	0	0
	体部	0	0	0	0	12	12
	底部	0	0	0	0	0	0
甕類	口縁部	0	0	0	0	1	1
	体部	0	0	0	0	2	2
	底部	0	0	0	0	0	0
計		0	0	0	0	15	15

表45　第24号溝出土土器集成

図45　第24号溝断面図(1)

10YR5/4　にぶい黄褐色砂質シルト、粘性、しまりとも弱い酸化鉄を含む。

図46　第24号溝断面図(2)

10YR¾褐色シルト　粘性・しまりなし、混入物なし。

緩やかなU字形をなし、深さ５cmで底面は平坦である。幅は上面で30～50cmである。

堆積土：埋土は１層でやや粘性のある褐色シルトである。遺物もほとんど見られない。

関連遺構と性格：第24号溝は第８号掘立柱建物跡の周溝である。しかし方形に回ったものではなく、当初より北側を除く３方だけをコ字形に作られたもので、第８号土壙に接する部分はその地点より伸びていない。

（５）　ピット群

ピット群はＣ地区東端中央、Ｎ12Ｅ36、Ｎ12Ｅ33、Ｎ９Ｅ36、Ｎ９Ｅ33、Ｎ６Ｅ36、Ｎ６Ｅ33、Ｎ６Ｅ30、Ｎ６Ｅ21地区と、西部南西、Ｓ９Ｅ３、Ｓ９Ｗ３、Ｓ６Ｅ３、Ｓ６Ｗ３地区において検出した。確認面は共に地山であった。

前者の堆積土は黄褐色砂質シルトで、掘り方が見られるものもあったが組み合わせが不明で建物の構造は明らかにできなかった。

後者の堆積土は黄褐色砂質シルトないし褐色砂質シルトで、大部分のものは掘り方が見られなかった。少数遺物を含むピットもあったがその性格は不明である。

４．Ｄ地区の概要

Ｄ地区はＡ、Ｂ、Ｃ区と異なり遺構が確認されなかった。その理由としては、天地がえし等の耕作もさることながら、それ以前にこの地が削平されたためと思われる。それはＡ地区の沢の西斜面に削平を受けた窯跡１基（第１号窯跡）が確認されたことによる。それを見れば、その部分とＤ地区は与兵衛沼からの用水路で切られているがかつては一体となっており、Ａ地区西側を含むＤ地区は小丘陵端部であったと思われるからである。

Ⅵ．出土遺物について

今回の調査で出土した遺物は、瓦類、土器類、鉄製品、土製品、木製品、石製品等がある。そのうち瓦類が最も多く全体の７割を占めている。遺物の総量は平箱で200箱にも達した。出土した全量に対して資料化を試みたが、あまりの多量のため詳部にいたるまでの十分な観察を行なうことが出来なかったので資料化した遺物は遺構別にできうる限り、掲載することとして、図表として後述した。

そこで、ここにおいては、出土した主要な遺物を器種ごとに略述し、本遺跡における遺物の概略を検討して見たい。

１．瓦類

瓦はＡ地区、Ｂ地区の窯跡、灰原よりの出土が多く、Ｃ地区では住居跡、溝、土壙等において、若干見られるが量的には少ない。種別は、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、道具瓦類があり、その他に刻印文字瓦、ヘラ書文字瓦、塼が見られた。

（１）　軒　丸　瓦

１）重弁蓮華文軒丸瓦

直径26センチの８葉の重弁蓮華文で、直径4.4センチの中房上に１＋４の蓮子があり、中央の蓮子は円形であるが周囲の４個の蓮子は棍棒形に近い。蓮子の延長は、間弁に一致する。胎土に若干の小石粒を含む焼成は緻密で灰白色を呈する。

出土状況：主としてＢ地区の灰原、ＡＢ地区の窯跡より出土しているが、Ｃ地区にも若干見られる。枡江窯跡の主要軒丸瓦である。

２）細弁蓮華文軒丸瓦

外区珠文と細弁が観察できるが、出土した２点共、小片の為、蓮子の配置、弁数、珠文類は不明である。推定直径は19センチ前後である。

出土状況：Ｃ地区において４点出土しただけである。２点は第２住居跡付近より出土しているが、他の２点は遺構外の第１層より出土している。

（2） 軒 平 瓦

単弧文軒平瓦

真直に１本の弧線がヘラ書きされ、顎には縦方向に縄叩目が施こされている。

出土状況：本遺跡より出土した唯一の軒平瓦で、Ｂ地区灰原より出土している。

（3） 鬼　　板

重弁蓮華文鬼板の中房破片と考えられる。直径5.7㎝、厚さ3.3㎝の破片で裏側は指ナデ状の痕跡が見られる。中房上の蓮子の配置は１＋４であり、その形態は中央の１個が円形で周囲の４個は棍棒形である。前記の軒丸瓦と共通する意匠である。

出土状況：Ａ地区において１点だけ出土した。

（4） 道 具 瓦

１）隅瓦

焼成前に平瓦の隅を切りおとしたものである。凹面はほとんどすり消すか、わずかに布目が

表46　文様瓦、文字瓦等出土表

遺構＼種別		軒丸瓦		軒平瓦	鬼板	文字瓦		その他		
		重弁蓮華文	細弁蓮華文	単弧文	重弁蓮華文	刻印	ヘラ書	隅瓦	熨斗瓦	塼
A	１号窯跡	1					1 (嶋比)	11	1	
	第１土壙 遺構外	2 7	1		1			5		1
B	２号窯跡					物 不明 (1) (1)				
	３号窯跡	3				丸 (3)				
	４号窯跡	1				物 不明 (1) (1)				
	５号窯跡									
	灰　原	22		5		物 占 伊 田 (3) (3) (1) (1)		3		
	その他	1				丸 矢 不明 (1) (1) (2)				
C	１号住居	2								
	２号住居		3							
	第３土壙									1
	その他		2							
計		39	6	5	1	19	1	19	1	2

注：小破片も１点と数えたため、かならずしも表の数字は個体数を表わしているものではない。

見られる。糸切痕が見られるものもある。凸面は一部すり消されているか縄目叩きが見られる。少数であるが凸面に布目痕の見られるものもある。

出土状況：第１号窯跡よりの出土が多く、他にＡ地区遺構外、Ｂ地区灰原よりも出土している。

２）熨斗瓦

幅は上弦13.5cm、下弦14.5cm、厚さ2.5cmの幅の狭い瓦で熨斗瓦と思われる。凹面は布目が見られ、凸面には横方行の縄目叩きが見られる。

出土状況：第１号窯跡より１点だけ出土した。

（５）　文　字　瓦

１）ヘラ書文字瓦

平瓦の凸面にヘラ書きで「嶋比」と二字が書かれている。前の文字は「嶋」であるが、後の㔟文字は「比」とも「治」とも見えるが不明である。凸面は全面にすり消しされているが、縦方向の縄目叩きが確認できる。凹面はすり消されて布目は見られない。

出土状況：第１号窯跡より１点だけ出土した。

２）刻印文字瓦

３cm程の方形の枠内に文字一字を表わしたもので、スタンプの手法によって刻印されている。刻印には「丸」、「物」、「伊」、「占」、「矢」、「田」の６種類があり、判読不明の物もある。丸瓦に刻印されていたのは「田」、「伊」、「占」、平瓦に刻印されていたのは「物」、「矢」、「丸」である。最も多いのが「物」で５点、次が「丸」の４点、「占」の３点、「伊」、「矢」、「田」各１点不明４点である。

出土状況：第２号窯跡から「物」１点、不明１点、第３号窯跡から「丸」が３点、第４号窯跡から「物」が１点、不明１点、灰原からの出土は最も多く、「物」が３点、「占」が３点、「伊」、「田」、「丸」、「矢」が各１点、不明２点出土している。第１号窯跡と未使用の第５号窯跡を除く各窯跡と灰原より出土している。第２号、３号、４号窯跡で焼成された可能性がある。

（６）　平　　瓦

本遺跡における出土量は数万点を越える量が出土し、全ての瓦について観察することができなかったので製作技法に基づいた詳細な分類は後日に機し、ここにおいては主として完形品を

基にした若干の分類と特色を述べ、本遺跡出土平瓦の概略をあげて見たい。

現在までの観察では粘土板の合せ目や明確な枠板痕は見られず、ほとんどが一枚作り技法によったものと考えられるので、主として凹面と凸面の観察によって分類した。

1）1類

凹面：全体的にヘラ削りあるいはナデによってすり消されている。一部すり消しが不十分な部分に布目や粘土塊より粘土板を切り取った糸切痕が観察できる。

凸面：縄目叩きが縦方向あるいは斜め方向に見られる。一部がすり消されているものや、凹面同様糸切痕が観察できるものもある。

出土状況：刻印文字瓦がこの類にあたる。主として窯跡ならびに灰原よりの出土量が多い。

法量：上弦幅は広端で23cm、狭端で21cm、下弦幅は広端で24.5cm、狭端で22.2cm、厚さ2cm、長さ33cm程で、焼成はややあまく、色調は灰白色で胎土に砂粒を少々含む。

2）2類

凹面：精布の布目が見られる。明確な糸切痕を残しているものが多い。すり消しは行なわれていない。

凸面：縄目叩きが縦方向に施されている。2次調整は行なわれていない。

出土状況：C地区第1住居跡施設瓦として使用されているのが目立つ。

法量：上弦幅は広端で25cm、狭端で20cm、下弦幅は広端で27cm、狭端で21cm、弧深2cm、厚さ2.3cm、長さ38cm程である。焼成は良好で色調は灰白色ないし灰色で胎土に砂粒を少々含む。

3）3類

凹面：すり消されているが、わずかに布目が見られる。

凸面：縄目叩きが縦方向に見られる。2次調整は行なわれていない。

出土状況：灰原に多く見られる。完形品は見られない。

法量：不明。焼成は良好で堅い。色調は灰色で小色、砂粒を含む。

4）4類

凹面：全面にすり消しを受けている。わずかに布目が見られるものもある。

凸面：全面にすり消しが行なわれ、叩き目が見えない。糸切痕が見られるものもある。

出土状況：B地区の窯跡、灰原に見られる。

法量：不明。焼成は良好で堅い。色調は灰色で胎土に砂粒を含む。

5）5類

凹面：精布の布目が見られる。

凸面：太い縄目叩痕を2次調整として板状のもので叩き凹凸をつぶしている。

出土状況：灰原に多いがほとんどが破片である。焼成は良く堅い。色調は灰色で胎土に砂粒を含む。

以上5類に大別したが、さらに細分できよう。また特異なものとしては凸面にも布目痕がわずかに見られるもの、凸面に叩き板の側面で叩いた痕が見られるものがある。さらにかなり多数のものの凸面にも糸切痕が見られた。

（7） 丸　　瓦

出土した丸瓦は全て玉縁付の有段丸瓦で、粘土紐巻作りによる。玉縁部は回転を利用して、削り、ナデ調整を行なっている。筒部は縄目叩きで全体を叩き締め、ナデで成形している。回転を利用した痕跡が明確に残るものもある。

出土状況：B地区の窯跡、灰原で多量に出土した。C地区でも多数出土しているが、住居跡の内部で施設瓦として使用されていたのが目立った。

法量：B地区出土丸瓦は全長35.5～30cmである。玉縁長は全長の1/6程で6.5～6cmである。第2住居跡出土丸瓦は全長41.7cm～38.2cm、玉縁長11.5～11cmで、玉縁長が全長の⅓程を占める。前者に比べてやや大きい。

（8） 塼

小破片のため全様を知ることはできないが布目痕が観察できるものもあり、レンガ状の形態になるものであるが一定の規格は把握できなかった。焼成は悪く、色調は黒色で胎土には多く含む。

出土状況：B地区灰原、C地区第3号土壙等から数点出土している。

2．土器類

（1） 須　恵　器

1）坏

全て平底であり、底部の切り離し並びに再調整によって分類できる。

第Ⅰ類：ロクロを回転させた状態で糸切り技法によってロクロより切り離し、再調整を全く行なわない。

第２類：１類と同様回転糸切り技法によってロクロから切り離しを行なったのち、底部の中央部を残してヘラ削り再調整を行なっている。

第３類：ロクロを静止した状態で糸切り技法で切り離し、再調整を行なわないものである。破片の場合は第１類と判別しにくいものもある。１類としたものの中に混入している可能性もある。

第４類：回転ヘラ切りによってロクロから切り離し、再調整を行なわないものである。

第５類：回転ヘラ切りによってロクロから切り離し、回転ヘラ削りを行なっている。

第６類：回転ヘラ切りによってロクロより切り離し、手持ちヘラ削によっ再調整を行なう。

第７類：切り離し技法は不明で、底部全体に手持ちヘラ削を行なっている。

第８類：第７類同様切り離し技法は不明で、底部を回転ヘラ削りしているものである。

出土状況：坏は出土した土器類の中でも最も多量に出土したもので、Ａ、Ｂ、Ｃ地区の全域より出土している。第１類は各遺構から出土し、量的にも最も多い。特にＢ地区焼土遺構において一括して出土している。第２類は第１類と共伴する出土状態が多く、Ｂ地区焼土遺構においては明確に共伴している。第３類は各地区より出土しているが量的には少ない。第４類は各遺構より出土しているが第１類よりは多くない。第５、第６類は切り離し技法を確認できたものは少なかった。第７、８類は各地区で検出された。Ｂ地区の灰原、焼土遺構ではほとんどの類が一括して出土した。

２）蓋

全体の形のわかるものはない。つまみは退化した宝珠形をしたものだけであった。天井部はロクロ回転のヘラ削りをし、口縁部は短く下方に反り、断面三角形に近いものが大部分であった。

出土状況：Ｃ地区で比較的多く見られたが、いずれも小破片であり全体の器形は判然としない。

３）台付坏

体部下端に稜をもって内湾しつつ広がるもので、体部はロクロによって整形され高台が付く。ロクロからの切り離しは不明である。

出土状況：Ｂ地区灰原より完形に近いものが出土しているが、あまり多くない。

４）長頸壺

口縁部から頸部の破片が大部分で、器形の判然としたものはない。口縁部が断面三角形状に外側に折り返しされているものが多い。甕の底部としたものに混入している可能性がある。

出土状況：出土量はきわめて少ない。A地区、C地区でわずかに見られた。

5）甕

全てが破片であり、器形の判然としたものはない。口縁部は外側に断面三角形状に折り返すのと、大きく外反し口縁端に稜をもつものが多い。体部外面は平行叩きによって整形され、内面はナデ調整を受けている。底部は平底で、ほとんどがヘラ削りを受けているが、少数回転糸切り痕を観察できるものもある。

出土状況：A、B、C地区共、割合いに多量に出土しているが、個体数としては比較できなかった。

6）硯

いわゆる風字硯と呼ばれるものと高台の付く円面硯の2種類がある。さらに風字硯は頂部がまる味をもつものと方形になるものがある。円面硯は小片のため分類できなかった。

出土状況：C地区に多く大部分が遺構に伴なわず、確認より上層で出土した。

7）その他

(1) 破片のため形態は不明であるが、叩きとヘラ削りで整形された、大型の風字硯状を呈するものである。焼成は割合いに硬いが、色調はにぶい橙色で、胎土に若干の砂粒を含む。

(2) 底部を焼成前に穿孔し、ヘラ削りで整形した大型甕の底部状のものであり、焼成は割合いに硬く、色調は橙色で胎土は緻密である。

出土状況：共に第1号住居跡の床面より出土している。炉や鉄滓と関連するものだろうか。

（2） 土 師 器

出土量は多く、A、B、C各地区より出土している。特にC地区では調査地域全域より出土している。しかしその大部分が細片であり、形態のわかるものも磨滅が著しいものが多い。

1）坏

土師器の内では最も出土量の多いものである。ほとんどが平底であり、丸底は1点しか見られなかった。底部のロクロから切り離し、調整技法によって分類すると4類に分類できる。

第1類：回転糸切りによってロクロから切り離し、再調整を行なわないもの。

第2類：回転糸切りによってロクロから切り離し、底部周縁だけをヘラ削りするもの。

第3類：ロクロから切り離しは不明であるが手持ちヘラ削りによって再調整を行なう。

第4類：ロクロからの切り離しは不明であるがヘラ削りによって再調整し丸底にしているもの。

1類～3類までは平底で内面を黒色処理したものもある。口縁部、体部のあり方により更に細分化が可能である。第4類は磨滅が著しく、ロクロの使用については問題がある。

出土状況：第1類は各地区に見られたが、特にC地区に多く、第1号住居跡、第2号住居跡でも検出できた。第2類はB地区、C地区で見られた。B地区焼土遺構にも若干混入している。第3類は各地区に見られるが、特にC地区土壙で出土している。第4類はB地区灰原で1点だけの出土である。

2）甕

完形は少なく形態は判然としない。大型器形は口縁部は外反し、口縁端が立ち上るものが多い。体部は削り調整されている。底部はヘラ削り調整を受けているものが大部分である。形態は長胴の甕と考えられる。

小型器形は口径が8㎝、器高が5.5㎝程のもので、口縁部は外反している。体部は再酸化を受けているものが多く不明であるが、おそらくナデ調整であろう。底部も磨滅が著しく判然としないものが多いが、回転糸切り無調整のものがある。

出土状況：大型器形、小型器形共にC地区に多く、溝、土壙中から多量に出土した。

3）甑

甑の取手と思われるものが見られた。コ字形をした取手でヘラ削りによって器形を整えている。

出土状況：C地区第2号住居跡から1点だけ出土した。

4）異形土製品

(1)　小形手捏ね土器

器形は皿形、甕形、壺形などの種類がある。成形技法は体部外面がヘラ削りされ、内面は指でおさえながら器形を整えている。

(2)　土鈴

楕円形の体部に把手が付いた形態をしており、体部は中空である。把手の部分に糸を通す穴が見られ、体部に1つの穴が観察できた。破片のため確かではないが、体部の穴は複数あったものであろう。

(3)　土製斧

台形をし、一方を厚くし他方を薄くして刃の形を作り斧形にしている。胎土は荒く、焼成も良くないが、割合いに硬い。色調はにぶい橙色で部分的に赤褐色、黒色となっている。

(4)　土玉

円形の土玉で糸を通す穴があいている。胎土に砂を含み、色調は橙色であり割合いに堅い。全体をみがいている。

(5) その他

前記以外にもコ字形を呈するものや分銅形を呈するものなどがあり、形態、性格共不明なものである。

出土状況：全てC地区から出土しており、溝、土壙をはじめ、C地区の各遺構より出土している。特に第1号住居跡より(1)、(3)、(4)、第2号住居跡からは(1)、(4)が出土し、層位的にも住居跡に伴うことは確実であるが、特にまとまった出かたはしていない。

(3) 灰釉陶器

高台の付く浅い杯形を呈し、口縁は軽く内湾し、内側に沈線をもつ口唇部に至る。外面、内面共にミガキないしはナデによって丁寧に調整されている。胎土は緻密で、色調は灰白色を呈し焼成は堅い。推定口径4.4cm、器高2.5cm程の小砂片である。灰釉陶器の可能性がある。

出土状況：C地区第2号住居跡より1点だけ出土している。

3．鉄製品

鉄製品は保存状態が悪く形態が完全に判明したものはない。種類の判別できたものとしては、鉄鏃、刀子、カマ（？）などがある。

出土状況：全てC地区の第1、第2号住居跡より出土している。

4．木製品

(1) 漆　　器

高台が付く椀が数点見られた。いずれも小片で形・態は不明であるが内外共黒色を呈している。

(2) 割　り　材

製品として作ったものかは不明であるが、木材を縦方行に割って板状にしたものが多数出土

した。

出土状況：漆器、割り材共にＢ地区の灰原の沢跡から出土している。

5．石製品

（1）　磨　り　石

大型楕円形の磨り石で中央部に擦痕が観察できる。Ｃ地区第２号住居跡に捉えてあったものである。このほかに小形のものが数点見られた。

（2）　砥　　石

砂岩質の自然石を使用したもので長方形に近い形をしており、かなり使いこまれ両面が凹型に磨りへっている。Ｃ地区第１号住居跡で出土した。

（3）　石　　器

Ｃ地区において石器が若干見られた。器種としては石斧、石鏃、縦形石匙などがある。

6．その他

（1）　鉄　　滓

鍛冶のさいに出たと思われる鉄滓で、ほとんどが小塊である。

（2）　鞴　火　口

数点の破片を発見した。全て高温を受け、自然釉が見られるものもある。

出土状況：Ｃ地区第１号住居跡において出土した。炉の存在も考え合わせると小鍛冶を行なっていたと判断できる。

Ⅶ. 総 括 と 考 察

1．遺構について

今回の調査において発見できた遺構は、窯跡５基、焼土遺構１基、竪穴住居跡２棟、掘立柱建物跡８棟、土壙21基、溝24本、ピット群であった。ここでは遺構のまとめを行ない、個々の遺構と遺跡全体の性格を考えてみたい。

（１） 窯跡について

窯跡の分布：窯跡は第１号窯跡がＡ地区、第２、３、４、５号窯跡がＢ地区の２ヶ所において発見した。Ａ地区は南東向きの斜面である。発見できたのは１基だけであったが沢中の出土遺物よりみて更に数基存在した可能性があるが、地形の改変が著しく確認できなかった。

Ｂ地区は南向き斜面で４基発見できた。第２、３、４号窯跡においては瓦焼成を行なっているが第５号窯跡は窯を作りながら火入れの作業は一切行なわれていない。

窯跡の構造：窯跡は地山を掘り下げ、スサ入り粘土で天井を構築した半地下式無階無段登窯であった。同様の構造をもつ窯跡は台原・小田原窯跡群中には比較的多く、近接するものとしては安養寺下窯跡、安養寺中囲窯跡があげられる。未調査であるが同一の旧河川沿いにある与兵衛沼窯跡も同様の構造を持つものと思われる。

窯跡の単位：Ａ地区においては窯跡は１基しか発見できなかったが、Ｂ地区では４基の同一構造の窯跡が発見できた。これらの窯跡は同一の斜面に構築され、灰原の観察によると若干の前後関係はあるが、ほぼ窯跡の分布範囲に対応する同一の灰原を共有している。

以上のことより発見した４基の窯跡は一つの単位であった可能性がある。第５号窯跡は構築後に湧水等のため使用できず放棄したものではないだろうか。

（２） 建物跡群について

遺構の分布：Ｃ地区の平場は地形的に見て南側にはわずかしか伸び得ないものであり、分布する遺構のほぼ全様を調査できたと言える。

遺構の配置：中央部に第２号住居跡があり、その東側に７棟の掘立柱建物跡群があり、西側に第１号住居跡と第８号掘立柱建物跡が位置する。

遺構の重複：第１号住居跡は２時期１回の増改築があり、そのさい第８号掘立柱建物跡の一部を切っている。第２号住居跡は３時期４回の増改築がある。その東側に位置する掘立柱建物群の中では第２号掘立柱建物跡は１回の重複があり、第３号、第４号、第５号掘立柱建物跡は互いに重複しており、第４号を第３号が切り、更に第３号が第５号によって切られている。この掘立柱建物群の重複は第２号住居跡の増改築に対応する可能性があるが、どの時期に対応するかは判然としない。しかし第１号住居跡、第２号住居跡は共に拡大するかたちで増改築されており、掘立柱建物跡群も同一基調で増改築が進行したと考えられる。

（３）　遺構群の性格

本遺跡において発見された遺構群は遺構内出土遺物から考えて一つのまとまりを示す遺構群であると考えられる。すなわちＣ地区で発見した遺構群が住居跡２棟、掘立柱建物跡８棟という組み合わせであり、通常の集落としては不自然である。つまり掘立柱建物跡群は居住するという性格のものではなく、住居跡に附属し、貯蔵、保管的性格を持つと考えられる。住居跡は第１号住居跡が住居内に鍛治の施設をもつなど工房的色合いが強く、各住居内をはじめＣ地区全体から多量の瓦を出土し、かつ使用している。

また今回発見した瓦窯跡群に最も近接する唯一の平場に立地する遺跡であることを考えると、瓦作りに密接に関連する遺構群といえる。「瓦屋」ないしは「造瓦所」と呼ばれる瓦製作を行なった工房遺跡という性格を考えることができる。

２．出土遺物について

瓦をはじめ各種の遺物が多量に出土しており、個々の遺物に対する検討は後日行なうこととし、ここでは主として文様瓦、文字瓦、須恵器について検討し、遺跡の年代的位置付けを行なってみたい。

文様瓦：枡江遺跡において出土した文様瓦は重弁蓮華文軒丸瓦、細弁蓮華文軒丸瓦、単弧文軒平瓦であった。この中で重弁蓮華文軒丸瓦と単弧文軒平瓦は窯跡においてセットとなることが確認されている。

出土した重弁蓮華文軒丸瓦に近似するものとしては多賀城跡出土の 250 とされる重弁蓮華文がある。これは現在までの例では多賀城跡よりわずかに出土するもので、弁の形や胎土が 210 重弁蓮華文と極めて類似しており、多賀城第Ⅱ期の瓦文様と考えられている。（「多賀城跡」

昭和52年度発掘調査概報）

細弁蓮華文軒丸瓦は、多賀城跡では 310 と分類され、多賀城第Ⅲ期の瓦文様とされている。（「多賀城跡」昭和45年度発掘調査概報）

単弧文軒平瓦は多賀城分類では 640 とされるもので多賀城第Ⅱ期の文様である。

文字瓦：一字刻印の文字瓦は多賀城跡をはじめ、同附属寺院、陸奥国分寺、同尼寺より出土している。時期的には多賀城第Ⅱ期に位置付けられている。

須恵器：東北地方における須恵器の編年はまだ確立していないが、坏形土器の底部技法によって一つの試論がなされている。これによると①ロクロからの切り離しはヘラ切りで、再調整としてヘラ削り、まれに静止糸切りを行なうもの。②ヘラ切りで再調整を行なわないもの。③回転糸切りで再調整をほとんど行なわないもの。と変遷すると考えられ、①は多賀城の第Ⅰ期を中心とし、②は多賀城の第Ⅲ期を中心とし、③は多賀城第Ⅳ期を中心とする位置付けがされている。（岡田、桑原「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」1974、桑原「東北地方の８、９世紀を中心とした土器編年」1979）

しかしこれは資料が十分と言い難く、若干の問題点を含んでいる。多賀城第Ⅱ期の瓦を生産した仙台市蟹沢中窯跡では回転手切り無調整の坏が出土しており、同様に多賀城第Ⅲ期の瓦を焼成した仙台市安養寺下窯跡においても回転糸切りの坏が出土している。今後再検討の必要を感じる。

枡江遺跡出土の坏については、前記の①、②、③の全ての技法をもつ坏が確認でき混在している。

遺物の年代：瓦より見た上限は、重弁蓮華文軒丸瓦と単弧文軒平瓦ならびに文字瓦は多賀城の第Ⅱ期に相当し奈良明代後半に位置付けることができる。細弁蓮華文軒丸瓦は多賀城第Ⅲ期に相当し平安時代初期に位置付けることができる。

須恵器は各種の底部技法があり、若干の問題もあるが、奈良時代後半より平安初期を中心とするものと考えられる。

3．まとめと問題点

枡江遺跡は瓦窯跡と瓦作りを行なった工房とが一つの単位、すなわち瓦屋としての性格を持つものである。しかし平場の遺構群は枡江窯跡が使用されなくなったのちにも、現在与兵衛沼となっている旧河川の北側沿いに近接する蟹沢中窯跡、与兵衛沼窯跡の工房としての性格を持ち続けたものと考えられる。蟹沢中窯跡は重圏文軒丸瓦と単弧文軒平瓦をセットする瓦窯跡

であり、与兵衛沼窯跡は細弁蓮華文軒丸瓦と偏行唐草文軒平瓦をセットとする窯跡である。枡江窯跡が使用停止したのち、蟹沢中窯跡、次いで与兵衛沼窯跡が造営されたものであり、C地区平場の建物跡群はそれらの工房として活動を続けたものであろう。遺物の出土状況もこれを裏付けている。

このほかに工房的性格をもつ遺跡としては、この台原・小田原窯跡群中では前田遺跡、二の森遺跡等があり、今後の検討が望まれる。

4．おわりに

台原・小田原窯跡群の調査もようやく進展し、これまで行なわれていたような瓦ないしは土器だけを取りあげるやり方より、遺跡の性格並びに各種出土遺物をも含めた総合検討を行なう時期がきたようである。今後は前記のような見方で今までの調査、研究を見なおし、更に進展させていきたい。

追記・この報文を作製中に茨城県勝田市で瓦屋の性格を持つ遺跡が発見されているが、その詳細については知ることができなかった。

1979年12月28日脱稿

参　考　文　献

「多賀城跡」—昭和45年度発掘調査概報—1970年・宮城県多賀城跡調査研究所

「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」—研究紀要Ⅰ、岡田茂弘・桑原滋郎—1974年・宮城県多賀城跡調査研究所

「多賀城跡」—昭和52年度発掘調査概報—1977年・宮城県多賀城跡調査研究所

「東北地方の８、９世紀を中心とした土器編年」—桑原滋郎、1979年・日本考古学協会昭和54年度大会研究発表・シンポジュウム資料

「蟹沢中瓦窯跡発掘調査報告書」—研究報告第一冊、1972年・古窯跡研究会

「陸奥国官窯跡群」—研究報告第二冊、1973年・古窯跡研究会

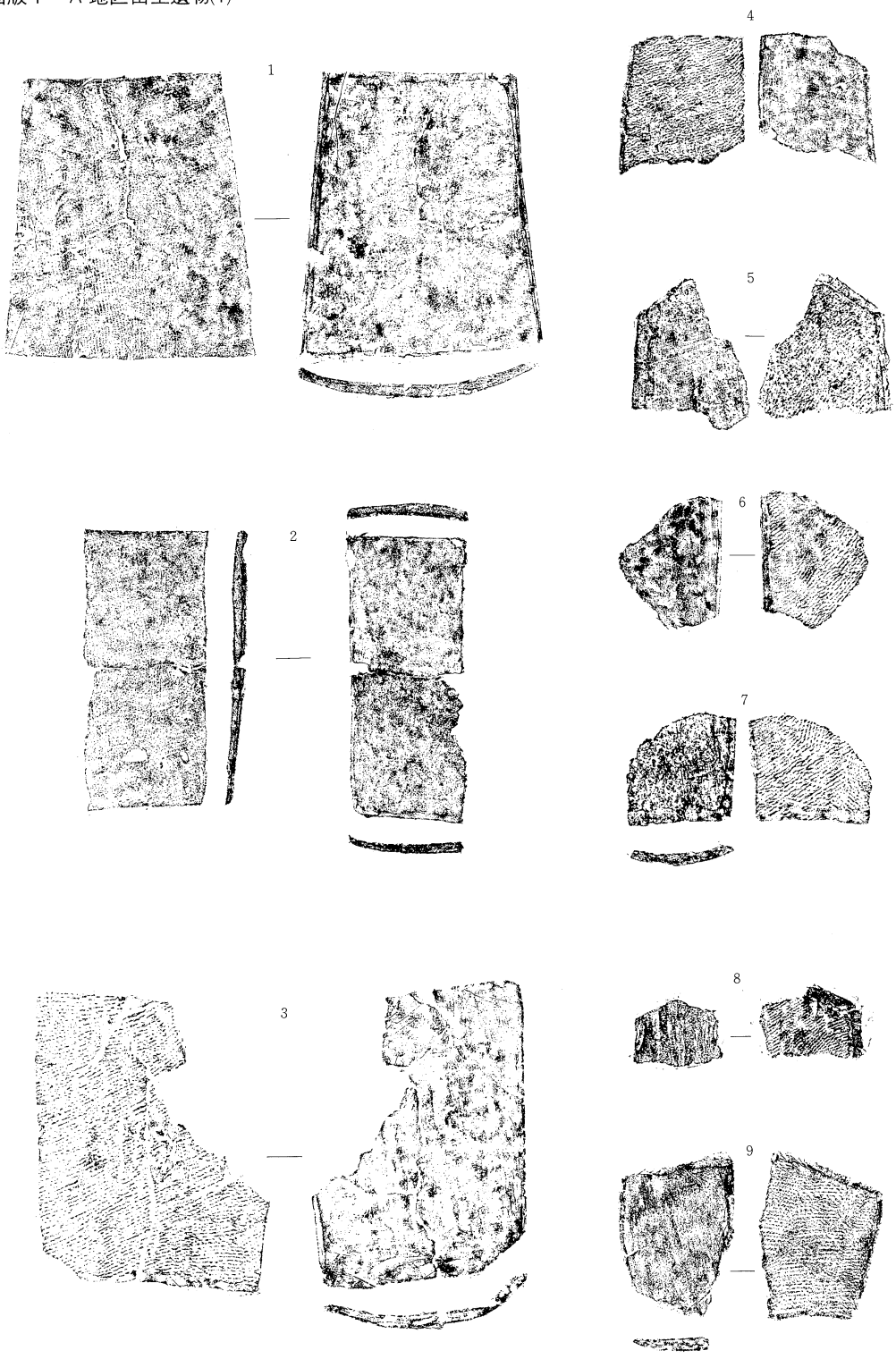
「陸奥国官窯跡群Ⅱ」—研究報告第四冊、1976年・古窯跡研究会

図版

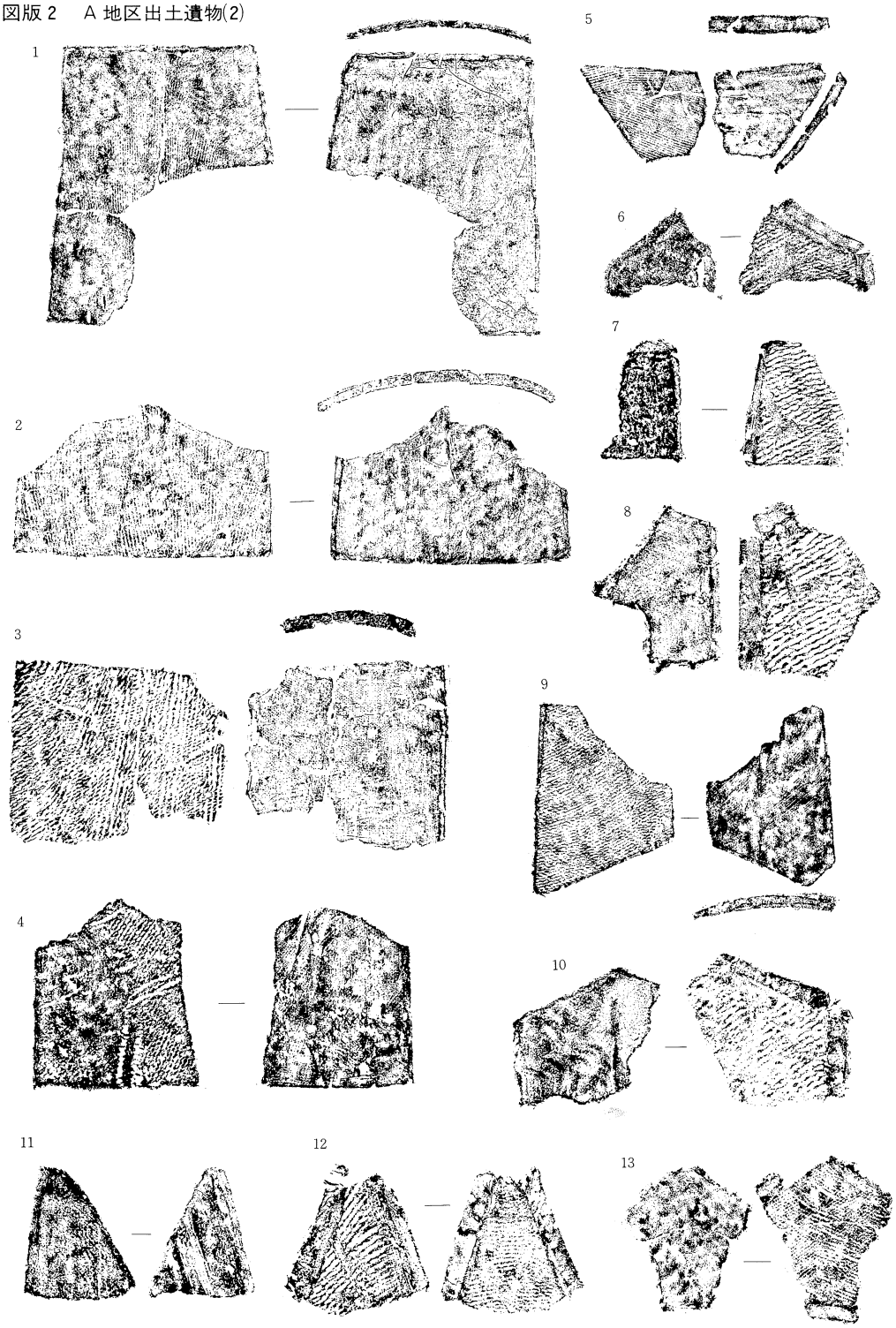
写真図版

観察表

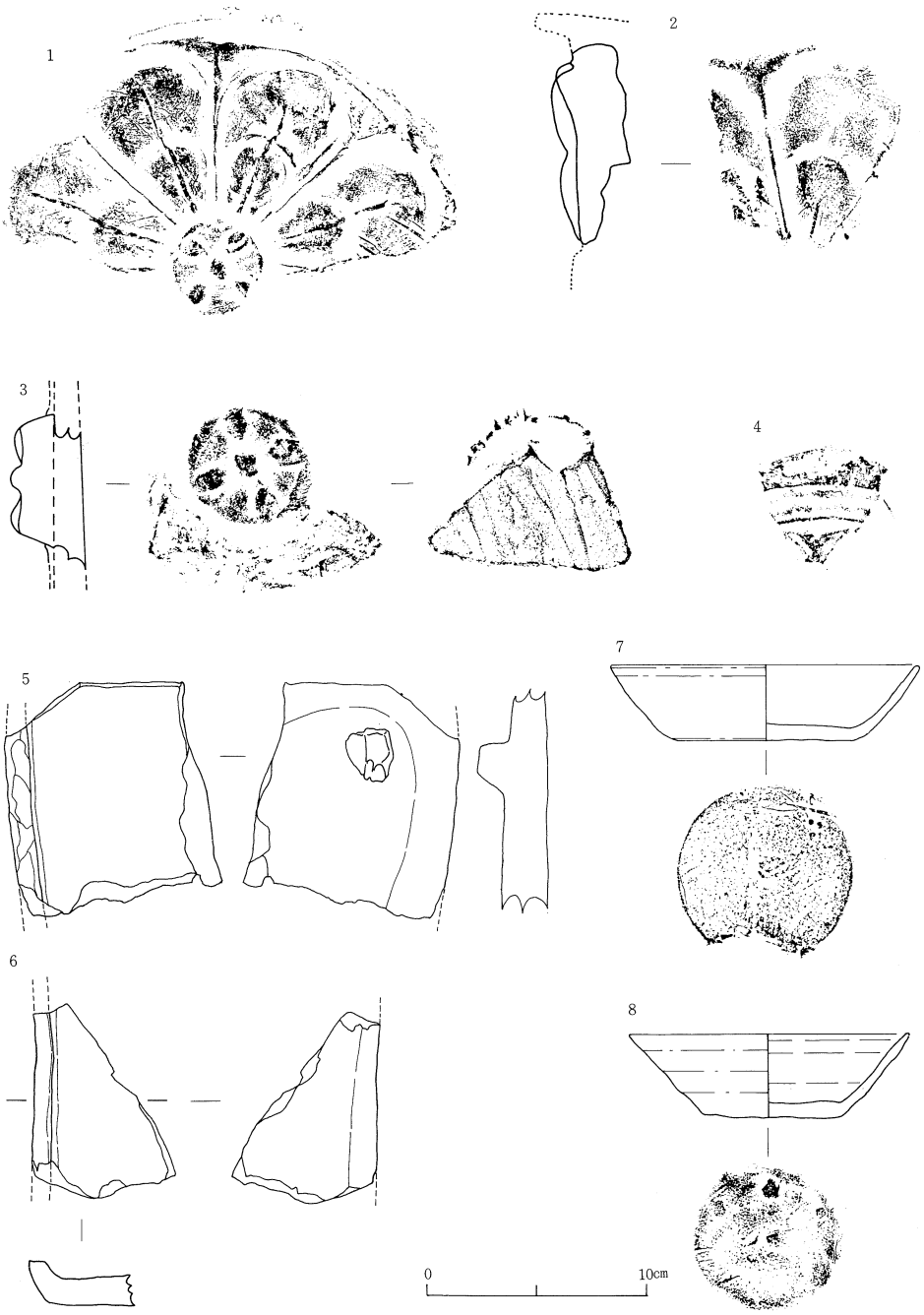
図版Ⅰ　A 地区出土遺物(1)



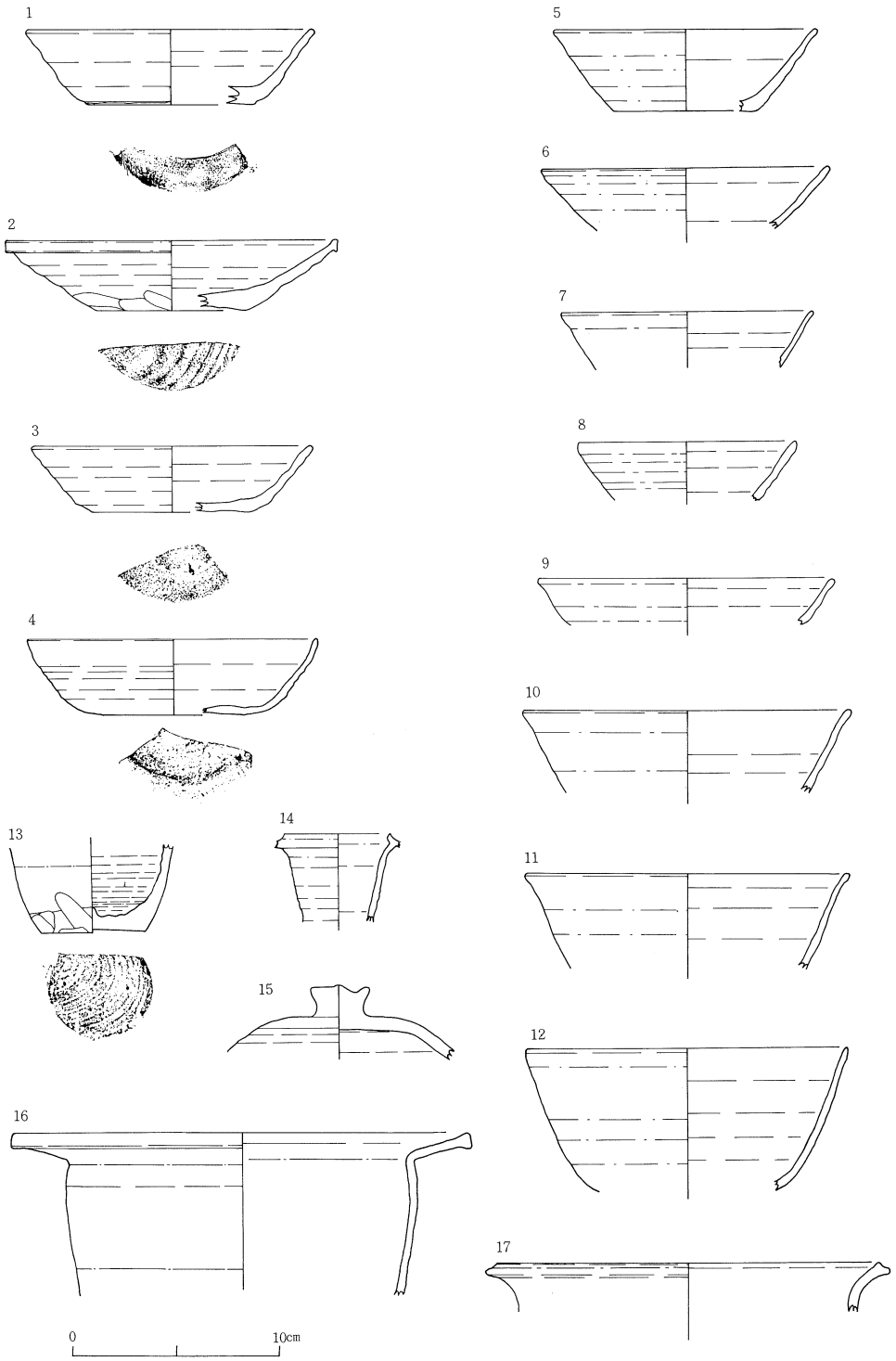
図版 2　A 地区出土遺物(2)



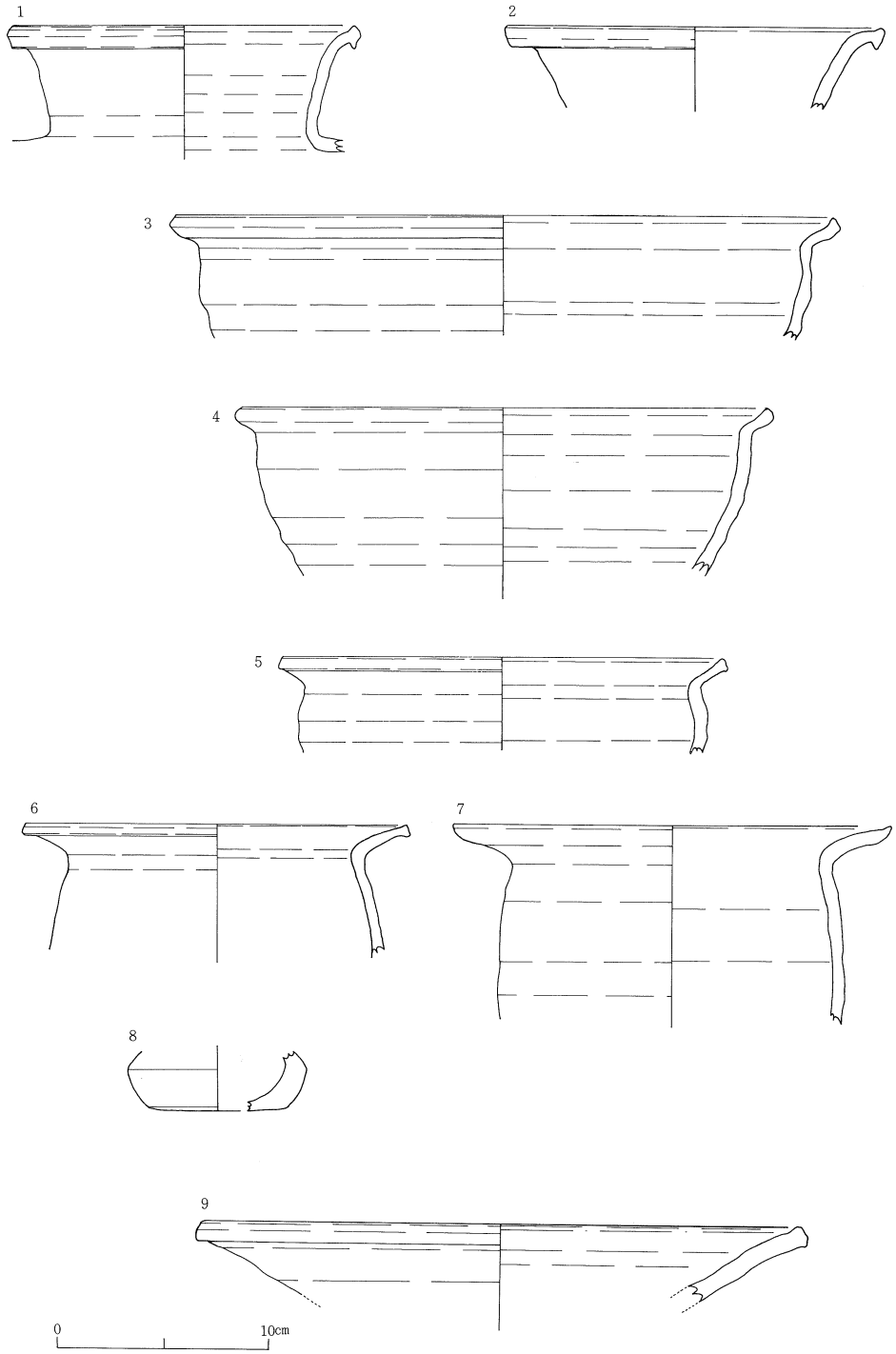
図版 3　A 地区出土遺物(3)



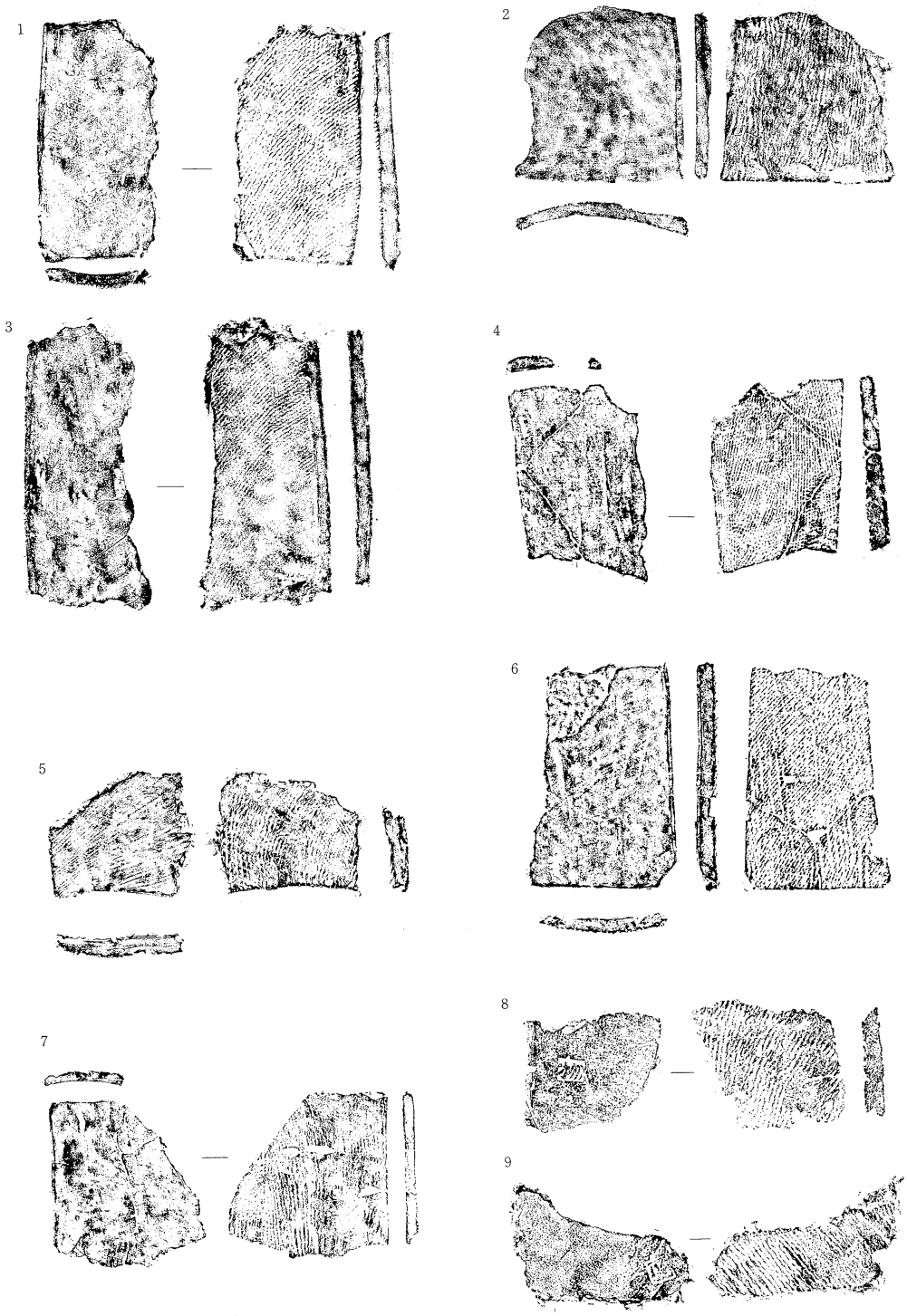
図版 4　A 地区出土遺物(4)



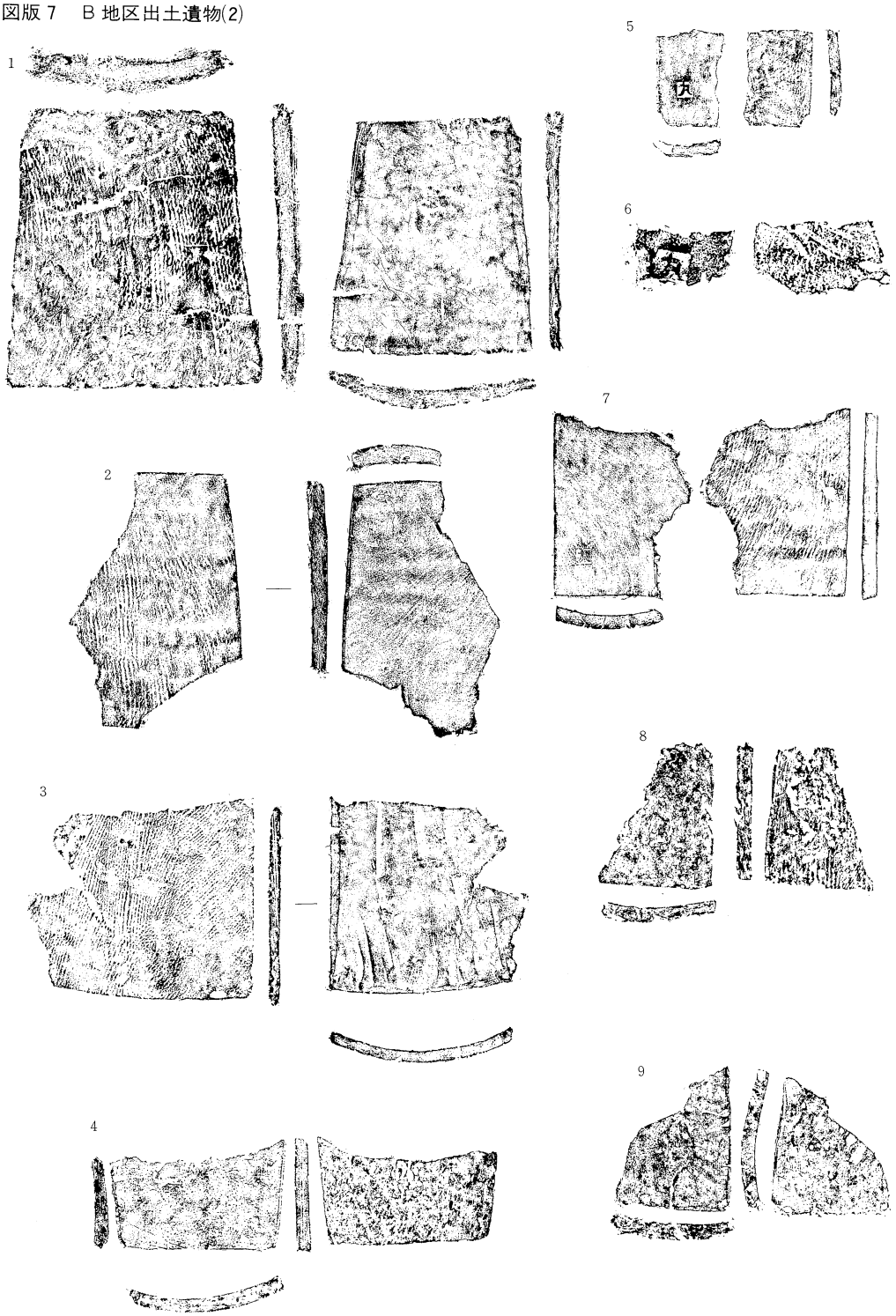
図版 5　A 地区出土遺物(5)



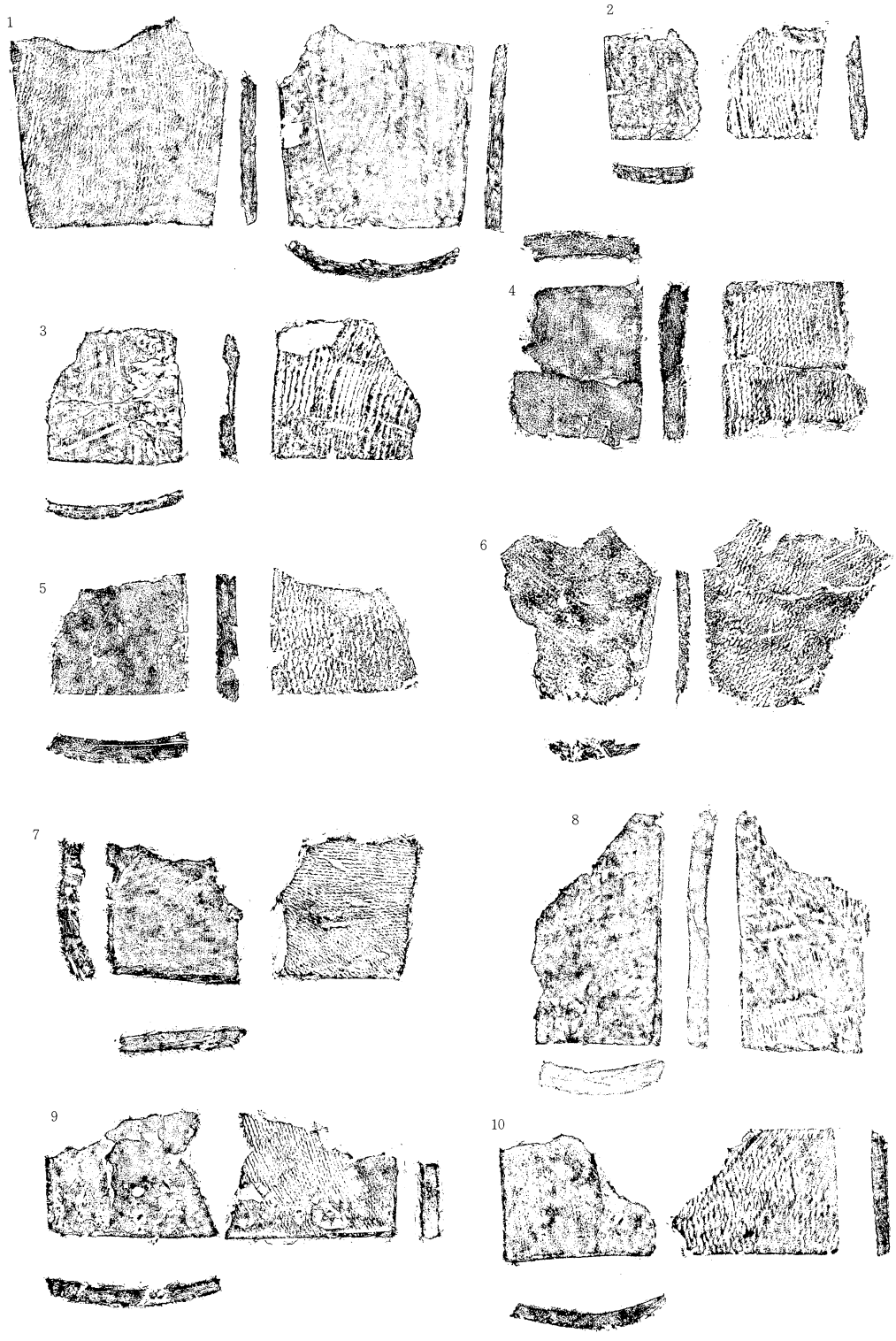
図版 6　B 地区出土遺物(1)



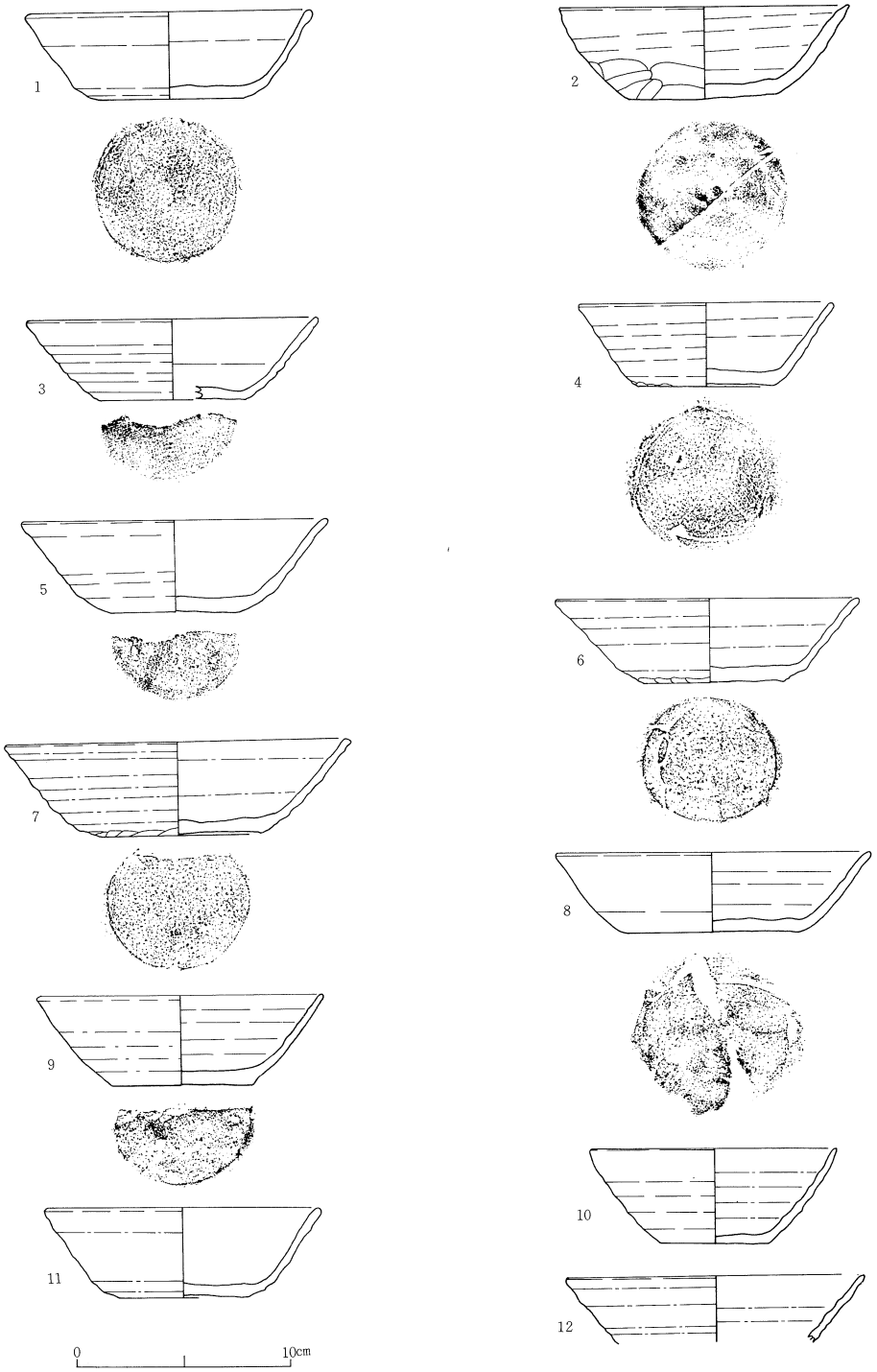
図版 7　B 地区出土遺物(2)



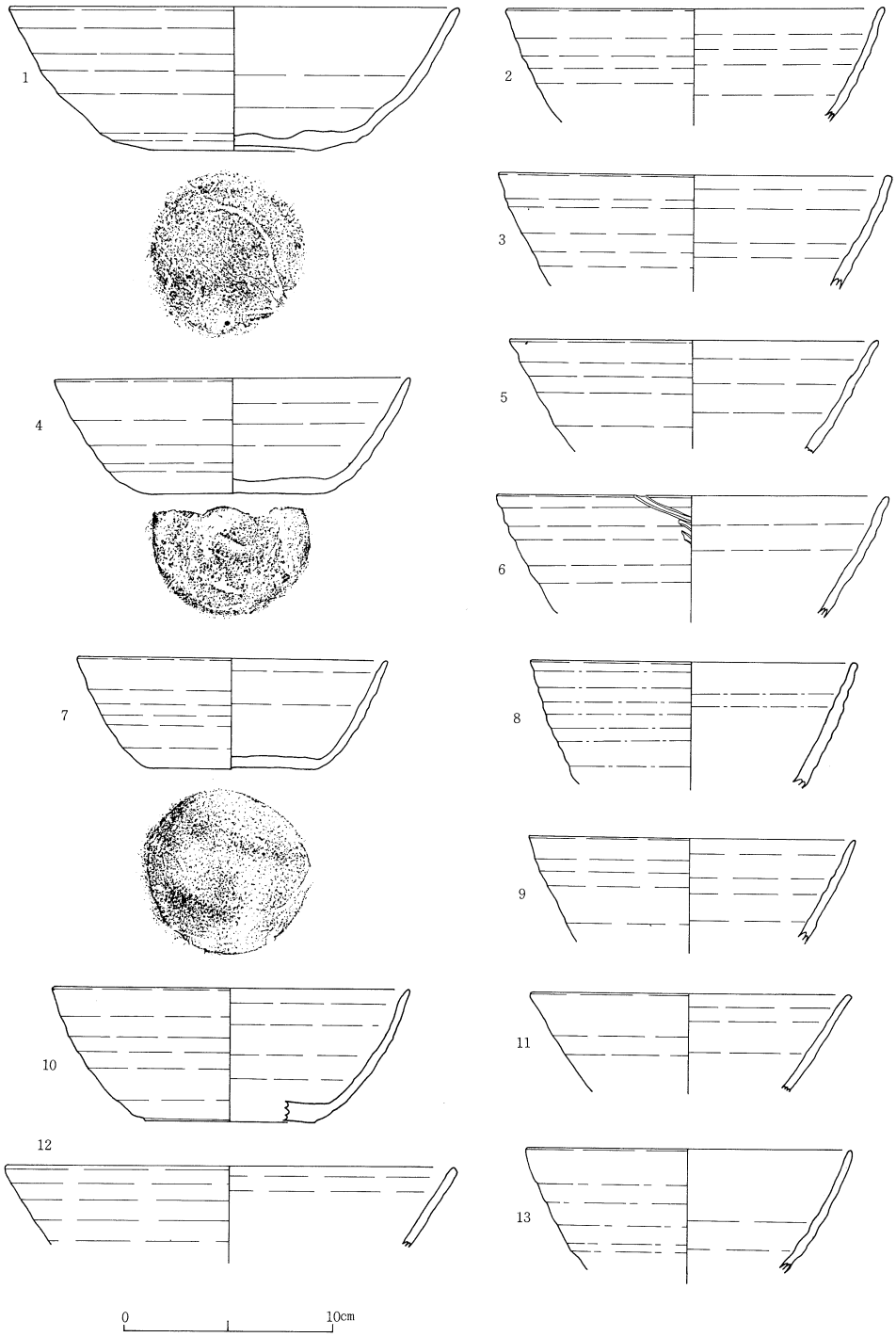
図版 8　B 地区出土遺物(3)



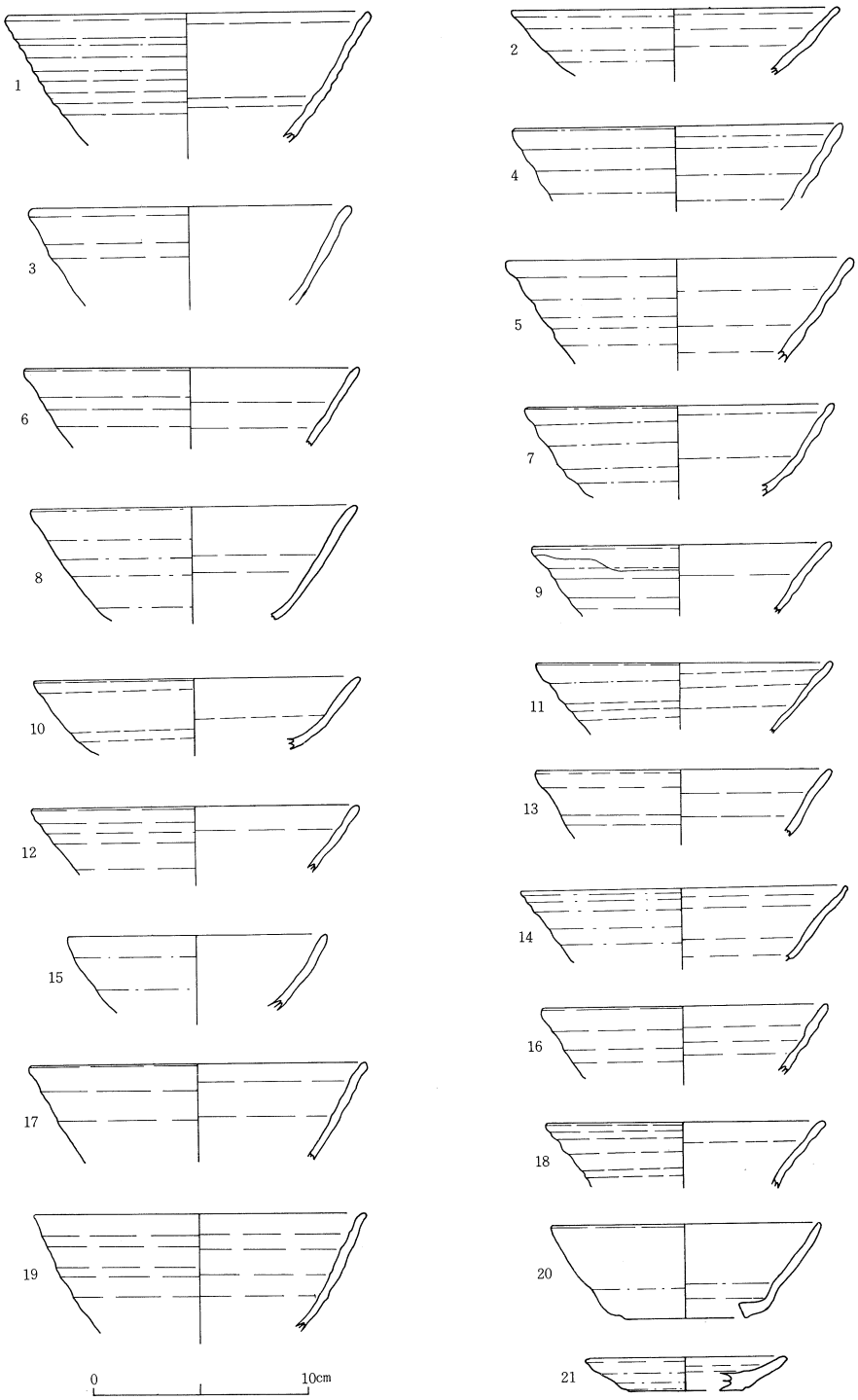
図版 9　B 地区出土遺物(4)



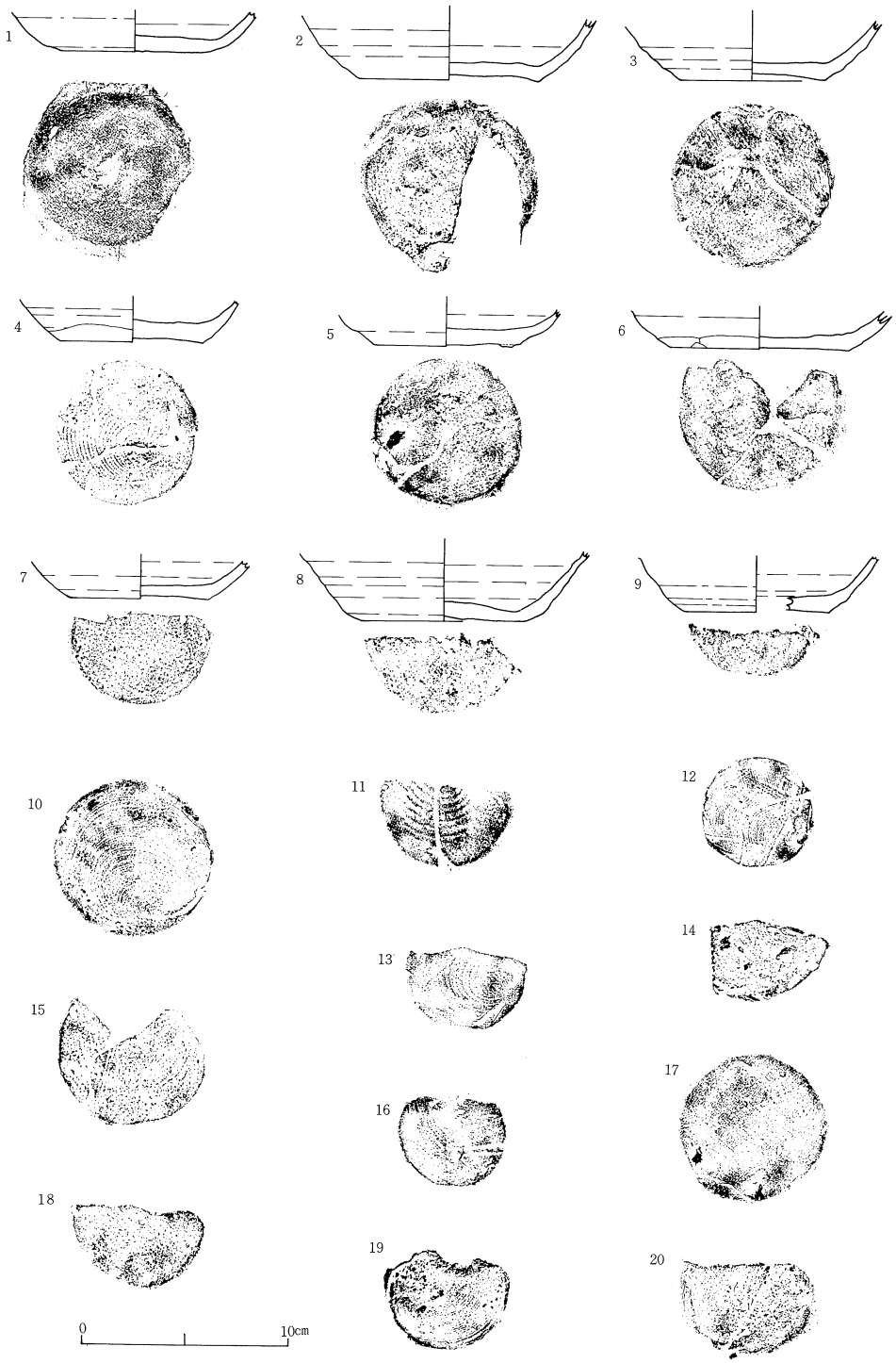
図版10　B地区出土遺物(5)



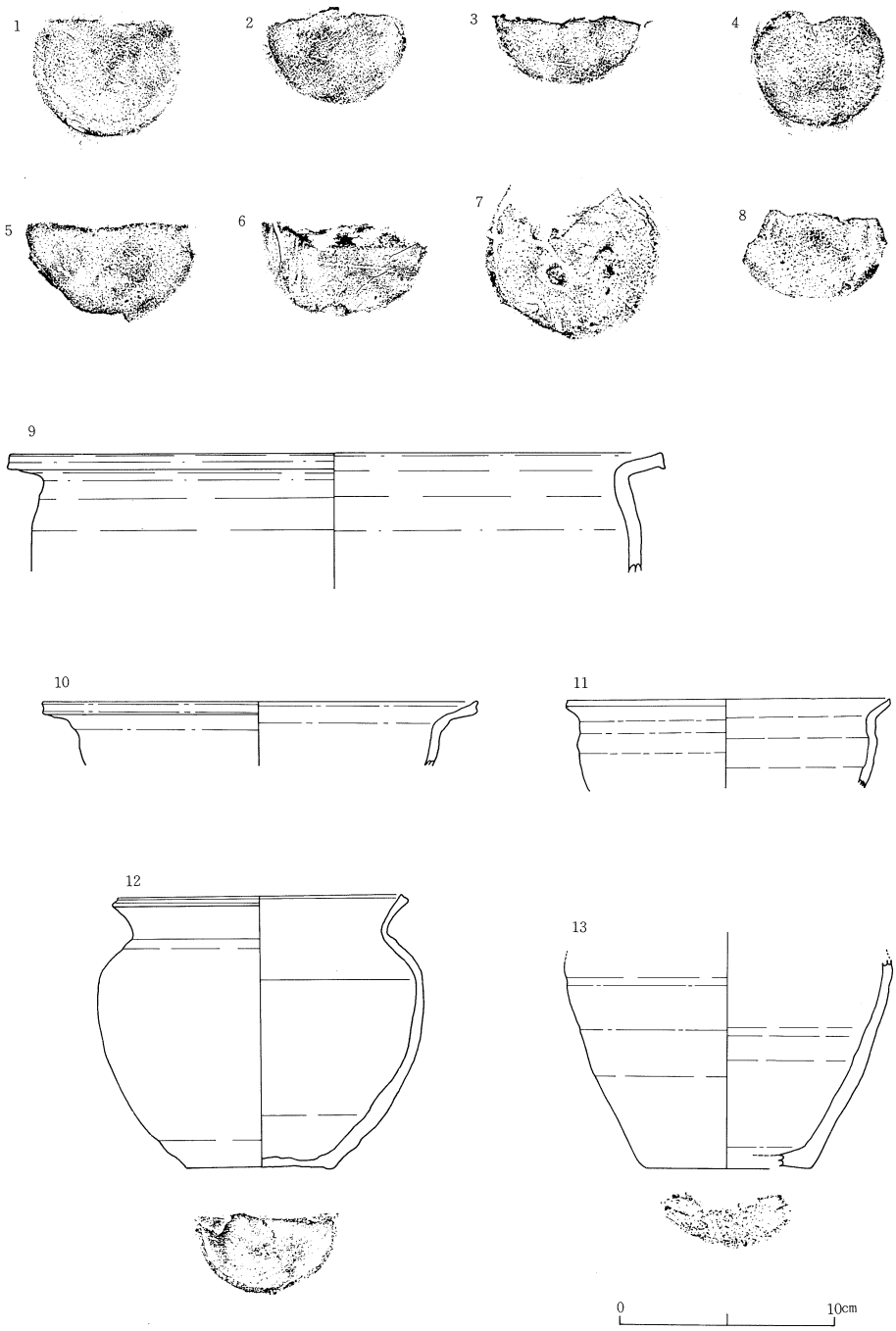
図版11　B 地区出土遺物(6)



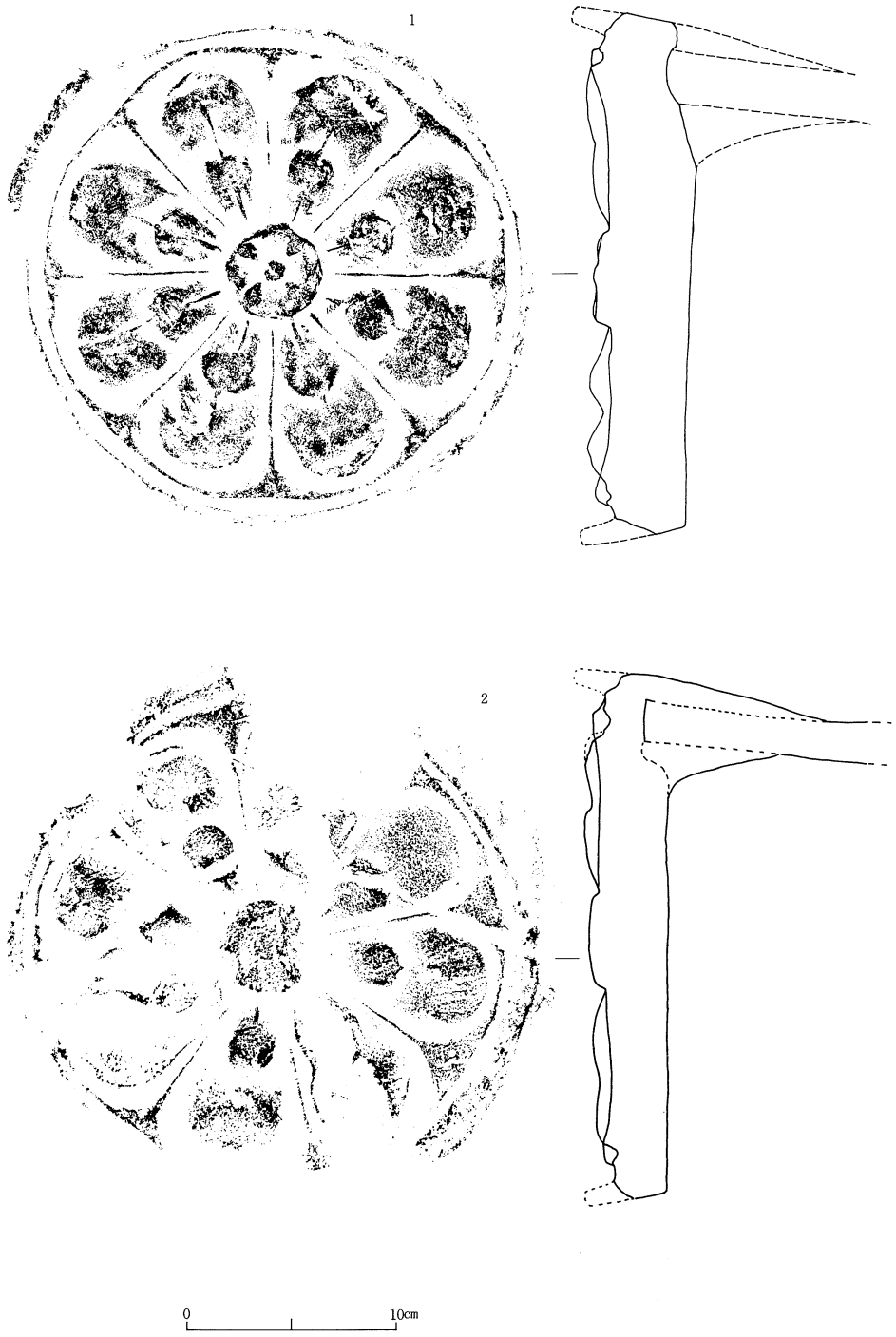
図版12　B 地区出土遺物(7)



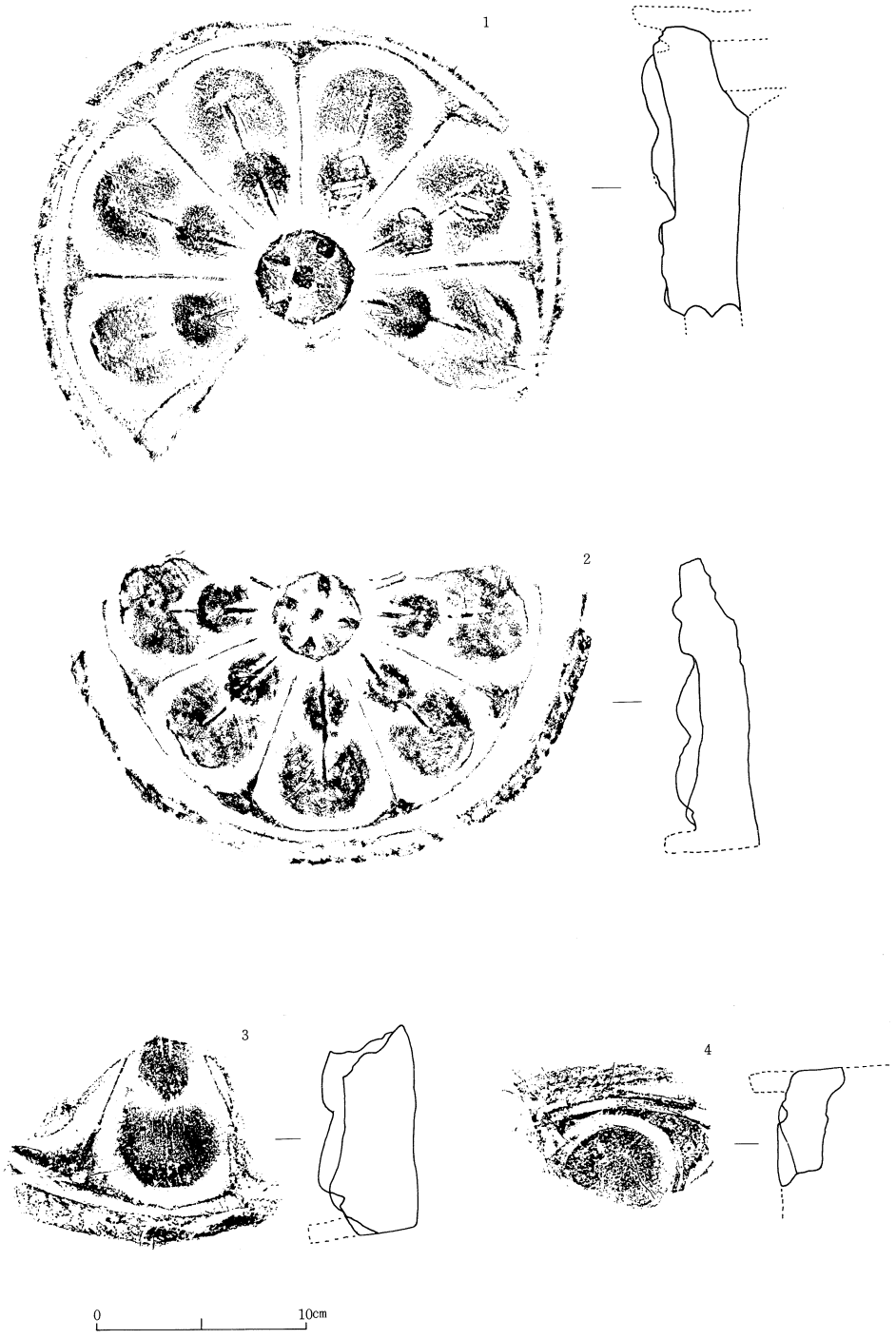
図版13　B 地区出土遺物(8)



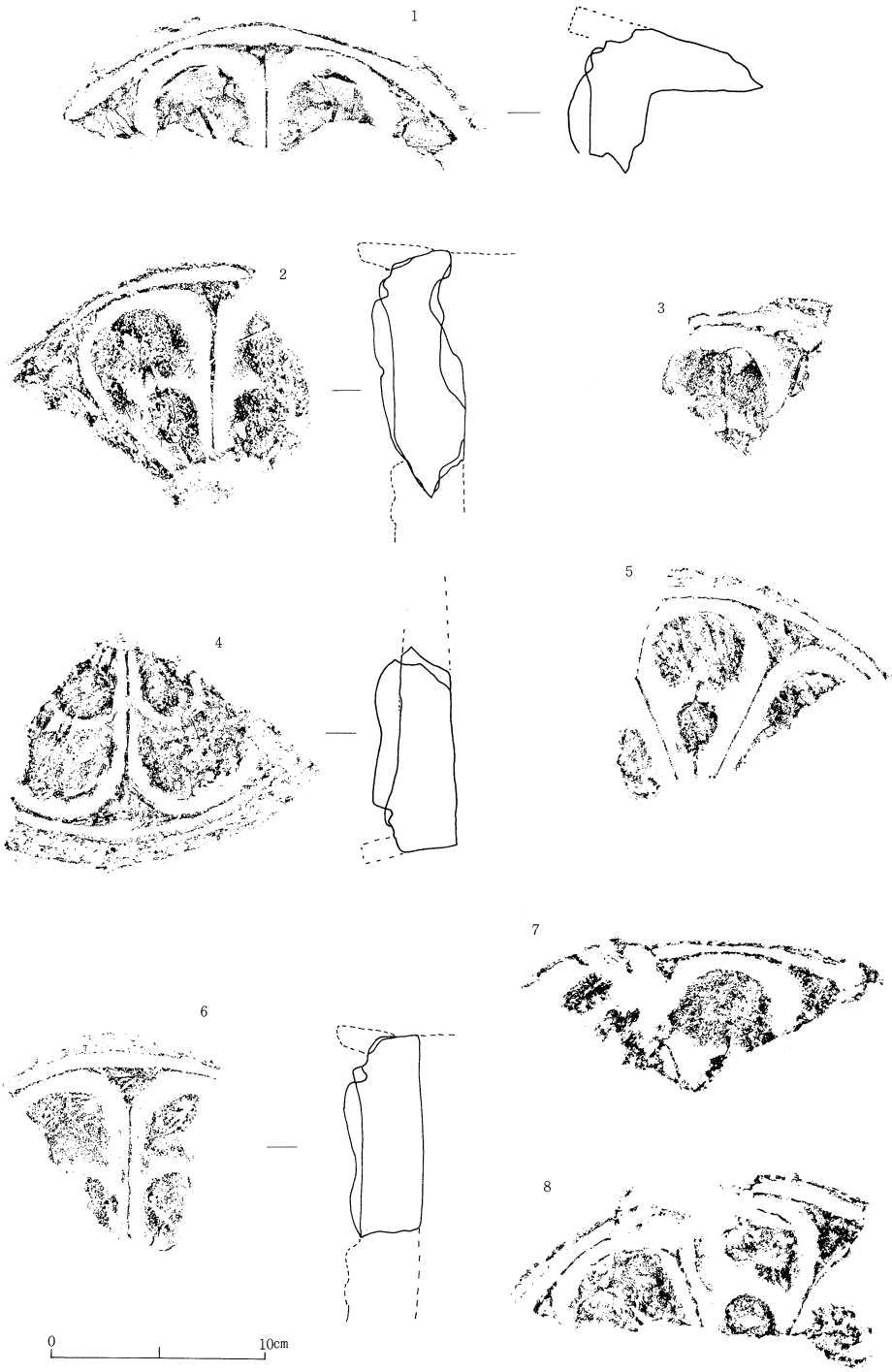
図版14　B 地区出土遺物(9)



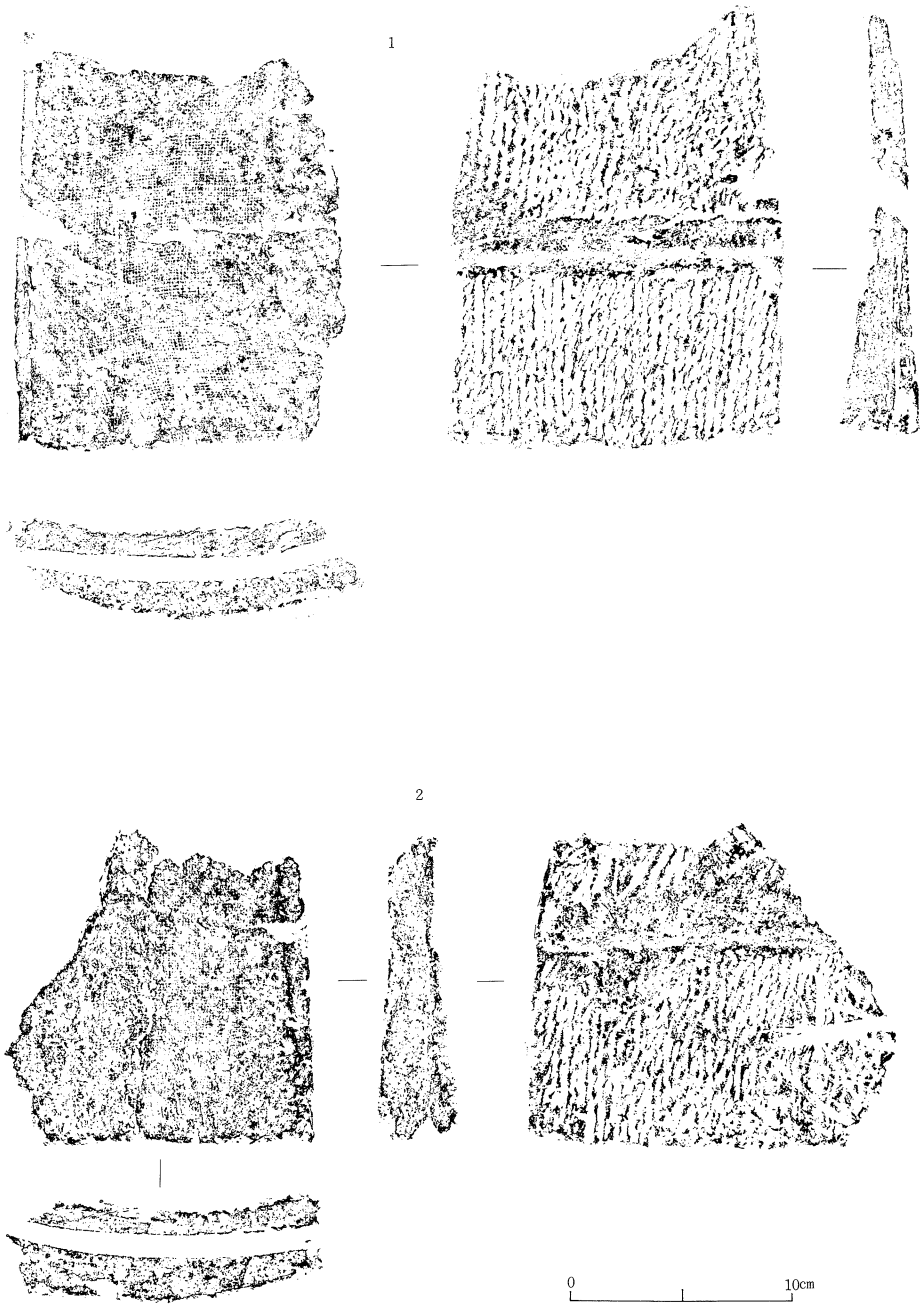
図版15　B 地区出土遺物(10)



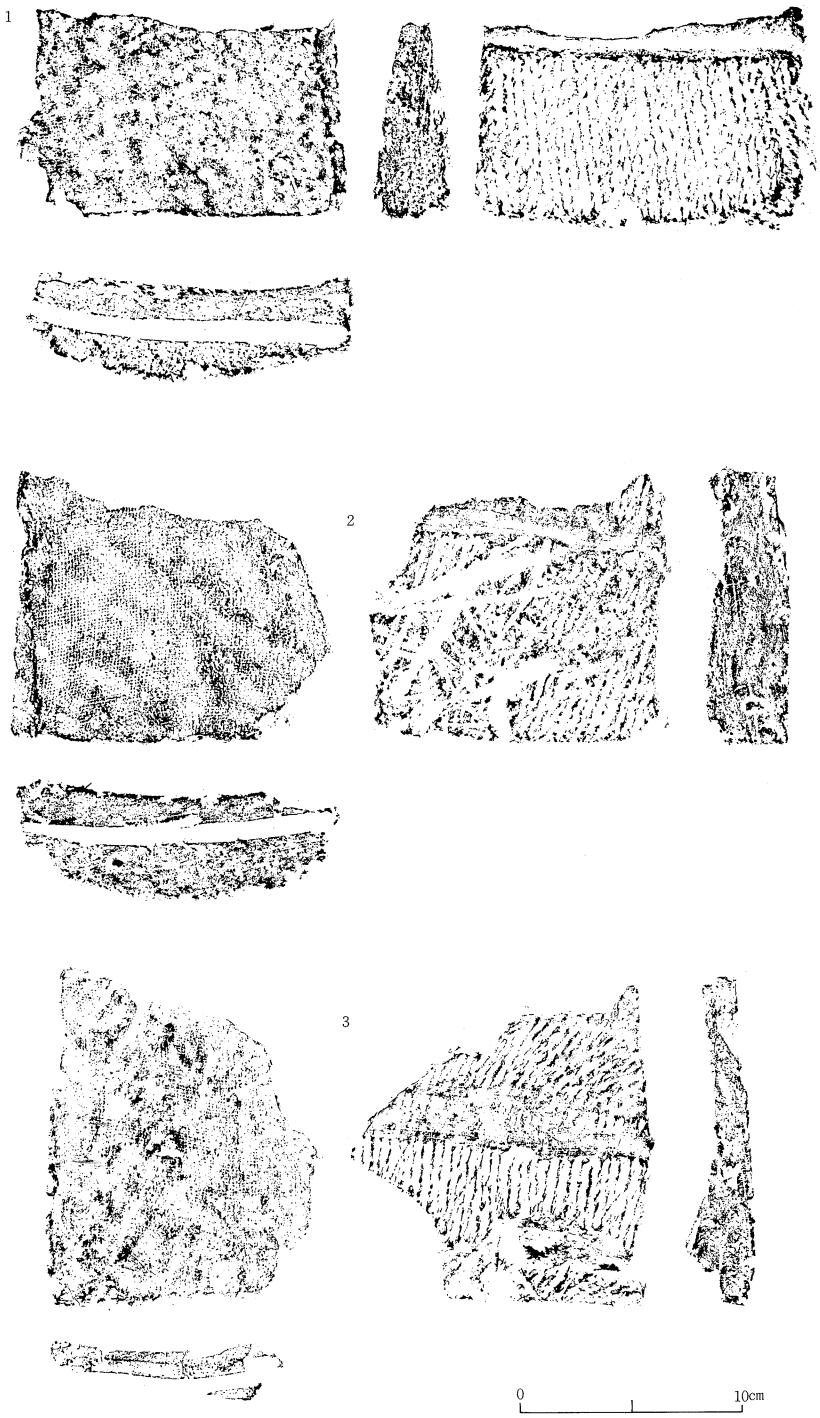
図版16　B 地区出土遺物(Ⅱ)



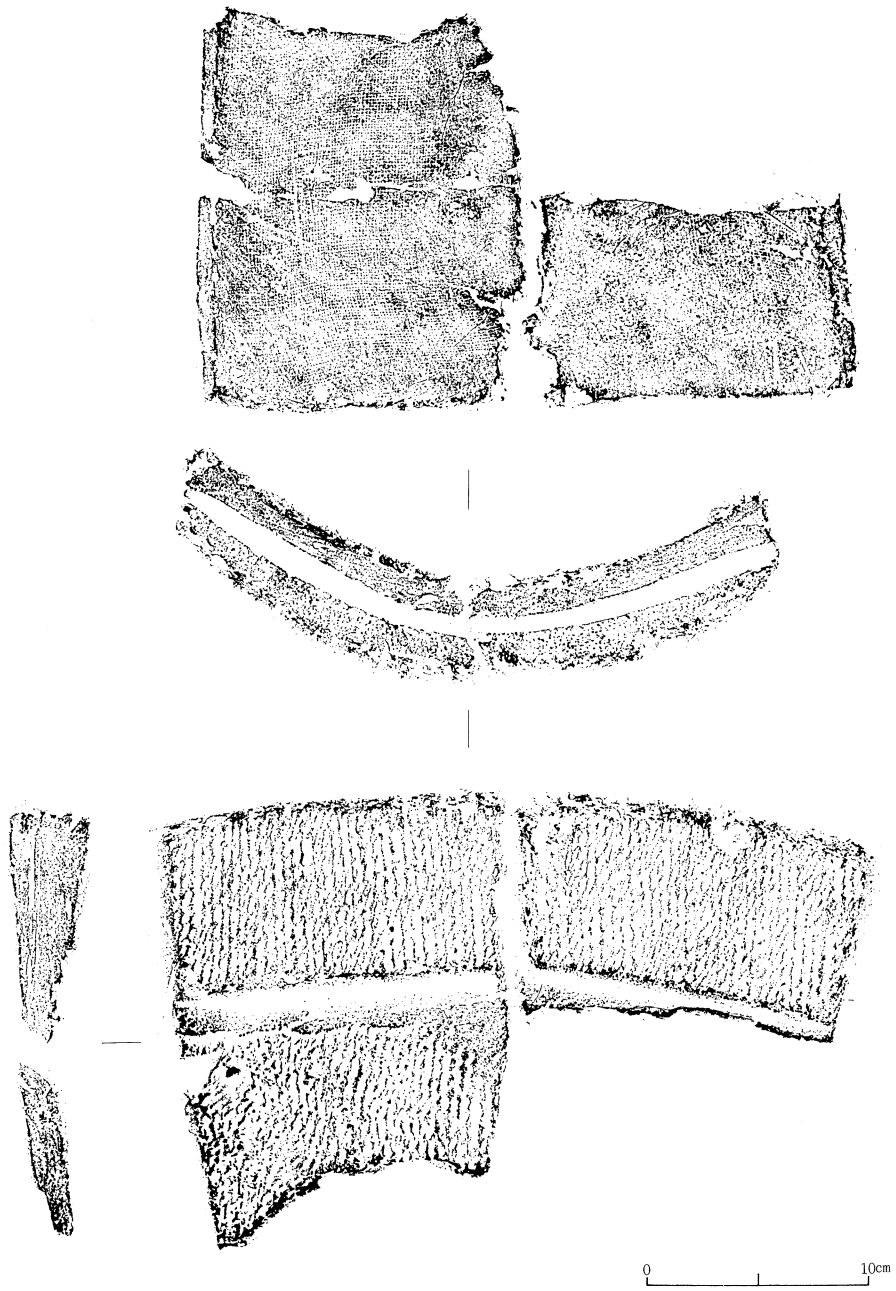
図版17　B 地区出土遺物(12)



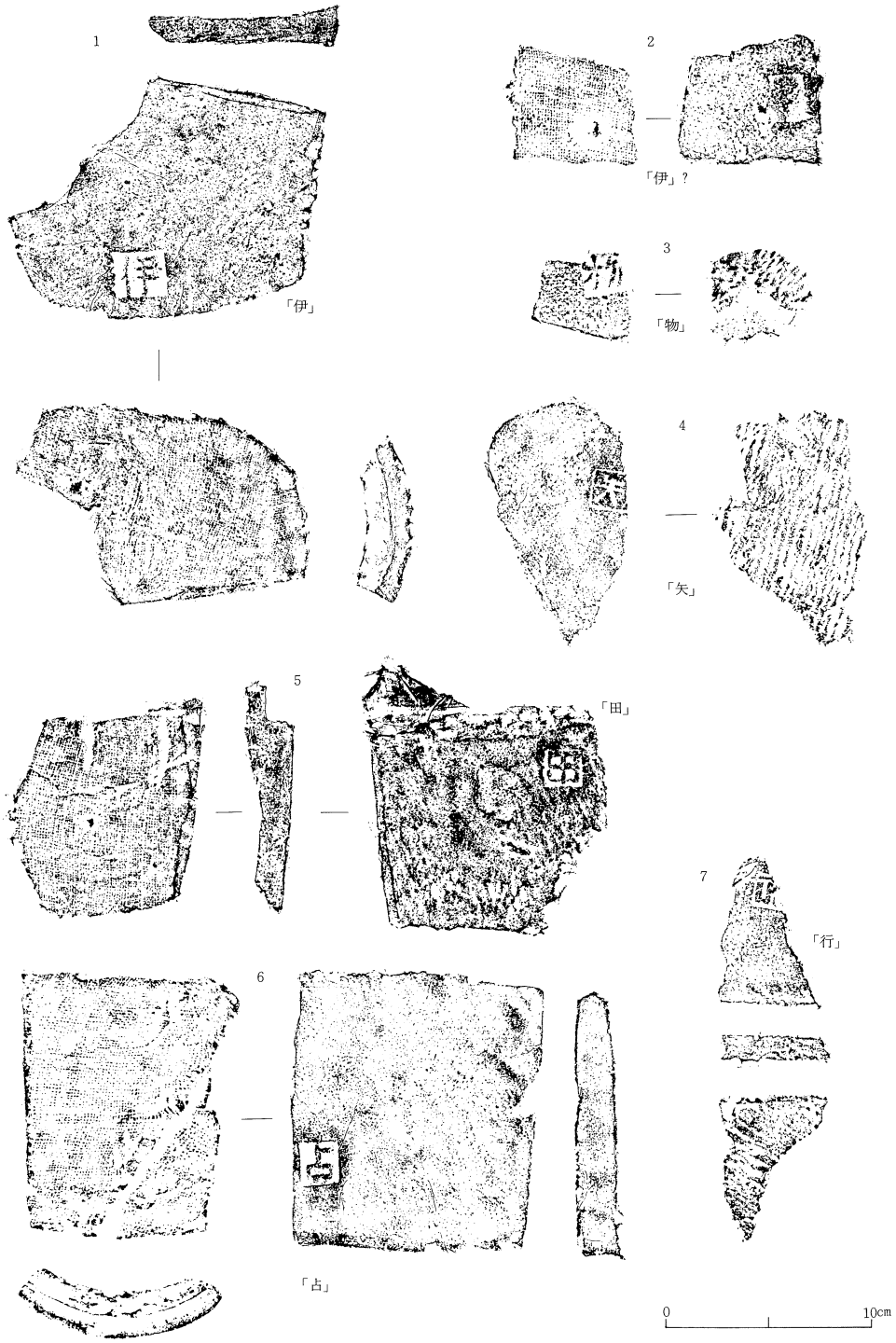
図版18　B地区出土遺物(13)



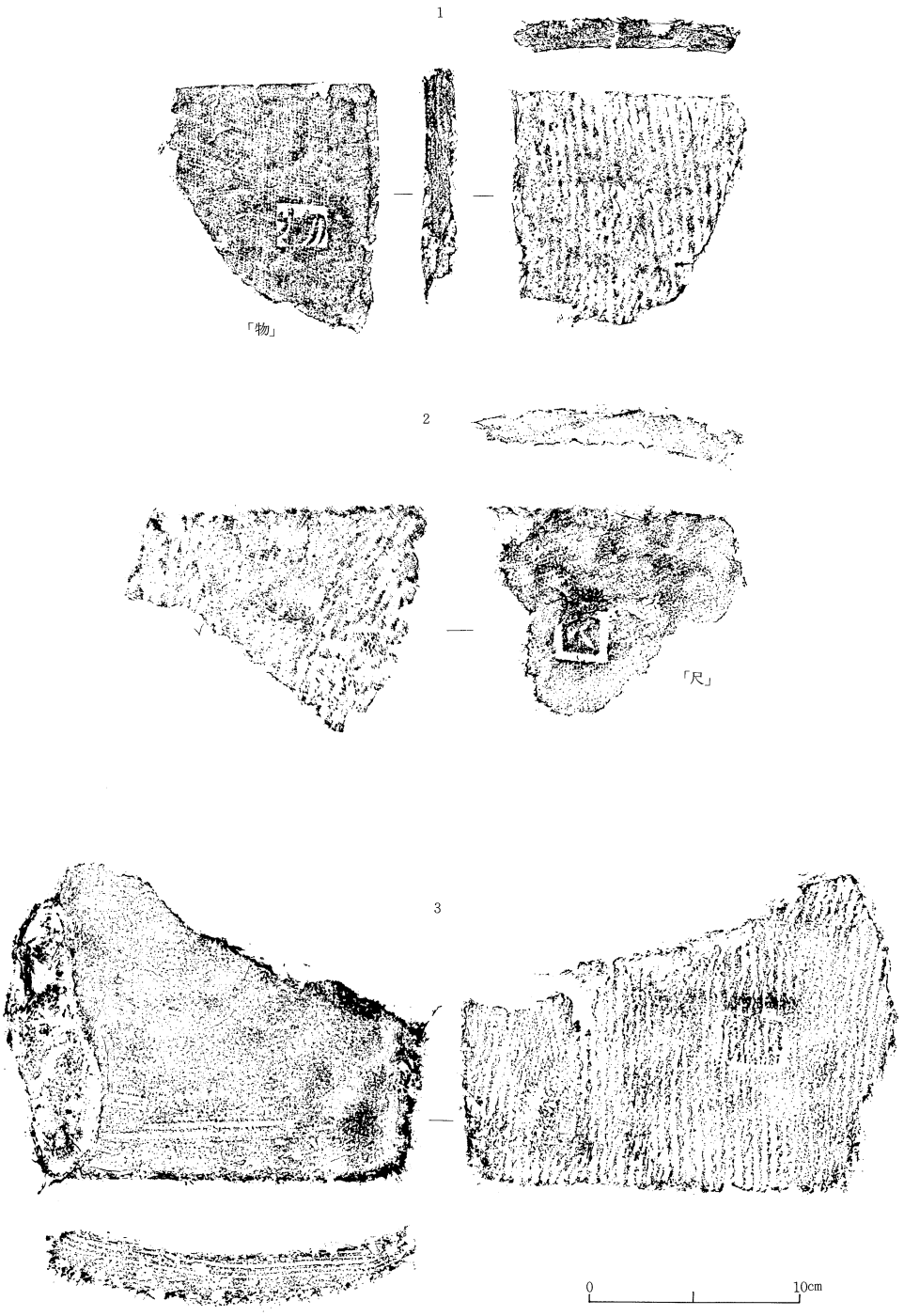
図版19　B地区出土遺物(14)



図版20　B 地区出土遺物(15)

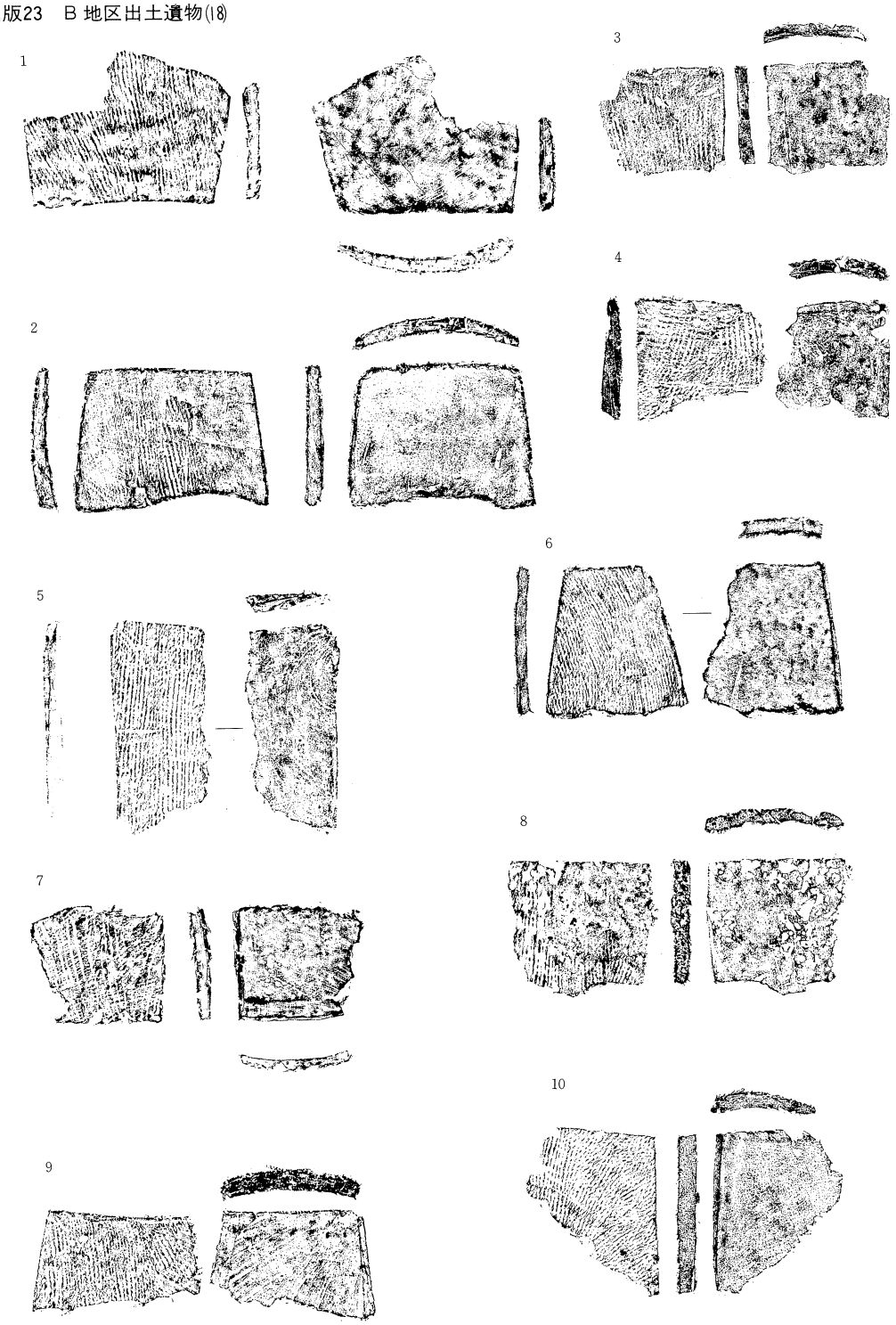


図版21　B 地区出土遺物(16)

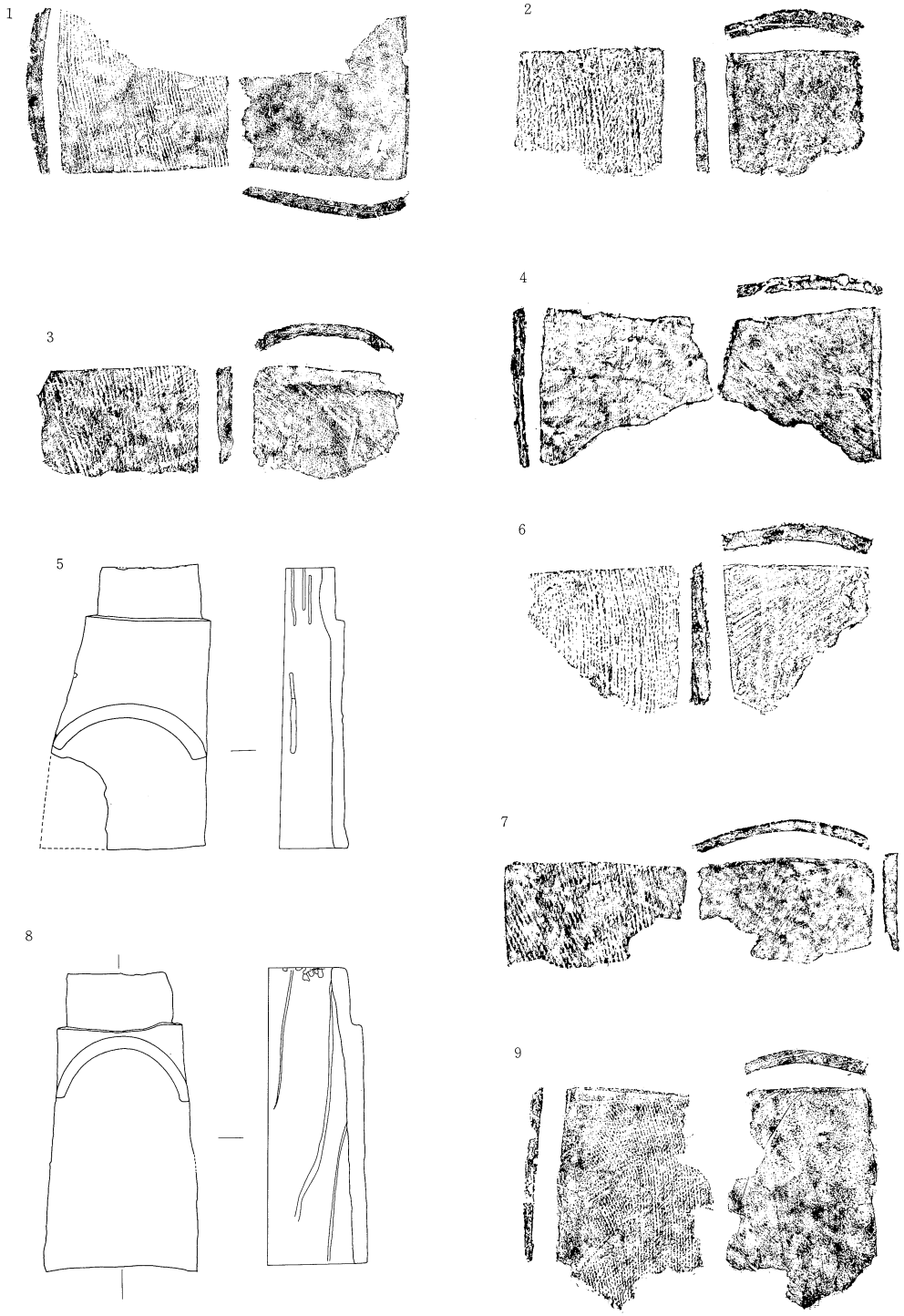


図版22　B 地区出土遺物(17)

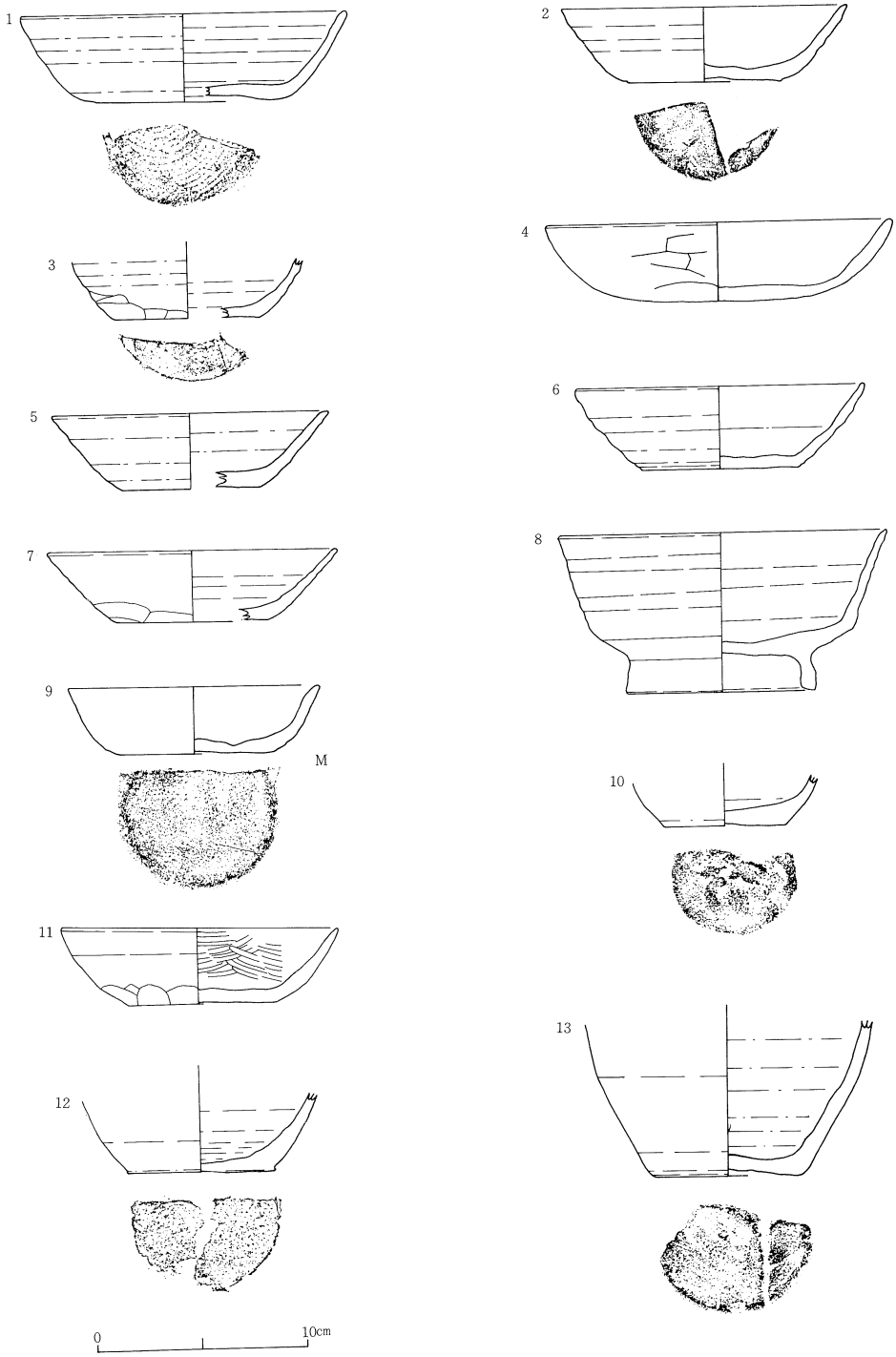
図版23　B 地区出土遺物(18)



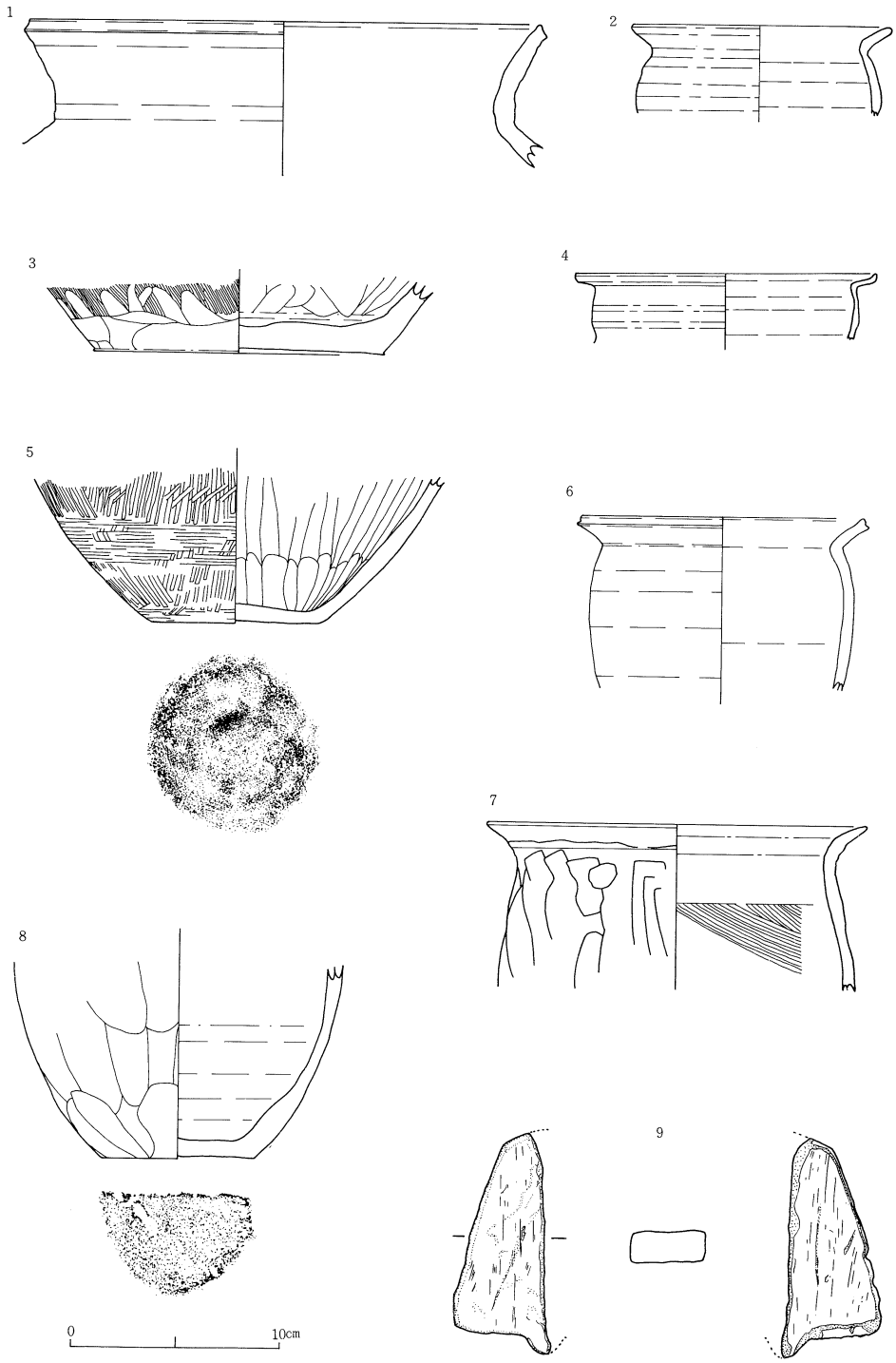
図版24　B 地区出土遺物(19)



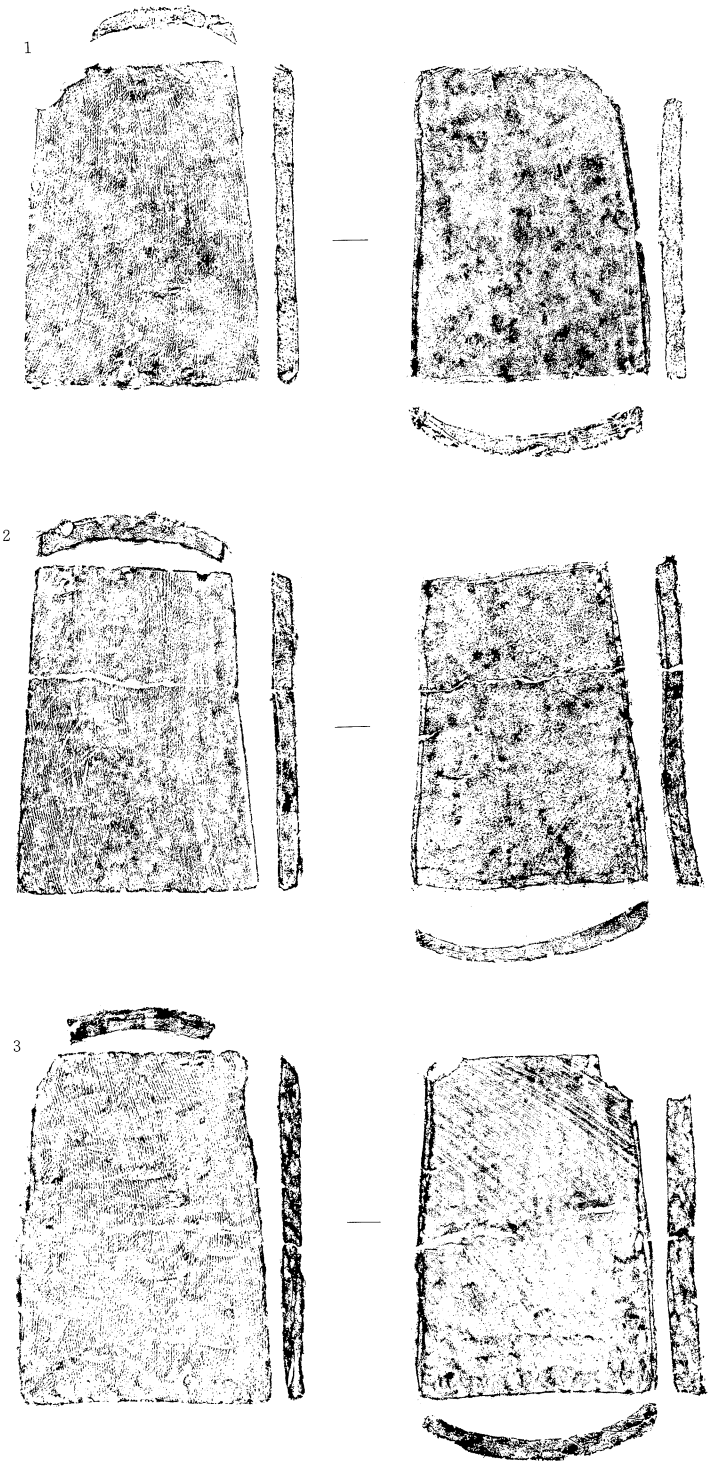
図版25　B 地区出土遺物(20)



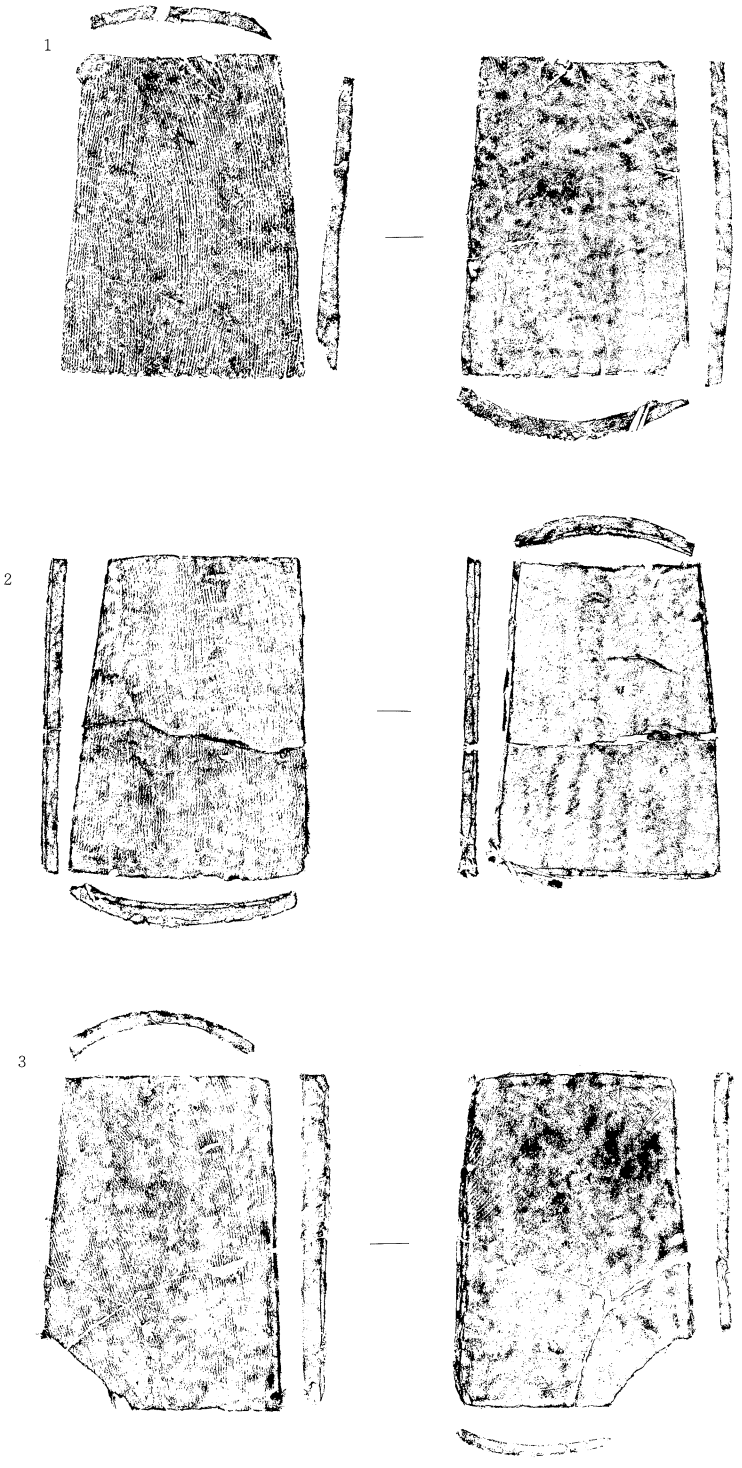
図版26　B 地区出土遺物(2)



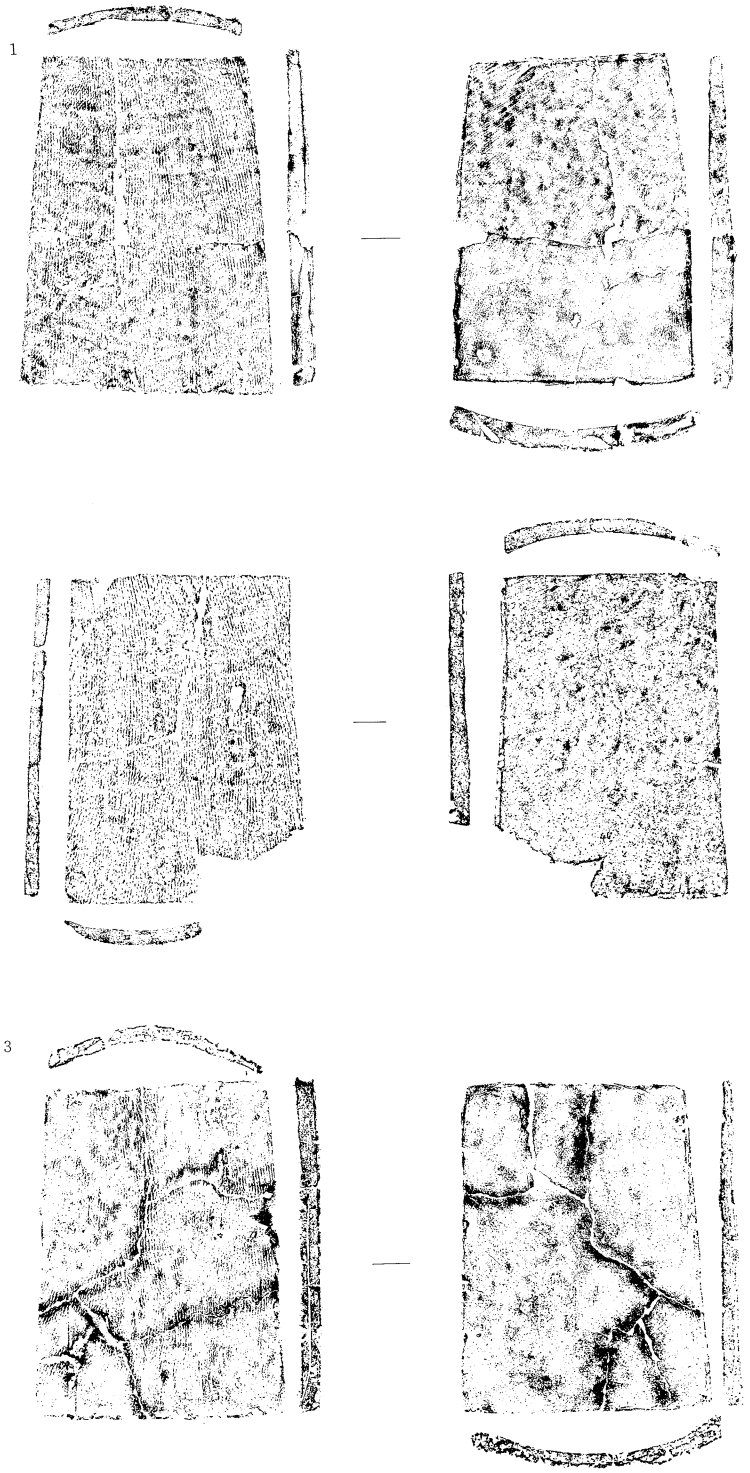
図版27　C 地区出土遺物(1)



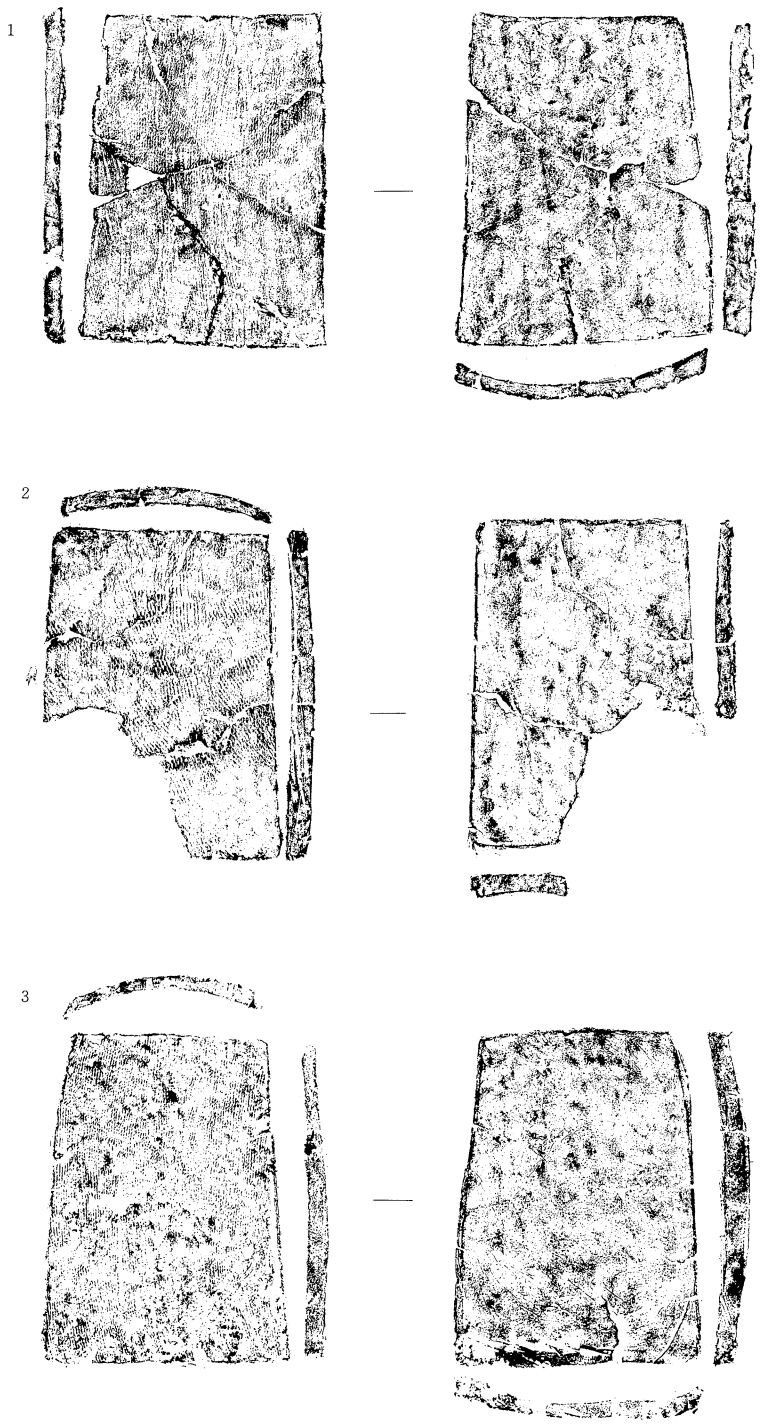
図版28　C 地区出土遺物(2)



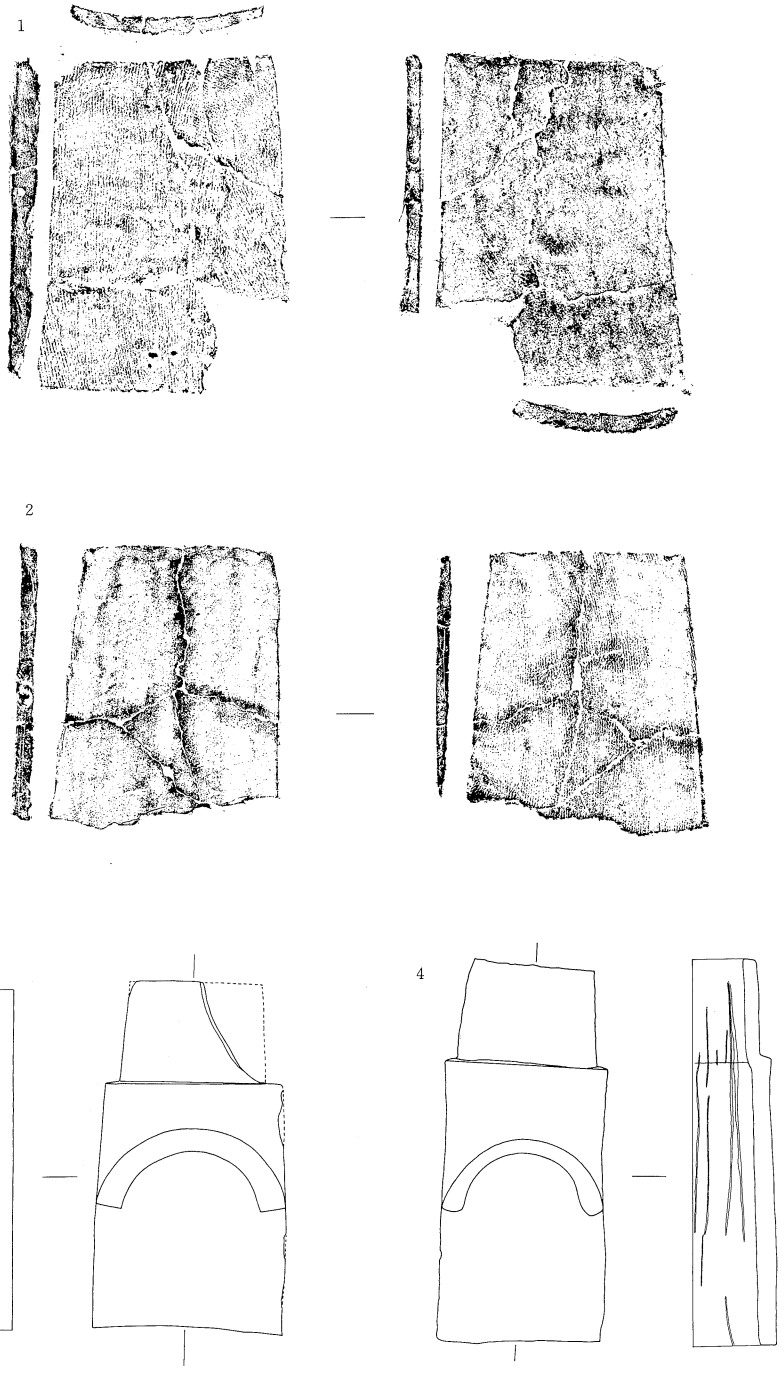
図版29　C 地区出土遺物(3)



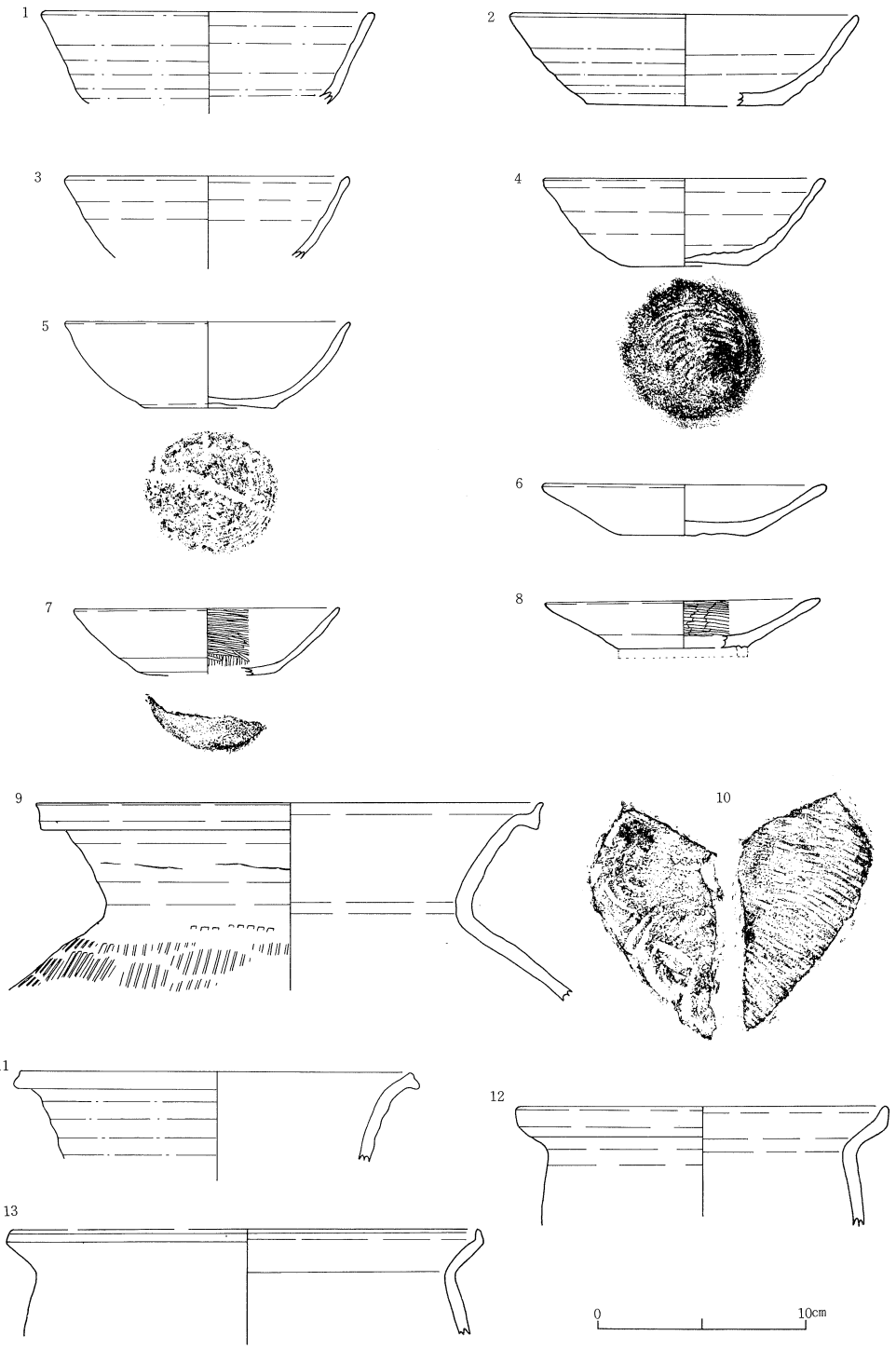
図版30　C 地区出土遺物(4)



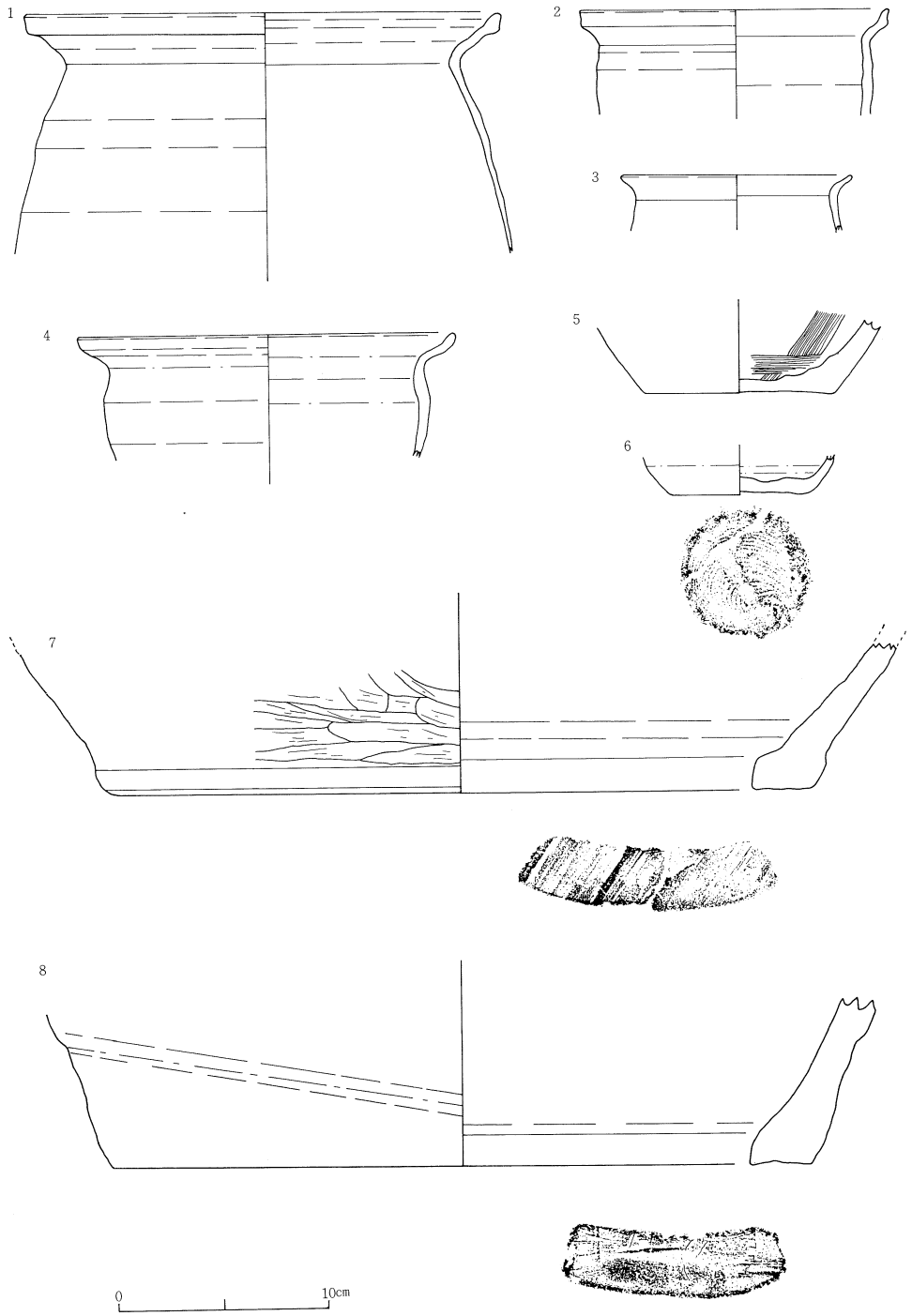
図版31　C 地区出土遺物(5)



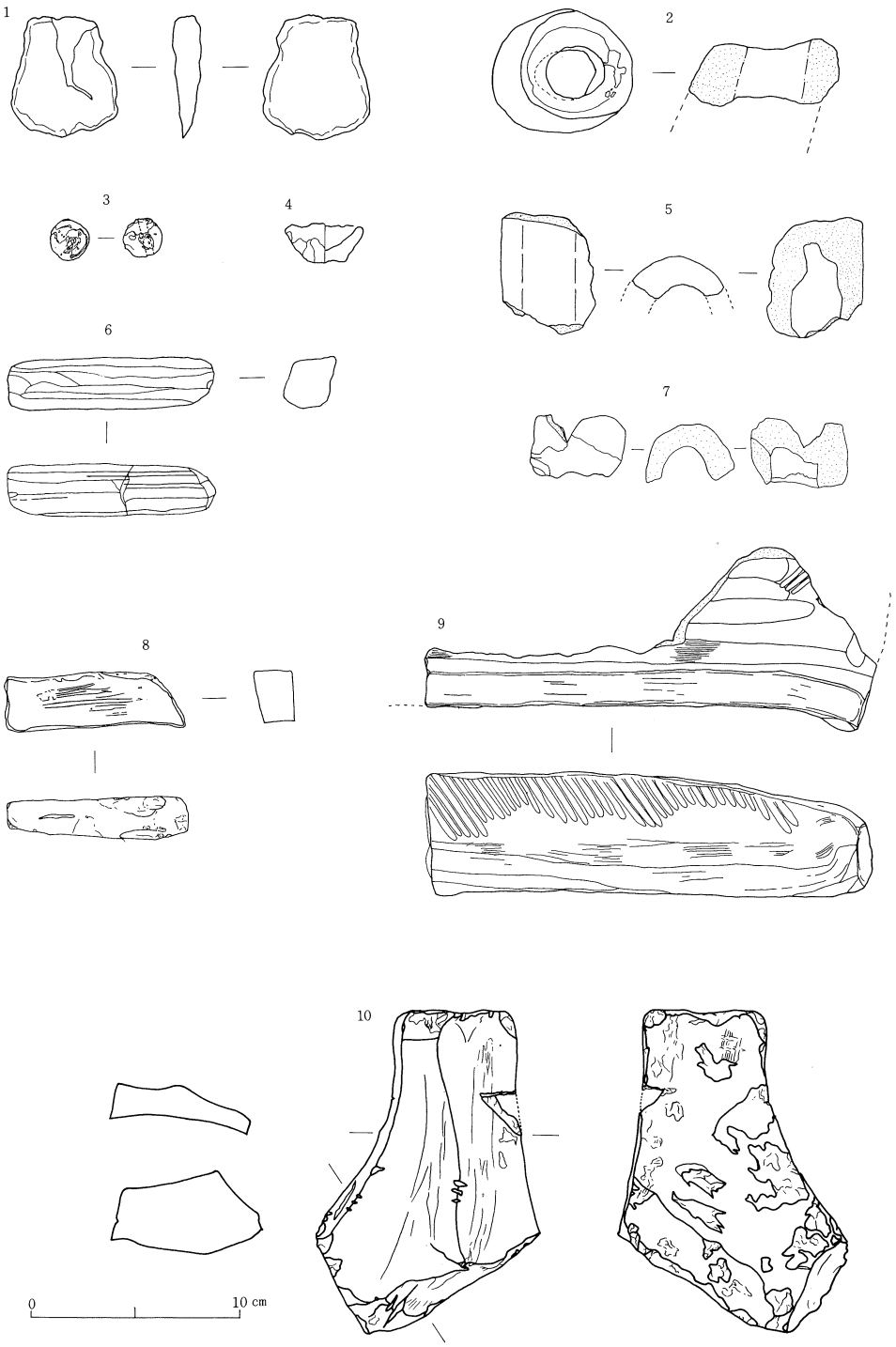
図版32　C 地区出土遺物(6)



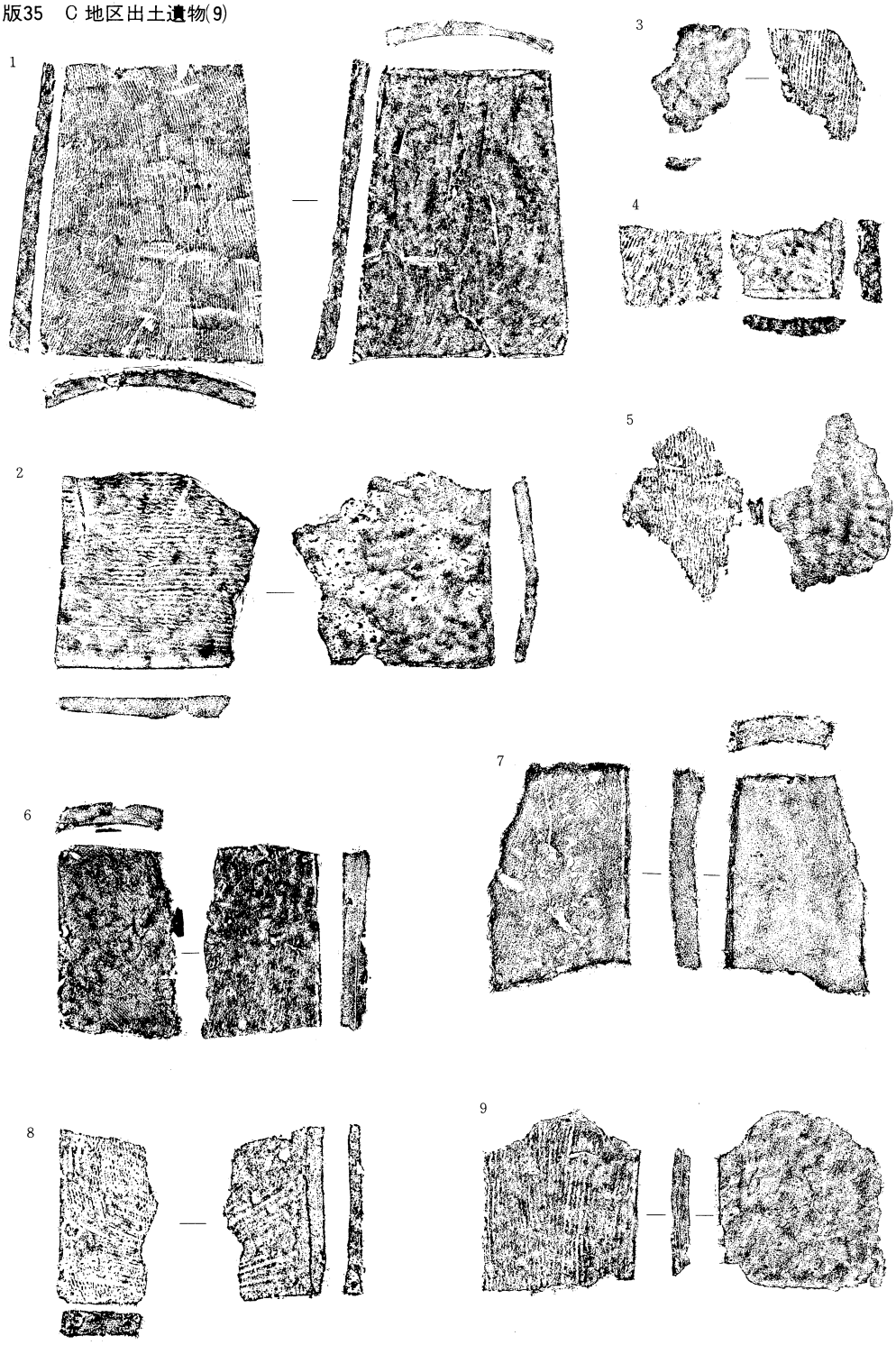
図版33　C 地区出土遺物(7)



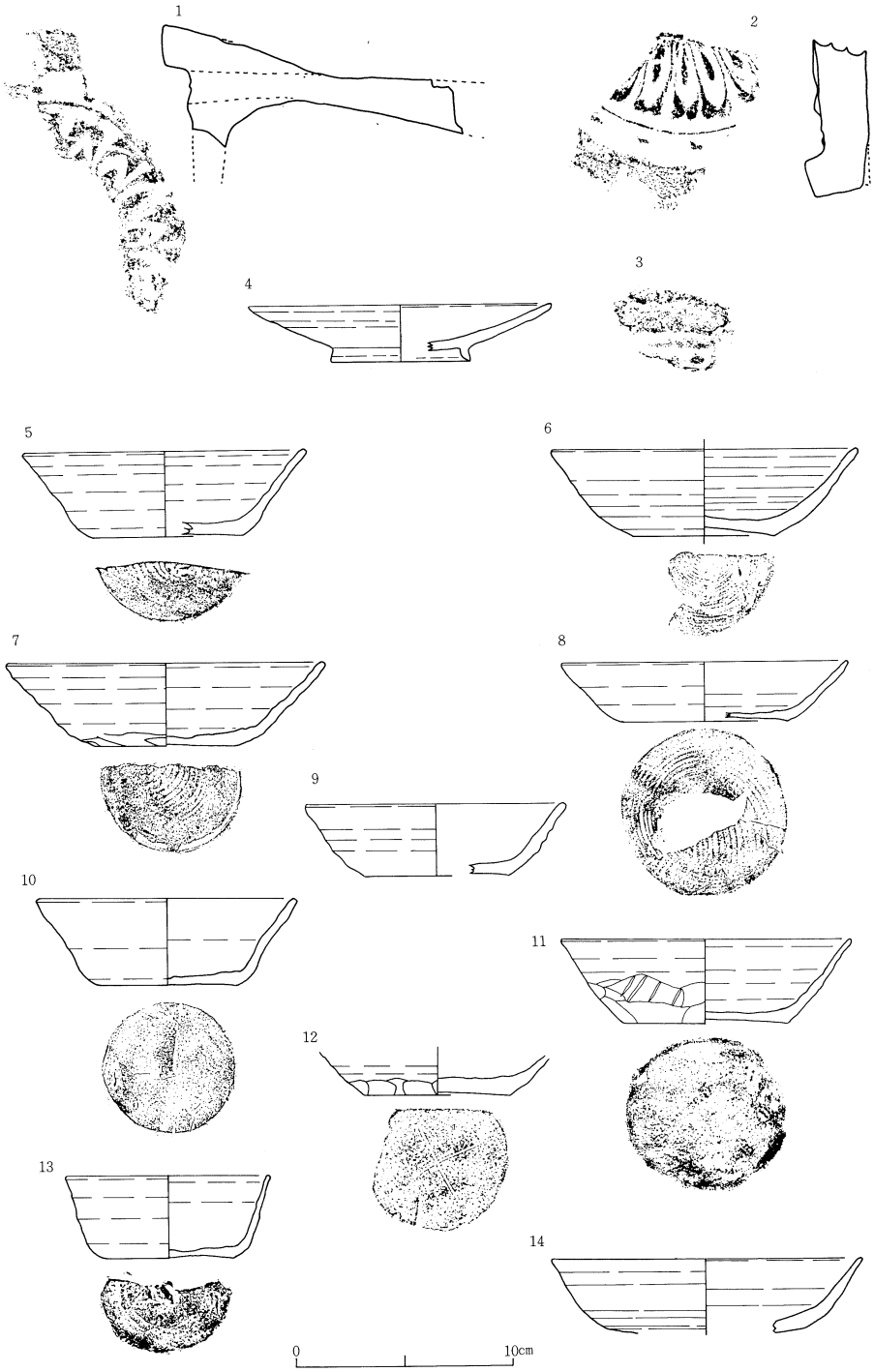
図版34　C 地区出土遺物(8)



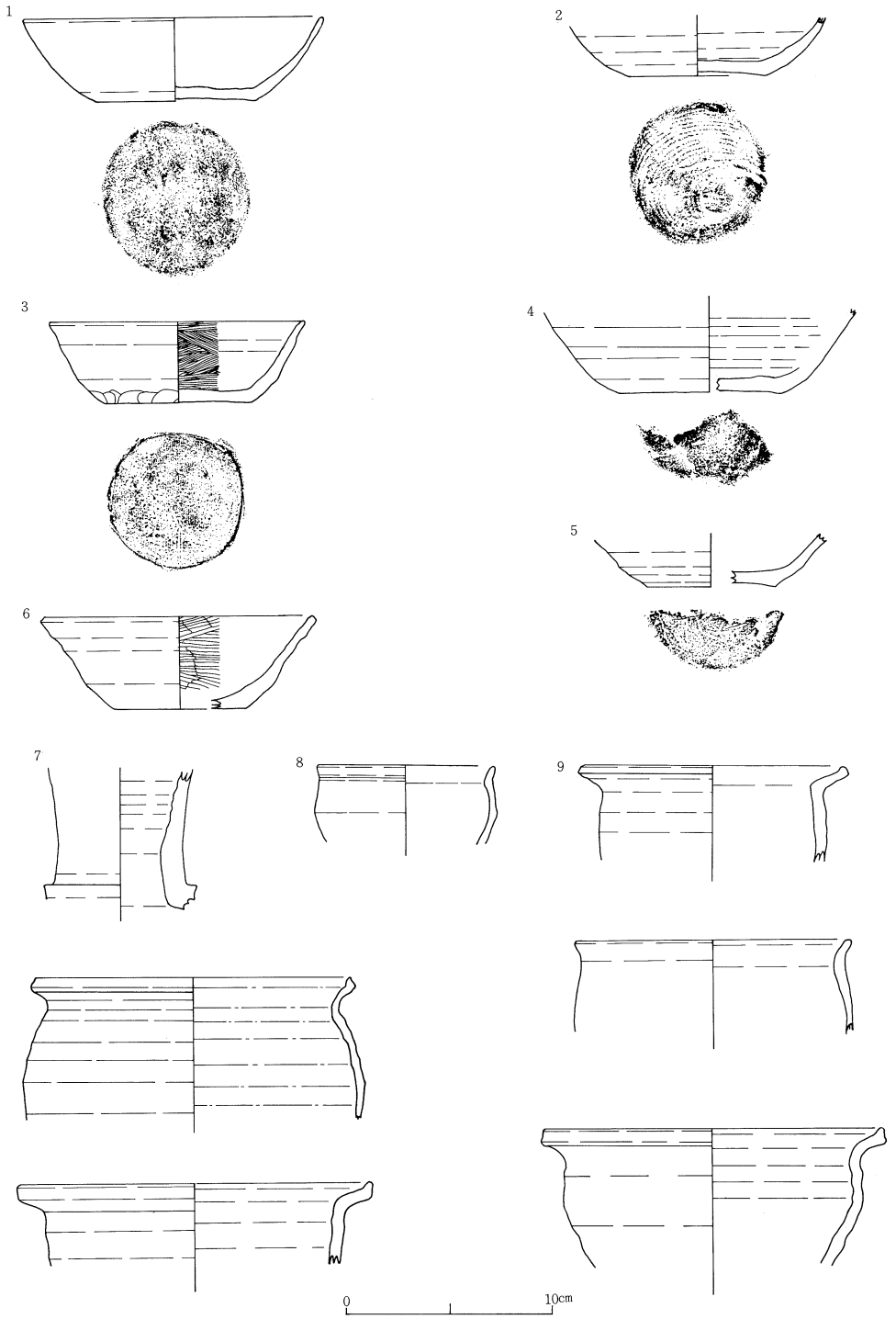
図版35　C 地区出土遺物(9)



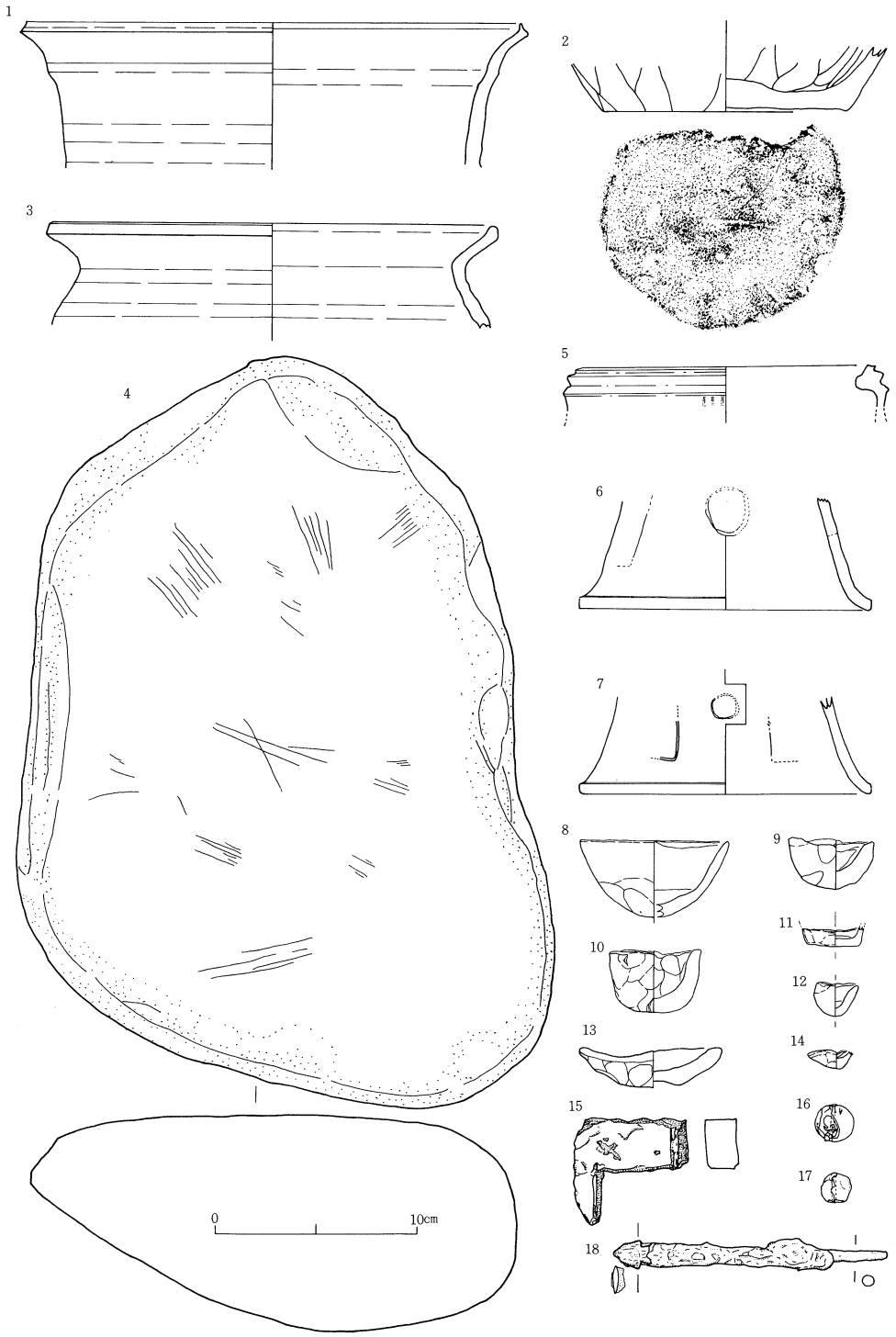
図版36　C 地区出土遺物(10)



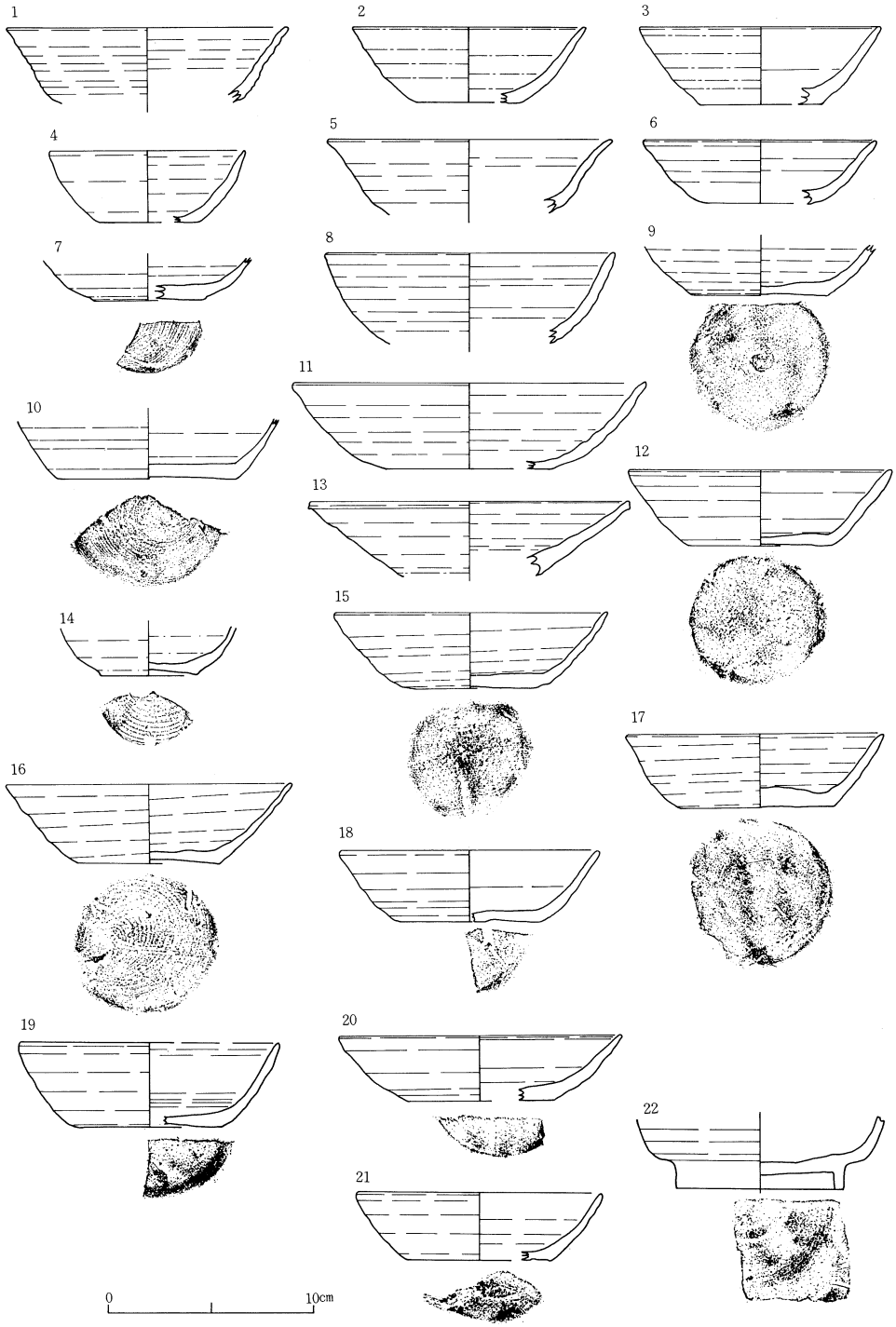
図版37　C 地区出土遺物(Ⅱ)



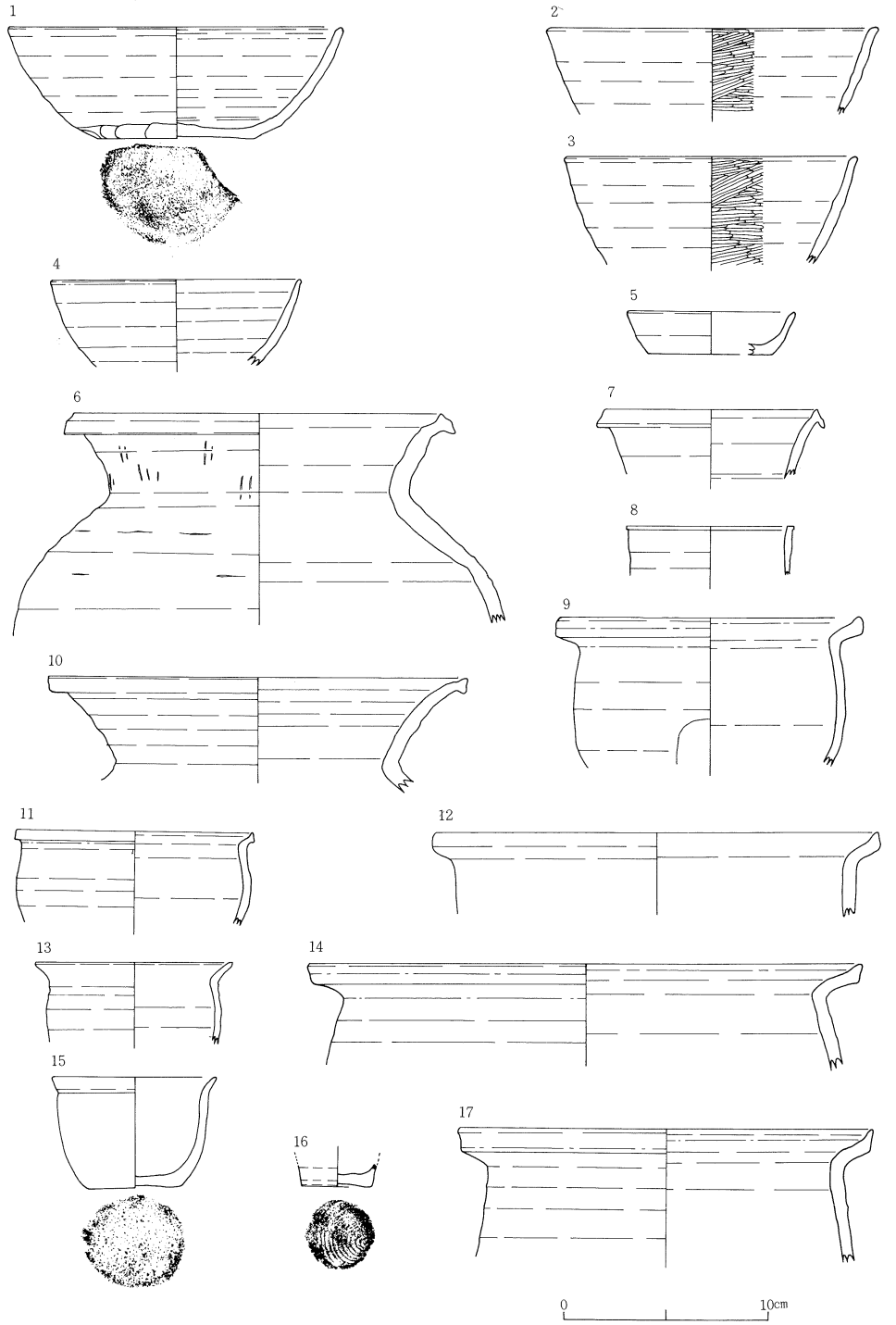
図版38　C 地区出土遺物(12)



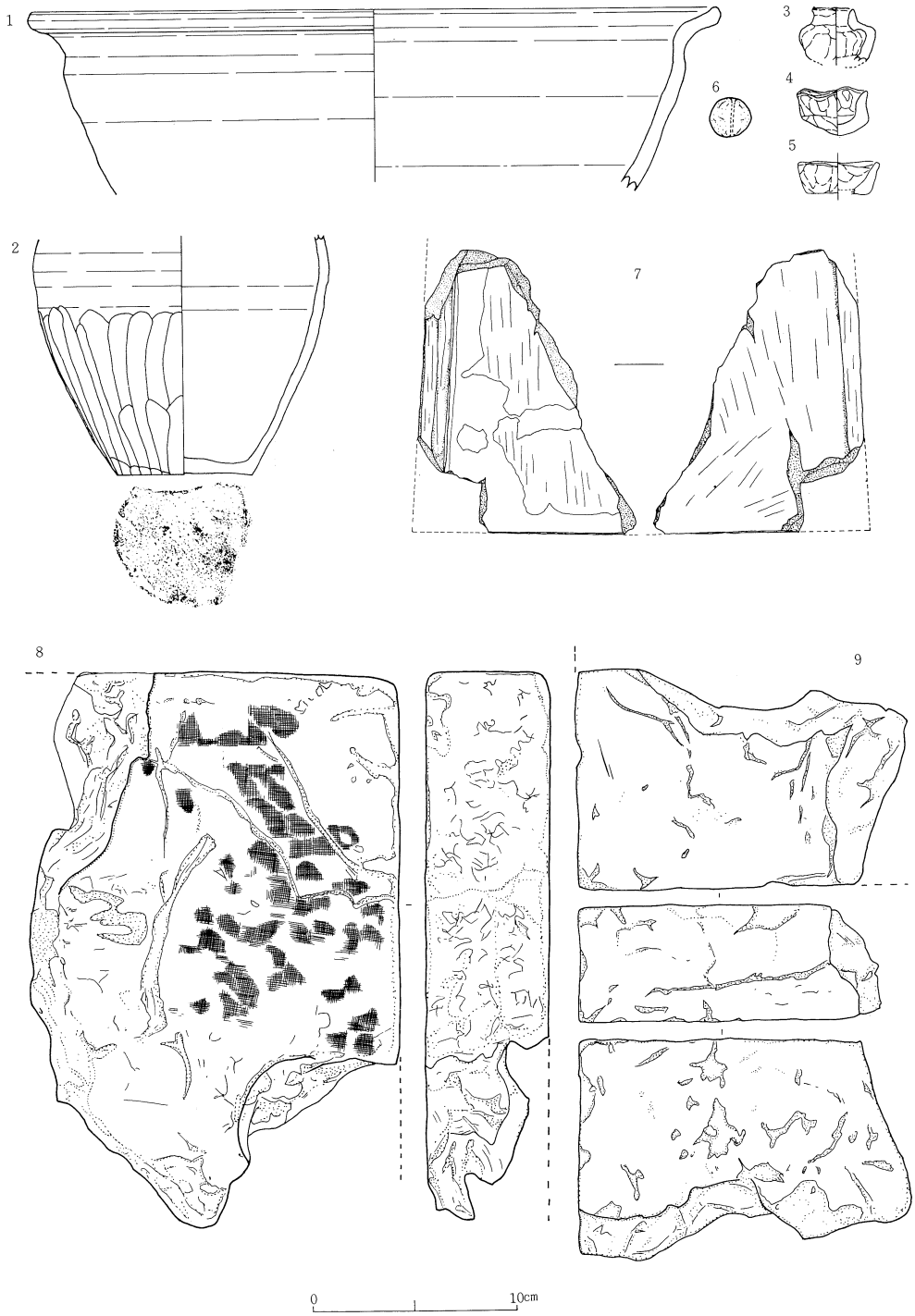
図版39　C 地区出土遺物(13)



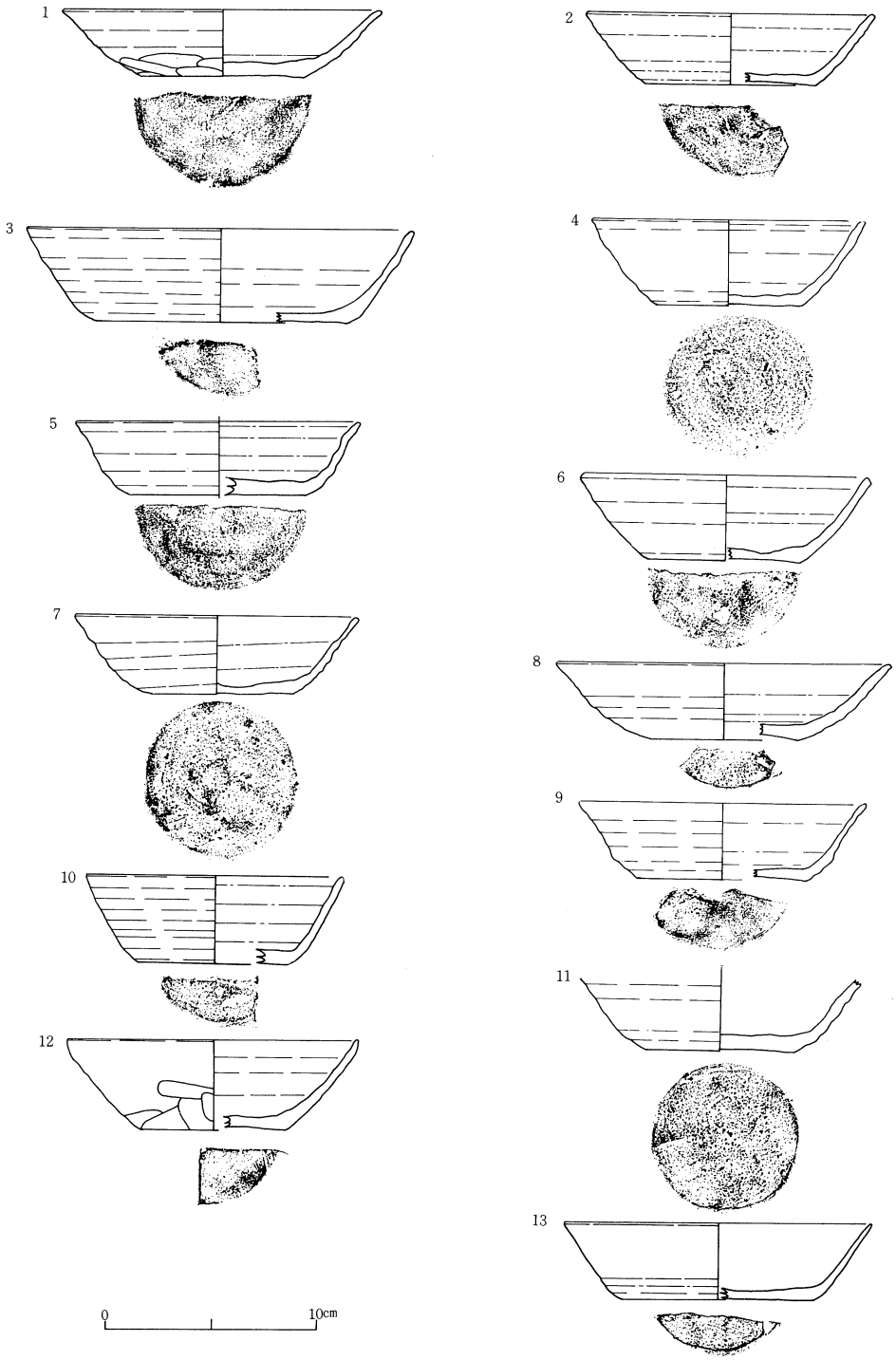
図版40　C 地区出土遺物(14)



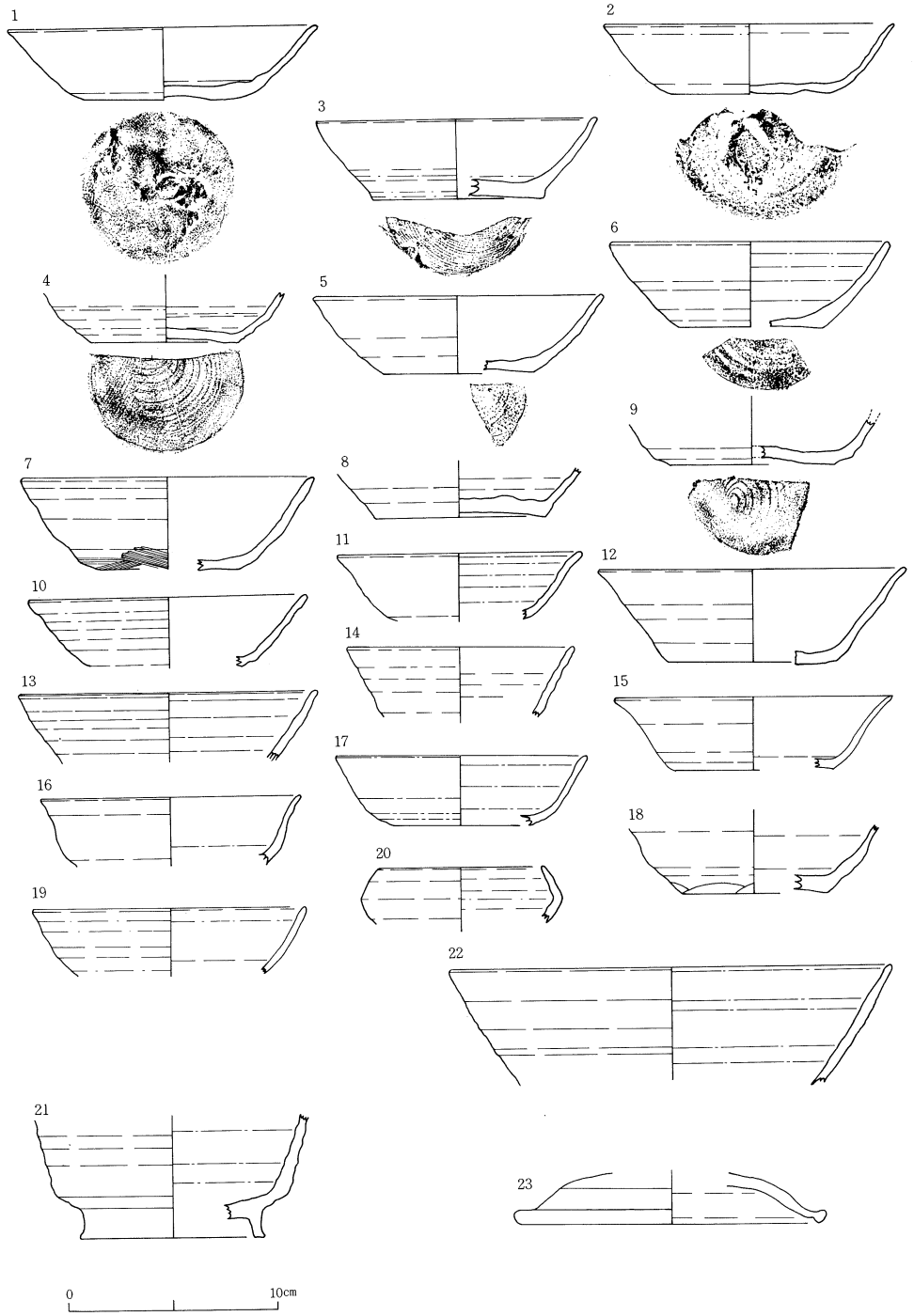
図版41　C 地区出土遺物(15)



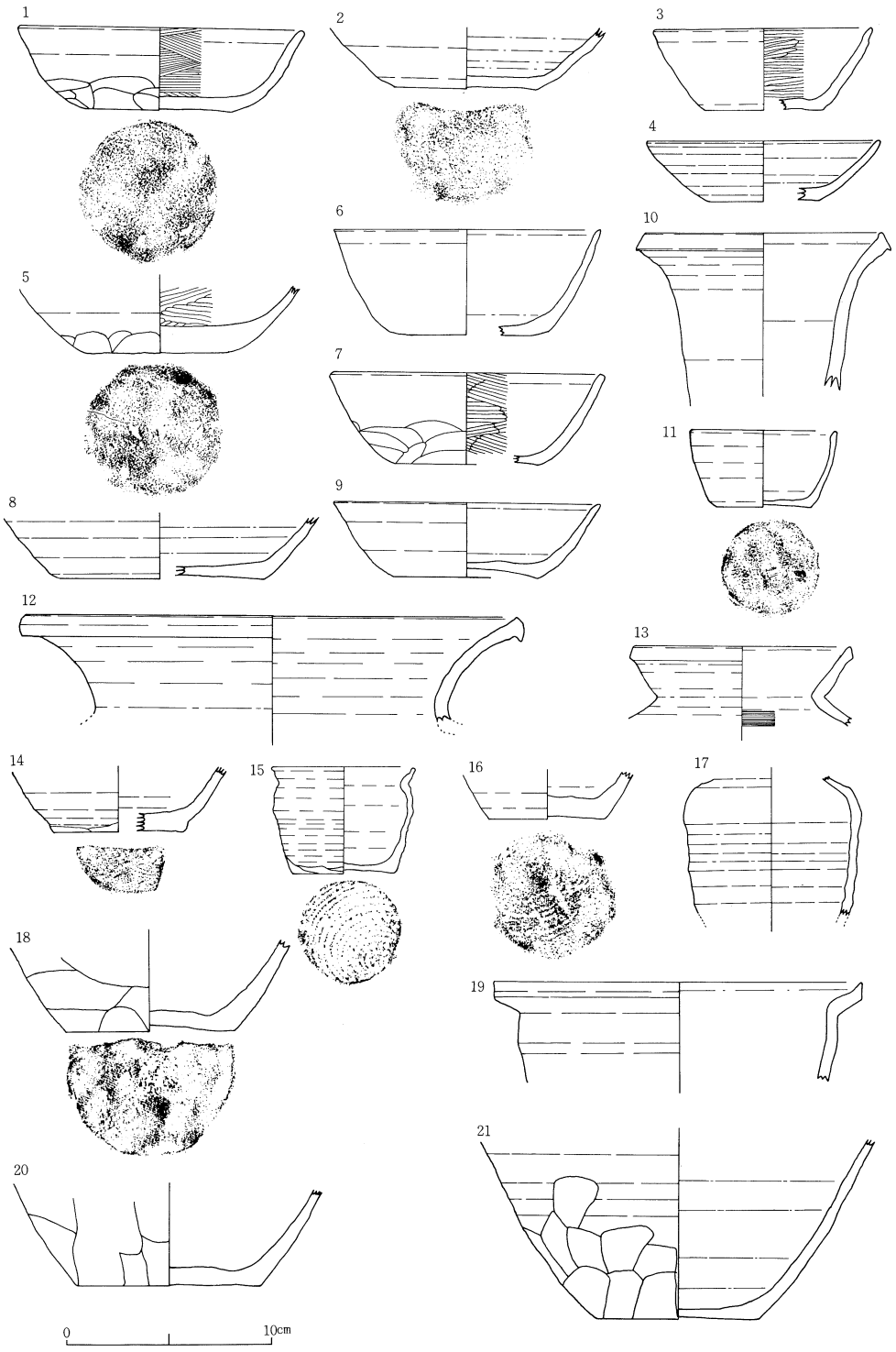
図版42　C 地区出土遺物(16)



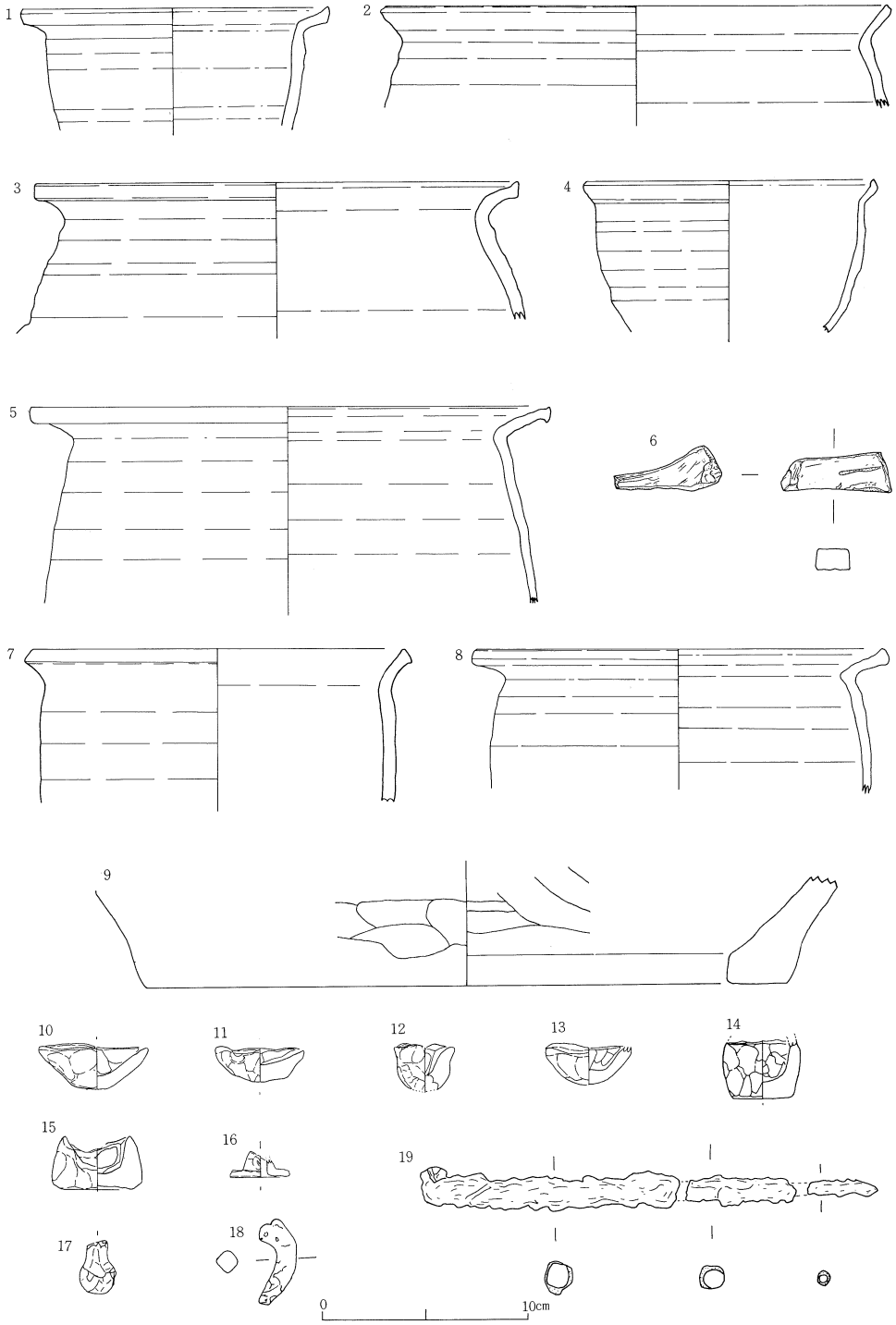
図版43　C 地区出土遺物(17)



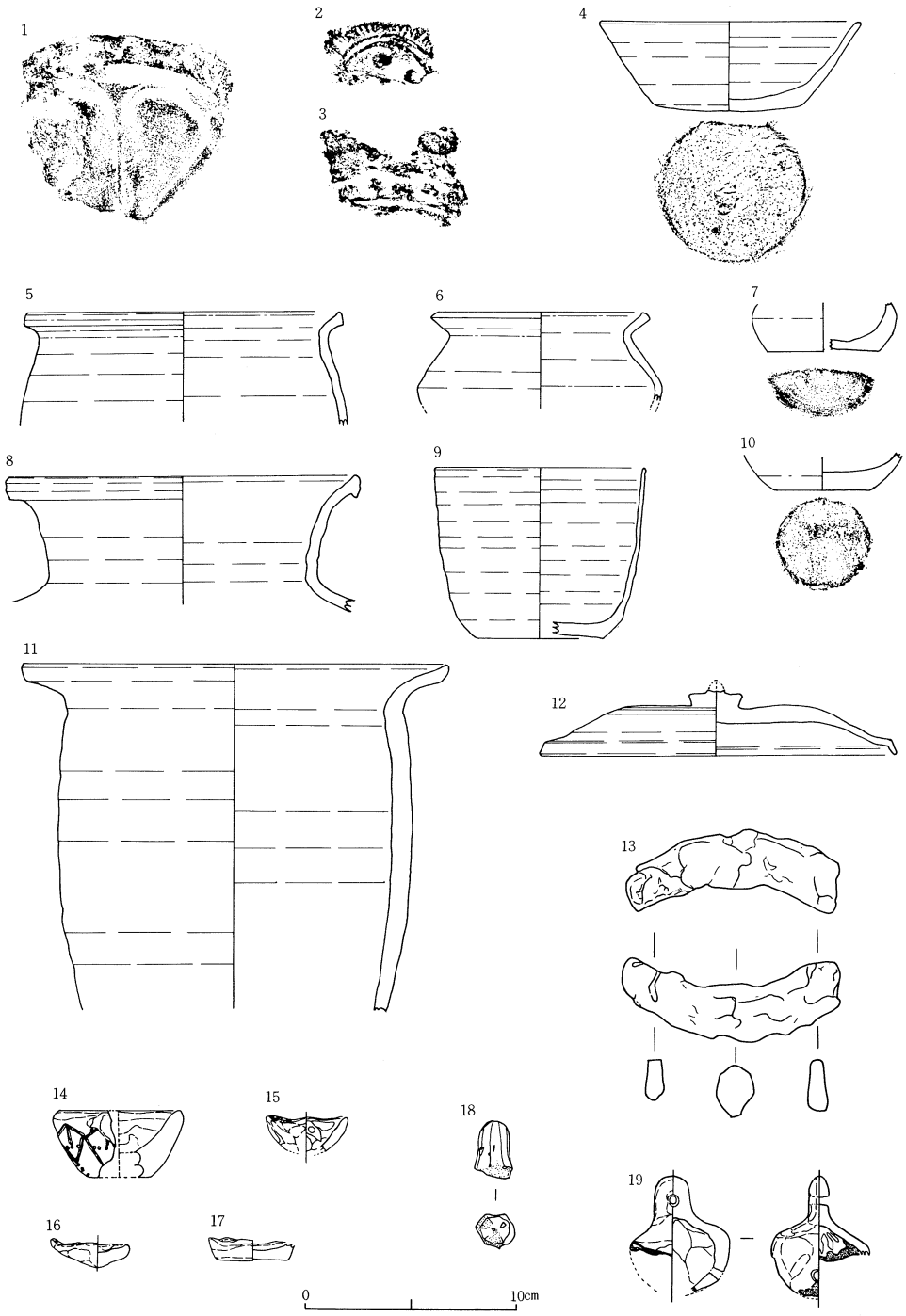
図版44　C 地区出土遺物(18)



図版45　C 地区出土遺物(19)

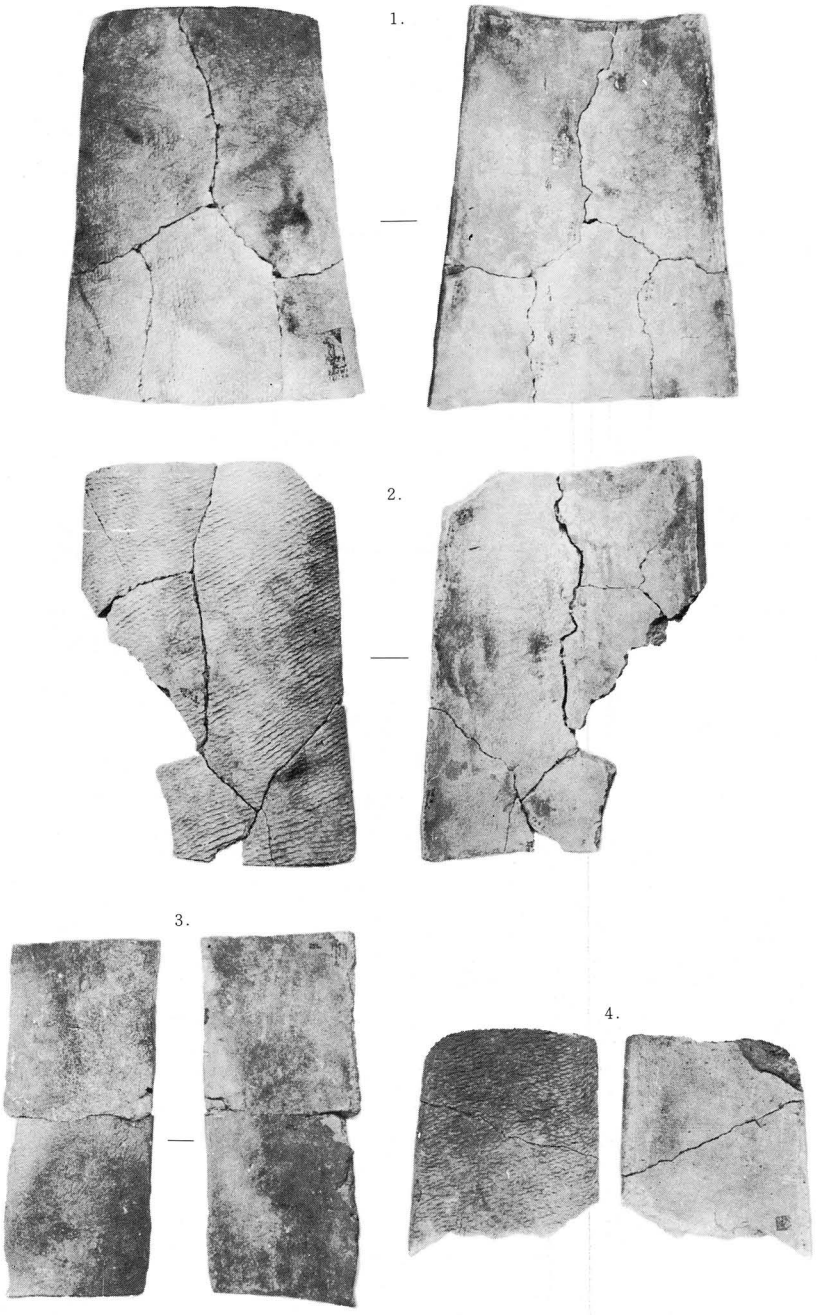


図版46　C 地区出土遺物(20)

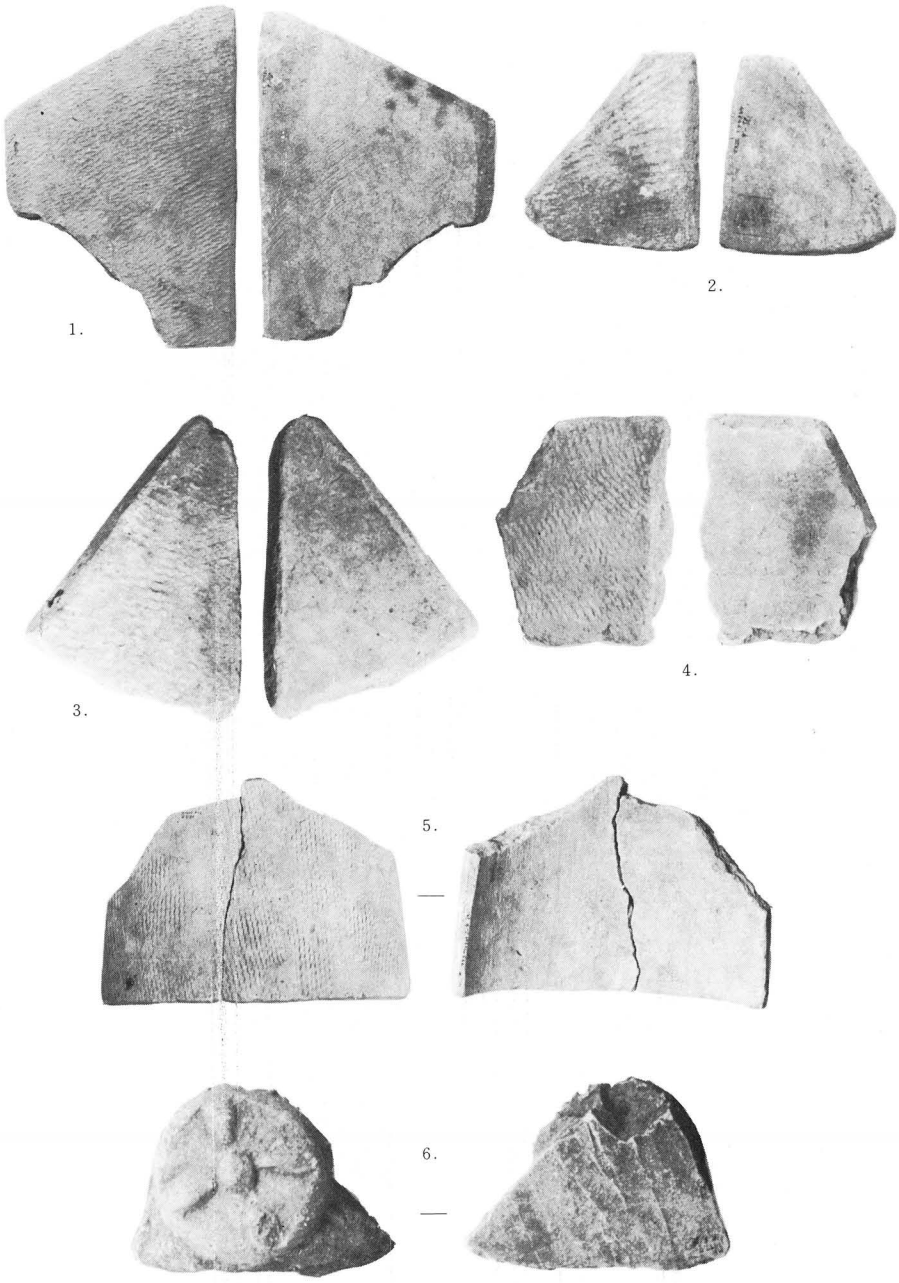


図版47　C 地区出土遺物(21)

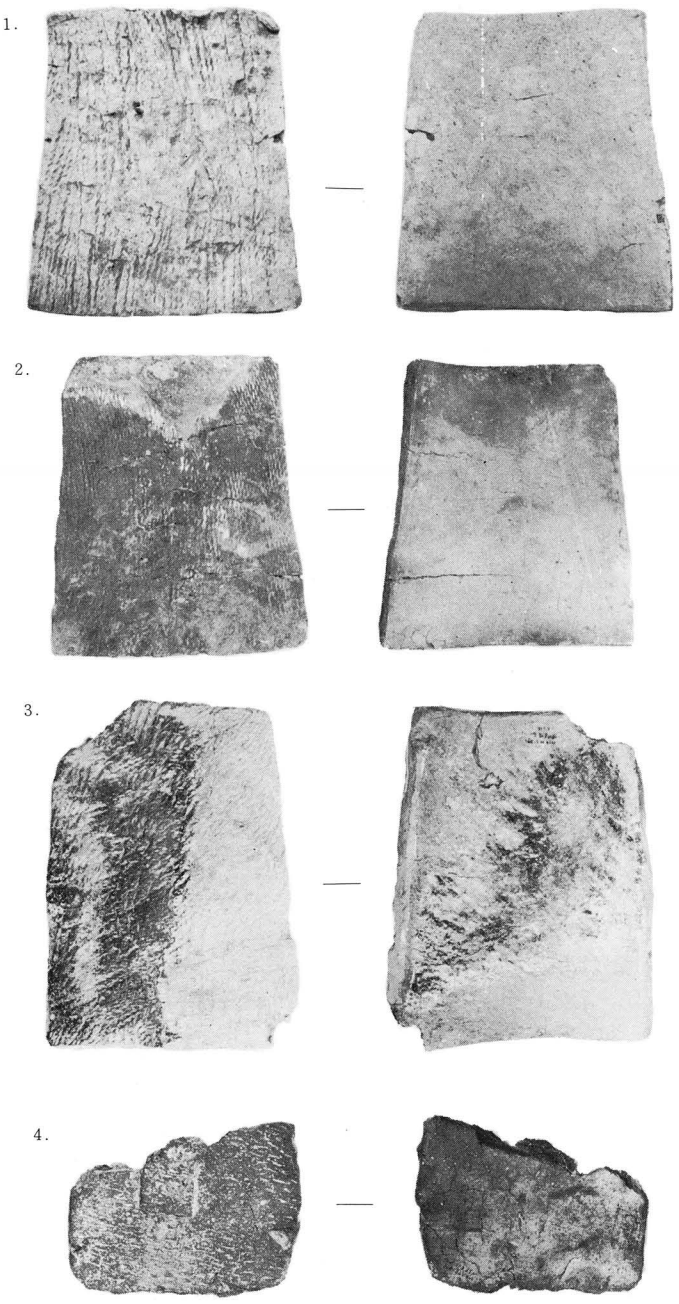
写真図版Ⅰ



写真図版 2

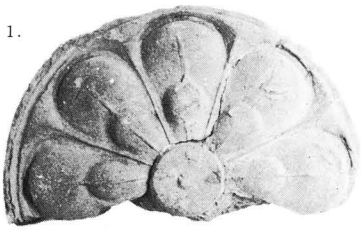


写真図版 3

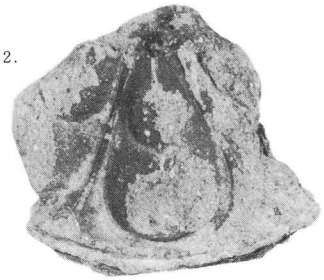


写真図版 4

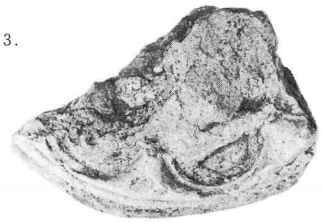
1.



2.

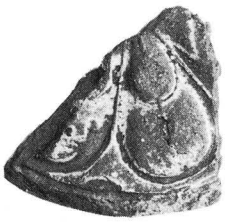


3.

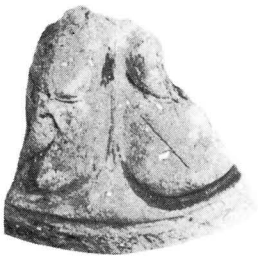


4.

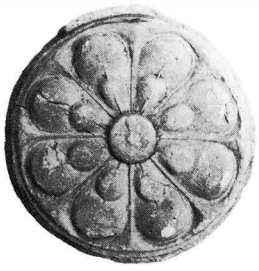
5.



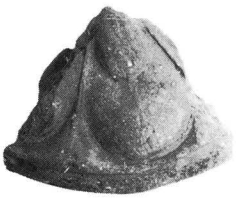
6.



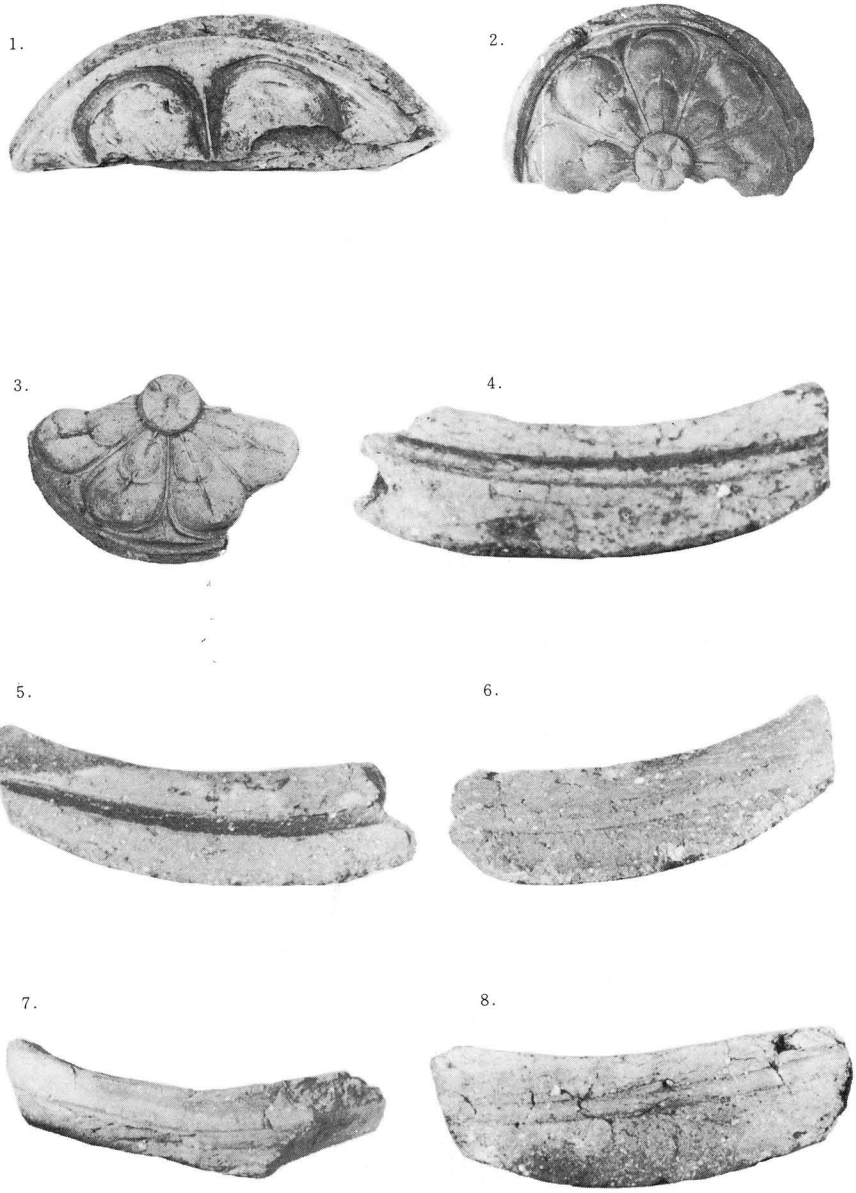
7.



8.

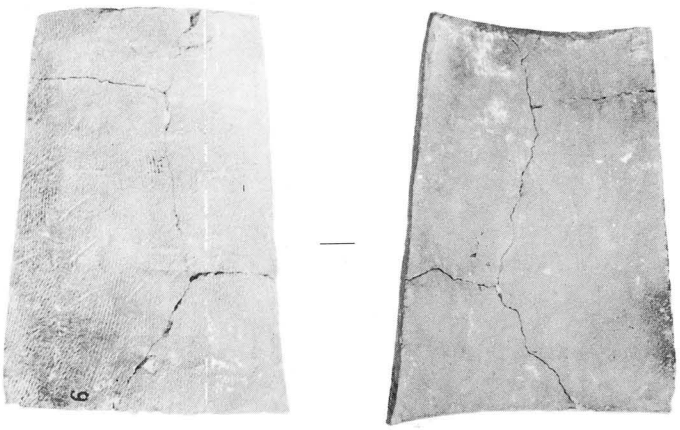


写真図版 5

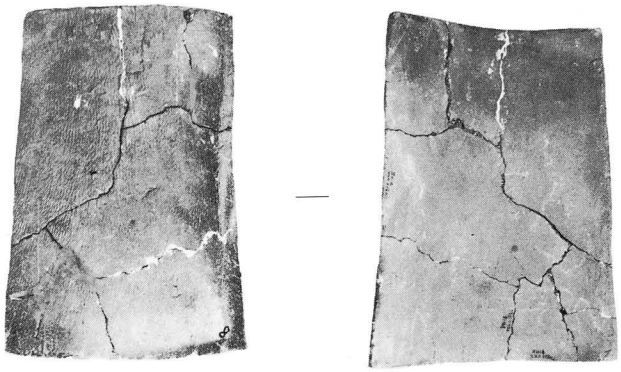


写真図版 6

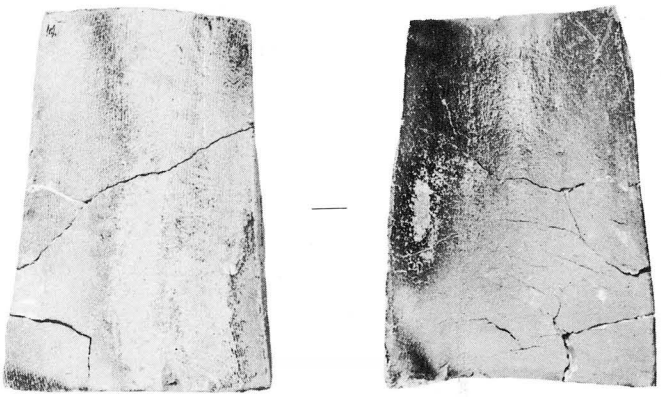
1.



2.

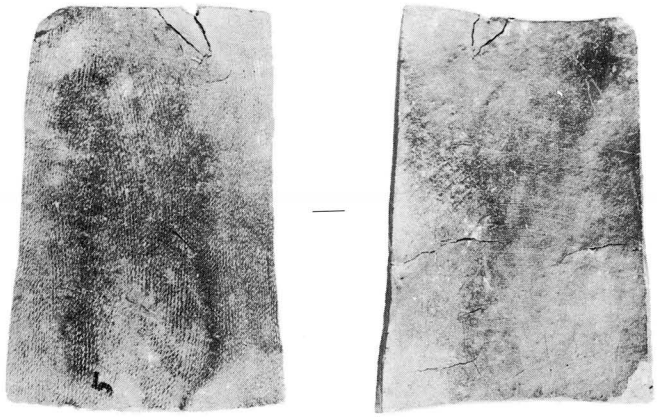


3.

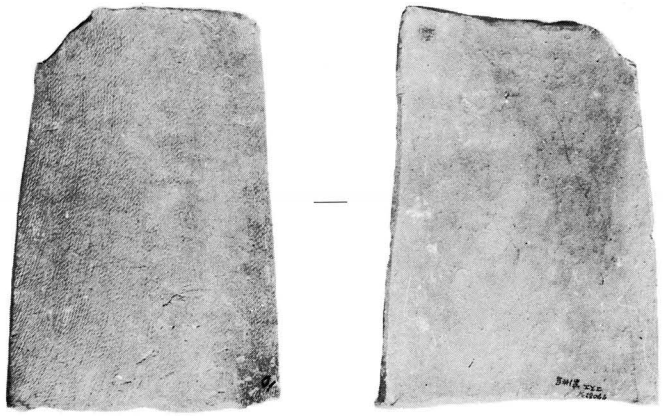


写真図版 7

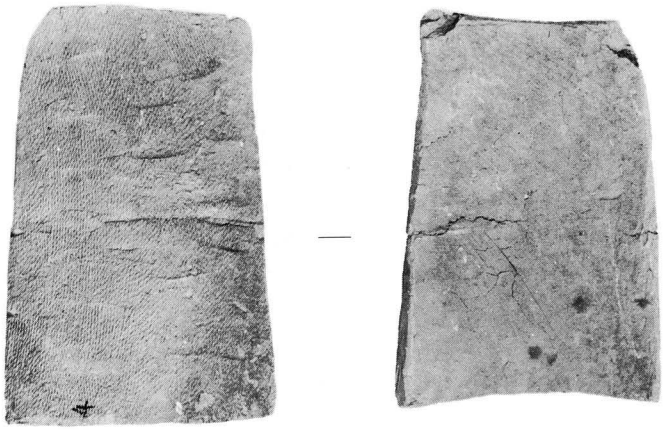
1.



2.

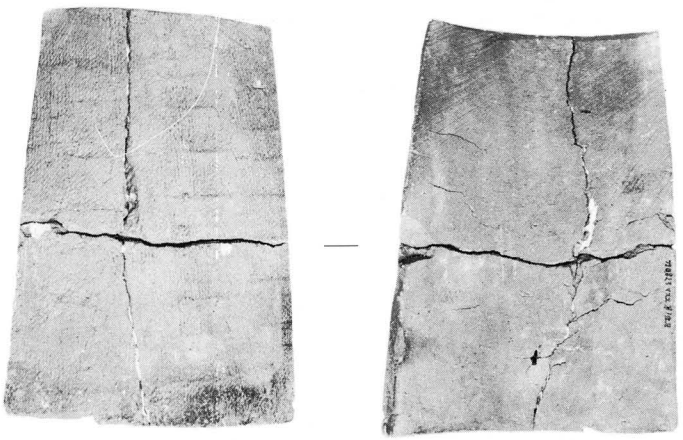


3.

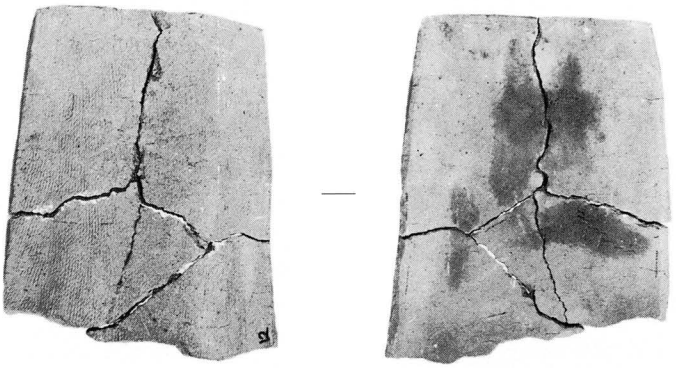


写真図版 8

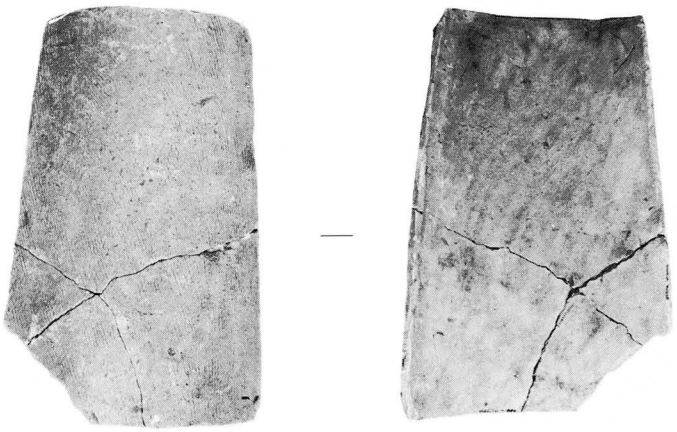
1.



2.

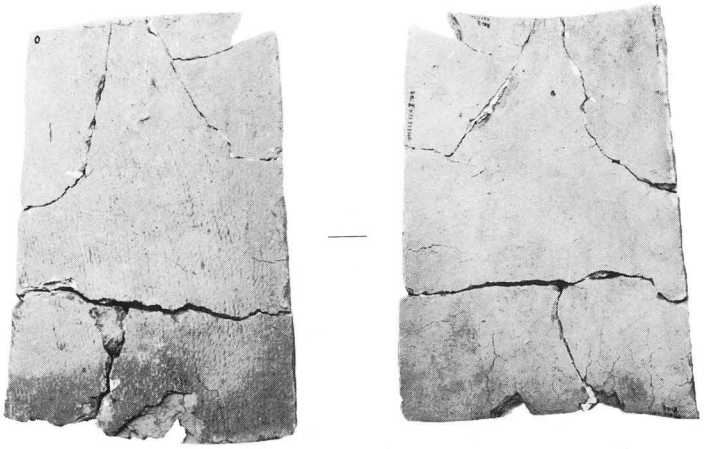


3.

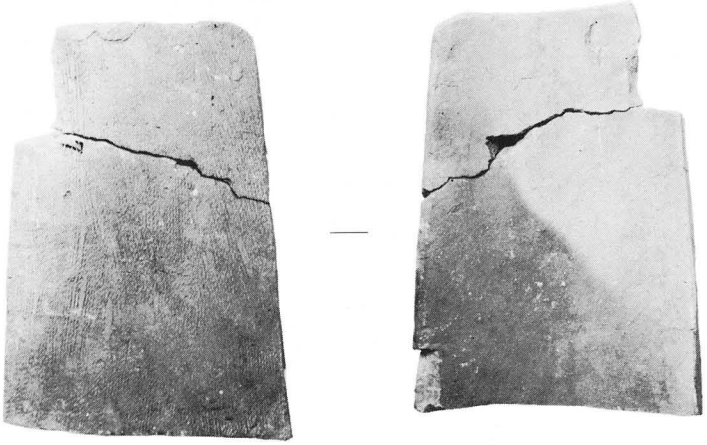


写真図版 9

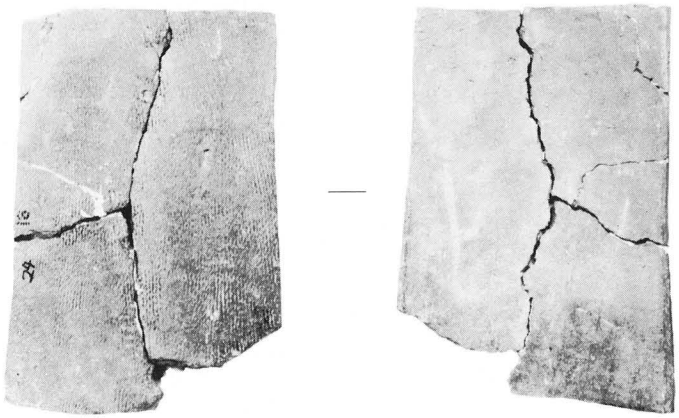
1.



2.

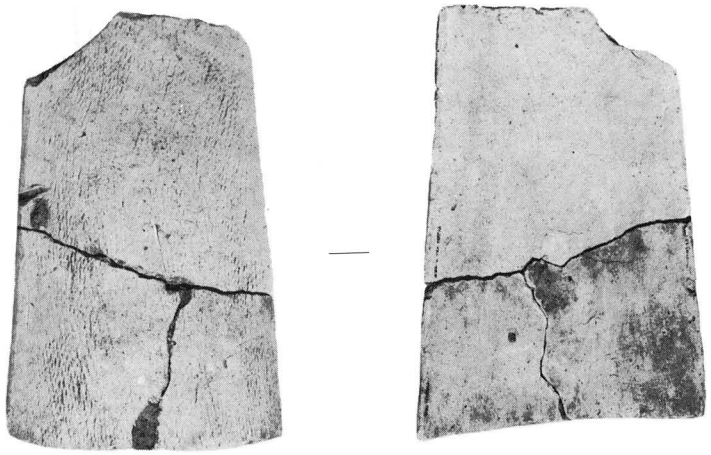


3.

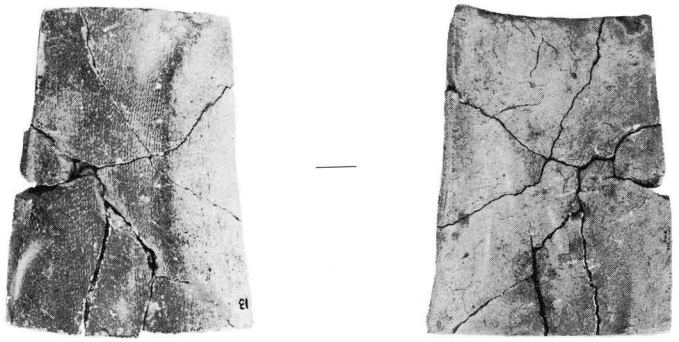


写真図版10

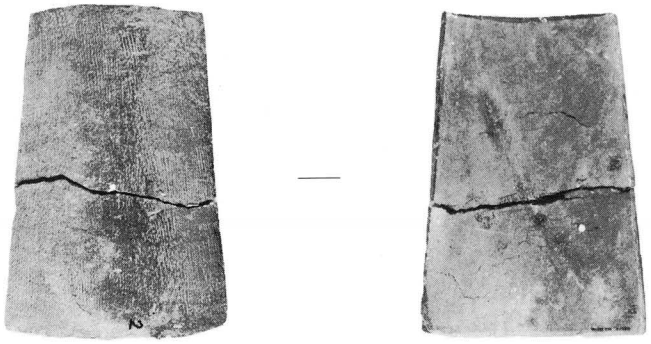
1.



2.



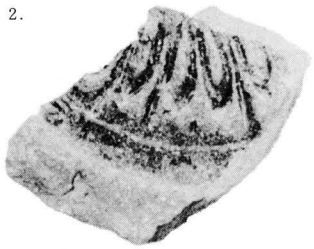
3.



写真図版11

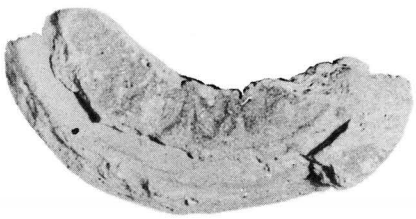
1.

2.

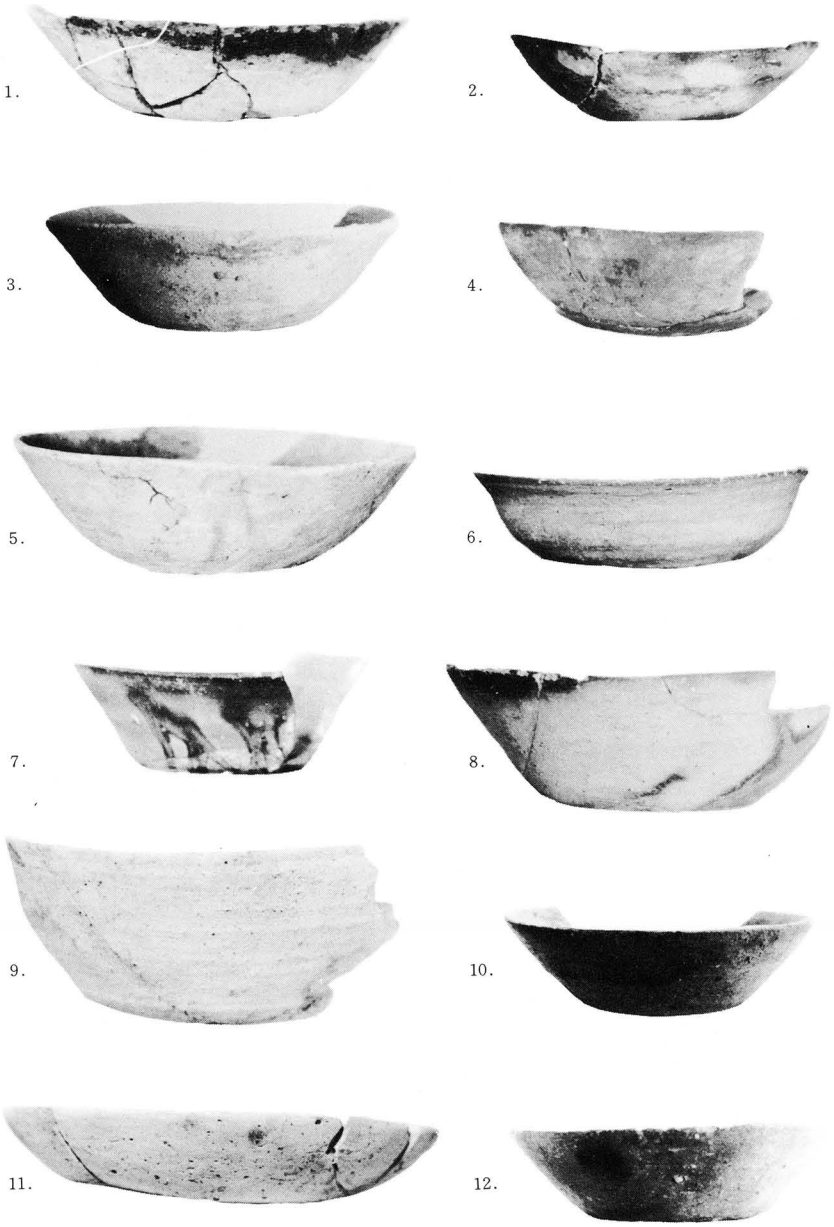


3.

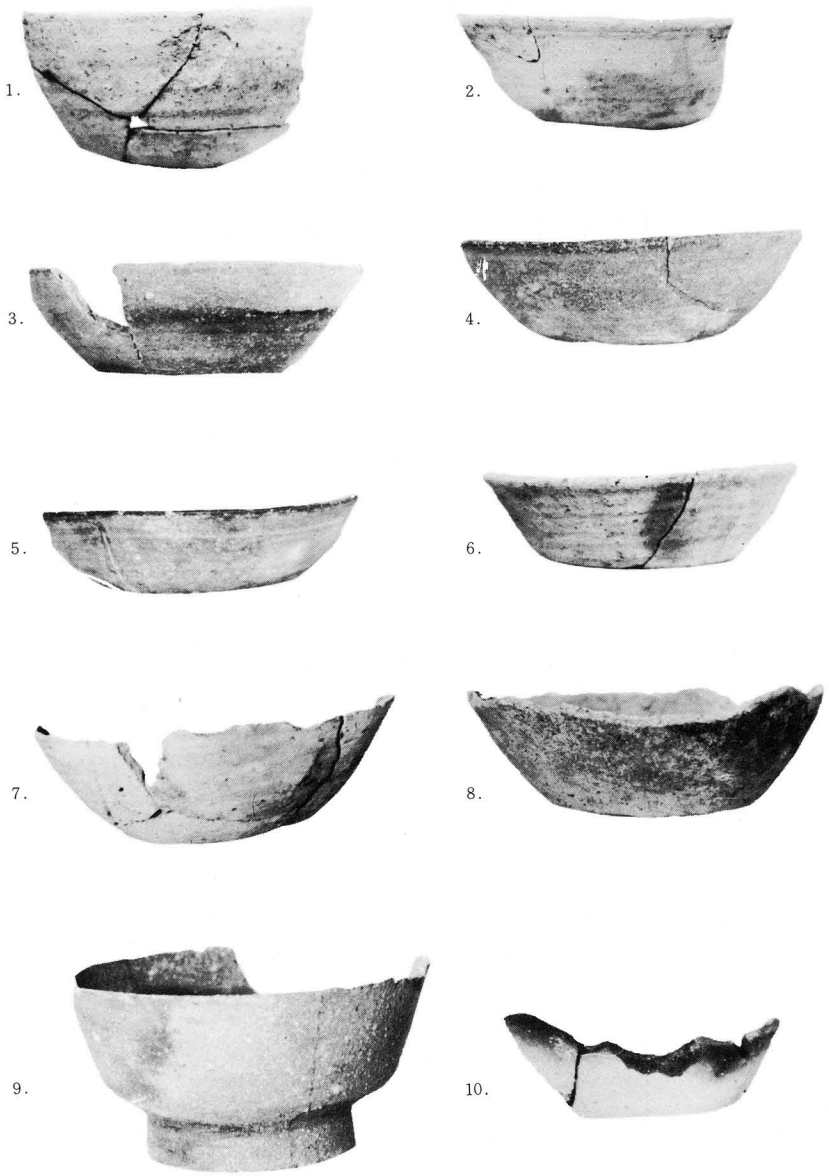
4.



写真図版12



写真図版13



写真図版14

1.

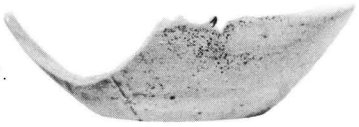
2.

3.

4.

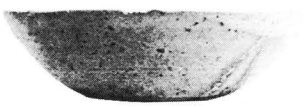
5.

6.

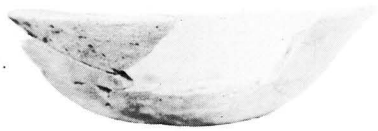


7.

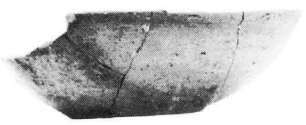
8.



9.



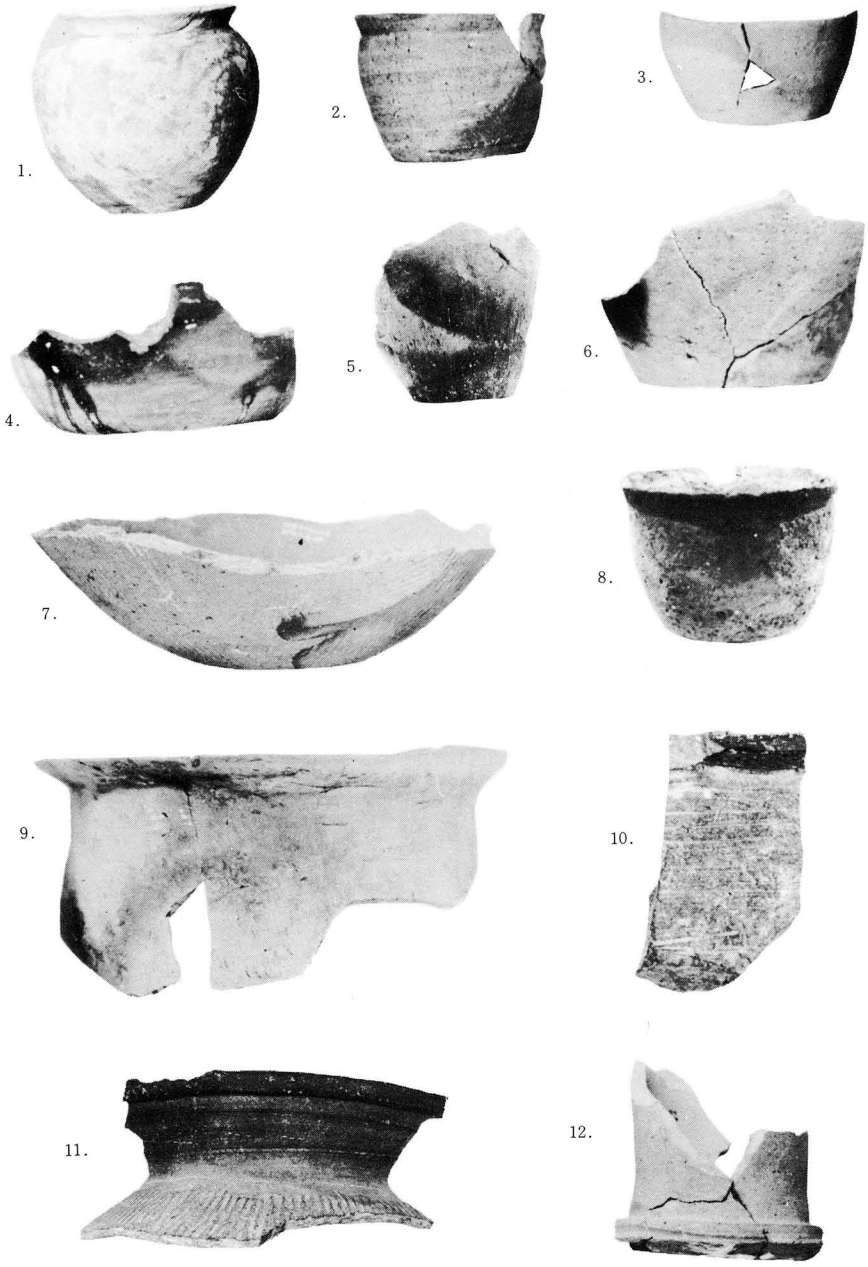
10.



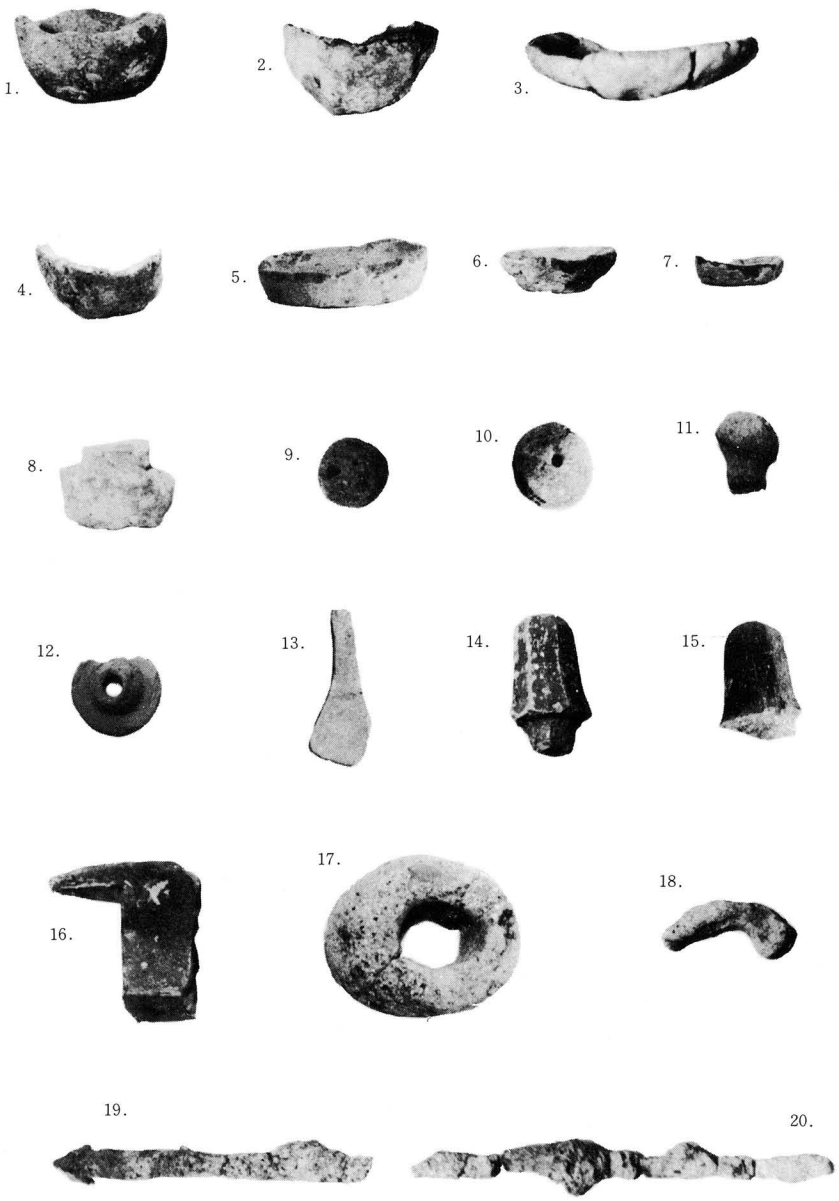
11.

12.

写真図版15

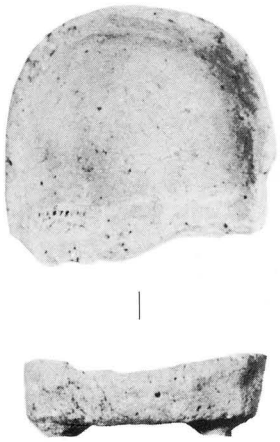


写真図版16

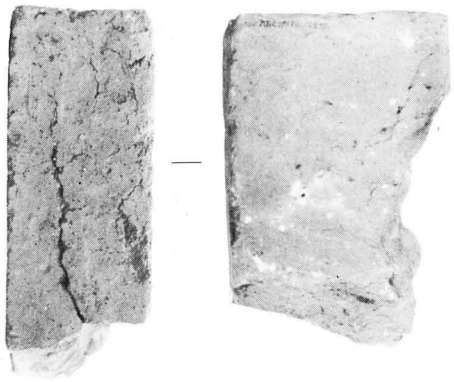


写真図版17

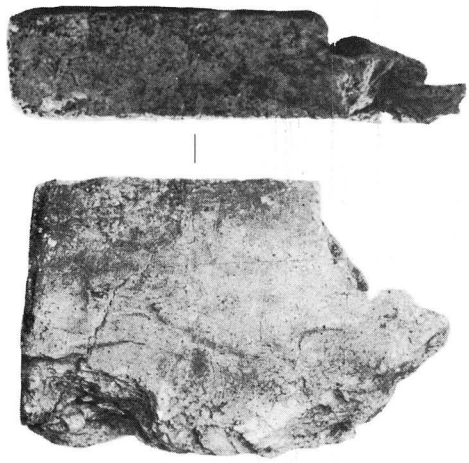
1.



2.



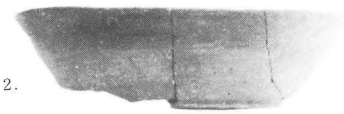
3.



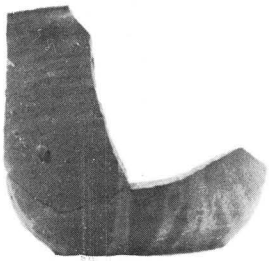
写真図版18

1.

2.



3.

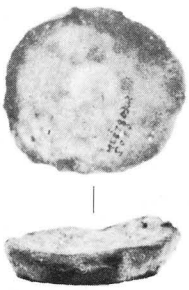


4.

5.

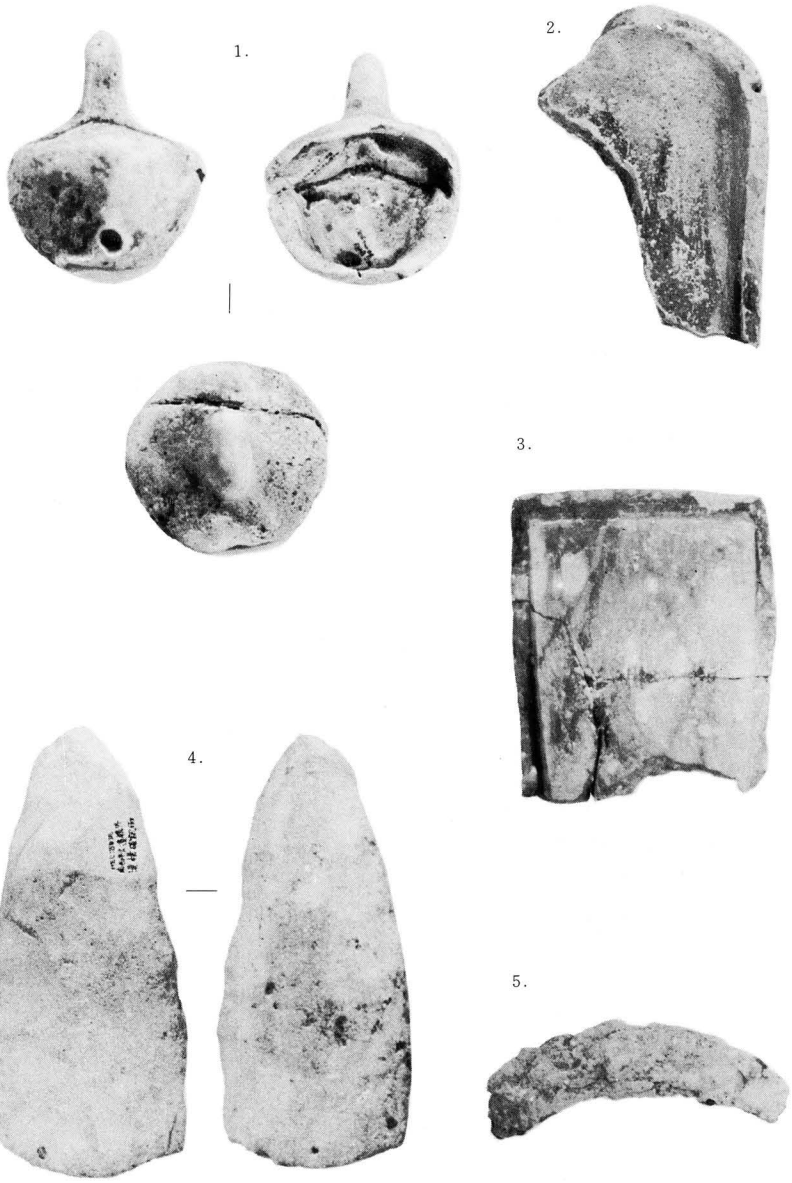
6.

7.



8.

写真図版19



A地区出土遺物観察表

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
1－1	平瓦 No.4	第1窯跡 敷瓦	凸面　縄目叩、縦方向 凹面　布目6×6、糸切痕、大部分スリケシ 焼成堅い、色調赤褐色、胎土砂粒含む、	写真図版1－1
1－2	平瓦 ヘラ書文字瓦 No.628	第1窯跡 敷瓦	凸面　縄目叩、縦方向、一部スリケシ コーナー端に「嶋比(？)」のヘラ書き 凹面　全面スリケシ 焼成堅い、色調褐灰色、胎土砂粒含む	写真図版1－3
1－3	平瓦 No.30	第1窯跡	凸面　縄目叩、斜方向 凹面　布目7×6、大部分スリケシ 焼成堅い、色調褐灰色、胎土雲母含む	写真図版1－2
1－4	道具瓦 No.1	第1窯跡	凸面　縄目叩、斜方向 凹面　布目6×5、幅が狭く熨斗瓦か、 焼成堅い、色調明赤灰色、胎土小石含む	写真図版1－4
1－5	道具瓦 No.21	第1窯跡	凸面　縄目叩斜方向、端を切りとってある。 凹面　布目8×6、熨斗瓦か 焼成堅い、色調褐灰色、胎土砂粒含む	
1－6	平瓦 No.22	第1窯跡	凸面　縄目叩斜方向、一部縦方向に布目痕 凹面　布目6×5、ヘラケズリ痕有り 焼成堅い、色調褐灰色、胎土砂粒含む	
1－7	平瓦 No.11	第1窯跡	凸面　縄目叩斜方向、縄目の上に一部布目痕 凹面　布目スリケシ 焼成堅い、色調にぶい橙色、胎土砂粒含む	
1－8	道具瓦 No.12	第1窯跡	凸面　縄目叩斜方向、端を切りとってある。 凹面　布目大部分スリケシ 焼成堅い、色調にぶい橙色、胎土砂粒含む	写真図版2－4
1－9	道具瓦 No.179	第1窯跡	凸面　縄目叩斜方向、端を切りとってある。 凹面　布目大部分スリケシ 焼成ややもろい、色調浅黄橙、胎土雲母・小石含む。	
2－1	道具瓦 No.5	第1窯跡	凸面　縄目叩縦方向、一部スリケシ・ナデ 凹面　布目6×5、一部スリケシ、糸切痕 焼成堅い、色調淡赤橙色、胎土砂粒含む。	
2－2	平瓦 No.13	第1窯跡	凸面　縄目叩縦方向 凹面　布目7×6、全面スリケシ、わずかに布目有り。 焼成もろい、色調淡赤橙色、胎土雲母含む。	写真図版2－5
2－3	平瓦 No.10	第1窯跡	凸面　縄目叩縦方向 凹面　布目6×7 焼成堅い、色調にぶい橙色、胎土少々砂含む。	
2－4	平瓦 No.2	第1窯跡	凸面　縄目叩斜方向、一部スリケシまたはナデ 叩板の側面で叩いた様な痕あり。 凹面　布目6×5、一部スリケシ、布目の他に斜線 焼成堅い、色調にぶい橙色、胎土砂粒含む。	
2－5	道具瓦 No.150	第1窯跡	凸面　縄目叩斜方向、一部布目痕6×7 凹面　布目5×5、一部スリケシ、熨斗瓦か 焼成堅い、色調淡橙色、胎土砂粒含む。	
2－6	道具瓦 No.56	第1窯跡	凸面　縄目叩斜方向、端を切りとってある。 凹面　全面スリケシ布目見えず、熨斗瓦か 焼成もろい、色調灰赤褐色、胎土雲母含む。	

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
2－7	平瓦 No.41	第1窯跡	凸面　縄目叩斜方向 凹面　布目全面スリケシ 焼成もろい、色調にぶい橙色、胎土雲母含む。	
2－8	道具瓦 No.34	第1窯跡	凸面　縄目叩斜方向、端を切りとってある。 凹面　布目全面スリケシ 焼成もろい、色調にぶい橙色、胎土雲母含む。	
2－9	道具瓦 No.3	第1窯跡	凸面　縄目叩方向、端を切りとってある。 凹面　布目6×5、糸切痕あり、熨斗瓦 焼成堅い、色調明褐灰色、胎土砂粒含む。	写真図版2－1
2－10	道具瓦 No.29	第1窯跡	凸面　縄目叩斜方向、端を切りとってある。 凹面　布目スリケシ、熨斗瓦か 焼成堅い、色調にぶい橙色、胎土砂粒含む。	
2－11	道具瓦 No.26	第1窯跡	凸面　縄目叩斜方向、一部布目痕あり。 凹面　布目スリケシ 焼成堅い、色調赤褐色、胎土砂粒含む。	写真図版2－2
2－12	道具瓦 No.23	第1窯跡	凸面　縄目叩斜方向、端を切りとってある。 凹面　布目スリケシ、ヘラケズリ痕あり。 焼成堅い、色調淡赤橙色、胎土砂粒含む。	写真図版2－3
2－13	道具瓦 No.24	第1窯跡	凸面　縄目叩斜方向交叉、端を切りとってある。 凹面　布目6×6、スリケシ、熨斗瓦か 焼成堅い、色調褐灰色、胎土砂粒多し。	
3－1	軒丸瓦 No.682	A－IIb11 12層	重文蓮華文。中房の蓮子の配置は1＋4。 蓮子は中央が円形、周囲が棍棒形。蓮子の延長は蓮弁にほぼ一致。 焼成堅い、色調灰白色、胎土緻密、雲母砂粒含む。	写真図版5－3
3－2	軒丸瓦 No.22	A－II 2	重弁蓮華文。蓮弁の大きさは、No.682と同様。 焼成堅い、色調灰白色、胎土緻密	
3－3	道具瓦 No.676	A地区 沢表採	重弁蓮華文鬼板か。中房上の蓮子は1＋4で中央が円形、周囲が棍棒形。 焼成堅い、色調灰白色、胎土砂粒・雲母含む。	写真図版2－6
3－4	軒丸瓦 No.693	A－1 表採	重弁蓮華文。間弁が観察できる。 焼成ややもろい、色調にぶい黄橙色、胎土石英小石粒含む。	
3－5	硯 風字硯 No.1	A－IIb9 5層	全体ケズリによって調整海は研磨 二脚か。 焼成堅い、色調灰色、胎土緻密	
3－6	硯 風字硯	A－II 8 3層	全体ケズリによって調整、海は研磨 焼成堅い、色調暗緑灰、胎土緻密	
3－7	須恵器 坏 No.6	A－II 8 3層	口縁外反しながら内湾、体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り、 回転ヘラ調整、火だすきあり。 焼成堅い、色調褐灰色、胎土砂粒含む。	
3－8	須恵器 坏 No.11	A－II 8 3層	口縁外反、体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り、 回転ヘラ調整 焼成堅い、色調灰白色、胎土石英砂粒含む。	
4－1	須恵器 坏 No.16	A－II 8 6層上面	口縁外反、体部ロクロナデ、底部切り離し不明。 手持ヘラケズリ調整、内面外面に黒斑あり。 焼成堅い、色調にぶい褐色、胎土砂粒含む。	No.5接合
4－2	須恵器 坏 No.13	A－I 8 3層	口縁外反し、上下に稜をもつおりかえし端部となす。 体部ロクロナデ、体部下端より底部周縁を手持ヘラケズリ、 底部静止糸切り 焼成堅い、色調橙色、一部黒褐色、胎土砂粒・石英を若干含む。	

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
4－3	須恵器 坏 No.314	A－II 8 3層上面	口縁外反、体部ロクロナデ、底部回転ヘラキリ。 黒はんが、内面、外面に見られる。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒石英を多量に含む。	
4－4	須恵器 坏 No.8	A－II 8 3層上面	口縁外反し立上る。体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り調整なし、ややあげ底。 焼成堅い。色調にぶい黄橙。胎土石英砂粒若干含む。	
4－5	須恵器 坏 No.152	A－Ib9 6層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部手持ヘラケズリか。 焼成堅い。色調灰色。胎土1㎜程の小石を含む。	
4－6	A－II 6 坏 No.291	A－II 6 3層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。火だすき痕あり。 内面・外面とも磨滅。 焼成ややもろい。色調灰白色。胎土小さい砂粒を多量に含む。	
4－7	須恵器 坏 No.240	A－II 8 3層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。外面に火だすき痕あり。 内外に黒はんあり。 焼成堅い。色調淡黄色。胎土小石を含むが均質。	
4－8	須恵器 坏 No.130	A－II 8 3層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調にぶい黄橙。胎土砂粒を多量に含む。	
4－9	須恵器 坏 No.292	A－II 6	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調灰色。胎土少量砂粒を含むが均質。	
4－10	須恵器 坏 No.239	A－II 8 3層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 内面・外面に黒はんあり。 焼成ややもろい。色調灰白色。胎土0.1㎜の小砂を含む。	
4－11	須恵器 坏 No.208	A－II 8 3層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調褐灰色。胎土1㎜程の小石粒を含む。	
4－12	須恵器 坏 No.75	A－II 2 8層	口縁外反。体部長く、ロクロナデ。底部不明、あるいは高台が付くものか。 焼成堅い。色調暗灰色。胎土砂粒わずかに含む。	
4－13	須恵器 小形壺 No.234	A－II 8 3層上面	口縁不明。体部ロクロナデ、内部凹凸がはげしい。 底部静止糸切調整なし。 焼成堅い。色調灰白色。胎土1㎜以下の砂粒含む。	
4－14	須恵器 長頸壺 No.114	A－II 3 表土	口縁外反し端部で内反し、上下に稜をもつおりかえし状の口縁をなす。頸部にロクロナデ。長頸壺の頸部である。 焼成堅い。色調暗青灰色。1.5㎜以下の石英粒多量に含む。	
4－15	須恵器 蓋 No.9	A－II 1 4層	口縁部不明。天井部端ロクロナデ、中央ヘラケズリ。 擬宝珠のつまみがつく。 焼成堅い。色調体部黄灰色、つまみ灰白色。胎土石英・砂粒を多量に含む。	
4－16	須恵器 甕 No.12	A－II 8 6層	口縁大きく外反してかるいおりかえし口縁をなす。 体部外側ロクロナデ、内側かるいロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土1㎜以下の砂粒が多量に含む。	
4－17	須恵器 甕	A－II 6	口縁外反し、端部は直立しかるいおりかえし。体部ロクロナデ。外面に自然釉がみられる。 焼成堅い。色調外側黒色、内側黄灰色。胎土0.7㎜程の砂粒を多量に含む。	
5－1	須恵器 甕	A－II 8 5層	口縁外反し、上下に稜を持つおりかえし口縁をなす。 口縁部に自然釉がみられる。体部ロクロナデ。底部不明。	

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
5－1	No.128		焼成堅い。色調灰褐色。胎土大粒の砂粒、多量の石英砂粒を多量に含む。	
5－2	須恵器 甕 No.174	A－II 8 5層	口縁外反し、にぶい稜をもつおりかえし口縁をなす。 体部内外共にロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調黒褐色。胎土0.7mm程の砂粒を多量に含む。	
5－3	須恵器 甕 No.76	A－II 2 8層	口縁外反し、端部で内側に折り返している。 体部はまるみをおびる。内外共にロクロナデ。底部不明 焼成堅い。色調外側暗灰色、内側灰色、断面赤色。胎土砂粒多量に含む。	
5－4	須恵器 甕 No.232	A－II 8 5層	口縁外反し、端部を内側に折り返している。 体部まるみをおび、内外共にロクロナデ。 焼成堅い。色調外側黒色、内側灰色。胎土小砂粒を多量に含む。	
5－5	須恵器 甕 No.67	A－II 6	口縁外反し、上下に稜を持つおりかえし口縁をなす。 体部はまるみをおび、内外共にロクロナデ。 焼成堅い。色調外側紫黒色、内側灰色。胎土砂粒を含む。	
5－6	土師器 甕 No.111	A－II 8 5層	口縁外反し、端部はかるいおりかえしをなす。 体部内外共磨滅。 焼成やや堅い。色調黄橙色。胎土1mm程の小石粒を含む。	
5－7	土師器 甕 No.121	A－II 8 5層	口縁大きく外反し、端部がたちあがる。 体部まるみをおびた長胴。底部不明。 焼成もろい。色調浅黄橙。胎土1mm程の小石粒を含む。	
5－8	土師器 壺 No.28	A－II b 9	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切りか。 体部から底部に火だすきらしきものあり。 焼成堅い。色調にぶい黄橙色。胎土1mm程の小石粒を含む。	
5－9	土師器 甕 No.288	A－I 6	口縁外反し、かるいおりかえしをなす。 体部内外共にロクロナデ。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土1mm以下の石英粒を含む。	

B地区出土遺物観察表

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
6－1	平瓦 No.362	第2窯跡 2層	凸面　縄目叩斜方向 凹面　布目5×6、大部分スリケシ 焼成堅い。色調暗灰黄色。胎土砂粒を含む。	
6－2	平瓦 No.500	第2窯跡 2層	凸面　縄目叩縦方向 凹面　布目7×5、糸切痕 焼成堅い。色調灰白色。胎土石英小石粒を含む。	
6－3	平瓦 No.338	第2窯跡 床面直上	凸面　縄目叩斜方向 凹面　全面スリケシ 焼成もろい。色調褐灰色。胎土小石砂粒を含む。	
6－4	平瓦 2層 No.353	第2窯跡 2層	凸面　縄目叩斜方向 凹面　布目6×5、スリケシ、糸切痕 焼成堅い。色調明褐灰色。胎土砂、小石粒を含む。	
6－5	平瓦 No.504	第2窯跡 2層	凸面　縄目叩縦方向 凹面　布目7×5、大部分スリケシ、糸切痕 焼成堅い。色調にぶい赤褐色。胎土砂粒を含む。	
6－6	平瓦	第2窯跡 床面直上	凸面　縄目叩斜方向、糸切痕 凹面　布目7×7、大部分スリケシ、糸切痕	

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
6－6	No.371		焼成堅い。色調にぶい黄橙色。胎土雲母を含む。	
6－7	平瓦 No.560	第2窯跡 床面直上	凸面　縄目叩縦方向、糸切痕。 凹面　布目7×7、一部スリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調にぶい黄褐色。胎土小石粒砂を含む。	
6－8	平瓦 文字瓦 No.639	第2窯跡 3層	凸面　縄目叩斜方向、叩きをかるくナデている。 凹面　布目9×8、大部分スリケシ、糸切痕。 「物」の刻印有り。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石を含む。	
6－9	平瓦 文字瓦 No.634	第2窯跡 2層	凸面　縄目叩斜方向、叩きをナデている。 凹面　　目6×7、スリケシ、糸切痕。 「行」？の刻印有り。 焼成堅い。色調灰黄色。胎土小石粒を含む。	
7－1	平瓦 No.659	第3窯跡 2層	凸面　縄目叩縦方向、一部斜、部分的にナデ。 凹面　布目大部分スリケシ。 焼成堅い。色調灰色。胎土砂粒少々含む。	写真図版3－2
7－2	平瓦 No.612	第3窯跡 1層	凸面　縄目叩縦方向、一部ナデ。 凹面　布目スリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調灰黄色。胎土小石粒を含む。	
7－3	平瓦 No.556	第3窯跡 2層	凸面　縄目叩縦方向、一部ナデあり。 　　布目8×6、かるいスリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調橙色。胎土雲母砂粒を含む。	
7－4	平瓦 No.407	第3窯跡 2層	凸面　縄目叩縦方向、ナデによるスリケシ、糸切痕。 凹面　布目全面スリケシ。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石を含む。	
7－5	平瓦 文字瓦 No.635	第3窯跡 1層	凸面　縄目叩縦方向、ナデによりスリケシ。 凹面　布目7×7、スリケシ。 「丸」の刻印有り。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石を含む。	
7－6	平瓦 文字瓦 No.698	第3窯跡 1層	凸面　縄目叩、大部分ナデスリケシ。 凹面　布目全面スリケシ。 「丸」の刻印有り。 焼成堅い。色調灰色。胎土は砂粒を含む。	
7－7	平瓦 文字瓦 No.631	第3窯跡 2層	凸面　縄目叩縦方向、糸切痕 凹面　布目6×7、スリケシ、糸切痕。 「丸」の刻印有り。 焼成堅い。色調にぶい橙。胎土小石粒を含む。	
7－8	平瓦 No.477	第3窯跡 床面	凸面　縄目叩縦方向、部分的に黒釉。 凹面　布目全面スリケシ。 焼成堅い。色調暗灰色。胎土小石を含む。	
7－9	平瓦 No.503	第3窯跡 2層	凸面　叩きを全面スリケシ 凹面　布目全面スリケシ。 焼成堅い。色調暗赤褐色。胎土小石を含む。	
8－1	平瓦 No.624	第4窯跡 焚口	凸面　縄目叩縦方向。 凹面　布目8×7、かるいスリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調灰色。胎土砂粒を含む。	
8－2	平瓦 文字瓦 No.534	第4窯跡 3層	凸面　縄目叩縦方向。 凹面　布目6×6、一部ケズリ。 「田」の刻印有り。 焼成堅い。色調灰色。胎土砂粒を含む。	

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
8－3	平瓦 No.513	第4窯跡 3層	凸面　縄目叩縦方向。 凹面　布目スリケシ。糸切痕。 焼成堅い。色調にぶい橙色。胎土砂粒を含む。	
8－4	平瓦 文字瓦 No.638	第4窯跡 3層	凸面　縄目叩縦方向。 凹面　布目6×6、スリケシ。 「物」の刻印有り。 焼成堅い。色調灰黄色。胎土小石を含む。	
8－5	平瓦 No.537	第4窯跡 3層	凸面　縄目叩縦方向ナデ。 凹面　布目7×6、スリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調灰色。胎土砂粒を含む。	
8－6	平瓦 No.586	第4窯跡 3層	凸面　縄目叩斜方向、×じるしあり。 凹面　布目スリケシ。糸切痕。 焼成堅い。色調灰白色。胎土小石、砂粒を含む。	
8－7	平瓦 No.547	第4窯跡 3層	凸面　縄目叩縦方向。 凹面　布目6×6、スリケシ。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石を若干含む。	
8－8	平瓦 No.611	第4窯跡 たき口	凸面　縄目叩縦方向ナデ。 凹面　布目4×5、大部分スリケシ。 焼成堅い。色調灰黄色。胎土雲母小石を含む。	
8－9	平瓦 No.562	第4窯跡 3層	凸面　縄目叩斜方向、黒釉一部あり。 凹面　布目6×5、スリケシ、黒釉一部あり。 焼成堅い。色調暗灰色。胎土小石を若干含む。	
8－10	平瓦 No.557	第4窯跡 3層	凸面　縄目叩縦方向、一部ナデ。 凹面　布目7×7、スリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調灰色。胎土砂粒を含む。	
9－1	須恵器 坏 No.231	焼土遺構 2層	口縁かるく内湾ぎみに外反。体部ロクロナデ。底部ヘラ切り。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土1㎜以下の砂粒を多く含む。	写真図版14－2
9－2	須恵器 坏 No.3	焼土遺構 2層	口縁外反し非常にうすくなる。体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切、手持ちヘラケズリ調整。 焼成ややもろい。色調灰白色。胎土多量の石英粒、砂粒を含む。	写真図版13－7
9－3	須恵器 坏 No.232	焼土遺構 2層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部磨滅。 焼成もろい。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	写真図版14－5
9－4	須恵器 坏 No.245	焼土遺構 2層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒混入のためあらい。	写真図版13－6
9－5	須恵器 坏 No.167	焼土遺構 2層	口縁外反、体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。全体的に二次焼成をうけている。 焼成もろい。色調灰白色。胎土0.5㎜程の砂粒を含む。	写真図版13－2
9－6	須恵器 坏 No.198	焼土遺構 2層	口縁外反、体部ロクロナデ。底部ヘラ切か。 手持ヘラケズリ調整。体部下端をケズリかるい稜をなす。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土1㎜程の砂粒を含む。	写真図版14－12
9－7	須恵器 坏 No.233	焼土遺構 2層	口縁外反。体部にロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。体部下端ケズリかるい稜をなす。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	写真図版14－9
9－8	須恵器 坏 No.249	焼土遺構 3層	口縁外反、体部ロクロナデ。底部切りはたし不明。 手持ちヘラケズリ調整。器面の磨滅がはげしい。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	写真図版12－1

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
9－9	須恵器 坏 No.199	焼土遺構 1層	口縁外反、体部ロクロナデ。底部ヘラ切か。手持ちヘラケズリ。 焼成堅い。色調浅黄橙。胎土1㎜程の小石粒を含む。	
9－10	須恵器 坏 No.37	焼土遺構 1層	口縁内湾ぎみに外反。体部ロクロナデ。底面切りはなし不明、 手持ちヘラケズリ。器面磨滅。 焼成ややもろい。色調淡黄色。胎土砂粒を含む。	
9－11	須恵器 坏 No.205	焼土遺構 2層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ヘラケズリ。。器面磨滅。 焼成もろい。色調浅黄橙。胎土砂粒を多量に含む。	
9－12	須恵器 坏 No.139	焼土遺構 1層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 器面磨滅。 焼成もろい。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
10－1	須恵器 坏 No.254	焼土遺構 5層	口縁内湾ぎみに外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	写真図版12－9
10－2	須恵器 坏 No.93	焼土遺構 2層	口縁内湾ぎみに外反。体部ロクロナデ。底部不明。 再焼成をうけている。 焼成ややもろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
10－3	須恵器 坏 No.119	焼土遺構 2層	口縁内湾ぎみに外反。体部ロクロナデ。底部不明。 再焼成をうけている。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
10－4	須恵器 坏 No.203	焼土遺構 3層	口縁内湾ぎみに外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし手持ち ヘラケズリ調整。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土0.5㎜以下の砂粒を含む。	
10－5	須恵器 坏 No.260	焼土遺構 2層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
10－6	須恵器 坏 No.114	焼土遺構 3層	口縁外反。体部ロクロナデ、ヘラキズあり。 底部不明。再焼成をうけている。 焼成ややもろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
10－7	須恵器 坏 No.200	焼土遺構 2層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。 手持ちヘラケズリ。 焼成ややもろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
10－8	須恵器 坏 No.273	焼土遺構 2層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 再焼成をうけている。 焼成ややもろい。色調淡橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
10－9	須恵器 坏 No.132	焼土遺構 3層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 器面磨滅。再焼成をうけている。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
10－10	須恵器 坏 No.239	焼土遺構 2層	口縁内湾ぎみに外反。体部ロクロナデ。底部も切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ。 焼成もろい。色調にぶい橙色。胎土砂粒を多量に含む。	写真図版13－1
10－11	須恵器 坏 No.296	焼土遺構 2層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 再焼成をうけている。 焼成もろい。色調淡橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
10－12	須恵器 坏 No.243	焼土遺構 2層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 再焼成をうけている。 焼成ややもろい。色調浅黄橙色。胎土1㎜程の小石を含む。	No.261接合
10－13	須恵器	焼土遺構	口縁内湾ぎみに外反。体部ロクロナデ。底部不明。	

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
10－13	坏 No.94	2 層	焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
11－1	須恵器 坏 No.204	焼土遺構 2 層	口縁外反、体部ロクロナデ。底部不明。 再焼成をうけている。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
11－2	須恵器 坏 No.235	焼土遺構 1 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 再焼成をうけている。 焼成ややもろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
11－3	須恵器 坏 No.116	焼土遺構 2 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 黒はんあり。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
11－4	須恵器 坏 No.228	焼土遺構 2 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 一部ハクリ。 焼成もろい。色調にぶい橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
11－5	須恵器 坏 No.234	焼土遺構 2 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成ややもろい。色調淡橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
11－6	須恵器 坏 No.215	焼土遺構 2 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
11－7	須恵器 坏 No.246	焼土遺構 2 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
11－8	須恵器 坏 No.95	焼土遺構 2 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂量を多量に含む。	
11－9	須恵器 坏 No.220	焼土遺構 2 層	口縁外反。体部ロクロナデ、粘土紐状のものが見られる。 底部不明。再焼成をうけている。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
11－10	須恵器 坏 No.237	焼土遺構 2 層	口縁外反。体部ロクロナデ、体部下端内湾。 底部不明。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
11－11	須恵器 坏 No.323	焼土遺構 2 層	口縁外反。体部ロクロナデ、つみあげ状の痕跡あり。 底部不明。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
11－12	須恵器 坏 No.157	焼土遺構 2 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
11－13	須恵器 坏 No.224	焼土遺構 2 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成もろい。色調灰白色。胎土砂粒、小石を含む。	
11－14	須恵器 坏 No.241	焼土遺構 2 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
11－15	須恵器 坏	焼土遺構 2 層	口縁外反。色調灰白色。胎土石英含むが密。 焼成堅い。色調灰白色。胎土石英粒を含むが密。	
11－16	須恵器 坏	焼土遺構 2 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。	

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
11－16	No.138		焼成ややもろい。色調にぶい橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
11－17	須恵器 坏 No.42	焼土遺構 3層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
11－18	須恵器 坏 No.256	焼土遺構 2層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含むが密。	
11－19	須恵器 坏 No.115	焼土遺構 2層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 再焼成をうけている。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
11－20	土師器 坏 No.266	焼土遺構 2層	口縁内湾ぎみに外反。体部ロクロナデ。底部穿孔のため不明。 穿孔は焼成前にくりぬかれたもの、径5～5.4cm。 焼成もろい。色調にぶい黄橙色。胎土緻密。	
11－21	土師器 坏 No.334	焼土遺構	口縁外反。体部ロクロナデ、一部ケズリ。底部不明。 小型灯明皿か。 焼成ややもろい。色調灰白色。胎土砂粒を含むが均質。	
12－1	須恵器 坏 No.131	焼土遺構 2層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部ヘラ切。 手持ちヘラケズリ調整。一部ナデ。 焼成堅い。色調灰白色。胎土小石粒を含むが密。	
12－2	須恵器 坏 No.186	焼土遺構 3層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ。再焼成をうけている。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
12－3	須恵器 坏 No.173	焼土遺構 2層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。体部下端ヘラケズリ。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
12－4	須恵器 坏 No.201	焼土遺構 2層	口縁不明。体部ロクロナデ。下端ヘラケズリ。 底部回転糸切りのち周縁。手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
12－5	須恵器 坏 No.141	焼土遺構 2層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部手持ちヘラケズリ調整。 体部下端より底部にかけて段あり。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
12－6	須恵器 坏 No.123	焼土遺構 2層	口縁不明。体部ロクロナデのち下端ヘラケズリ。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ調整。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
12－7	須恵器 坏 No.202	焼土遺構 2層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土小石粒を含む。	
12－8	須恵器 坏 No.10	焼土遺構 1層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ。 焼成もろい。色調浅黄色。胎土砂粒を含む。	
12－9	須恵器 坏 No.183	焼土遺構 2層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ。一部ハクリ。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土石英粒を含む。	
12－10	須恵器 坏 No.140	焼土遺構 2層	口縁不明。体部ロクロナデ、体部下端ケズリ。 底部回転糸切り調整なし。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
12－11	土師器 坏 No.303	焼土遺構 1層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転糸切り、周縁ヘラケズリ。 内面内黒。 焼成ややもろい。色調浅黄橙色。胎土均質で密。	

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
12－12	須恵器 坏 No.154	焼土遺構 3層	口縁不明。体部不明。底部回転糸切り。 手持ちヘラケズリ。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
12－13	須恵器 坏 No.165	焼土遺構 2層	口縁不明。体部下端ケズリ。底部回転糸切り、一部ケズリ調整。 焼成もろい。色調淡黄色。胎土砂粒を含む。	
12－14	須恵器 坏 No.155	焼土遺構 2層	口縁不明。体部不明。底部回転糸切り、一部ヘラケズリ。 焼成堅い。色調淡黄色。胎土砂粒を多量に含む。	
12－15	須恵器 坏 No.16	焼土遺構 2層	口縁不明。体部下端ケズリ。庭部回転糸切り。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成もろい。色調にぶい橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
12－16	須恵器 坏 No.171	焼土遺構 2層	口縁不明。体部不明。底部回転糸切り、一部ケズリ。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
12－17	須恵器 坏 No.104	焼土遺構 4層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ。黒はんあり。 焼成堅い。色調灰白色。胎土均質で密。	SWベルト
12－18	須恵器 坏 No.172	焼土遺構 2層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
12－19	須恵器 坏 No.158	焼土遺構 2層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転糸切り調整なし。 焼成もろい。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
12－20	須恵器 坏 No.135	焼土遺構 2層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成もろい。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
13－1	須恵器 坏 No.133	焼土遺構 2層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
13－2	須恵器 坏 No.152	焼土遺構 2層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成もろい。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
13－3	須恵器 坏 No.136	焼土遺構 2層	口縁不明。体部ロクロナデ、下端ケズリ。 底部回転糸切り。手持ちヘラケズリ調整。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
13－4	須恵器 坏 No.177	焼土遺構 2層	口縁不明。体部ロクロナデ、下端ケズリ。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ調整。 焼成もろい。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
13－5	須恵器 坏 No.168	焼土遺構 2層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
13－6	須恵器 坏 No.180	焼土遺構 2層	口縁不明。体部ロクロナデ、下端ケズリ。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ調整。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
13－7	須恵器 坏 No.180	焼土遺構 2層	口縁不明。体部ロクロナデ、下端ケズリ。 底部手持ちヘラケズリ調整。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
13－8	須恵器	焼土遺構	口縁不明。体部ロクロナデ。	

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
13－8	坏 No.164	2 層	底部回転ヘラ切り。手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
13－9	須恵器 甕 No. 9	焼土遺構 2 層	口縁外反し、上下に稜をもつおりかえし口縁をなす。 体部ロクロナベ、底部不明。 い。色調ひぶい橙色。胎土石英粒を多量に含む。	
13－10	須恵器 甕	焼土遺構 2 層	口縁外反、端部がたち上る。体部ロクロナベ合底部不明。 焼成堅い。色調暗灰色。胎土砂粒を多量に含む。	
13－11	須恵器 甕 No.257	焼土遺	口縁外反し端部内反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成ややもろい。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
13－12	土師器 甕 No.47	焼土遺構 4 層	口縁外反し、端部に至って内湾。体部ロクロナデと思われるが激しく脆弱化、底部も観察できない。 焼成もろい。色調淡橙色。胎土砂粒を含む。	写真図版15－1
13－13	土師器 甕 No.117	焼土遺構 2 層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部ヘラケズリ。 体部外面に黒はん。 焼成もろい。色調外側灰白色、内側浅黄橙色。胎土石英粒多量に含む。	
14－1	軒丸瓦 No.667	N 12 5 層	重弁蓮華文。８葉の重弁で中房上の蓮子の配置は１＋４である。蓮子は中央が円形で周囲が棍棒形。蓮子の延長が間弁にほぼ一致する。 焼成堅い。色調灰白色。胎土小石粒を含むが緻密。	写真図版４－７
14－2	軒丸瓦 No.674	N 39 E 12 5 層	重弁蓮華文。８葉の重弁で中房上の蓮子は中央に円形のものが１個みられただけで、蓮子はつぶれている。焼成前につぶれたものである。 焼成堅い。色調灰白色。胎土小石粒を含むが緻密。	663、681、680、接合
15－1	軒丸瓦 No.666	N 36 E 12	重弁蓮華文。８葉の重弁、中房上の蓮子は１＋４で、中央が円形で周囲が棍棒形。蓮子の延長がほぼ間弁に一致する。	666、668接合
15－2	軒丸瓦 No.677	N 39 E 12 4 層	重弁蓮華文。８葉の重弁、中房上の蓮子は前述品にくらべてやや小さい。１＋４で中央円形、周囲棍棒形。蓮子の延長は間弁に一致。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石粒を含むが緻密。	
15－3	軒丸瓦 No.665	N 39 E 15 11 層	重弁蓮華文。８葉の重弁と思われる。 焼成堅い。色調灰色。胎土雲母小石粒を含むが緻密。	写真図版４－８
15－4	軒丸瓦 No.664	N 39 E 12 3 層	重弁蓮華文。８葉の重弁と思われる。 焼成ややもろい。色調灰白色。胎土雲母小石粒を含む。	写真図版４－４
16－1	軒丸瓦 No.675	N 39 E 18 4 層	重弁蓮華文。８葉の重弁と思われる。 焼成ややもろい。色調灰白色。胎土雲母小石粒を含む。	写真図版５－１
16－2	軒丸瓦 No.683	N 39 E 12 2 層	重弁蓮華文。８葉の重弁と思われる。 焼成堅い。色調淡赤橙色。胎土石英小石粒を含む。	写真図版４－２
16－3	軒丸瓦 No.689	N 39 E 15 2 層	重弁蓮華文。８葉の重弁と思われる。 焼成ややもろい。色調灰色。胎土石英小石粒を含む。	
16－4	軒丸瓦	N 39 E 15	重弁蓮華文。８葉の重弁と思われる。	

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
16－4	No.688	3 層	焼成ややもろい。色調灰白色。胎土小石砂粒を含む。	
16－5	軒丸瓦 No.663	N 39 E 15 5 層	重弁蓮華文。8葉の重弁と思われる。 焼成堅い。色調灰白色。胎土小石砂粒を含む。	写真図版4－5 681、680、674と接合。
16－6	軒丸瓦 No.678	N 39 E 15 11 層	重弁蓮華文。8葉の重弁と思われる。 焼成堅い。色調灰白色。胎土石英砂粒を含むが緻密。	写真図版4－6
16－7	軒丸瓦 No.681	N 39 E 15 5 層	重弁蓮華文。8葉の重弁と思われる。 焼成堅い。色調灰白色。胎土小石、石英粒を含むが緻密。	663、680、674と接合。
16－8	軒丸瓦 No.680	N 39 E 9 3 層	重弁蓮華文。8葉の重弁と思われる。 焼成ややもろい。色調灰色。胎土雲母小石粒を含む。	681、663、674と結合。
17－1	軒平瓦 No.647	N 39 E 15 5 層	単弧文。凸面　縄目叩縦方向、顎画線あり。 凹面　布目6×8、一部スリケシ。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石粒を含むが緻密。	写真図版5－5 648と接合。
17－2	軒平瓦 No.661	N 39 E 15 5 層	単弧文。凸面　縄目叩縦方向、顎画線あり。 凹面　布目8×8、一部スリケシ、糸切痕あり。 焼成ややもろい。色調灰色。胎土小石粒を含む。	写真図版5－4
18－1	軒平瓦 No.648	N 36 E 12 5 層	単弧文。凸面　縄目叩縦方向、顎画線あり。 凹面　布目6×7、一部スリケシ、糸切痕あり。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石粒を含む。	写真図版5－6 647と結合。
18－2	軒平瓦 No.657	N 39 E 15 5 層	単弧文。凸面　縄目叩縦方向、顎画線あり。ヘラキズあり。 凹面　布目6×8、一部スリケシ。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石粒を含むが緻密。	写真図版5－8
18－3	軒平瓦 No.650	N 39 E 9 3 層	単弧文。凸面　縄目叩縦方向、顎画線あり。ヘラキズあり。 凹面　布目8×7、一部スリケシ。 焼成ややもろい。色調灰色。胎土雲母砂粒を含む。	写真図版5－7
19－1	軒平瓦 No.647	N 39 E 15 5 層	註記 17－1、18－1と同様。	648と接合
20－1	丸瓦 文字瓦 No.643	N 39 E 21 5 層	凸面　縄目叩スリケシ・ナデ、「伊」の刻印有り。 凹面　布目7×8 焼成堅い。色調灰色。胎土小石粒を含む。	
20－2	丸瓦 文字瓦 No.642	N 39 E 12 5 層	凸面　縄目叩スリケシ・ナデ、「伊」?の刻印有り。 凹面　布目8×8 焼成堅い。色調灰色。胎土雲母小石粒を含む。	
20－3	平瓦 文字瓦 No.636	N 36 E 21 5 層	凸面　縄目叩縦方向 凹面　布目スリケシ、「物」の刻印有り。 焼成堅い。色調灰白色。胎土小石粒を含む。	
20－4	平瓦 文字瓦 No.637	N 36 E 15 6 層	凸面　縄目叩縦方向 凹面　布目7×5、大部分スリケシ。「矢」の刻印有り。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石を含む。	
20－5	丸瓦 文字瓦 No.645	N 39 E 9 3 層	凸面　一部縄目叩きスリケシ。「田」の刻印有り。 凹面　布目7×7 焼成堅い。色調灰色。胎土小石粒を含む。	
20－6	丸瓦 文字瓦	N 39 E 18 4 層	凸面　スリケシ、「占」の刻印有り。 凹面　布目7×6	

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
20－6	No.644		焼成堅い。色調灰白色。胎土雲母を含む。	
20－7	丸瓦 文字瓦 No.632	N 39 E 9 2 層	凸面 縄目叩スリケシ。 凹面 布目スリケシ、「行」の刻印有り。 焼成堅い。色調褐灰色。胎土小石粒を含む。	
21－1	平瓦 文字瓦 No.640	N 39 E 15 2 層	凸面 縄目叩縦方向 凹面 布目7×7、スリケシ、「物」の刻印有り。糸切痕。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石を含む。	
21－2	平瓦 文字瓦 No.641	N 39 E 15 6 層	凸面 縄目叩斜方向、一部ナデ。 凹面 布目6×6、スリケシ、「尺」の刻印有り。糸切痕。 焼成堅い。色調暗灰色。胎土小石を含む。	
21－3	平瓦 No.610	N 39 E 15 2 層	凸面 縄目叩縦方向、長方形の凸出部あり。 凹面 布目スリケシ。 焼成堅い。色調にぶい橙色。胎土小石粒を含む。	
22－1	平瓦 文字瓦 No.725	N 39 E 9 2窯北2層	凸面 縄目叩縦方向ナデ。 凹面 布目7×7、スリケシ、「丸」の刻印有り。 焼成堅い。色調灰白色。胎土雲母砂粒を含む。	
22－2	平瓦 No.662	第5窯跡 確認面	凸面 縄目叩縦方向ナデ。 凹面 布目5×4、スリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調灰白色。胎土雲母を含むが密。	写真図版3－1
22－3	平瓦 No.163	N 39 E 15 2 層	凸面 縄目叩斜方向。 凹面 布目6×5、スリケシ。糸切痕。 焼成堅い。色調灰白色。胎土小石雲母を含む。	
22－4	平瓦 No.160	N 39 E 15 6 層	凸面 縄目叩縦方向。 凹面 布目6×5、スリケシ、糸切痕。 焼成ややもろい。色調灰白色。胎土小石を含む。	
22－5	平瓦 No.312	N 36 E 18 4 層	凸面 縄目叩斜方向ナデ、糸切痕。 凹面 布目7×8、ケズリ、糸切痕。 焼成堅い。色調黄灰白。胎土雲母小石を含む。	
22－6	平瓦 No.219	N 36 E 12 2 層	凸面 縄目叩斜方向ナデ。 凹面 布目スリケシ。 焼成堅い。色調灰色。胎砂粒を含む。	
22－7	平瓦 No.625	N 21 E 24 2 層	凸面 縄目叩縦方向、一部ナデ、黒釉あり。 凹面 布目6×5、スリケシ、、沈線による区画あり。 焼成堅い。色調灰色。胎土雲母小石粒を含む。	
22－8	平瓦 No.626	N 36 E 12 7 層	凸面 縄目叩ナデ。 凹面 布目スリケシ、角をもつ凹部あり。 焼成堅い。色調褐灰色。胎土小石粒を含む。	
22－9	平瓦 No.151	N 34 S 15 5 層	凸面 縄目叩スリケシ、糸切痕。 凹面 布目4×4、スリケシ。 焼成堅い。色調赤褐色。胎土小石を含む。	
23－1	平瓦 No.224	N 39 E 15 5 層	凸面 縄目叩斜方向ナデ。 凹面 布目7×5、スリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調灰白色。胎土雲母を含む。	
23－2	平瓦 No.174	N 33 E 9 3 層	凸面 縄目叩縦方向ナデ。 凹面 布目7×6、スリケシ。 焼成堅い。色調灰白色。胎土雲母小石を含む。	
23－3	平瓦 No.472	N 39 E 15 5 層	凸面 縄目叩縦方向ナデ。 凹面 布目5×5、スリケシ。 焼成堅い。色調暗灰色。胎土小石を含む。	

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
23－4	平瓦 No.472	N 39 E E 5 層	凸面 縄目叩 凹面 布目10×9、スリケシ、糸切痕。 焼成ややもろい。色調灰白色。胎土雲母小石粒を含む。	
23－5	平瓦 No.310	N 36 E 18 4 層	凸面 縄目縦方向ナデ。 凹面 布目8×6、スリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調灰白色。胎土小石雲母を含む。	
23－6	平瓦 No.241	N 39 E 15 4 層	凸面 縄目叩縦方向。 凹面 布目8×7、スリケシ。 焼成ややもろい。色調褐灰色。胎土小石を含む。	
23－7	平瓦 No.193	N 39 E 12 2 層	凸面 縄目叩縦方向ナデ。 凹面 布目6×7、スリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調灰白色。胎土雲母砂粒を含む。	
23－8	平瓦 No.294	N 39 E 12 2 層	凸面 縄目叩縦方向。 凹面 布目6×6、スリケシ、糸切痕。 焼成ややもろい。色調灰色。胎土砂、小石を多量に含む。	
23－9	平瓦 No.214	N 39 E 12 2 層	凸面 縄目叩縦方向。糸切痕。 凹面 布目7×8、スリケシ、糸切痕。 焼成ややもろい。色調暗灰色。胎土砂粒を含む。	
23－10	平瓦 No.614	N 37 E 30 2 層	凸面 縄目叩斜方向。 凹面 布目6×5、スリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調にぶい黄橙色。胎土小石粒を含む。	
24－1	平瓦 No.496	N 39 E 15 4 層	凸面 縄目叩縦方向。 凹面 布目6×5、大部分スリケシ。 焼成堅い。色調灰褐色。胎土小石を含む。	
24－2	平瓦 No.188	N 36 E 18 5 層	凸面 縄目叩縦方向ナデ。 凹面 布目6×7、スリケシ。 焼成堅い。色調暗灰色。胎土砂粒を含む。	
24－3	平瓦 No.482	N 39 E 15 5 層	凸面 縄目叩縦方向ナデ、糸切痕。 凹面 布目9×8、スリケシ。 焼成堅い。色調明褐灰色。胎土雲母を含む。	
24－4	平瓦 No.250	N 36 E 15 3 層	凸面 縄目叩スリケシ。黒釉あり。 凹面 布目8×8、スリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石雲母を含む。	
28－5	丸瓦 No.40	N 36 E 18 5 層	凸面 縄目叩一部、全面スリケシ。 凹面 布目ヘラナデ、全体に黒釉あり。 焼成堅い。色調灰白色。胎土小石粒を含む。	
24－6	平瓦 No.253	N 39 E 9 3 層	凸面 縄目叩縦方向。 凹面 布目6×8、スリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調灰色。胎土雲母小石を含む。	
24－7	平瓦 No.576	第5窯跡 1 層	凸面 縄目叩縦方向。 凹面 布目6×6、スリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調にぶい黄橙色。砂粒を含む。	
24－8	丸瓦 No.84	第2窯跡 床面	凸面 縄目叩一部、全面スリケシ。 凹面 布目ナデ。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎砂粒を含む。	
25－1	須恵器 坏 No.34	N 39 E 15 9 層	口縁内湾ぎみに外反。体部ロクロナデ。 底部回転糸切。回縁手持ちヘラケズリ。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	No.33接合
25－2	須恵器	N 39 E 15	口縁内湾ぎみに外反。体部ロクロナデ。	写真図版14－6

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
25－2	坏 No.37	3 層	底部回転糸切、周縁手持ちヘラケズリ。 焼成堅い。色調黒褐色。胎土石英粒を多量に含む。	
25－3	須恵器 坏 No.38	N 39 E 12 2 層	口縁不明。体部ロクロナデ、下端ケズリ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ。 焼成堅い。色調にぶい黄橙色。胎土砂粒を含む。	
25－4	土師器 坏 No.29	N 39 E 15 5 層	口縁外反。体部磨滅、わずかにミガキあり。 底部磨滅のため不明。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	写真図版12－11
25－5	須恵器 坏 No.67	B 地区 表土	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土石英粒、砂粒を多量に含む。	
25－6	須恵器 坏 No.39	N 39 E 15 3 層	口縁内縁ぎみに外反。体部ロクロナデ、庭 底部回転ヘラ切り。 焼成ややもろい。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
25－7	須恵器 坏 No.61	N 36 E 12 2 層	口縁外反。体部ロクロナデ、下端ケズリ。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調青灰色。胎土砂粒を多量に含む。	
25－8	須恵器 高台付坏 No.1	N 39 E 15 9 層	口縁直立ぎみに外反。体部ロイロナデ、高台ロクロナデ。 底部切りはなし不明。回転ヘラナデ調整。 焼成堅い。色調青灰色。胎土石英粒、砂粒を多量に含む。	
25－9	土師器 坏 No.25	N 39 E 18 5 層層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 ヘラナデ調整。再焼成をうけている。 焼成もろい。色調褐灰色。胎土砂粒を含む。	
25－10	土師器 坏 No.23	N 39 E 15 5 層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切、調整なし。 全体に磨滅。 焼成もろい。色調淡黄色。胎土砂粒を多量に含む。	
25－11	土師器 坏 No.14	N 36 E 21 4 層	口縁外反。体部ロクロナデ、下端ケズリ。内側ミガキ内黒。 底部切りはなし不明、手卓ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調色灰色。胎土砂をを含むが均質。	
25－12	土師器 甕 No.23	N 39 E 15 5 層	口縁不明。体部ロクロナデ、下端ケズリ。 底部回転ヘラケズリ。 焼成ややよろい。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
25－13	土師器 甕 No.24	N 39 E 18 5 層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部手持ちヘラケズリ。 全体磨滅。 焼成もろい。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	写真図版15－6
26－1	須恵器 甕 No.45	N 42 E 18 3 層	口縁外反し端部直立。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調灰色。胎土均質。	
26－2	土師器 甕 No.85	N 36 E 21 2 層	口縁外反、体部ロクロナデ、底部不明。 焼成ややもろい。色調　黄橙色。胎土石英砂を含む。	
26－3	須恵器 甕 No.15	N 39 E 12 4 層	口縁不明。体部外側タタキの上を手持ちヘラケズリ、内側ロクロナデの上をおきえ。底部切りはなし不明、ヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調黄灰色。胎土砂粒を多量に含む。	
26－4	土師器 甕 No.70	N 39 E 12 7 層	口縁外反して端部直立。体部ロクロナデ。 底部不明。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂を含む。	
26－5	須恵器 甕	N 36 E 18 6 層	口縁不明。体部外側タタキ・ナデ、内側指ナデ。 底部切りはなし不明。ヘラナデ調整。	写真図版15－7

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
26－5	No.8		焼成堅い。色調灰色。胎土砂粒を多量に含む。	
26－6	土師器 甕 No.8	N 39 E 12 5 層	口縁外反して端部直立。体部ロクロナデ。 焼成堅い。色調灰白色。胎土石英粒を多量に含む。	
26－7	土師器 甕 No.40	N 39 E 9 8 層	口縁外反。体部外側ケズリ、内側ハケナデ。 底部不明。 焼成もろい。色調灰白色。胎土砂粒含む。	写真図版15－9
26－8	土師器 No.26	N 39 E 18 5 層	口縁不明。体部外側ヘラケズリ、内側ロクロナデ。 底部切りはなし不明。ヘラケズリ調整。 焼成もろい。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
26－9	卜石 No.103	N 39 E 16 2 層		

C地区出土遺物観察表

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
27－1	平瓦 No.63	1 住居 施設 瓦	凸面　縄目叩縦方向。 凹面　布目6×5、かるいスリケシ。糸切痕。 焼成堅い。色調灰色。胎土雲母を含む。	写真図版7－2
27－2	平瓦 No.64	1 住居 施設 瓦	凸面　縄目叩縦方向。 凹面　布目7×6、糸切痕。 焼成堅い。色調灰色。胎土雲母を含む。	
27－3	平瓦 No.65	1 住居 施設 瓦	凸面　縄目叩縦方向。 凹面　布目7×6、糸切痕。 焼成堅い。色調灰色。胎土雲母を含む。	写真図版7－3
28－1	平瓦 No.68	1 住居 施設 瓦	凸面　縄目叩縦方向。 凹面　布目7×6、糸切痕。 焼成堅い。色調灰白色。胎土小石を含む。	写真図版7－1
28－2	平瓦 No.71	1 住居 施設 瓦	凸面　縄目叩縦方向。 凹面　布目8×8、かるいスリケシ。糸切痕。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石を含む。	写真図版10－3
28－3	平瓦 No.72	1 住居 施設 瓦	凸面　縄目叩縦方向、かるいナデ。 凹面　布目7×6、スリケシ、糸切痕、T字形のヘラ書あり。 焼成堅い。色調灰白色。胎土小石を含む。	写真図版8－3
29－1	平瓦 No.74	1 住居 施設 瓦	凸面　縄目叩縦方向。 凹面　布目7×5、かるいスリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石雲母を含む。	写真図版8－1
29－2	平瓦 No.81	1 住居 施設 瓦	凸面　縄目叩縦方向。 凹面　布目6×8、全体的にスリケシ。糸切痕。 焼成堅い。色調灰色。胎土砂粒を含む。	写真図版9－3
29－3	平瓦 No.90	1 住居 施設 瓦	凸面　縄目叩縦方向、かるいスリケシ。 凹面　布目7×8、全体的にスリケシ。 焼成堅い。色調黒色。胎土砂粒を含む。	写真図版6－2
30－1	平瓦 No.105	1 住居 施設 瓦	凸面　縄目叩縦方向、黒釉あり。 凹面　布目7×6、かるいスリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調黄黒色。胎土小石を含む。	写真図版10－2
30－2	平瓦	1 住居	縄目叩縦方向、一部ナデ。	

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
30－2	No.116	施設瓦	凹面　布目7×7、スリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調にぶい橙色。胎土小石を含む。	
30－3	平瓦 No.120	1住居 施設瓦	凸面　縄目叩縦方向。 凹面　布目6×6、全体的にスリケシ。 焼成堅い。色調にぶい橙色。胎土小石を含む。	写真図版6－3
31－1	平瓦 No.132	1住居 施設瓦	凸面　縄目叩縦方向。 凹面　布目7×6、かるいスリケシ。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石粒を含む。	
31－2	平瓦 No.70	1住居 施設瓦	凸面　縄目叩縦方向。 凹面　布目6×5、全体的にスリケシ。 焼成堅い。色調灰色。胎土雲母を含む。	写真図版8－2
31－3	丸瓦 No.33	1住居 施設瓦	凸面　全面スリケシ。縄目叩痕あり。 凹面　布目7×8 焼成堅い。色調灰色。胎土小石粒を含む。	
31－4	丸瓦 No.83	1住居 施設瓦	凸面　全面スリケシ。縄目叩痕あり。 凹面　布目7×7、布じわ。 焼成堅い。色調にぶい橙色。胎土小石粒を含む。	
32－1	須恵器 坏 No.43	1住居 ピット4	口縁外反、体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
32－2	須恵器 坏 No.194	1住居 ピット4	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
32－3	土師器 坏 No.47	1住居 ピット4	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成もろい。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
32－4	土師器 坏 No.4	1住居 カマド付近	口縁外反。体部ロクロナデ。底部回転糸切り。 周縁ケズリ。 焼成もろい。色調橙色。胎土大粒の砂を含む。	写真図版12－3
32－5	土師器 坏 No.7	1住居	口縁外反。体部ロクロナデ。底部回転糸切調整なし。 全体的に磨滅。 焼成もろい。色調灰黄色。胎土砂を含む。	写真図版12－4
32－6	土師器 高台付坏 No.6	1住居 表採	口縁外反。体部内側ヘラミガキ黒色処理。外側ロクロナデ。 底部磨滅がはげしい。高台が付く。 焼成ややもろい。色調にぶい橙色。胎土均質。	
32－7	土師器 坏 No.7	1住居 ピット25	口縁外反。体部内側ヘラミガキ黒色処理、外側ロクロナデ。 底部切りはなし不明。回転ヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調にぶい橙色。胎土均質。	
32－8	土師器 高台付坏 No.150	1住居 ピット9	口縁外反。体部内側ヘラミガキ黒色処理、外側ロクロナデ。 底部磨滅、高台が付く。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土小石粒を含む。	
32－9	須恵器 甕 No.2	1住居 貯蔵穴	口縁外反し、上下に稜をもつおりかえし口縁をなす。 頸部ロクロナデ。体部平行叩き。 焼成堅い。色調灰色。胎土砂粒、石英粒を含む。	写真図版15－11
32－10	須恵器 甕 No.68	1住居 表採	裏面　同心円文あり 表面　平行叩き 焼成堅い。色調橙色。胎土小石粒を含む。	
32－11	須恵器 甕	1住居 2層	口縁外反し、おりかえし口縁をなす。体部ロクロナデ。	

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
	No.179		焼成堅い。色調灰色。胎土砂粒を含む。	
32－12	土師器 甕 No.13	1住居 ピット8	口縁外反し、おりかえし口縁をなす。体部ロクロナデ。 全体的に磨滅。 焼成もろい。色調橙色。胎土砂粒を含む。	
32－13	土師器 甕 No.173	1住居 カマド付近	口縁外反し端部が内反。体部ロクロナデ。 全体的に磨滅。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
33－1	土師器 甕 No.1	1住居 煙道部	口縁外反し端部が直立する。体部ロクロナデ。 一部にヘラケズリ。 焼成堅い。色調淡橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
33－2	土師器 甕 No.49	1住居 ピット1	口縁外反し端部が直立する。体部ロクロナデ。 焼成もろい。色調にぶい橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
33－3	土師器 甕 No.48	1住居 ピット1	口縁外反。体部ロクロナデ。 磨滅がはげしい。 焼成もろい。色調にぶい褐色。砂粒を含む。	
33－4	土師器 甕 No.121	1住居 1層	口縁外反。体部磨滅のため観察できず。 焼成もろい。色調にぶい橙色。胎土砂粒を含む。	
33－5	土師器 甕 No.171	1住居 3層	口縁不明。体部内側ミガキ、外側磨滅がいちじるしい。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
33－6	土師器 甕 No.23	1住居 ピット7	口縁外反。体部ロクロナデ。底部回転糸切り調整なし。 焼成もろい。色調黒褐色。胎土砂粒を含む。	
33－7	須恵器 異形土器 No.83	1住居 床面	口縁不明。体部ケズリ。底部焼成以前に穿穴されている。 焼成堅い。色調橙色。胎土砂粒を含む。	
33－8	須恵器 異形土器 No.90	1住居 床面	口縁不明。体部ナデ、一部ケズリ。底部焼成以前に穿穴されている。 焼成堅い。色調橙色。胎土砂粒を含む。	
34－1	土製品 No.99	1住居 4層	斧形土製品 焼成堅い。色調にぶい橙色。胎土砂粒を含む。	
34－2	土製品 鞴火口 No.97	1住居 2層	火●口、黒色の釉が表面にみられる。 焼成ややもろい。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	写真図版16－17
34－3	土製品 土玉 No.100	1住居	穿穴されている。 焼成堅い。色調灰黄褐色。胎土砂粒を含む。	写真図版16－9
34－4	土師器 手捏土器 No.98	1住居 3層	全体的に凸凸。指ナデをしている。 焼成ややもろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
34－5	土製品 鞴火口 No.96	1住居 2層	外面磨滅している。指ナデをしている。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
34－6	石製品 磨石 No.110	1住居 床面	長軸方向に磨かれている。	

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
34－7	土製品 鞴火口 No.49	1住居 ピット1	上部は黒く硬質であるが、下部は磨滅。 焼成ややもろい。色調灰褐色。胎土砂粒を多量に含む。	
34－8	砥石 No.130	1住居 3溝	ほぼ長方形	
34－9	土製品 No.85	1住居 2層	大形の風字硯状の土製品。外側にタタキ痕あり。 全体をヘラケズリで調整。 焼成堅い。色調にぶい橙色。胎土砂粒を含む。	
34－10	砥石 No.54	1住居 2層	大型。弓状に磨がかれている。 使用面は二面。	
35－1	平瓦 No.726	1住居 施設瓦	凸面　縄目叩縦方向。 凹面　布目9×8、スリケシ。糸切痕。 焼成堅い。色調灰色。胎土雲母小石粒を含む。	写真図版6－1
35－2	平瓦 No.618	2住居 施設瓦 1号カマド	凸面　縄目叩縦方向、黒釉あり。 凹面　布目スリケシ。 焼成堅い。色調黒色。胎土小石粒を含む。	
35－3	平瓦 No.601	2住居 施設瓦 1号カマド	凸面　縄目叩縦方向、かるいスリケシ。 凹面　布目6×5、スリケシ。 焼成堅い。色調黄灰色。胎土小石粒、雲母含む。	
35－4	平瓦 No.716	2住居 床面 （2次）	凸面　縄目叩斜方向。 凹面　布目6×5、スリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調灰色。胎土雲母小石粒を含む。	
35－5	平瓦 No.722	2住居 1層	凸面　縄目叩縦方向。 凹面　布目6×5、スリケシ。 焼成もろい。色調浅黄色。胎土砂粒を含む。	
36－6	平瓦 No.723	2住居 施設瓦 1号カマド	凸面　縄目叩全面スリケシ。。糸切痕。 凹面　布目7×7、スリケシ。 焼成堅い。色調灰黄色。胎土小石粒を含む。	
35－7	平瓦 No.599	2住居 施設瓦 1号カマド	凸面　縄目叩斜方向、スリケシ。 凹面　布目7×6、スリケシ。 焼成堅い。色調黄橙色。胎土雲母小石粒を含む。	
35－8	平瓦 No.720	2住居 施設瓦 2号カマド・2層	凸面　縄目叩スリケシ。 凹面　布目7×7、スリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調暗赤灰色。胎土小石粒、雲母を含む。	
35－9	平瓦 No.602	2住居 施設瓦 1号カマド	凸面　縄目叩スリケシ。 凹面　布目5×6、スリケシ。 焼成堅い。色調暗赤灰色。胎土小石を含む。	
36－1	軒丸瓦 No.714	2住居 1層	細弁蓮華文。周縁と瓦当面のみ残存。 凸面　スリケシ。　凹面　布目7×7、スリケシ。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石粒を含む。	写真図版11－4
36－2	軒丸瓦 No.483	2住居 1層	細弁蓮華文。周縁と瓦当面残存。 焼成堅い。色調黄灰色。胎土砂粒を含む。	写真図版11－2
36－3	軒丸瓦 No.672	2住居 周溝内	細弁蓮華文。珠文があり、細弁蓮華文と思われる。 焼成ややもろい。色調灰黄色。胎土小石粒を含む。	
36－4	灰釉陶器	2住居	口縁外反し、かるく内湾し、まるみのある端をなす。	

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
	No.279	2 層	体部ナデ。底部高台が付く。灰釉か。 焼成堅い。色調灰白色。胎土均質で緻密。	
36－5	須恵器 坏 No.8	2 住居 2 層	口縁外反。体部ロクロナデ、下端回転ヘラケズリ。 底部回転糸切り。手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	写真図版12－8
36－6	須恵器 坏 No.429	3 土壙 7 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部回転糸切り、調整なし。 焼成堅い。色調明褐灰色。胎土砂粒を多く含む。	写真図版14－10
36－7	須恵器 坏 No.266	2 住居 1 層	口縁外反。体部ロクロナデ、下端ケズリ。 底部回転糸切り。周縁手持ちヘラケズリ。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
36－8	須恵器 坏 No.272	2 住居 ピット70	口縁外反。体部ロクロナデ。底部回転糸切り、調整なし。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	写真図版14－2
36－9	須恵器 坏 No.268	2 住居 1 層	口縁外反し体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
36－10	須恵器 坏 No.274	2 住居 4 溝 2 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ。火ダスキあり。 焼成堅い。色調灰色。胎土砂粒を含む。	写真図版12－7
36－11	須恵器 坏 No.25	2 住居 周溝 1 層	口縁外反。体部ロクロナデ、下端ヘラケズリ。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	写真図版12－5
36－12	須恵器 坏 No.267	2 住居 ピット1	口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明、手持ちヘラケズリ、×じるしあり。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
36－13	須恵器 坏 No.9	2 住居 ピット28	口縁直立ぎみに外反。体部ロクロナデ。 底部回転ヘラ切り調整なし。 焼成堅い。色調灰色。胎土砂粒を含む。	
36－14	須恵器 坏 No.194	2 住居 ピット25	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調緑灰色。胎土砂粒を含む。	
37－1	土師器 坏 No.275	2 住居 5 周溝 1 層	口縁外反。体部磨滅がはげしい。 底部切りはなし不明、ケズリか。 焼成ひじょうにもろい。色調橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
37－2	土師器 坏 No.25	2 住居 1 層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転糸切り調整。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	写真図版14－7
37－3	土師器 坏 No.26	2 住居 2 次床面	口縁外反。体部内側ヘラミガキ黒色処理、外側ロクロナデ。 底部切りはなし不明。体部下端より手持ちヘラケズリ。 焼成ややもろい。色調浅黄橙色。胎土均質である。	
37－4	土師器 坏 No.52	2 住居 第2カマド	口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 体部下端より手持ちヘラケズリ。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	写真図版14－1
37－5	土師器 坏 No.18	2 住居 1 号周溝	口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明、手持ちヘラケズリ。 焼成堅い。色調淡黄色。胎土砂粒を多量に含む。	
37－6	土師器 坏	2 住居 1 層	口縁外反。体部内側ミガキ、外側ロクロナデ。 底部回転糸切り、周縁ヘラケズリ。	

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
	No.265		焼成堅い。色調橙色。胎土砂粒を含む。	
37－7	須恵器 長頸壺 No.259	2住居 2周溝	口縁不明。頸部ロクロナデ。体部とのさかいに凸帯をめぐらす。 焼成堅い。色調灰白色。胎土石粒を多量に含む。	写真図版15－12
37－8	須恵器 壺 No.46	2住居 1周溝	口縁かるく外反し、外側に沈線がめぐる。体部ロクロナデ。 底部不明。 焼成堅い。色調黄灰色。胎土砂粒を多量に含む。	
37－9	土師器 甕 No.236	2住居 2層	口縁大きく外反し、端部直立。体部ロクロナデ。 底部不明。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
37－10	土師器 甕 No.43	2住居 2号カマド 煙道	口縁かるく外反し、端部直立。体部まるみをおびる、ロクロナデ。底部不明。 焼成もろい。色調橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
37－11	土師器 甕 No.175	2住居 2次床面	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成もろい。色調橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
37－12	土師器 甕 No.4	2住居 ピット93 1層	口縁大きく外反、端部直立。体部ロクロナデ。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
37－13	土師器 甕 No.271	2住居 ピット19 柱穴埋土	口縁外反して端部直立。体部ロクロナデ。 焼成もろい。色調橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
38－1	土師器 甕 No.205	2住居 1層	口縁かるく外反して端部直立する。体部ロクロナデ。 焼成堅い。色調にぶい橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
38－2	土師器 甕 No.6	2住居 ピット77 1層	体部内側指ナデ、外側ヘラケズリ。 底部ケズリ。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土細かい砂粒を含む。	
38－3	土師器 甕 No.37	2住居 1周溝	口縁外反し、端部直立する。体部ロクロナデ。 焼成堅い。色調橙色。胎土砂粒を含む。	
38－4	スリ石 No.127	2住居 2次床面	床面にすえてあったものである。 表面に使用痕あり。	
38－5	硯 円面硯 No.278	2住居 2層	体部に三条の沈線。周縁端部の破片。 焼成堅い。色調赤灰色。胎土砂粒を含む。	
38－6	硯 円面硯 No.65	2住居 2層	体部に円穴と長方形のスカシをもつ。 焼成堅い。色調灰色。胎土均質。	
38－7	硯 円面硯 No.14	2住居 2層	体部に円穴と長方形のスカシをもつ。 焼成堅い。色調灰色。胎土均質。	
38－8	土師器 手捏土器 No.20	2住居 2層	口縁内湾ぎみに外反。体部から底部指ナデあり。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒多い。	
38－9	土師器 手捏土器 No.13	2住居 2層	全体的に磨滅。体部指ナデ。 焼成もろい。色調褐灰色。胎土砂粒多し。	写真図版16－1

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
38－10	土師器 手捏土器 No.276	2住居 2次床面	口縁かるく外反。全体的に指ナデ。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土石英粒を含む。	写真図版16－2
38－11	土師器 手捏土器 No.105	2住居 1周溝 1層	全体的に磨滅。指ナデ。 焼成もろい。色調にぶい黄橙色。胎土均質。	
38－12	土師器 手捏土器 No.21	2住居 ピット22 2層	全体的に磨滅。 焼成もろい。色調浅黄色。胎土砂粒を含む。	
38－13	土師器 手捏土器 No.280	2住居 2層	口縁大きく外反。皿型を呈する。 焼成ややもろい。色調淡黄色。胎土石英砂粒を含む。	写真図版16－3
38－14	土師器 手捏土器 No.184	2住居 4溝	全体的に磨滅。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
38－15	須恵器 異形土器 No.174	2住居 1周溝	形態不明。 焼成堅い。色調黒褐色。胎土砂粒を含む。	写真図版16－16
38－16	土製品 土玉 No.176	2住居 2周溝	土玉穿穴されている。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
38－17	土製品 土玉 No.297	2住居 ピット60	穿穴されている。 焼成ややもろい。色調橙色。胎土均質。	
38－18	鉄製品 鉄鍬 No.48	2住居 2次床面 2号カマド	三角形の長い矢鍬と長い矢柄をもつ。 酸化が著るしい。	写真図版16－19
39－1	須恵器 坏 No.431	第3土壙 7層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調暗青灰色。胎土石英砂粒を多量に含む。	
39－2	須恵器 坏 No.44	第12土壙 1層	口縁内湾ぎみに外反。体部ロクロナデ、底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
39－3	須恵器 坏 No.41	第13土壙 1層	口縁内湾。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
39－4	須恵器 坏 No.126	第14土壙	口縁内湾。体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切りか？ 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土1～2㎜程度の砂粒を含む。	
39－5	須恵器 坏 No.425	第14土壙 2層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を少量含む。	
39－6	須恵器 坏 No.50	第19土壙 1層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 焼成堅い。色調明褐灰色。胎土砂粒を含む。	
39－7	須恵器 坏 No.5	第19土壙 1層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転糸切り。 焼成堅い。色調灰色。胎土均質。	写真図版12－2
39－8	須恵器	第14土壙	口縁内湾。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。	

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
	坏 No.423	2 層	焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
39－ 9	須恵器 坏 No.123	第14土壙 10 層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土少量の砂粒を含む。	
39－10	須恵器 坏 No.57	第14土壙 2 層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転糸切り。 焼成堅い。色調灰白色。胎土1㎜程の砂粒を含む。	
39－11	須恵器 坏 No.105	第19土壙 11 層	口縁内湾ぎみに外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 回転ヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調青灰色。胎土砂粒を含む。	
39－12	須恵器 坏 No.354	第14土壙	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 回転ヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土3㎜程の砂粒を含む。	
39－13	須恵器 坏 No.390	第 3 土壙	口縁軽い折り返しが見られる。体部ロクロナデ。 底部切りはなし不明。 焼成堅い。色調にぶい橙色。胎土0.5mm以下の砂粒を含む。	
39－14	須恵器 坏 No.167	第14土壙 7 層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転糸切り。 焼成堅い。色調褐灰色。胎土砂粒を含む。	
39－15	須恵器 坏 No.343	第14土壙 1 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土石英を含む。	写真図版14－ 8
39－16	須恵器 坏 No.351	第13土壙 7 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部回転糸切り。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒含む。	写真図版12－10
39－17	須恵器 坏 No.355	第14土壙 9 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成ややもろい。色調灰白色。胎土石英を含む。	写真図版14－11
39－18	須恵器 坏 No.262	第14土壙 1 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
39－19	須恵器 坏 No.17	第16土壙 1 層	口縁やや内湾。体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
39－20	須恵器 坏 No.357	第13土壙 9 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰黄色。胎土砂粒を含む。	
39－21	須恵器 坏 No.135	第14土壙 5 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成もろい。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
39－22	須恵器 高台付坏 No.142	第14土壙	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。 焼成堅い。色調にぶい褐色。胎土砂粒を含む。	写真図版13－ 9
40－ 1	土師器 坏 No.80	第13土壙 5 層	口縁外反。体部ロクロナデ、内面黒色処理。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調橙色。胎土砂粒を含む。	
40－ 2	土師器 坏	第14土壙 3～4層	口縁外反。体部ロクロナデ、内面ヘラミガキ黒色処理。 底部切りはなし不明。	

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
	No.247		焼成もろい。色調にぶい橙色。胎土砂粒を含む。	
40－3	土師器 坏 No.246	第14土壙 D3～4層	口縁外反。体部ロクロナデ、内面ヘラミガキ黒色処理。 底部切りはなし不明。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
40－4	土師器 坏 No.22	第13土壙 2層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土少量の砂粒を含む。	
40－5	土師器 坏 No.212	第14土壙	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調淡黄色。胎土均質。	
40－6	須恵器 甕 No.327	第8土壙 2層	口縁おり返し。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調灰色。胎土粗砂粒を含む。	
40－7	須恵器 長頸壺 No.38	第13土壙 1層	口縁おり返し。体部不明。底部不明。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
40－8	須恵器 不明 No.256	第14土壙 1層	口縁凸帯有り。体部不明。底部不明。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
40－9	土師器 甕 No.238	第14土壙 3～4層	口縁外反し、口唇部に至り直立。体部ロクロナデ、一部ケズリ有り。底部不明。 焼成ややもろい。色調淡橙色。胎土砂粒を含む。	
40－10	須恵器 甕 No.6	第19土壙 1層	口縁おり返し。体部叩き目有り。底部不明。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
40－11	土師器 甕 No.386	第14土壙	口縁外反し、口唇部に至って直立する。体部ロクロナデ。 底部不明。 焼成ややもろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
40－12	土師器 甕 No.330	第14土壙	口縁外反し、口唇部直立。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成もろい。色調橙色。胎土2㎜程の砂粒を含む。	
40－13	土師器 甕 No.318	第14土壙 12層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調橙色。胎土微砂粒を含む。	
40－14	土師器 甕 No.270	第13土壙 3層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土石英を含む。	
40－15	土師器 壺 No.341	第13土壙 床面	口縁外反。再焼成を受けている。体部磨滅のため不明。 底部磨滅のため不明。 焼成もろい。色調口縁部黒色、体部橙色。胎土砂粒を含む。	写真図版15－8
40－16	土師器 坏 No.70	第19土壙 2層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転糸切り。 焼成ややもろい。色調橙色。胎土微砂粒を含む。	
40－17	土師器 甕 No.232	第14土壙 3～4層	口縁外反し、口唇部において直立する。体部ロクロナデ。 底部不明。 焼成ややもろい。色調淡橙色。胎土砂粒を含む。	
41－1	土師器 甕 No.71	第19土壙 3層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成もろい。色調橙色。胎土砂粒を含む。	

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
41－2	須・恵器 甕 No.352	第3土壙	口縁不明。体部ロクロナデ、下端ヘラケズリ。 底部ヘラケズリの後、ナデ。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	写真図版15－5
41－3	土師器 手捏土器 No.10	第3号掘立 1層	口縁直立。体部指による整形。底部不明。 焼成もろい。色調橙色。胎土少量の砂粒を含む。	写真図版16－8
41－4	土師器 手捏土器 No.342	第19土壙 床面	口縁直立。体部指による整形。底部丸底、指による整形。 焼成ややもろい。色調黒色。胎土少量の砂粒を含む。	
41－5	土師器 手捏土器 No.358	第14土壙	口縁外反。体部指による整形。底部不明。 焼成もろい。色調にぶい橙色。胎土若干の砂粒を含む。	写真図版16－4
41－6	土師品 土玉 No.366	第13土壙 5層	直径1㎜程の穿穴がなされている。全体に丹を塗った可能性がある。	写真図版16－10
41－7	硯 風字硯 No.373	第19土壙 2層	陸部は上・下方向に磨かれている。周縁はヘラケズリがなされている。 焼成堅い。色調灰色。胎土均質。	
41－8	埦 No.362	第14土壙	残存する一面に布目痕がある。 焼成もろい。色調にぶい橙色。砂粒を含む。	写真図版17－3
41－9	埦 No.363	第14土壙	焼成堅い。色調灰色。胎土砂粒を含む。	写真図版17－2
42－1	須恵器 坏 No.419	7号溝 1層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成もろい。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	写真図版14－3
42－2	須恵器 坏 No.299	4号溝	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土多量の砂粒を含む。	
42－3	須恵器 坏 No.378	19号溝 1層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰褐色。胎土石英を含む。	
42－4	土師器 坏 No.480	19号溝 1層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成ややもろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
42－5	須恵器 坏 No.420	7号溝 2層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土若干の砂粒を含む。	写真図版12－6
42－6	須恵器 坏 No.475	18号溝 2層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒、小石を含む。	写真図版13－4
42－7	須恵器 坏 No.421	7号溝 2層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 回転ヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土石英砂粒を含む。	
42－8	須恵器 坏 No.434	7号溝 1層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 回転ヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰色。胎土砂粒を含む。	
42－9	須恵器	7号溝	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。	

図面番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
	坏 No.410	1 層	手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
42－10	須恵器 坏 No.285	18 号溝 1 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調黄灰色。胎土若干の砂粒を含む。	
42－11	須恵器 坏 No.413	7 号溝 2 層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調にぶい橙色。胎土砂粒を含む。	
42－12	須恵器 坏 No.97	7 号溝 1 層	口縁外反。体部ロクロナデ、下端ヘラケズリ。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調淡黄色。胎土多量の砂粒を含む。	
42－13	須恵器 坏 No.251	22 号溝 1 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土若干の砂粒を含む。	
43－1	土師器 坏 No.422	7 号溝 2 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。 その後ナデ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土石英、砂粒を含む。	
43－2	須恵器 坏 No.476	22 号溝 1 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切り調整なし。 焼成堅い。色調青灰色。胎土若干の砂粒を含む。	写真図版13－5
43－3	須恵器 坏 No.464	7 号溝 2 層	口縁若干内湾している。体部ロクロナデ。底部回転糸切り。 調整なし。 焼成堅い。色調灰色。胎土少量の砂粒を含む。	
43－4	須恵器 坏 No.408	7 号溝 1 層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転糸切りの後、手持ちヘラケズリ調整。×のヘラ書き有り。 焼成堅い。色調灰白色。胎土均質。	
43－5	須恵器 坏 No.471	18 号溝 確認面	口縁外反。体部ロクロナデ。底部回転糸切りの後、手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土石英、砂粒を含む。	
43－6	須恵器 坏 No.470	18 号溝 確認面	口縁外反。体部ロクロナデ。底部回転糸切りの後、回転ヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰色。胎土多量の砂粒を含む。	写真図版13－3
43－7	須恵器 坏 No.434	7 号溝 1 層	口縁外反。体部ロクロナデ、下端にヘラケズリ有り。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰色。胎土若干の砂粒を含む。	
43－8	須恵器 坏 No.131	7 号溝 1 層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転糸切り。無調整。 焼成堅い。色調灰色。胎土１㎜程の砂粒を含む。	
43－9	須恵器 坏 No.82	7 号溝 1 層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転糸切りの後、手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土若干の砂粒を含む。	
43－10	須恵器 坏 No.261	6 号溝	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 焼成ややもろい。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
43－11	須恵器 坏 No.154	7 号溝 2 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 焼成堅い。色調灰白色。胎土多量の砂粒を含む。	
43－12	須恵器 坏	1 号溝 2 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。	

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
	No.58		焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
43－13	須恵器 坏 No.106	7号溝 1層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 焼成堅い。色調灰白色。胎土多量の砂粒を含む。	
43－14	須恵器 坏 No.486	1号溝 2層	口縁外反。体部ロクロ調整。底部切りはなし不明。 焼成堅い。色調灰黄褐色。胎土若干の砂粒を含む。 焼成堅い。色調灰黄褐色。胎土若干の砂粒を含む。	
43－15	須恵器 坏 No.538	4号溝 確認面	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不踊。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土多量の砂粒を含ぬ。	
43－16	須恵器 坏 No.153	7号溝 2層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなき不明。 焼成堅い。色調灰白色。胎土多量の砂粒を含む。	
43－17	須恵器 坏 No.281	4号溝	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 焼成堅い。色調灰白色。胎土多量の砂粒を含む。	
43－18	須恵器 坏 No.286	18号溝 1層	口縁不明。体部ロクロナデ、下端ヘラケズリ。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調青灰色。胎土石英、砂粒を含む。	
43－19	須恵器 坏 No.354	1号溝 1層	口縁若干内湾する。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 焼成堅い。色調灰色。胎土若干の砂粒を含む。	
43－20	須恵器 坏 No.187	7号溝 確認面	口縁くの字形に内湾する。体部ロクロナデ。 底部切りはなし不明。 焼成堅い。色調にぶい黄橙色。胎土微砂粒を含む。	
43－21	須恵器 高台付坏 No.451	1号溝 1層	口縁外反。体部ロクロナデ、下端輪積痕有り。 底部切りはなし不明。 焼成堅い。色調橙色。胎土多量に砂粒を含む。	
43－22	須恵器 坏 No.523	19号溝 2層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 焼成堅い。色調灰黄色。胎土多量に砂粒を含む。	
43－23	須恵器 甕 No.445	1号溝 1層	口縁軽い折り返し、口唇部は丸みを帯ている。体部ロクロナデ、 中心に近い部分回転ヘラケズリ。つまみ不明。 焼成堅い。色調灰色。胎土石英、砂粒を含む。	
44－1	須恵器 坏 No.473	21号溝 床面	口縁外反。体部ロクロナデ、内面ヘラミガキ。下端ヘラケズリ。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調明褐灰色。胎土砂粒を含む。	
44－2	土師器 坏 No.338	18号溝 1層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 焼成もろい。色調橙色。胎土多量に砂粒を含む。	
44－3	土師器 坏 No.477	20号溝 1層	口縁外反。体部ロクロナデ、内面ヘラミガキ黒色処理。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土若干の砂粒を含む。	写真図版13－10
44－4	土師器 坏 No.243	2号溝 1層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部回転糸切り。無調整。 焼成堅い。色調橙色。胎土微砂粒含む。	
44－4	土師器 坏 No.313	18号溝 1層	口縁不明。体部ロクロナデ。内面ヘラミガキ黒色処理。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒含む。	

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
44－6	土師器 坏 No.382	17号溝	口縁外反。体部・底部磨滅のため不明。 焼成もろい。色調橙色。胎土若干砂粒を含む。	
44－7	土師器 坏 No.268	21号溝 1層	口縁外反。体部ロクロナデ。内側ヘラミガキ黒色処理。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ調整。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土微砂粒を含む。	
44－8	土師器 甕 No.170	7号溝 2層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部磨滅のため不明。 焼成ややもろい。色調黄橙色。胎土小石粒含む。	
44－9	土師器 坏 No.579	18号溝	口縁外反。体部ロクロナデ。底部磨滅のため不明。 焼成ややもろい。色調橙色。胎土若干砂粒を含む。	
44－10	須恵器 長頸壺 No.297	18号溝	口縁折り返し。体部不明。底部不明。 頸部ロクロナデ。 焼成堅い。色調灰色。胎土砂粒を含む。	
44－11	須恵器 坏 No.404	7号溝 2層	口縁内湾しながら直立。体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切り、無調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土石英を含む。	写真図版15－3
44－12	須恵器 甕 No.6	3号掘立 1層	口縁折り返し。頸部ロクロナデ。体部・底部不明。 焼成堅い。色調灰赤色。胎土石英多量に含む。	
44－13	須恵器 甕 No.504	2号溝 2層上面	口縁若干の折り返し、ロクロナデ。体部・底部不明。 外面に自然釉有り。 焼成堅い。色調灰色。胎土若干の砂粒を含む。	
44－14	須恵器 坏 No.324	18号溝 1層	口縁不明。体部ロクロナデ、下端ヘラケズリ。 底部回転糸切り。手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
44－15	土師器 甕 No.479	19号溝と18号溝の接点 1層	口縁外反。体部ロクロナデ、下端ヘラケズリ。 底部回転糸切り、無調整。 焼成堅い。色調淡橙色。胎土多量の砂粒を含む。	写真図版15－2
44－16	土師器 甕 No.440	7号溝 1層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転糸切り、無調整。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土石英を含む。	
44－17	須恵器 壺 No.252	22号溝 1層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調灰白色。胎土若干の砂粒を含む。	
44－18	土師器 甕 No.409	7号溝 1層	口縁不明。体部内面ロクロナデ、外面ヘラケズリ。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
44－19	土師器 甕 No.362	9号溝 1層	口縁外反し、口唇部は直立する。体部ロクロナデ。 底部不明。 焼成もろい。色調黄橙色。胎土多量の砂粒を含む。	
44－20	土師器 甕 No.478	22号溝 1層	口縁不明。体部内面ロクロナデ、外面ヘラケズリ。 底部切りはなし不明。手持ちヘラスズリ調整。 焼成ややもろい。色調橙色。胎土石英を含む。	写真図版10－8
44－21	土師器 甕 No.416 417	7号溝 1層	口縁不明。体部ロクロナデ、下端ヘラケズリ。 底部磨滅のため不明。 焼成堅い。色調淡赤橙色。胎土若干砂粒を含む。	
45－1	土師器	1号溝	口縁部は大きく外反し、口唇部で直立。頸部は細くしめられて	

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
45	甕 No.384	2 層	いる。体部はロクロ痕あり。ナデか。ロクロ回転不明。	
45－2	土師器 甕 No.149	7 号溝 1 層	内外面ともロクロナデ。口縁部外面と内面が再酸化されて黒色になっている。非常に磨滅が激しい。色調は橙色。	
45－3	土師器 甕 No.282	18 号溝 1 層	内外面ともロクロナデ。色調は外面が浅黄橙色、内面が灰白色である。胎土には砂粒を多量に含み、焼成は良好で堅い。	
45－4	土師器 甕 No.349	2 号溝 B 2 層	頸部から外反し、口唇部で内反する。頸部との境を細くして、沈線をなしている。体部内外面ともナデがみられる。色調は暗褐色で、胎土には小石を含み、もろい。	
45－5	土師器 甕 No.438	7 号溝 C 2 層	体部内外面ともロクロナデ。焼成はあるていど良好であるが、保存が悪く、もろい。胎土には、砂粒を多く混入する。	
45－6	卜石 No.432	7 号溝 C 1 層	浅黄橙色	写真図版16－13
45－7	土師器 甕 No.169	2 号溝 B 2 層	内外面ともロクロナデ。内面浅黄橙色、外面橙色。胎土は均質の粘土で焼成良好で堅い。	
45－8	土師器 甕 No.65	7 号溝 A 1 層	全体に内外面ともロクロナデ。胎土は 0.5㎜ 以下の砂粒が多量に混入している。焼成は良好である。	
45－9	土師器 異形土器 No.467	17 号溝 2 層	用途不明。底部付近外面は横、斜めの指ナデ。内面は指ナデ、ヘラ削りされている。	
45－10	土師器 手捏土器 No.381	19 号溝 1 層	色調は浅黄橙色。胎土に砂粒含み、もろい。	
45－11	土師器 手捏土器 No.423	7 号溝 A 2 層	色調は浅黄橙色。胎土にやや砂粒が混り、焼成は堅い。	写真図版16－6
45－12	土師器 手捏土器 No.207	4 号溝 埋 1	色調は浅黄橙色。胎土に若干の砂粒含み、堅い。	
45－13	土師器 手捏土器 No.502	8 号溝 1 層	胎土に若干石英粒含む。色調はにぶい橙色。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒含む。	
45－14	土師器 手捏土器 No.453	1 号溝 南部拡張部下	色調は浅黄橙色。胎土に石英粒含み、堅い。	
45－15	土師器 手捏土器 No.452	1 号溝 1 層	色調は浅黄橙色。胎土に若干石英砂粒含み、堅い。	
45－16	土製品 No.454	1 号溝 1 層	色調は橙色。胎土に砂粒多く、ややもろい。	写真図版16－12
45－17	土製品	17 号溝	色調は灰白色。胎土に砂粒多く、もろい。	写真図版16－11

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
	No.465			
45－18	土製品 把手？ No.437	7号溝C 1層	色調は浅黄橙色。胎土に若干砂粒含み、もろい。	写真図版16－18
45－19	鉄製品 工具？ No.459	4号溝 2層	非常にもろい。	
46－1	軒丸瓦 No.23	遺構外 北部 2層	重弁蓮華文。色調は灰白色であり、焼成は良好で堅い。	
46－2	軒丸瓦 No.547	遺構外 I－3	細弁蓮華文。 焼成堅い。色調灰白色。胎土均質。	
46－3	軒丸瓦 No.713	遺構外	細弁蓮華文。色調は灰白色。胎土は均質な粘土であり、焼成良好で堅い。	
46－4	須恵器 坏 No.51	遺構外 地山	体部内外面ともロクロナデ。底部は回転ヘラ切りの後にヘラ削りされている。色調は灰白色、胎土には2㎜程の砂粒を含み、もろい。	
46－5	土師器 甕 No.506	遺構外	内外面ともロクロナデ。色調は灰白色、胎土にはごく細い砂粒が混入し、焼成不良で磨滅が激しい。	
46－6	須恵器 甕 No.82	遺構外 4層	内外面ともロクロナデ。胎土には0.5㎜以下の砂粒が多量に混入している。	
46－7	土師器 壺 No.11	遺構外	体部内外ともロクロナデ。底部は手持ちヘラ削り。色調は内面が淡橙色。胎土に1㎜程の砂粒含み、焼成は堅めである。	
46－8	須恵器 甕 No.123	遺構外	頸部が外反し、口縁部は折り返している。内外面ともロクロナデされている。内面は灰白色、外面は灰色である。胎土には砂粒を若干含み、焼成良好で堅い。	
46－9	須恵器 鉢 No.4	遺構外	内外面ともロクロナデされている。底部は回転糸切りである。内外面に火だすき跡が見られる。胎土には1㎜程の砂粒を含む。色調は青灰色で堅い。	写真図版18－3
46－10	須恵器 甕 No.517	遺構外 4層	体部内外面ともロクロナデ。底部は手持ちヘラ削り。 焼成堅い。色調明褐灰色。胎土砂粒を含む。	
46－11	土師器 甕 No.9	遺構外 5層	口縁部から口唇部にかけて、わずかに直立している。全体的に剝離していて、細い調整は不明。胎土は均一でなく、もろい。色調は明黄褐色である。	
46－12	須恵器 蓋 No.81	遺構外 地山	回転ヘラ削り、そして調整。胎土には0.7㎜程の砂粒を多く含む。外面は明赤褐色、内面はにぶい褐色で、焼成良好にして堅い。	写真図版18－8
46－13	鉄製品 カマ No.10	遺構外 地山	腐食が激しい。	写真図版19－5
46－14	土師器 手捏土器 No.43	遺構外 1層	体部に沈線文様あり。胎土は比較的均質な粘土で、色調が淡赤橙色である。	

図版番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
46－15	土師器 手捏土器 No.40	遺構外	色調は浅黄橙色。	
46－16	土師器 手捏土器 No.177	遺構外 東部斜面	焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
46－17	土師器 手捏土器 No.27	遺構外	色調は浅黄橙色。胎土に砂粒多い。	写真図版18－7
46－18	土製品 No.12	遺構外	8角形で先がまるい。 焼成堅い。色調柴灰色。胎土砂粒を含む。	写真図版16－15
46－19	土製品 土鈴 No.13	遺構外 東西ベルト	胎土に砂粒含む。色調は浅黄橙色。	写真図版19－1
47－1	硯 円面硯 No.31	遺構外 東西ベルト	色調は褐灰色で内面に黒色の自然釉が見られる。 胎土には1㎜程度の砂粒を含み、焼成は良好で堅い。	
47－2	硯 円面硯 No.72	遺構外 東西ベルト 西部	接地部が鋭角で端部で折り返える。体部にヘラ書縦方向沈線が見られる。色調は外面灰褐色、内面黒灰色。透しの一部が見られる。胎土に若干の石英を含み、焼成良好で堅い。	
47－3	硯 円面硯 No.48	遺構外 1層	脚部の小破片で透しが1個、ヘラ書き縦線が2本見られる。 脚は外湾して端部で折り返える。色調は外面が灰色、内面黒色であり、胎土に若干の石英を含む。非常に堅い。	
47－4	硯 風字硯 No.20	遺構外 南側拡張	外面はヘラ削り、内面はミガキの調整をうけている。 胎土は良好であり、色調は灰色。堅く焼きしまっており、保存状態は一番良い。	写真図版19－3
47－5	硯 風字硯 No.7	遺構外 5層	全体にヘラ削りの調整が行なわれている。胎土は均質な粘土であり、灰白色で、堅い。	写真図版19－2
47－6	硯 風字硯 No.1	ピット2 1層	土師器風であり、もろい。硯としての使用は疑問あり。 色調は浅黄橙色であり、胎土には砂粒を多く含む。	写真図版17－1
47－7	硯 風字硯 No.47	遺構外	周縁部は平である。比較的均質な粘度で、灰白色。焼成は良好で堅い。	
47－8	硯 風字硯 No.509	遺構外	周縁部が平である。外面はヘラ削りとミガキ調整されている。 胎土には砂粒が少々含まれ、青灰色で堅い。	
47－9	硯 風字硯 No.44	遺構外	周縁部は平である。底部はヘラ削りされている。内面に一部黒斑が見られる。胎土には砂粒が多く、褐灰色で、堅い。	

職　員　録

社会教育課

課長	永野昌一	
主幹	早坂春一	

文化財係

係長	鈴木昭三郎	
主査	鈴木高文	
主事	田中則和	
〃	結城慎一	
〃	柳沢みどり	
〃	渋谷孝雄	
〃	佐藤洋	
〃	篠原信彦	
〃	木村浩二	
〃	佐藤甲二	
〃	工藤哲司	
〃	渡部弘美	
〃	山口宏	
〃	渡辺洋一	

仙台市文化財調査報告書刊行目録

策１集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年４月）
策２集　仙台城（昭和42年３月）
策３集　仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書（昭和35年３月）
策４集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年３月）
策５集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年８月）
策６集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
策７集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年３月）
策８集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年５月）
策９集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年３月）
策10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年３月）
策11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年３月
策12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年３月）
策13集　南小泉遺跡―範囲確認調査報告書―（昭和53年３月）
策14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年３月）
策15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年３月）
策16集　六反田遺跡発掘調査（第２・３次）のあらまし（昭和54年３月）
策17集　北屋敷遺跡（昭和54年３月）
策18集　枡江遺跡発掘調査報告書（昭和55年３月）
策19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年３月）

仙台市文化財調査報告書第18集
昭和54年度
枡江遺跡発掘調査報告書
昭和55年３月
発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町３－７－１
仙台市教育委員会社会教育課
印刷　株式会社　東北プリント
仙台市立町24－24　TEL　63－1166

文化財愛護シンボルマーク